

ヨナが巨大な魚に飲み込まれたが、逃げ出した所は何と今のポルトガル  
この地でハンニバルが勇士、武器、金塊を発見してローマへ行軍  
ジュリアス・シーザーが、ガリアと英国征服への野望を抱ききっかけを  
暗闇の大西洋に囲まれたポルトガルに侵攻したアラブ人の支配で  
世界一進歩した文明化を  
ノルマン人がリスボンを制圧、その後、新ポルトガルがヴェニスを破産に追い込み  
欧州一番の裕福に  
後に教皇ジョン21世となった国王ジョアンが、リスボン在住スペイン人に  
初の現代医学の本を書かせ、専門家に百年後のヨーロッパの見通しを聞く  
ポルトガル在住ユダヤ人がオランダにチューリップ  
チョコレート、ダイヤモンドを紹介  
英国に“午後の紅茶”の習慣を教え、ボンベイが世界帝国の鍵だと助言  
アフリカにマラリア防疫とアメリカへの奴隷貿易を  
インドへは高等教育とカレーとサモサを  
日本へは天婦羅と火縄銃を  
欧州人国家で初めて共産主義から脱出  
民主主義に立ち戻り、自分で再興を図り  
新欧州で活気ある国として  
21世紀にポルトガルは突入

「初のグローバル村」は自国ポルトガルでお目に掛った中で最も興味の魅かれる本  
フェルナンド・ド・オルレイ (新リスボン大学教授)

マーティン・ページは魅惑的な国ポルトガルについて新鮮な洞察を与えてくれる、  
そして「初のグローバル村」は読者を夢中にさせる物語文学  
ピーター・ワイズ (ザ・ファイナンシャル・タイムズ紙)

「初のグローバル村」の中で、マーティン・ページは鮮やかにポルトガルの空白部  
を埋め尽くし、読み易い、深い学識がある、最新の歴史書  
ジェーン・メイズ (ザ・デイリー・メール)

マーティン・ページの人生の集大成  
ザ・ニュー・ヨーカーズ

ポルトガルは欧州の最南西端に位置し、大西洋の  
荒波が押し寄せ、地中海地方の燦燦と照りつける  
太陽で温暖な気候の国。イベリア半島の古代王国  
の中でスペインから独立した唯一の国。大きさは  
フロリダの約半分、人口はその三分の二程度。全  
世紀に亘り、大国や大きな勢力を持つ国々を凌いで未だに影響を与えてきている国。

# ポルトガルの歴史物語

初のグローバル村・ポルトガルが世界を変えた

マーティン・ページ 著

鈴木弥栄男 訳



表紙デザイン 鈴木珠基（次女）

すずき出版

**Martin Page**  
**THE FIRST GLOBAL VILLAGE**  
**How Portugal Changed the World**  
**6ª edição**

原著

ISBN 972-46-1308-9

Copy rights Martin Page 2002 (著作権 マーティン・ページ 2002年)

Direitors reservados (発行元)

EDITORIAL NOTÍCIAS (出版社: ノティシアス)

Rua Bento de Jesus Caraça, (住所: ジェズス・カラサのベント通り  
1495-686 Cruz Quebrada, 17 1495-686 クルス・ケブラーダ 17)

E-mail: [geral@editorialnoticias.pt](mailto:geral@editorialnoticias.pt) (電子メールアドレス)

Internet: [www.editorialnoticias.pt](http://www.editorialnoticias.pt) (ウェブサイトのホームページURL)

**JRP**ENTRETENIMENTO(製本)

*Revisão*: Gillian Delaforce (校正者: ギリアン・デラフォルス)

Ayala Monteiro (アヤラ・モンテイロ)

*Capa*: 3designers gráficos (カバー: 3人のグラフィック・デザイナー)

Edição n.º01 503 038 (発行番号: 01 503 038)

1.ª edição: Fevereiro de 2002 (初版発行: 2002年2月)

6.ª edição: Outubro de 2004 (第6版発行: 2004年10月)

*Pré-impressão* (表紙の印刷)

Multipor Artes Graficas, Lda. (多色刷グラフィックアート有限会社)

*Impressão e acabamento* (本文の印刷)

Tipografia Peres (ペレス印刷会社)

日本語版權所有 すずき出版

Japanese translation rights arranged with

SUZUKI-publisher, Kashiwa, Japan

## 訳者まえがき

本書は、ポルトガルに8年間家族と一緒に過ごしてポルトガル人になりきった英国のジャーナリストが4年間の歳月を掛けて、ポルトガルの歴史を物語風に書いた一冊である。

本書の構成は、一般的な洋書と同じく謝辞が現われて邦書とは違うスタイルをとり、その次にまえがきや概要がなく、直ぐに著者の紹介が延々と続き、それから初めて目次に至っている。

その著者の紹介にて、突然アフリカの内戦の取材に関する記述が始まる。そこでタイトルのポルトガルの関係が見えてくる。ペドロ・ダ・クーニャを追憶し・・・の巻頭言が出てくる意味もその著者の紹介で徐々に謎が解かれていく。そして、何故に著者がポルトガルに関心を持ったのかを浮き彫りにして行くのである。

日本では、無意識にパン、ポートワイン、カステラやビードロ、ステテコ、ボタン、シャボンなど数多くのポルトガル語を日常使っているが、殆どの日本人がポルトガルを知らない。実際コルクは世界の生産量の殆どを占め、タングステンも、大理石に至ってはイタリアで加工されてイタリア製に変わってしまっていて、我々はポルトガル製の商品を使っている意識はない。著者は、この中で天ぷらの調理方法もポルトガルから由来するなどを紹介し、織田信長時代にポルトガル人が日本にキリスト教を伝えようと漂流からの偶然で来たが、当時の僧侶や大名や平民の知識レベルの高さにも言及するなど、かなりアジアの中の、いや世界の中の日本を評価というか、関心を向けていることが分かる。

英国とポルトガルとは、従来から深い縁があったことにも本書で十分に理解できる。著者が英国人であり、特派員記者として世界を駆け巡って、落ち着いた先がポルトガルである。原著のタイトルが、『初のグローバル村・ポルトガルが世界を変え

た』という、何が書かれているのか興味を持たせるものであるが、日本でもあまり知られていない小国のポルトガルを、ジャーナリストの目から鋭く見て、生活して、多くの友人と接して、そのようなタイトルの評価をしたものと推察できる。なぜグローバル村と敢えて村にしたのかも興味あることだが、一方世界を変えたと大上段に構えて表現する反語も面白い点であろう。

世には、歴史書が数多くあるが、ジャーナリストが書いたものはあまり見かけない。著者自身も、本書は学術書ではないとはっきり断っている。しかしながらテーマを絞り、通史のようなスタイルでなくて物語に仕上げている。そして人間社会の醜さや素晴らしさを中心に、ポルトガルを囲む世界各国の中から抉り出して面白く描いている。奴隷制度、奴隷貿易という現在では否定されたものを創り出す一方、異国文化特に食文化の世界交流に大いに役立ち、宗教対立では前線に立って挑み、異端審問所設立という悪さをする一方、死刑廃止を世界に先駆けて実施するなど、実に相矛盾した両極端の世界を渡り歩いてきている。

ラテンの世界で、時間が悠然と過ぎていく国の観光案内ではなくて、人間の葛藤の姿を、常に先駆者として立ち振舞ってきたポルトガルを知ることができるのではないのでしょうか。

2009年7月 訳者 鈴木弥栄男



## マーティン・ページの著作

### ノンフィクション：

失脚人物：ニキタ・フルシチョフの失墜（デービット・ベルグ共著）  
Unpersoned: The Fall of Nikita Khrushchev

3人の王の時代（ヘレン・ハーディング共著）  
The Year of Three Kings

会社の無作法者  
The Company Savage

大列車の失われた喜び  
The Lost Pleasure of the Great Trains

おやすみのキスを、鬼軍曹  
Kiss Me Goodnight, Sergeant Major

後生大事だから、私を連れていかないで  
For Gawdsake Don't Take Me

名医紹介本  
The Good Doctor Guide

### フィクション：

ピラトの陰謀  
The Pilate Plot

モナリザを盗んだ男  
The Man Who Stole the Mona Lisa

マーティン・ページが有するこの本の著作権は、イングランドとウェールズの  
1988年著作権法の77、78条に従う。



ペドロ・ダ・クーニャを追憶し  
彼の家族といまも続いている友情に寄せて



## 謝 辞：

目の見えない私が著作と研究をし易くしてくれた妻キャサリン；もし励ましがなかったら著作できなかったほどお世話になったリスボンのカトリック大学教授ペドロ・ダ・クーニャ(Pedro da Cunha)；精神的にも専門的技術知識的にも支えて頂いたフェルナンド・オーレイ(Fernando d'Orey)—新リスボン大学教授；サラザール(Salazar)の登場とアングロ・ポルトガル人との関係を研究してポルトガル経済史をご教授頂いたジャイム・レイス(Jaime Reis)—フローレンスの欧州研究所教授；欧州人の東アジア居住者について、アメリカ、欧州、アジア間でポルトガル人が菓、植物、動物、料理方法をどう移転してきたかなどの情報を頂いた、著述家長老のオーステイン・コーテス(Austin Coates)；ポルトガル語原典の英訳を手助けして頂いたリスボンの聖アントニオ修道院 OP のアエドゥリス姉；ポルトガル現代史について記憶を辿って語ってくれたポルトガルの多くの友人達；蔵書を快く利用させて頂き更に多く手助けをしてくれたトゥリスタウン・ダ・クーニャ博士；貴重な蒐集品を見させてもらい、助言も頂いたアントニオ・サルダーノ(António Saldano)博士；ポルトガル語で書かれたテキストのチェックをされ、アジアにポルトガル人が居住していたことの洞察で色々と参考にさせて頂いたガブリエル・メスキータ・デウ・ブリト (Gabriel Mesquita de Brito)大使；シントラの文化的生活に関する考察に役立たせてくれたジョン・コノール(John O'Connor)；著作に当たり友情あるお手伝いをして頂いたカルロス・フェルナンデス(Carlos Fernandes)；本の編集を担当して頂いたスーザン・モーレ(Susan Moore)とジェラルディン・トムリン(Geraldine Tomlin)・……へ。



## 目 次

著者紹介	( 1 7 頁～3 4 頁)
出典註記	( 3 1 6 頁～3 1 9 頁)
更に読んで欲しいもの&ウェブサイト	( 3 2 0 頁～3 2 7 頁)
訳者あとがき	( 3 2 8 頁～3 3 1 頁)
索引	( 3 3 2 頁～3 4 1 頁)

## 第1章 ヨナからジュリアス・シーザー ( 3 5 頁～4 4 頁)

旧約聖書、初期ギリシャ語、ラテン語による神到来を越えた世界；カルタゴ人による莫大な鉱物資源の発見；ローマでハンニバル、ポルトガル人騎馬隊の行軍；ジュリアス・シーザーが幸運な勝利でポルトガル統治と将来図を作成；ローマでジュリアス・シーザー、自分の遣り口で巻き込み、フランス、ベルギーと英国を征服。

## 第2章 大西洋のローマ ( 4 5 頁～5 5 頁)

ローマ人がポルトガルで国を創る；国、国民、ローマの法律、食事、言語を変革して世話；税金の暴騰でポルトガル人がローマ人を奴隷売買に；階級制を規制したらローマ人が孤立。

## 第3章 キリスト教国の盛衰 ( 5 6 頁～6 4 頁)

聖ヤコブの革命的“実践的なキリスト教”が北アフリカから到着；ローマ人に対する反乱；国を接収するゲルマンから宗教反体制が到着；国王ウティザの殺人へ導く法律の改正；故意でないアラブ人の襲撃が軍隊を占領。

## 第4章 ヨーロッパへアラブ文明持ち込み ( 6 5 頁～8 1 頁)

## 目次

おおかた平和的な征服；大司教、聖職者の敗走による空白の中身；キリスト教徒の殉教か自滅か；農業、教育、医学、建築でのアラブ人の革新；王子の女官との駆け落ち；アルガルブの首都が音楽、文学の文化の中心地に、そして英国十字軍による崩壊。

### 第5章 キリスト教徒のレコンキスタ (82頁～94頁)

現代キリスト教国のためのブルゴーニュ人聖ベルナルの陰謀；ベルナルのいとこ・アフォンソ・エンリケがスペインの母を拘留、ポルトガル最初の国王を宣言；テンプル騎士団の設立と、その鍵となる役割；“大胆不敵なジェラルド”の功績；リスボン包囲でのイングランド人・ノルマン人対ゲルマン人・フランドル人；略奪と残忍さ。

### 第6章 シトー修道会の平和 (95頁～109頁)

修道士の戦後の大改革—戦場を果樹園、葡萄園、森林に；国王ディニスの新ポルトガル；社会福祉と大学教育に変革の波；ブルゴーニュからの王室の没落；スペインからの強迫；淑女英国女王が宮廷の放蕩に挑戦。

### 第7章 エンリケ航海王子の不運 (110頁～127頁)

王子エンリケを航海士として英国人が再捏造；ザグレス航海学校の神話；スペインとの平和が軍事、宗教体制で財政破綻に；エンリケの北アフリカ略奪と宮廷の不名誉；カラヴェル船の開発；欧州人のアフリカ奴隷貿易が開始。

### 第8章 国王ジョアンと偉大な探検 (128頁～139頁)

エリート教育が宮廷を改革；国王ジョアンのクリストファウン・コロンブス解任がなぜ正解か；西アフリカの黄金ブーム。

### 第9章 調査団長ペロ・ダ・コヴィーリャ (140頁～149頁)

## 目次

インドへ一人旅のペロ；ペロ航海図は南アフリカ迂回路発見者バルトロメウ・ディアスの航海図で完成；ペロ、プレスター・ジョーン発見のための2度目の探検航海では戻れず；宮廷付き牧師がペロをリスボンに連れ戻そうとするも、監禁されたと主張して豪華な生活をする彼を発見。

### 第10章 ヴァスコ・ダ・ガマと海洋支配 (150頁～162頁)

ヴァスコ・ダ・ガマは大使なるも新航路発見者でない；ガマの船旅は現代の宇宙船飛行ほど行き当たりばったりではない；キリスト教徒であることの危険性；インド洋の地元首長との言葉による決闘；軽蔑された欧州人の貢物；かろうじて脱出。

### 第11章 インドとそれを越えて (163頁～180頁)

インド洋を征服するためのアラブ人との競争；ヴェニスとの貿易提携の切り離し；現代薬理学の基礎；極東への出入口、マラッカ海峡の占領；海軍大将アルブケルケの25億ドルもの戦利品の沈没；メンデス・ピント、フランシスコ・シャヴィエルの信じられない冒険；ポルトガル人イエズス会の日本への衝撃；アメリカ、欧州、アジア間の植物、食べ物、料理方法の移転。

### 第12章 リスボンの黄金時代、大惨事の広がり (181頁～191頁)

欧州で富と流行の新しい中心地に；マヌエル様式建築、音楽、劇場と社交界；ダ・クーニャのローマ教皇へ象を寄進；ポルトガル人の科学での進歩；新教徒海賊の略奪行為；国王セバステイアンによるモロッコへの悲惨な侵略；ポルトガルがスペイン人に攻撃を開始。

### 第13章 異端審問所の到来、ユダヤ人の追放 (192頁～214頁)

スペイン異端審問所で追放されたユダヤ人を追放しなかった欧州で唯一の国ポルトガル；ローマ教皇、国王マヌエルがポルトガルのユダヤ人を守る；異端審問所の聖庁組織；*auto-de-fé*

(アウト・デゥ・フェ) “信仰についての訴訟手続き”、“公開の儀式”の非神話；追放や逃亡したユダヤ人を介して、ブラジルでダイヤモンドの発見、チューリップ球根、チョコレート、タバコ、銀行をオランダにもたらす；オランダ人がポルトガルのアジア帝国を圧巻。

#### 第14章 自由の再獲得 (215頁～234頁)

フランシス・デウレイク卿の侵入が茶番劇に；アル・オブ・エセックスがファロ司教の書籍を盗み、オックスフォード大学図書館を創設のトーマス・ボデウレイ卿に手渡す；ポルトガル人貴族、スペイン貴族を追い出し、新皇族にブラガンサ家を任命；アイルランド人司祭が外務大臣に、タンジェ、ボンベイを嫁資とし、ブラガンサのカタリーナ皇女を英国国王チャールズ2世のお后に、スペインへの軍隊派遣を見返りで嫁がせる；政略結婚とその悲惨；タバコが欧州で大流行、王室財産膨らむ；アメリカで初めてのゴールドラッシュ。

#### 第15章 ポンバルと国王、誇大妄想の二重奏 (235頁～250頁)

リスボン大地震の津波がカリブ海諸島まで届く；リスボンの廃墟に独裁者が任命される；宣伝家なるポンバル；国王に代って“ポンバル”が新リスボンの創造者に、“ポンバル水道橋”なる建築家；ユダヤ教徒と一緒に戦い；教育体制の崩壊；独裁制の得。

#### 第16章 大きな権力の運動場 (251頁～263頁)

ブラガンサ家がブラジルに逃避、ポルトガル国民、ナポレオン軍勢を解放者で歓迎；フランス軍占領体制下、国は故意に破壊；ウェリントン大公、フランス退却とポルトガルの芸術的宝物を戦利品として英国艦隊の受領を許可；フランス軍占領から英国占領に置き換わる；ひとたび解放されるや、ビスマルクに勇気付けられ内戦に明け暮れ。

#### 第17章 ブラガンサ家の没落 (264頁～274頁)

民主主義と技術と社会が進歩した現代国家の模範とアンデルセンがポルトガル報告；間抜け



の新国王；アフリカに対する英国の人種攻撃；国王と皇后皇子が暗殺される；新王が英国郊外に亡命。

第18章 独裁制への滑走 (275頁～287頁)

多過ぎる選挙、新大統領と新政府が無政府状態を導く、暴力が街頭から議会へ広がる；カトリック主義撲滅に共和主義が挑戦；司教、ファティマの奇跡を受け止め；軍事クーデター、民主主義を停止、文民独裁者サラザールの誕生；サラザールを父とする家族国家；秘密警察設立とポルトガル人には最初の収容所。

第19章 第二次世界大戦、自由への裏切りと戦い (288頁～302頁)

ポルトガル産タングステン、戦火で荒廃のロンドンに脅威；ポルトガルでの英国諜報機関主任グレアム・グリーン；秘密民主主義最頂の内通告発；ジェイムス・ボンドの元祖；ポルトガル植民地事情をガルヴァウンが暴露、周遊定期船の捕獲；ゴア居留地、インドに明け渡し、アフリカの問い掛けに新世代ポルトガル将校がいつまで続く？

第20章 自由の夜明け (303頁～315頁)

ラジオ倶楽部ポルトガル、暴動を叫ぶ；カーネーション革命、不快さをひっくり返す；民主主義者ソアレスがスターリン主義者クニャールとのテレビ対決で勝利；終に普通自由選挙に；“ラテン暴れ者の経済”なるポルトガルの有事；20世紀に傷付いた国々に希望を与える回復。

## 著者の紹介

午後を半ば過ぎていた。コンゴは内戦の最中<sup>きなか</sup>にあった。ロンドンから到着したばかりの新米海外特派員の私は、ヌドーラからエリザベスヴィルに向かう道端に突っ立っていた。実は交通事故に遭い、後で分かったことだが、4本の肋骨<sup>ひび</sup>に輝が入り、左肩は骨折していた。カタンガ人の兵士仲間が、事故で潰れた<sup>つぶ</sup>レンタカーにある小荷物の中身を調べるのを手助けしているあいだ、兵士が私の背中に向けてサブマシンガンの銃口を徐々に押し付けてきていた。

これから自分が行こうとする戦闘地帯から逃げ出して、盗んだと思われる車両に白人の南アフリカ傭兵を乗せた往来の流れが私の目に飛び込んできていた。運転手は民兵を見ながら速度を落とし、それからまたスピードを上げていった。私の傍<sup>そば</sup>を通り過ぎていった車両は、優に50台を越えていたであろうか。そうこうするうちに1台のプジョー・ステーション・ワゴンが近づいてきた。運転手は急ブレーキを踏み、私の方へ逆戻りして、後部座席用のドアを開けて「飛び乗れ！」と叫んだ。

「背中に銃で脅されている！」

「だから飛び乗れと言っているのだ！」

彼にただ従うしかなかった。素早く車に乗るように急かせた。自分の肩が骨折していてドアを閉められなかったが、どういうわけか風でドアが閉まってくれた。乗っている車が国境の警戒地域に近づいたようだ。運転手は3つの音色の警笛を鳴らし、ヘッドライトを点滅させたあと、アクセルを強く踏んだ。新しいゲートを壊されるのではと恐れて慌て<sup>あわ</sup>ふために警備兵はゲートを上げてしまった。ただ我々はカタンガ共和国の外側にいることだけは確かだ。しかし警備兵はなぜ発砲もせず<sup>びた</sup>に我々を通してくれたのだろうか。

「奴らは銃薬を持たせて貰<sup>びた</sup>えず、鏹一文、報酬を貰っていない。我々が煙草を

恵めば、奴らはそれを食べ物と交換するのだよ。」

私は運転席のバックミラーに写る彼の顔をじっと見つめていた。彼の真面目そうな、少ししかめ面の表情は、微動していなかった。仲間に似て、黒髪、口髭<sup>くちひげ</sup>を丁寧に手入れする南欧州人の風貌ある30代の年恰好に見えた。彼らは洗濯の効いた白いシャツを身に着けていた。首には、小さな十字架と聖母マリアの肖像画メダルを付けた金のネックレスが下がっていた。

現在のザンビアからコンゴへタバコを密輸する業者だと、彼らが打ち明けてくれた。私がレントゲン撮影、注射、縫合や包帯の治療をしてもらおうよう銅鉱山の町・キクウィットの病院へ連れて行き、その間鉱山会社の宿泊所に立ち寄り、英国人の管理人に私を紹介してくれた。

彼女は「朝のお茶は5時過ぎからですよ」と言った。

「私は何も要らない、ただ休ませてくれ。」

「それは失礼しましたわね」と言った。「あなただけを例外にしてしまうと、他の宿泊客はあなたに何があったのかと聞くかもしれないわよ。食堂での朝食は6時半が最後ですよ。」

私はロンドンにいる外国編集者テレンス・ランカスター(Terence Lancaster)に電話をつなぐように依頼した。「君の災難を知って非常に心配している。ケープタウンのタバコ工場でどうも暴動があったようだ。明日までにそこを出発できないなら、君のもう片方の肩を壊したるわ！」とテリーは言った。

私にとっての助<sup>すけつと</sup>人が、宿泊所にあるバーで、南アフリカの大きなブランデーグラスを運んできた。ロシュマンズのタバコ5百本を呉れ、私の財布には充分なお金があることを確かめて立ち去って行った。何か私の生まれ育った文化を少し呼び戻させてくれた気もしたが、それ以降2度と彼らとは会わなかった。私がポルトガル人と承知の上で会ったのに、その出会いが、まさかの時の見知らぬ人としては異常な程に触れ合ったばかりでなく、虚勢さ、廉恥心、巧妙さ、落ち着きを混ぜ合わせた

ようなものを持っていたように思えてならない。

\* \* \*

企業役員がどう合理的に意思決定するかを風刺した、私の著作『会社の無作法者』(*The Company Savage*)の日本語版を売り込む為に日本へ行ったことがある。一流 日刊新聞の朝日新聞で、書評を好意的に書いてくれた人とお茶を飲む機会を編集局長が作ってくれた。彼と話している間に自分が<sup>た</sup>称えられているのは、はっきりと分かった。彼は日本経済の陽を<sup>あ</sup>揚げるのに最も影響力のある、尊敬されている指導者の1人であった。我々は上智大学キャンパスがある高層建築に到着し、エレベーターで最上階へ行った。立ち並んでいる列を通り過ぎて実務研修の学部長室控えの間に入り、偉人を飾っている隅の執務室へと進んだ。学部長はイエズス会のポルトガル人とばかりてっきり思い込んでいたが、実は、流暢に、陽気に、英語を操り、そして司祭の衣装を完璧なほどに身に着けた日本人であった。

サウン・フランシスコ・シャビエル(São Francisco Xavier) (発音上、ザビエルでなくシャビエルが本来は正しい)のイエズス会士ら共同創設者のもとにポルトガル人が日本に暮らし、我々英国の先祖が日本の存在を知る前の世代であったことを自分達は見逃してしまうのは容易に想像が付く。イエズス会士らは京都御所にて仏教の僧らと神学について議論した。彼らは日本語に自国の言葉を導入し、例えば《有難う》を意味する言葉、ポルトガル語”obrigado”から”orrigato” (著者の記述。でもローマ字なら arigato であろう) などである。人気ある、簡単に料理出来る天婦羅(*tempura*)の料理法を日本に<sup>もたら</sup>した。更に銃の製造技法や、砲撃に耐え、耐震性の城や砦の建設技術を教えた。ポルトガル人が教えて建てた長崎市の構築物は、1945年の原爆投下での広島よりも何世紀にも亘って残存してきている。マルコ・ポーロが中国に着いていたときより前に、ポルトガル人は既に明皇帝の顧問になっていた。インドに唐辛子の栽培法を持ち込み、インドに居た英国人に《カレー料理》の発明を可能にさせ、英国のインド統治のひと味としてカレー料理を本国へ持ち帰った。

## 著者の紹介

東チモールのポスト植民地時代の独立闘争は、最も永く続き、過酷なもの1つであったが、1999年に漸くインドネシアから独立を勝ち取ることができた。東チモールという新しい国家を作る上で最初にとった動きは、ポルトガル語を公用語として採用し、法貨としてエスクードを承認することであった。この決断をした裏には強い思いがあった。東チモール人には自由自在の正当性があるとポルトガル人の多くが強く信じていたのに、欧州人はそれを殆ど理解しかねていた。東チモールにとっては、ポルトガル語そのものが正当性の重要な象徴として成り得たのである。

でも別の見方をすると、その選択は多くの外国人から見て、特に最も近隣の、また擁護者でもあった豪州人にとっては、そうであるという考え方をそんなに奇異には映らなかった。ポルトガル語は、ラテン言語の中で言葉使いがずば抜けて難しく、嫌な程に聞き取りにくい代物である。また欧州言語の中でポルトガル語は、英語、スペイン語に次いで3番目に話されており、フランス語やドイツ語よりも多い。ブラジルやアンゴラは、勿論この知られざる統計値に相当に貢献している。動物虐待を規制する州法に従って、ヴェルクロ（マジックテープ）を先端に覆った槍でもって円形競技場の中で雄牛と闘う北カルフォルニアでの畜牛大牧畜場や、ポルトガル人が船乗りの勇敢さと技能を高く評価している田舎町・ニューイングランドでの漁師社会を指す“*lingua franca*”は、ポルトガル語である。ジョン・エフ・ケネディー一家はハイアニスでよく避暑をしたが、そこのサウン・フランシスコ・シャビエル教区教会へ、日曜の礼拝に2回ほど行ったが、ポルトガル語で喋ったと云われている。

ロンドンの、あるイタリアレストランの自動開閉ドアの後ろには、イタリア人に成済ましたポルトガル人が店のオーナーとなって取り仕切っている陰が見える。パーティー船《公爵夫人》がテムズ川で浚渫船しゆんせつせんと激しくぶつかり沈んだ時、ロンドンに住んでいる控えめな態度のポルトガル人が悲壯感を漂わせていたのを思い出す。その溺死者の多くがロンドンで働き、仲間の誕生日を祝っていた投資銀行家のポルトガル人だったことをどのメディアも報道していない。ポルトガル人はまたパリで

4百ものレストランのオーナーをして経営しているが、ラテン系アメリカ人として、多くはフランス人として振舞っている。パリで最新の、最も光り輝いているルーブル美術館のピラミッドは、ポルトガルの建設会社によって実は作られているのだ。

南アフリカのヨハネスブルグ、ニューアーク、ニュージャーシー、ルクセンブルグ、ヴェネズエラの首都カラカスでは、ポルトガル語は2番目に多く喋られている言語である。インド、マレーシア、台湾、中国、同様にバミューダ諸島、ジャージー島、トロント、ロサンジェルス、ブリスベーンと数え切れない場所で、その地方で生まれ育っても、ポルトガル語が日常会話として使われている。

これは何も表向きの姿を大きく映し出しているものではなく、海外に住む殆どのポルトガル人は居住国市民なのだ。マリオ・ソアレス(Mário Soares)が《言葉は接着剤のようなもので、ポルトガル語を喋る人は、ポルトガル人である》とも言っている。ポルトガル人は辺り一面に居るのだが、彼らは非常に静かに喋り、我々は彼らが居ることを殆ど聞き取れないくらいなのだ。

\* \* \*

1988年の復活祭の朝、妻キャサリンと私と2人の息子マットとサムは、リスボン西の、シントラの峰々から大西洋に突き出た大きな半島・ロカ岬の近くにある新居を歩いていた。テラスから沸きあがる霞で太陽が銀色に変化していたのを眺めていた。月が我が家の後方に見え、夜には狼が遠吠えし、狐がうろつく木々が生い茂った峰々の上に未だ照っていた。空には1羽の白色の鷹<sup>たか</sup>と2羽の隼<sup>はやぶさ</sup>が飛翔していた。家の横に広がる牧草地には野草、灌木のローズマリーや黒葡萄が微風で揺れていた。野菜、レモン、ジャム、蜂蜜、束ねた香りの良いコエンドロ、箱に入れた食用の蝸牛<sup>かたつむり</sup>などを積み上げた荷車を、日曜の市場に行くのだろうか、1頭の驢馬<sup>ろば</sup>が牽<sup>ひ</sup>いていた。カスカイシュ海岸あたりの市場でのせり売りに出す為なのだろう、朝獲った魚介類を運ぶ漁船がポップという音を立てながら崖の下方の海からゆっくと進んで来る。

シントラと云えば同時代の英国著術家にとっては隠れ家だった。1757年に、偉大な喜劇作家ヘンリー・フィールディング(Henry Fielding)が病的と思えるほど不機嫌に感じながら住んでいたバースを、夏には太陽がいつも燦燦と輝いて欲しいというだけで捨ててしまった。彼はティルバリーでリスボン行き満員の船に乗った。館を借りたシントラの町まで丘を登るために、リスボンで数頭の驟馬と4輪馬車を借りた。その後健康と気分は直ぐに大方快復したように思われた。新作を書くのにシントラが地球上で最も素晴らしい場所であると断言していた。口述が出来て話し好きな、出来れば牧師で、夕方には自分を楽しませてくれるような秘書を弟がロンドンからシントラに遣わすように、更に幅広の罌付きの帽子2つを送るよう依頼した手紙を弟宛に書いた。しかしこれらが届く前に肝臓の病で死んでしまった。

『ポルトガルジャーナル』の著者でもある桂冠詩人ロバート・サウジー(Robert Southey)が、18世紀末に妻と子供を連れてシントラに住み始め、英国浪漫運動の面々もシントラに来るよう急かした。それに呼応してコールリッジ(Coleridge)がシントラに来て《シントラは銀色の海にセットされたエデンの園のようだ》と評した。ウィリアム・ワーズワース(William Wordsworth)と妹ドロシー(Dorothy Wordsworth)も彼らに続いたが、地方の英国国教徒の共同社会はお墓に名を刻まない風習があるのに、それを無視してフィールディングが葬られたことにドロシーは激怒した。ドロシーは大急ぎで英国に戻り、リスボンに住む英国人の住民が敬うにも当たらないと“ペリシテ人”呼ばわりした激しい口調の小冊子を書いた。

男爵アルフレッド・テニスン(Alfred Tennyson)はシントラに居残った。バイロン(Byron)卿は『チャイルド・ハロルドの巡礼』を、このシントラから出発した。この丘を下れば、イアン・フレミング(Ian Fleming)がジェームス・ボンドのキャラクターを産み出した、カジノがあるエストリルに辿り着く。そこは最初の小説『カジノ・ロワイヤル』を構想したところである。死ぬ直前までシントラを訪れてはグレアム・グリーン(Graham Greene)を使い、カダヴァル・マルケータ(Marquesa de Cadaval)

の家に滞在していた。第2次世界大戦の間、ポルトガルにある英国諜報部・ロンドン本部長であった。映画『ハバナの男』は、元検閲官が求めている場面の変化を風刺したものであった。恰も玩具のようにスパイのように演じながらも、殺された時には自分達が実は人間であったと認識することになる自分を振っている。シントラやその周辺に生き延びて未だに住んでいるスパイは、彼が再び来るのではと、終戦後10年間もひどく怖がり続けていたのである。

クリストファ・イシャウッド(Christopher Isherwood)は1930年代後半にドイツ人パートナーのハインツと、ウエルシュ教会のピアニストに付き添ってきたステファン・スペンダー(Stephen Spender)とシントラで住み始めていた。ハインツがポルトガルに滞在したことがリスボンにあるドイツ領事に報告されている。彼はドイツ軍の徴兵に取られる前に領事館へ報告するよう命じられていた。さもなければ亡命者としてリストアップされ、ポルトガルから送還され、軍事法廷に引きずり出されて軍の牢獄行きの判決を言い渡されたに違いなかった。

イシャウッドはハインツの弁護を依頼して貰う為に、敢えて弁護費用が最も高い弁護士をリスボン市内で見つけてあげたが、その弁護士から丁重に断られてしまい、イシャウッドはなす術もなかった。シントラへ戻る列車に乗ろうとしていた2人が涙を流しているのを、駅舎の向いにあるカフェのウェイターが気付いた。

ウェイターは何が起きたのか尋ねてきた。事情を説明し終わったらウェイターは「悲観しなさんな。私がなんとかしてあげますよ。」と言った。

疑い深くウェイターに「いくらだい」と問いかけた。

「もちろん、ただだよ」とウェイターは答えた。そのウェイターは自分の言った言葉が本当のことなのだと彼らに十分に納得させようとした。その後スペンダーは連れ合いと少し諍いさかいを起こしてスペンダーは帰国してしまったが、イシャウッドは家の身の回りをお手伝いして呉れるハインツと一緒にシントラに留まった。このシントラでイシャウッドは、『私はカメラ』を完成させが、それがハリウッドのミュー



ジカル『キャバレー』の原作となった。オーデン(W.H. Auden)がイシャウツドの著作活動に加わり、連峰の険しい岩々を1つずつ這い登って、暁の雰囲気の中に自分自身を魅惑に包み込みながら、『ピーク F6 登頂』を共著した。

我が家族がシントラに住んで初めて迎えた秋の、フランクフルト・ブックフェア一開催後1週間、大西洋から我が家に襲ってくる大嵐に、<sup>おのの</sup>慄きながら、強風の<sup>うな</sup>唸り声と雷の<sup>とどろき</sup>轟を耳にした。稲妻が我が家の煙突に直撃し、また村の変電所にも落雷して、我が家の灯りと暖房が駄目になってしまった。雨水が出入口の下まで浸水してきた。濡れたタイル床を歩いていたら滑って転んでしまい、私は腕を何と骨折してしまった。

骨をボルトで固定する手術を受けた後、リスボンの、とある病室で麻酔から目覚めた。妻キャサリンは私に付き添っていて、窓の外を見渡しながら話し掛けて来た。

「隣扉の建物には綺麗なお庭があって、椰子の木と、バロック風壁画があるのよ。机には真っ白いテーブルクロスが敷かれていて、シャンパンを冷やした入れ物が置いてあるの。制服を着たウェイターが居るわ。美しい身なりをした人が、テラスから降りてきて歩いて来るわ、そう最新のイタリア・ファッションのようだよ……。」

看護師が部屋に入ってきた。彼はお尻の上部に注射をしながら、「隣は著作者倶楽部なのですよ」と説明してくれた。

私が訪問した著作者倶楽部というのは、東京では半地階に場所を構えていたし、モスクワ郊外では大きく粗末な木造の掘っ立て小屋だったし、ロンドンではグローチョの満員のバーがそうであった。だからそのように優雅な代物に近づいたことは1度として出会っていなかった。数ヶ月の内に、著作者倶楽部の幹事であるザーレス・レーネ(Salles Lane)博士の紹介を受けてから、私と妻はテージョ川をテラスから見渡して、海老のソテーや山<sup>うずら</sup>鶉の蒸し焼き料理に舌鼓を打つ計画を立てていた。

\* \* \*

私が50歳に未だ成っていない頃に我々はロンドンからシントラへ引っ越してき

## 著者の紹介

た。私の視力は手術しても良くならない網膜剥離症に罹っていて、視野範囲が10度で、それが95%も占める程に悪化していた。自動車を安全に運転するには、少なくとも120度必要だとされている。私が映画の脚本を手がけて働いていたアメリカ合衆国では、視野範囲が20度で法律上は盲目と見做している。私が自分の右手を広げて私の両目の前に立てたら、4本の指は見えるが同時に親指は見えない。

私は大人になってから殆どを、生まれ故郷を離れ、海外特派員、旅行記の書き手、編集者として過ごしてきた。今は独りだけではもう旅行出来なくなってしまった。それでも私はモスクワのプシュキン広場にある、開いていたマンホールに落ちてしまい、マンハッタンの通行車両の多いレシントン大通りを横切ったこともある。最後の独り旅はブリュッセル空港での出来事であり、自分のものでない欧州人の役人のアタッシュケースを拾い上げて、それを持って飛行機に乗り込もうとして捕らえられてしまった。

私の生まれ故郷であるロンドンさえ今では危険なものになり、<sup>あとか</sup> 恰も敵国の領地のようにさえ思えてくる。ラドゲート丘の階段を転げるように下りると、セントポール大聖堂からフリート通りへ、又は、オフィスから自宅への私の通勤路があり、ウォータロー駅で気ままに動くキャスター付手荷物が落ちてしまった時に、私は人々の仲を裂くように周りを通り過ぎ、それから再び溶け合うような現実を見た。

私はバーネスに郊外庭園を持っていた。そしてその裏側に木製の小屋があった。前扉を通して作業の為に出かけ、我々の家と隣扉との間にある側通路を通して小屋に向って行った。その小屋で私は『モナリザを盗んだ男』という小説を書いた。それはニューヨークで非常に好評を博し、ロンドンではタイムズ誌がその年の2つのベスト・スリラー物に選んで呉れた。サボイ・グリルで昼食をとった時に私の代理人が、私がこれから書く小説では豪く見入りが良くなりますよと話し掛けてきた。

経歴表に依れば私の余命は（今後の災難、事故を含む）、別の24年があった。禁錮刑の判決が2度あり、最たるものは殺人罪の<sup>かど</sup> 廉で服役した。横幅4米と奥行き5

米の独房の中で、真夜中に読むことも、心血注ぐことも出来ないで、物語を書いて私が過ごしたのだろうか？それはどこか他に別の人生を始める時間であった。

我々が南フランスかトスカーナで住む代わりにシントラを選んだことに、友人は当惑していたようだ。ロンドンで働いているポルトガル人の弁護士でさえ、プロヴァンスを代わりにと我々に懇願していた位であった。ポルトガルは我々のようなものにとっては、余りにも、訛った、土地が痩せた、衰退した、教育が行き届いていない、病気が蔓延した、ヨーロッパのバナナ共和国であった。ストライキは頻発して当たり前であった。物価上昇率は財政の温度計を壊すほどに鰻<sup>うなぎ</sup>上りであり、通貨のエクードの価値は落ちっぱなしで、経済は不況の真只中にあったといえるだろう。専門家の予想によれば、過酷な労働と厳しい犠牲を払って漸く国の負債を管理レベルまで減少させることが出来るだろうと。

その道はデコボコだった。ポルトガルの道路は運転者にとって西ヨーロッパに中で最も危険なものであった。リスボン地区にあるスーパーマーケットだけが、石鹼、塩鱈、缶詰のトマトとマーガリンを無愛想に売っていただけだった。

リスボンにいる弁護士は、依頼人のナイジェリア国王の酋長と一緒に空港へ向ってドライブしているときに我々に喋ってくれた。閣下はいつリスボンにお戻りになりますか？

「私は戻りたくない」とその酋長は答えた。「どうも国王はアフリカがもっとお好きのようです。」

リスボンを訪れたとき、我々は舗道に座って物乞いをしている肢切断者に気付いた。また我々が泊まった4つ星ホテルの絨毯<sup>じゅうたん</sup>には黴<sup>かび</sup>が生えていた。電話を掛けるときは、時間との過酷な戦いでもあった。そして捨て去られた朽ち果てた大邸宅が、以前は植民地だったアフリカからの難民が住む、掘っ立て小屋や家並みのそばに並んでいた。国を代表する寺院・ジェロニモス修道院は鳩の汚物で汚れ放題で、何もチェックされていなかった。

今までポルトガルについて別の側から見ていたように思われる。パダホシュというスペインとの国境を越えてポルトガル田園地帯のアレンテージョ地方に入ると、我々は絶望から希望へと気持ちがちがらりと変わり、うっとりさせられる。マドリッドとブルッセルが南西スペインに援助を提供していたことに、今日誰も感謝もしないし注目もしていない。国境警備兵の警戒態勢や礼儀らしさ、手入れの行き届いた庭園の豊富な花々、料理やワイン作りの品質向上への取り組み、カフェにいる我々が外国人であると見抜いて親しく且つ好奇心を持つ子供たち、歴史ある町並みの保護と維持の活動をする市町村など、我々よりも前に旅行した19世紀半ばのハンス・クリスティアン・アンデルセン(Hans Christian Andersen)が注目していた。地元の風景画家、大理石彫刻家、<sup>ししゅう</sup>刺繍をする人、木彫り人、詩人などがいた。エルヴァスでは修道女がプラムを保存して新しいケーキを創案したが、ブラガンサのカタリーナ(Catarina of Bragança)が英国へ《午後のお茶》の習慣と、侍女がアレンテージョ修道女のケーキ作りを習得して、持参したのは実はこのエルヴァスだった。

ポルトガル人は20世紀に入ると大きな遅れをとってしまう。中央アフリカでのポルトガルの鉱山権は《古き同盟国》の英国によって停止されてしまった。第1次世界大戦で連合国側に属したポルトガルの軍事的関わりあいには短かったが、それは悲惨そのものであった。無力な君主制が崩壊し、無政府状態がその後オリベラ・サラザールに権限をお目出度くにも委譲した間抜けな軍事臨時政府が続いた。サラザールは銀行破綻<sup>はたん</sup>から国を救い、通貨を復興させ、大きな経済発展綱領の実現に向けて投資基金を設立した。

サラザールは独裁者となったが、他の独裁者と同じように舞台からどう降りるのかの術を知らなかった。ポルトガルは第2次世界大戦では中立の立場をとったが、その後サラザールはアフリカに若い徴集兵を派兵して死に追いやり、そこで民族主義の潮流を後戻りさせる無駄な企てをしようとした。軍隊、それから共産主義者らが力を握った。西欧州でそのようなクーデターの事例はそれのみであった。197

0年代後期の、民主主義が定着するまで、ポルトガルは20世紀に始まった破綻や大混乱の苦境を連れ戻していたのであった。

ポルトガル人は自分の運命を素直に受け入れなかったように我々は感じる。私が自分自身に目が見えないことを課した以上に、ポルトガル人は彼ら自身に運命を道連れにはして来なかった。我々は幸運に見放され、不幸な災難の両方を持ち合わせていた。ポルトガル人は、希望的に言うなら我々自身、既に底を打ったが、前進し、這い上がれる処は何処にもないようにも思えた。ポルトガル人の多くは行動力、巧妙さ、決断力を持って、21世紀に向け国を造り直すことを示していた。我々は英国に生まれ、そして逆戻りできない、徐々に退歩していく英国を道連れしてしまった。再び陽が昇っていく国をじっと見ていることは、結構いい眺めでもある。

\* \* \*

ペドロ・ダ・クーニャと私は、リスボン北の環状線から降りたファドのホールの外の駐車場で、午前0時過ぎに初めて会った。我々の子供が通うアイルランド人経営のドミニコ修道会学校の、ある先生の誕生会から我々是一緒に帰ってきていた。新しい民主的なポルトガルを足元に呼び戻すのを手助けする為、医学、コンピュータ技術、博物館館長、音楽まであらゆる分野で高い評価を博しながらも、結局は追放されて最近海外から戻った多くのポルトガル人の1人が、ペドロであった。暗闇の中で私はペドロを見ることは出来なかった。自分の心の中では、温かみのある、自信に満ちた、敏捷な、好奇心に満ちた、隠し立てのない、旋毛曲がりじみたところの彼の声を聞いて先ず衝撃を受けた。

ペドロは教育改編の所管大臣になって戻っていた。ペドロとアメリカ人妻スーザン(Susan Cunha)と我々は、エストリルのセント・メアリー教会の日曜礼拝で会った。礼拝後のコーヒーを飲んでいる間、会話が弾んだ。週末のせいもあってか、昼食も夕食も一緒にすることに決め、食事が摂れるある倶楽部で落ち合った。そこでは現代の神学についての研究とその議論がごく自然と行われ、我々もその時間の約半

分を使ってしまった。

ペドロは異常とも思える位のもの知りであり、飲み込みが早く、新しい見方を切り開くことに心を奪われるタイプであった。7年後に癌で亡くなるまで続いたペドロとの友情は、私の人生の中で最も価値のあるものであったし、期待もしていた。

ペドロと私は1歳違いで、私がロンドン、ペドロがリスボンに生まれた。その後我々が歩んだ道は、まだその時点では将来に向い離れて行った。私は西イングランドにあるクエーカー教徒の寄宿舎で、朝の7時に冬でも冷水のシャワーを浴び、1週間に1回下着を着替え、緑色に帯びた肉と魚油臭の灰色マッシュポテトの夕食をお互いにこれじゃ缶詰の猫用の餌ではないかと文句を言い、数多い二流の講義をきき、「3人組みでランニングだ!」と呼び出されるお仕置きなどに逆らいながらも色々な体験をした。私が無神論者になると決意したのは、宗教への嫌悪感を持つに至ったビリー・グラハム(Billy Graham)福音伝道大集会の、学外での集団瞑想のときであった。

一方、ペドロはポルトガル北部に建てられた非常に厳格なイエズス会の学校で過ごし、同期の何人かは肉体的にも精神的にも傷を付けられて学校を去ったが、彼は聖職者への道を選んだ。

私がケンブリッジ大学に在学時、学生新聞の編集に没頭しているのをペドロは無視するかのようにブラガ大学で哲学の学位を取り、更にグラナダ大学で神学の学位を取っていた。私が新米外国特派員として、列車衝突事故、飛行機墜落事故、サミット会議などの取材をしていた頃、ペドロはボストン・カレッジで哲学の修士学位を取ろうとしていた。私がモスクワ編集局長になった時、ペドロはボストン大学に移り、教育に関する博士論文を執筆中だった。

リスボンに呼び戻されるまで、ペドロは正式に聖職者を辞めていたし（ペドロが常に心の中でそうしてきたと彼の友人は誰も考えていないが）、アメリカ合衆国の市民になっていた。

ポルトガルは欧州連合に加盟して、補助金、低金利融資、投資基金が豊かな北ヨーロッパから流れ込んできた。コインブラ大学から経済学博士号を取り、ヨークにあるエリートの新英国大学の講師であったアニバル・カヴァコ・シルヴァ(Aníbal Cavaco Silva)が率いる社会民主党政府が選出された。新財務大臣は、シカゴ大学で2つ目の Ph.D.を取り、エール大学で教鞭をとり、第3世界に向って政策を指示する世界銀行に以前籍を置いた人物であった。新外務大臣は、ジョージタウン大学で外交関係の教鞭をとっていた。その時のポルトガル新政府の学位数が、英国内閣の学士学位数よりも多いことに私は気付いた。

新任の教育大臣ロベルト・カルネイロ(Roberto Carneiro)は、欧州人で構成される閣僚に選ばれた初の少数民族・中国人（まさにアジア人）であるという栄誉を持った。彼の省は、《超越省》と呼ばれていた。カルネイロがある時に、新英国に移民のポルトガルの子供を教育する時に生じた問題に関するペドロの学位論文を読んだ。そしてポルトガルにおける教育の危機を解決するためにペドロを呼び寄せたのである。大人の読み書き計算の得点がヨーロッパの中で最低であることが分かった。

ペドロが教育改編の所管大臣として任命されて5年後、ロンドンのファイナンシャル・タイムズ紙が、18歳以上の大人の読み書き計算の得点はポルトガルがずっと上であり、英国がずっと下であると報道していた。

北東部の貧しい地方の学校を視察したペドロが、子供達がまだ朝なのにもう疲れていて注意力散漫な状況を見つけた。その母親らはカチカチのパンとワインを朝食として与えて子供の空腹の辛さをくい止めているのが分かった。そこでペドロは給食制度を導入し、火腿やチーズのサンドイッチと果物とミルクの献立の朝食にした。栄養失調と幼児性酩酊は減少し、出席率が増え、そこで読み書き計算の得点が高くなった。教師たちが、勤続年数がそう永くならず将来への訓練を出来るよう国が奨励した。1クラスの生徒数は半数になった。新しいカリキュラムが作られ、実践的な、社会的な、生存するための技能、つまり長さや重さなどの測定、家族の写真

撮影、水泳などを含んでいた。若人が教育実習生として相手になるよう工芸職人には給料が支払われた。ペドロは、ポルトガルはいまや多文化的社会であり、ペドロ自身が捧げてきたカトリック主義がもはや宗教を独占できなかつたし、他の信条や宗教の願いもかなえて、大切にしなければならないと強調した。

ポルトガル経済はヨーロッパのなかで最も早い進み具合で成長して行った。ビジネス出版物は《ポルトガル人の暴れ者》と呼び始めていた。フォードが、英国の北部工業地帯に働く仲間と比較すると、ポルトガル人の新卒は、いまや電動ロボット制御を学ぶことに余暇の半分を割いていると報告している。フォルクスワーゲンは、リスボンの南にあるセツバルの近くに、全世界向けのギャラシーとシャランを生産する工場を立ち上げるためにフォードと合併した。その車は、ポルトガルにとっては単独で最大の輸出製品となり製紙材料の木材チップの輸出額を上回っている。

ポルトガルが第3世界の状態から抜け出そうとしている速さは驚くべきものがある。ポルトガルのある地域では、先進国を馬跳びしてはるかに越えている。フランスの銀行 BNP の調査によれば、ポルトガル興業銀行 BCP が全欧州で顧客サービスの最高の水準に到達していると言っていた。我々が着いた時には、クレジットカードは持つことはなかった。至る所にある ATM で乗車券や座席指定券でさえ購入できるようにしたのはポルトガルが最初である。ポルトガル語の”*autostradas*”つまり自動車専用道路の全ての料金所に電子式料金支払装置を設置したのもポルトガルが最初である。銅鉱山を再開し、銅の製錬と精錬をするというポルトガルが開発した新しい製造法は、古代ローマには有り得なかつた。病院ではハイテクの医療機器が備えられており、英国人の顧問医師はただただ夢を見ているだけであつた。

リスボンの西方向へ新しい高速道路に沿って郊外が不規則に広がっているが、その高速道路は早朝と夕方遅くには直ぐに渋滞<sup>あお</sup>し始める。そして渋滞の煽り<sup>あお</sup>でほぼ停止状態のアルファ・ロメオ、BMW、ボルボに目を向けたら、車の中でお喋りしている運転手が録音装置に話しかけながら電気髭剃<sup>ひげそり</sup>を使っているのが見え、そしてウォ



ール・ストリート・ジャーナル・ヨーロッパ紙がハンドルの上に置かれていた。大学のキャンパス用としてとっておいた用地が、代わりに日本のゴルフ倶楽部所有地になっていた。羊や山羊が放牧されていた牧草地は、ヨーロッパで最大規模のショッピング・モールの用地になっていた。それはフランスのプランタン、オランダのC & A、スペインのキャプテン・タピオカ、イタリアのディヴァニ&ディヴァニ、英国のボディーショップ&マザーケアー、そして大西洋を越えてからマクドナルド、ピザハット、ワーナーのマルチ・スクリーン映画館などである。

外国人にとってポルトガルは生活し易く快適であるが、我々外国人の多くが素直に感じるように、驢馬に牽かせた荷車と交換してトヨタ製ピックアップを使っていることに象徴されるようなポルトガルの風変わりな趣や魅力が喪失してきているのを悔しく思う。建築許可証の認可や公共工事の発注契約の裁定時に賄賂が横行していた事例があった。麻薬の乱用、街頭での犯罪、精神病が、欧州で最低レベルの中から増え続けてしまった。

しかし、現在は特別に設計された飛行機やヘリコプターが、夏に地方の住民を破壊するような例年起きる森林火災の消火作業に当たっている。冬には家で暖をとり、電気も電話もひかれて家族には余裕すらある。下水処理システムも導入されている。インフレーションの程度は西世界では低い方に属している。失業率はEUの中で最も低い方であり、労働者は給料をきちんと受け取っている。結核や貧困に纏<sup>まつ</sup>わる病気は低下してきている。貧富の差は狭まり、英国と比較して極端に小さい。

リスボンはいしばしばガイドブックで、街の通りが海岸通りからドラマティックに上っているからサン・フランシスコに喩<sup>たと</sup>えられ、また7つの丘に建物があることからローマにも喩えられる。実際に有るのだし、ポルトガルの首都がその他の何処かと何か見間違えることは絶対にあってはならないことだ。これまで同質だった21世紀の勢いに注目せずにいられないその特徴を放棄してから、新しい繁栄が、リス

ポンの特有性の中に最もと思われる自尊心の代わりとして<sup>よみがえ</sup>蘇ってきた。

\* \* \*

ペドロ・ダ・クーニャは2日前に死んだ。彼は精神的緊張を和らげる鎮痛剤使用を勇敢にも拒んでいたようで、その朝、私に電話を掛けてきた。この本の第1章を、夜を通して読んだことを話した。アルカントラにある水道橋の建設がいつだったのを私に尋ねた。ポルトガルの早い時期の記述の残りを、ペドロは十分なほど裏書をして呉れて、証拠立ての例証を彼は快く許して呉れた。もう一人の友人、新リスボン大学教授フェルナンド・オーレイは手稿を3回も読み直してくれて、完璧なものになった。フェルナンドは、ポルトガルの起源にどう釣り合いの取れた見方が出来るのが大事なことだと言って呉れた。民族国家としてのポルトガルの誕生、スペインと無関係であるイベリア半島に唯一のものであることが、現代社会を越えて形作っている重要で画期的な出来事である。私の評価は以前の解釈とは根本的に異なる。中世のポルトガル創設と20世紀末期近くの民主主義の回復との間に、凡そ50年間、検閲制度があった。検閲によって発禁にされず書き換えを要求されなかった多くの資料は、リスボンの大地震、ナポレオンの侵攻、英国の占領、若しくは無視によって消滅されてしまった。

こうしてその後続く体制で、歴史を再び捏造<sup>ねつぞう</sup>することが自由に出来た。ペドロや私の同世代のポルトガル人はサラザール独裁体制の下で、中世やキリスト教徒やチェ・ゲバラの人物像について、イスラムの抑圧を打ち破り、人々が立ち上がったということを教えられた。アフリカ、アジアで、そしてスペインには決して譲らなかった南アメリカの半分を発見し、聖書と元込カノン銃を持ってキリスト教の布教と貿易に全力を尽くした。

国家の宿命という神話が、ポルトガルがアフリカでの悲惨な戦争へサラザール自身に委ねる結果をもたらした。またポルトガル人の年寄り世代の間では、民族の帰属性《ポルトガル人が欧州人である限り何処にも属さないという感覚》の自信喪失

がしつこく下の方で横たわっている。

現実には著しく異なる。それは、ポルトガル自身の外側にある源に言及すれば正体が現れる。その最たるものは、フランス国王、ドイツ皇帝、ローマ教皇との間の、12世紀に開かれたトロワ公会議の記録であり、その議長はクレルヴォーのベルナルが務めた。そこでそれからポルトガルと呼ばれるようになった新しい欧州人の国家を創り上げるという特別な任務を負って、テンプル騎士団が設立された。それはただひとつの自主独立体には成り得なかったが、近世に出現した欧州の有機的部分（UEを指す）でもって、今や再び一体化した。

ポルトガルを訪れる旅行者は、スペインを<sup>りょうが</sup>凌駕した祝勝記念として建てられたバターリャの大修道院を見に来る。これはポルトガルの民族性を結束させたが、ペドロは、民族精神はブルゴーニュから来た修道士によって建てられたアルコバッサのシトー会修道院に見出されるとの意見を持っていた。そこでは、新しい、人道主義的な文明開化が創られ、そこから広められた。ポルトガル人は征服者ではなくて、ただ征服されただけであり、考えや知識や技術を、欧州や世界を通じて移動させることによって、一つの枢軸として、一つの導管としての役割を演じた。

## 第1章

### ヨナからジュリアス・シーザーへ

旧約聖書の中のヨナ(Jonah)書は紀元前7百年頃に書かれたといわれていて、ユダヤ教会で今でも贖罪しよくざいの日に読まれている。そのヨナ書は旧約聖書の中で最も短く、且つ現在に残る最も古い風刺作品である。

ヨナ書の作者は不明だが預言者であったことは確かである。その中に以下のことが書かれている。

神はヨナにニネヴェへ急いで行って、住民の罪深い行ないに怒りを覚えておられることを知らせるように命じられた。住民が直ぐに悔い改めなければ、神は罪深きニネヴェの人々の町を壊滅してしまうであろうと。

ヨナはニネヴェの人々を酷く嫌っていて、ニネヴェの代わりにジャファ(原文: Jaffa、旧約聖書ではヨッパ Joppa)の港に向かい、神が降り立つ所の更に遠い行き先の乗船券を手に入れた。帆を揚げた直後に大きな嵐が襲ってきて、船長と乗組員は船の外に放り出されてしまった。

ヨナは巨大な魚に飲み込まれたが、神の命令のそのままに海岸へ吐き出された。それから神は嵐の海をお静めになられ、船は神のおられない行き先のタルシシュ(現レバノンの村落名で、ヘブライ語聖書に出てくる)に停泊したのである。

タルシシュは創世記の第10章で遙かに離れた国として出てくるが、ノア(Noah)の曾孫による大洪水後に建国された。旧約聖書の詩篇48に、《王たちは‘神’を見るとたちまち驚き、おじ惑って急いで逃げたという。その場で恐怖が王たちを捕らえた。産婦こどものような苦痛。彼方は東風でタルシシュの船を打ち砕かれる・・・。》と偉大なる王たちの感じ取ったことが叙述されている。

ギリシャの地理学者で歴史家であるヘロドトスが紀元前5世紀に、《タルシシュの

## 第1章 ヨナからジュリアス・シーザー

シルバー王、レックス・アルジェントニウス(Rex Argentonius)は120歳になり、彼の王国は巨大な怪物と大蛇でがっちりと守られ、多くの船が難破し、その船乗りが飲み込まれるのを待っている。」と書いている。イエスと同時代の別の優れたギリシャの学者であるストゥバロが、地理学という研究論文で、これはユリシーズ(ギリシャ神話)の中にある冒険の世界であると述べている。

有名なギリシャ伝説・続き物の1つに出てくるが、ヘラクレス(Hercules)がタルシシュに来てガデス王を先ず捕まえ、赤牛の群れを略奪し、更にヘスペリデスの金色のリングを盗み取ったという。金色のリングとは、実は現在のオレンジを指しているが、東地中海人の言語であり、オレンジという単語は《ポルトガル》である。

荒々しい大西洋から地中海を切り離している狭いジブラルタル海峡に聳<sup>そび</sup>え立つ、2つのヘラクレス(Hercules)の柱が、少なくとも千年もの間、西の境界(当時は、地球表面の半分を占めていると計算されていた。)と見做されていたし、文明地域はそこで終わっていると考えられていた。タルシシュは今日のアンダルシアの西地方からリスボン以南のポルトガルに跨っていた。(タルシシュは現在のポルトガルとスペインの国境線から6キロ離れたスペインの小さな町の名前で残っており、ポルトガル西海岸沖に唯一見つけられる魚介類の名前でもある。)

5百年もの間、地中海の貿易商人として権力を牛耳り、海路を掌握し、貿易都市であった北アフリカの偉大なカルタゴは、紀元前241年に、成り上がり者の北方近隣国ローマによって滅ぼされてしまった。23年も続いた戦争で、文明社会を持つ新参者の超権力保持者のローマ軍は、公吏歴史家ティトゥス・レウィウス(Livy)(Titus Livius)が《貪欲かつ残虐》と後で言わしめた降参条件をカルタゴに課した。

戦役名誉があり戦法には優っていたが、数ではローマ軍より劣っていたカルタゴ軍司令官ハミルカル(Hamilcar)が受けた屈辱に対し、ローマ軍は、レウィウス曰く「ひどい目に遭わせた上に侮辱を加えた。」ハミルカルは地中海から事実上追い払われ、タルシシュに追放された。レウィウスは、著作『ローマ建国史』で6百頁以上

## 第1章 ヨナからジュリアス・シーザー

も割いて、陽が昇る勢いのローマ帝国が為しえた贅沢な間違いであったと証明しようと試みたのである。

ハミルカルがカルタゴを立ち去る前に、8歳になる息子ハンニバル(Hannibal)も自分と一緒に追放されるように乞うた。ハミルカルが都市国家の主神が奉ってあるメルカート神殿にハンニバルを連れて行ったことを、レウィウスは詳しく語っている。《ハミルカルがハンニバルを祭壇に行くよう促し、ハンニバルが大人になったら直ぐにローマの敵軍大将となるように荘重に誓わせた。》それから2人は一緒に旅立った。

ヘラクレスの柱を越えて百キロ米強もある海の船旅は危険極まりないので、稀に生き延びた者だけが、長い砂嘴<sup>さしづ</sup>で囲われた避難できる湾に来ることが出来た。その湾がローマ人には知られていなかったのは当然として、現在カディス湾と呼ばれている。その湾には3本の川の河口で形作られていた。1番目の川の砂嘴にカディスとセヴィリア(カディスの砂嘴を形成する川と、セヴィリア SEVILLA の Rio Guadalquivar 下流で形成された砂嘴とは異なる。)という大きな都市が建設された。2番目の赤い川は、川床に銅の沈殿物が広く堆積しているのでそう名付けられたようだ。そこには世界でも屈指の銅製錬会社・リオ・ティント・ジンク(Rio Tinto Zinc)(イギリスの鉱山会社。スペイン語では銅を *cobre* といい *zinc* は英語も *zinc* で亜鉛を意味している。従って会社名は亜鉛なれども、銅も扱っているので矛盾はない。)があるが、その赤い川から名付けられている。

3番目の最も西側のグアディアナ川は、スペインとポルトガルの国境に現在なっている。旅行者は国境を越えると、不毛の地中海沿岸の地勢や地中海性気候から去り、大西洋側に入るともっと肥沃な地勢と温和な天候に気付く。その湾内に多くの魚がおり、陸地には花々、果物類、ナッツ類、野生のアスパラガスが採れ、蜜蜂、兎、野兎、狐、狼、熊、鹿、野生の猪が生きていて、空には山鶉<sup>うずら</sup>、きじと共に白鷺や隼も生息している。

貴族には労働を禁じて貴族以外の人々を5つの種族に区分し、神の王がその地に

## 第1章 ヨナからジュリアス・シーザー

降り、それはガルガリス(Gargaris)であり、耕作の発明者でもある、アビス(Abis)の土俗宗教の木霊が、キリスト後2世紀から今でも残っているといわれる。

それはグアディアナ川の川岸にあり、後にローマ軍が建設した都市メリダ(Mérida)である。ローマ帝国の中でも最も美しい都市の1つといわれていて、ポルトガル人がルジタニアと呼んでいるポルトガルの首都である。

地中海沿岸に住むユダヤ人、フェニキア人、キプロス人、ギリシャ人が、ここにハンニバルが到着するよりかなり前に定住地を持っていた時期があったことを、タルシシュが既に知っていたと考古学者はお墓の形跡から推測している。カルタゴ人の入植者は、グアディアナ川の河口から北に約150キロメートルの所に、先ず大きな神殿を建設したが、その柱は現在もポルトガルのエヴォラ大学の柱廊式玄関の一部を構成している。入植者たちはアルファベットを使っており、心の中で学べるような韻対句にて書かれた法典を持っていた。

ローマ軍は、グアディアナ川の上流にある丘陵と山々のセイラ・モレーナに、巨大な銀の埋蔵量があることをやがて知り、兵を雇い、装備を増強し、軍事訓練をし、大きな軍隊の兵員への報酬を支払うのに余りあるものと考えた。カルタゴ軍の下で、この鉱夫の数は2万人を超えるほどになった。

グアディアナ川の西岸はポルトガルのアレンテージョ地方に当たるが、そこに青銅を作る材料になる銅、錫、亜鉛、燐が、広範囲に亘る鉱床があった。兵器、盾や鎧兜はこの青銅の合金から作られ、また木造船を補強する為にも青銅は使われた。

グアディアナ川を航行出来るようになってから、カルタゴ軍は都市ミルティリスと船渠せんきょを建設した。そこでいかだ筏に鉱石を積み込み、船着場や精錬所や兵器製造工場を建設した河口に向かって川を下り鉱石を運んだ。ミルティリスは現在メルトーラとして知られている。銅などを船倉に入れて英国で加工するために鉱石運搬船の護送が1960年代まで行われていた。カルタゴがその地を去って2千年経った今日、ポルトガル国営のRTZが、欧州で最大の埋蔵量を誇る銅や錫の鉱山があるアレンテー

ジョ地方で、今でも採掘している。

イベリア半島の南西部には、我々が今理解しているような国というものがあった。そこには神の王アビスにより建国された神話学上の部族が住んでいた。テージョ川(Tagus) (2国を跨る川で、ポルトガルでは Tejo テージョ川、スペインでは Tajo タホ川と呼ぶ。)以北に住んでいたルジタニア人よりも彼らを征服し植民地化しようとしたハミルカル軍に対して、激しく勇敢に戦うものは誰も居なかった。ハミルカルは、紀元前230年の戦闘で、彼らによって殺された。

ハンニバルはそのとき17歳になっていて、26歳になったときにはイベリア半島のカルタゴ人長官になった。ハンニバルはカディスで、ギリシャ人の家庭教師とカルタゴ人の将軍の下で研究しながらその和解工作に時間を殆ど割いたと云われている。その滞在期間中、ハンニバルの義理の兄で臨時長官であったハスドゥバル(Hasdrubal)が、貢物と交易を通じてルジタニア人と他の部族との和解の道を探して合意に達していた。カルタゴ人は地中海の支配者であった以上に、今や南イベリアの支配者として大金持ちになっていた。

《部隊はハンニバルをただただ熱狂的に歓迎をした。》とレウィウスが書いている。ハンニバルはハミルカルの生まれ変わりであるからだと考える老兵すらいた。彼の顔の特徴と表情には、彼の眼に父と同じく燃えるものと、同じ活力が漲みなぎっていると老兵は見てとった。彼は自分が慕い、従って来た父親の記憶を呼び戻して継つがる必要なことはもはやないと、その老兵は素早く見抜いた。ハンニバルの統率力の下で、部下は果敢に突進しては彼の信頼を常に勝ち得ていた。自分が招いた危機に対しては向こう見ずのところもあったが、そのような場面では彼は見事に戦術的能力を発揮して危機を凌いだ。

ハンニバルは銀山の領主の娘イムルス(Imulce)と結婚し、息子一人授かったと伝えられている。連れ合いは短命であった。《ハンニバルは指揮初日から、ローマで戦争してイタリアを獲得するという明確な指図を恰も持っていたかのように行動した。



## 第1章 ヨナからジュリアス・シーザー

速攻が彼の本性であった。父の壮絶な死を思い起こし、早期決着しないと敵からの攻撃は避けられないし、与えられた時間がなかった。》とレウィウスは記述している。

24頭の象を北アフリカから船で運んできた。ローマ軍が掴んだ情報は、上陸場所が現在ポルティマウンとして知られているアルガルブのポルトス・ハンニバリスであり、後にそれが確認されている。ハンニバル軍には槍を振るう千人を超える北アフリカのベルベル人騎馬隊も付いてきた。

ハンニバルはヘルクレス神殿を詣でて団結を祈願した。彼は大掛かりに集めたイベリア人の戦闘兵士を呼び集めて、「神のご加護の下に、ローマに対するこの戦争を開始すれば、君らのポケットにはたと金一杯入ることもでき、君らを世界で有名にさせることが出来る。」と鼓舞する演説をぶった。

彼が象と北アフリカ人の騎馬隊とイベリア人の戦闘兵士を引き連れてピレネーを通り抜け、アルプスを越えてイタリアに入り、崩壊し掛っているローマに僅か10キロ米の所までに進軍した歴史を紐解くことは、この本の本意ではない。ポルトガルの歴史において大事なことは、ローマの反響がどうだったかである。

紀元前218年の春までにハンニバルはアペニン山脈を横切り、大きな戦闘に勝利し、イベリアから新たに着いた増援隊も加わってローマに向って行軍した。ローマ元老院はスキピオを大将とする大部隊をイベリアに派兵した。彼らはその時にはイベリアを征服する積りは無かったようで、単にイベリア半島に植民地建設を考えていた。スキピオ(Scipio)率いる軍隊の任務は、ハンニバルの増援隊と資金源を断ち切ってローマを救援することであった。

イベリア半島の東側部分で、スキピオとその軍隊は抵抗に殆ど遭わなかった。その部族民はこの数世紀の間、外国人による支配には慣れてきていた。ローマ軍は、進駐した地の産物を大量に消費し、購入し、地元の住民とは比較的思い遣りを持って接した。スキピオの軍隊が奥地に行軍し、紀元前197年、現在のポルトガル領地に入った途端にルジタニア人と顔を突き合う羽目になった。

## 第1章 ヨナからジュリアス・シーザー

15年もの間戦闘が続き、ルジタニア人は<sup>かぶと</sup>冑を身に着け、軽装な井出達で、時には騎馬姿で、刀を振り回し、毒を塗りつけた槍投げや石投げで応戦した。ルジタニア人はローマ軍の仕掛け花火の戦闘で退歩し、急に激しい攻撃を始めることが出来るセハア・ダ・エストレーラ(Serra da Estrela) (星の連峰の意。Serraはセラと普通表記するが実際の発音は違う。)の小山や峰々に逃げ込んだ。ローマ人の説明によると、ルジタニア人は捕虜になった場合に自殺できるよう毒入り小丸薬を常に携えていたし、捕虜になったら彼らは如何なる拷問にも耐え続け、秘密を洩らさずにむしろ自ら死を選んだと云う。

15万人ものローマ軍の部隊が、ルジタニアに緊張が漂うような平和を押し付けるために進駐し、ローマ人による恒久的な職業人の軍事事業の導入を要求した。その後暫くしてルジタニア人の中から、ローマ軍に対して再びルジタニア人を立ち上げらせると叫ぶ1人の指導者ヴィリアテウス(Viriatius)という羊飼いが現れた。8年間もヴィリアテウスはローマ軍に電撃攻撃に従う戦闘者を先導した。ローマ軍の將軍らは屈辱的な協定を受け入れて平和的な解決を図ろうとした。ローマの元老院はこの解決策を却下した。更にローマ軍はヴィリアテウスと交渉したい旨を口実にし、仲介人と称した殺し屋を雇い、ヴィリアテウスに近づかせ毒を盛って彼を殺した。

ローマ軍はイベリアを、境界線は概ね現在の国境でもって2つの地方に分けた。平和的な近イスパニア(Hispania Citerior)と、西側にある大きな領土の現在のポルトガルである遠イスパニア(Hispania Ulterior)の2つであった。

2地方間の大きな違いは、近イスパニアが地中海性の気候と文化を持つローマに似ているのに対し、遠イスパニアは大西洋性の気候と文化を持っていることであった。遠イスパニアには、ローマ軍の効果的な取締りが行き届かない位テージョ川より遥かに遠い北の、中央部の高地に住み、度々逃げ隠れするルジタニア人の生活があった。

紀元前61年ローマで、少数グループの上級官公吏間でひとつの抽選会が行われ、

遠イスパニアの総督にジュリアス・シーザー(Julius Caesar)を選んだ。その時、妬みを買うような考えを持たせなかった彼の当選が、彼の将来を一変させるものではなかった。ところがそれが、西欧州の歴史の進路を実は根本的に変えてしまったのである。

彼の正確な生年がいつなのか分からないが、その時恐らく42歳になっていたであろう。彼はそれまでローマ市の主任司祭であった。彼は再婚相手との離婚による大きなスキャンダルを噂からひき起こされ、「シーザーの妻は、疑いを挟む余地のないものだ。」という幾らか消化不良気味の意見でもって彼を有名にしてしまった。しかし<sup>ぼうとく</sup>冒涇だとの証を立てることが出来なかった。シーザーは多額の負債も抱え込んだ。彼の総督当選の元老院での承認を待つ代わりに、彼がローマ市から離れるのを止めさせるように裁判所の命令を先ず得た。そして彼が債権者に支払を済ませるまで、それを習得できる時間を与えてから、彼はローマを遅れることなく逃げ出せてカディスに出帆した。

この地方着任はシーザーにとっては初めてではなかった。彼は10年前に前任の総督の補佐を勤めていた。彼はそこで何をなすべきかを躊躇もせず、疑問も持たなかった。ローマ人の伝記作者プルタルチ(Plutarch)が、シーザーが赴任地に到着した時に、船中で読んだアレクサンダー大王の生涯という本を置いて溜息をつきながら「私のこの年頃でアレクサンダー大王(Alexander the Great)は既に国王に成っていたのに、自分は何1つたいしたことを成し遂げていないではないか。」と呟いたと書いている。

ジュリアス・シーザーは、1万人の兵士を雇い今までの2万人の部隊に加え、その全ての部隊が総督の命令の下で従軍するようにした。彼はテージョ川を越えて部隊を行軍させてルジタニアに入った。彼の多くの先輩たちが企てたルートは、結果としては悲惨なものであった。しかしシーザーの行動の動機は他とは違っていた。彼のそれは征服するのではなく、寧ろ略奪し、強奪し、部族に慈悲の見返りを強要

## 第1章 ヨナからジュリアス・シーザー

したものだった。これでもって実際に戦利品を確保出来た。ルジタニアとその北の地域は金銀が豊富で、ルジタニア人と近隣の人々は精製し大量に宝石や硬貨に加工していた。これらを見てローマ軍は驚くと同時に、強引に奪い取って戦利品とした後、軍隊を大急ぎで撤退させた。

《ドウロ》は《金色の》を意味する。丁度その頃川面は金色でキラキラ輝いていたドウロ川の河岸沿いに住む人々を威嚇するために、シーザーは北に向けて艦隊を出帆させた。その河岸には露天の鉱山があり、丘陵の斜面には大きくはだけた断層があり、その幅は200米にも及び、長さはキロメートルで、千人もの鉱夫が働いていた程である。シーザーの軍艦は直ぐに出航し、地金を積み込んだ。

ジュリアス・シーザーの監督下で、戦利品は3通りに分けられた。3分の1はローマの国庫として送られ、3分の1は略奪した兵士に山分けしてやり、残りの3分の1はシーザー自身のものにした。テージョ川の南部は既に平和裏に平定されていて、アレンテージョとして現在知られている地方にあるベージャの町の近くに、シーザーは妻の名前ジュリアナと名づけた鉱山を所有し操業した。金塊を輸送する経路を警護する軍団は、その輸送経路の沿道にある鉱山権や製錬権を持つ報酬が与えられ、オリーブ、葡萄、小麦などを育てる富裕な農場を造る権利も与えられ、地元ぶどうの女性と結婚してローマには戻らなかった。彼らの子孫は今でも続いている。

2年が経過して、シーザーは後任の総督が着くのを待たずに旅発ってローマに戻った。遠スペインアでの彼の略奪品は、元老院による《凱旋式》で盛んな喝采を受けた。彼は直ぐに負債を帳消ししたばかりか、将来を確約するような、その中には大規模の選挙用賄賂資金も含んでいて余りある蓄財を手にすることが出来た。彼は2つ空位ある執政官の選挙に立候補し、その選挙に当選確実に充分な位の選挙資金を使えて十分に間に合うように戻っていた。こうしてガリア(古代ケルトの地：現北イタリア、フランスを指す)、低地国(Netherland オランダやベルギーを指す)、英国を侵略し征服する資産と地位と権力を勝ち得たのである。

## 第1章 ヨナからジュリアス・シーザー

ローマ人がタルシシュに押し寄せて来た世紀より前に、今日のアルガルブの南西海岸を見て、そこを《内気で陰気な》と評した商人の水夫が、ヨーロッパ大陸の海岸を北上する海路、ビスケー湾を横切り、コーンウォールへ航行していた。そこで彼らは青銅と金とを引き換えに錫を運搬していた。ヨーロッパ大陸を横断し、紀元前55年に英国を侵略したシーザーと陸路を行軍したローマ軍団は、イタリア人というよりも彼らの子孫であって、ローマには決して足を踏み入れなかった。英国の総督になったハドリアヌス(Hadrian)は、カディス経由で来ていた。英国の考古学者は、ハドゥリアヌスの防壁の遠くの北でもオリーブ油が含まれた壺を発見しているが、その壺はポルトガルのベージャで作られ、ポルトガルから出帆していた。

## 第2章 大西洋のローマ

リスボン西へ車で40分ほど行ってアルモサジェム(Almoçageme)村に入ると、右手に廃墟になった1軒の家が見えてくる。大西洋からの塩風を防ぐかのように、その家の周り全体に波形をした金属製の屋根が立ち、モザイク模様の床の表面を覆っている。

その家はローマ帝国の最西端の地点にあり、この地域では珍しく野生の百合が一杯咲いている荒れた牧草地の高い所にある。1本の小径が入り江の方へ下に続いており、その入り江には海洋が強く叩きつける波で刻まれた洞穴や小さな洞穴があるのが見える。紀元後1世紀の初期の頃に、ローマの旅人の一団がここを訪れた時、小さな洞穴の中で美少女の姿をした精霊と女神が踊っているのを見つけたという。そこでその体験に心を動かし、彼らはティベリウス(Tiberius)皇帝宛にその体験を綴った1通の手紙(エジンバラにある公文書館に、ハミルトン蒐集として今も保管されている。)を書き、ローマの皇帝へそれを届けるように従者に託した。

ルジタニアと現在称している土地を、ローマ軍が戦闘を繰り返しながら平定するのに何と2百年も要した。その国土面積は現在のポルトガルのそれよりも大きくはなかった。それほどまで勝つのに苦勞して戦ったローマ軍も、その後は平穩に暮らし始めていた。

ルジタニアの魅力についての知らせがローマに広がり、イタリア人が訪れて住み着き、従軍後そのまま居続けて家を建てるような人々も出てきて増えていった。その数の記録は残っていないが、それは実に多かったと考古学者は証言している。現代の農夫は昔より土壌の中にもっと深く入れるような鋤を使っている。ありふれた所を鋤き返すと、モザイクや銘刻や描かれた模様のある石などがどっさりと出土す

る。それらは農地の傍<sup>そば</sup>にもあるが、家の壁に貼り付けたものの残骸としても現れる。

道路工事や他の公共工事でもって、大農場、修道院、新開地の存在が明らかになって来ている。それで新規高速道路のルートが何度か変更されたことがある。14もの大規模なローマ遺跡が最近発掘され、今もなお発掘されている。シントラからマフラに通じる北に向かう道路に架かる橋もそうだが、ローマ時代の2段式の橋は現在も使われている。ローマ軍が建設したメリダからヴィゼウに通じる道路の途中に、現在イダニャ・ア・ヴェーリャと呼ばれているエジタニア教区教会があるが、それはロマン風の寺院(temple)(キリスト教以外の神殿や寺院を指す)である。

アメリカ合衆国ルイスヴィレ大学から招聘<sup>しょうへい</sup>された考古学者が、北アレンテージョ地方のパルマ塔に詩神を描いた大理石モザイクが貼られ実に綺麗に保存されているのを、1947年に見つけた。その塔はローマ軍が敷設したリスボンから東に向かって延びている道路の脇にあるが、西ローマ帝国の中で今までに発見された最も美しいものの1つであると云われている。そのアメリカ人は48年間以上も掛けて、ルジタニアに住むローマ人の小さな町の日常生活を紐解き続けていた。それはイタリア人の邸宅街、ルジタニア人の召使と奴隷のための居住地区、工業地帯、作業所や倉庫などのある居住地区であった。

南アレンテージョ地方のサンタ・ククファテウは、屈指の保養地であり、イタリアの大金持ちが多くの大邸宅を建てている。壁やアーチ状の玄関口や彫刻された柱の大部分が未だに残って立っている。最初の所有者が大邸宅を堅実に建てたからかも知れないが、更に1千5百年も持ちそうに思えてくる。

アレンテージョ地方の県庁所在地エヴォラの広場に、柱状の神殿がそそり立っている。アルガルブの県庁所在地ファロ付近のミルレウには、柱、壁、モザイクで出来上った壮大な寺院があるが、それは大きな巡礼地であったと考えられている。

リスボンで広大なローマ式劇場が発掘され、それは結構良く保存されているが、発掘費用も掛り実用面から考えて未だ一部分しか発掘されていない。現地名のコイ

## 第2章 大西洋のローマ

ンプラ南に、ローマ式保養場のある、そのコニンブラがある。広範囲な発掘調査により町の大部分が現れ、博物館で民具や装飾品などを今日も全面的に展示している。

皇帝アウグスティヌス(Augustus)によってルジタニアの首都として建設されたメリダには、考古学上の財宝といわしめる宝石類が沢山残っている。そのメリダはスペインとの国境線を越えたスペイン側にあり、紀元後25年に出来たグアルディアナ川に架かる6本の橋脚で出来た橋が、現在も利用されている。

このメリダには、ローマ帝国の栄華を示す西欧州最大の展示物がある。フランスのアルルやニーム(Nîmes)、または英国のヴェルラムウム(Verulamium)よりも遙かに凌いだ内容である。1万5千もの座席がある野外の大円形競技場で、当時は剣闘士が猛獣と1対1で闘った。多数の観客が押し寄せても問題ないように設計されている。ローマとカルタゴとの戦いを、ミニチュアのガレー船に見立てて両国の艦隊の海戦を恰もからかうかのように、舞台の演出をしている。

2千歳にもなるメリダ劇場は、その殆どを未だに使い続けて来ている。劇場の6千もの座席は、神々の大きな像で威圧され、屋根付きの遊歩道もある。こうして私書いている最中にも修復工事が行われていたし、他の建物の間に3段式ディアナ神殿が見えていた。

石畳(舗装道路)がパン屋や金細工屋などの商店街の間に延び、そこを過ぎると大邸宅の遺跡に続く。メリダにあるローマ博物館には、例えばパン屋の工房などの特別展示や、優れたモザイクの蒐集、塑像や宝石の展示がある。

それらも注目すべきことであるが、考古学上の遺跡が必ずしもローマ時代の遺産であるとはいえない。ポルトガル北部に隣接するスペインの田舎ガリシアを除き、ラテンの影響が行き渡っている所は大西洋海岸には何処もない。

ローマ軍は、ケルト人の先祖にほぼ同等と考えられているポルトガル人の原型を実質的には作り上げて来た。ポルトガル語は、ガリシア人が持つ言語から発達し、それに殆ど似ており、他のロマンス語よりもラテン語に、より忠実な言語である。



## 第2章 大西洋のローマ

アルモサジェムのような村落が、国の心だと、ポルトガル人の多くが思っているが、実はローマ風模型として建てられたものである。それは人々が集まり、立ち並んでお喋りをし、市場が開かれる中央広場、教会、学校、カフェ、競技場があり、ボランティア消防隊が建物の中で待避することもあった。

ポルトガルの法律はローマ法に基づいて創設されている。これは他の欧州諸国とは異なる事由があった。19世紀初めに編纂されたナポレオン法典は、とり入れたローマ法の原形を帯びている。2千年経った現在でも、ポルトガル人はローマ法体系を首尾一貫して優先的に取り入れている。ドイツから来た西ゴート族は、ローマ・カトリック主義信奉を入れ替えようと企み、更にチュートン人の法体系を課すために、ムーア人がポルトガルに入り込んで管理できる道を開けるように敢えて反乱を誘発した。逆にムーア人を駆逐して新しいポルトガルを創りあげた修道院長は、ローマ法律体系を再び公布した。

ポルトガルはキリスト教が布教された西側諸国の中で最初の国であり、西欧の中ではカトリック教徒がアイルランドに次いで2番目に多い状態が続いている。大西洋側欧州の他の多くの国々は、数世紀の間、厳格な新教徒（プロテスタント）に固執している。ローマの建築家は華麗な教会のデザインに多大な影響を及ぼした。ローマが料理に影響を及ぼした例としては、オレンジかオリーブで鴨を調理することや、ローマ軍の標準食であった料理の、キャベツのみじん切りを茹でたコジード・ア・ポルトゲーザ(*cozido à portuguesa*)などである。風習に順応したものとしては、アフリカの奴隷がポルトガル船に乗せられてアメリカへ輸送されている時に与えられた《<sup>まき</sup>餌》が、後になって《人間の食べ物》に進化させたことが挙げられる。同じくローマ軍は、魚に衣を付けて揚げる調理法、これは後に日本にも伝えられた”*tempura*”をポルトガルに紹介した。ローマ軍はポルトガルに魚を塩漬けにして乾燥すれば保存が効くことを教えた。その代表例、バカリャウ”*bacalhau*”にして保存した鱈は、<sup>たとえ</sup> 喩で《365種類もの調理法》があるくらい庶民の食材になった。沿

## 第2章 大西洋のローマ

岸海域で長い間、鱈の漁をしていたが、ポルトガル人の漁師は鱈を探すため更に遠く離れたニュー・ファウンドランドまで出掛けて行っていた。ノルウェーの欧州連合加盟交渉が、鱈漁獲量割り当ての件でポルトガル人とガリシア人の無理強いだ暗礁に乗り上げた。現在ノルウェーはスカンジナビアと英国から巨大な量を輸入している。

ポルトガル人が国籍をどう捉えているかは近隣諸国と違っているが、古代ローマ帝国の考え方に基づいている。スペイン人が抱く国籍とは、本質的に先祖に基づいており、出生届出をする場合、直系3世代までが記録される。英国のは、最低限伝統的に少数民族なのか《アングロ・サクソン》であるかに基づいている。後生のために、何処で生まれたのかもまた大切に考慮すべき事柄であった。

ローマ市民であると同様に、ポルトガル人であるそのものが1つの精神状態であり、全てを抱きしめたい気持ちで民族文化を受け入れることであり、生き方でもある。ローマ軍で最高位の何人かは実はイタリア人ではなかった。大セネカ(Seneca the Elder)とハドリアヌスは南イベリア人であり、大セネカは帝都には決して足を踏み入れることは無かった。ポルトガル人の殆どが、人種差別が自分達の社会には比較的無いことに誇りを長い間持ってきている。インド人、アフリカ人、中国人との、同様に英国人やドイツ人との国際結婚にも長い伝統がある。夫か妻かどちらの外国人の配偶者がポルトガルの社会へ逆に融け込んでいるのを度々見かけられる。

ポルトガル人がインドで居留し始めた時から、英国人が原住民と厳密な分離政策を取っていることの差異に注目して、ポルトガル人は地元の女性を娶って親密になることも含めてその関係作りを奨励した。この結婚が短期間のものになろうがなるまいが、実は度々そうなのだが、帝国政府は厳密に居住者に押し付け、生まれた子供の世話や本国へ連れ戻さないように認め且つ責任を持つために、処罰という脅しで処したのである。

その状態それ自身は同じようにはしなかった。ローマ帝国時代の多くのローマ移

## 第2章 大西洋のローマ

住民がそうであったように、1世紀かそれ以前には欧州人の先祖のみだったかも知れないが、母国の今でいうパスポートをきちんと携帯していたとしてもポルトガル移住民の大多数は、《母国》に戻ることは決して出来なかった。彼らの中には、マカオや香港に居住の欧州系中国人、スリランカに居住の《市民(Burghers)》、ゴアやゴアに源を発するボンベイに居住するインド人が含まれている。

多くのイタリア人はルジタニアの<sup>きん</sup>金に引き付けられて来た。紀元後70年から75年の間、ルジタニアの総督であった大プリネイ(Elder Pliny)が金の産地について、《世界で最大の金産出の地》としてルジタニアとガリシアを通してオーストリアまで鉱脈が走っていると記述している。(その当時は、世界の広さは欧州の2倍と考えていた。)これらの埋蔵している金資源を維持するのに、昔、元老院は政令を公布し、それによりイベリアにある鉱山会社は、鉱脈の薄層当り5千人の鉱夫を最大とする制限を課されたと言っている。現在はその制約は外されてきているが、プリネイは西イベリアの鉱山は年間320万オンスの金を産出してきたと概算している。ポルトガルの金埋蔵量はまだ当時は巨大なものだった。ポルトガル北東部のヴィラ・リアル(Vila Real)近くにあるジェレス(Jeles)金鉱山はローマ軍により採掘が始められたが、1992年には唯一のものになって結局は閉山になった。ポルトガルはそれまでは年間10万オンスを少し越える金を産出してきたし、更に金の2倍に相当する銀を産出してきた。地質学者は、それでも10億ドル以上の価値ある含有量があると推定しているが、現在持ち合わせている技術でもってしても抽出する費用はあまりにも高すぎる。

プリネイは、イタリア人は金塊には貪欲であり、<sup>きん</sup>金を手に入れるなら同僚がどんなことでもしかねないのではと酷く<sup>ゆううつ</sup>憂鬱になってしまった。彼は、ポルトガル北部で利用できる採掘方法について以下のように記述している。《ランプの灯りを使い、長い坑道は山腹の方に向えば短縮できる。鉱夫は長時間交替勤務で働き、ランプの燃え尽きる時間で時を測り、数ヶ月引き続いて日光を見なかっただろう。この坑道

の天井は鉞夫を押し潰し崩壊しがちである。真珠による占いか、海の深みからの紫色の魚を捕まえれば、比較的安全と信じられていた。我々が地中を危険なものに作り上げてしまったのだ!》

もうひとつの採掘方法は露天掘りであった。ポルトガル北部に、ローマ軍が2百年間露天掘りをしてそのまま残していった傷跡がある。それは長さが350米、幅が110米、深さが百米に及ぶ。ここに2千人もの鉞夫が雇われていた。《採掘方法は、鉄製の楔と碎石機でもって土壌や岩石を砕くことである。土石や砂利が混ざったものは、もっと頑固ものとさえ思える金塊を除けば全ての中で最も硬いものと見做されていた。》とプリネイは考えていた。

鉞夫は割れ目が現れる山腹についに狙いを定めた。プリネイは続けてこう書いた。《怒鳴り声か手旗信号で、監視員が鉞夫に対して作業の中止命令を発し、同時に見晴らしの利く地点から監視員は駆け下りる。崩壊した山が想像できないほど破碎し、ばらばらになって落ちてきて、途方も無いほどの爆風が同時に巻き起こる。恰も勇士に勝ち誇ったかの様に、鉞夫は自然に打ち勝ったかの様にじっと見つめている。》

土石や砂利の塊は、細粒になるまで打ち砕かれ、それから鉞山の上部に建設してある貯水池の水門が開けられる。水はどつと急勾配の導管を流れ落ち、これらを切り分けるために、鉞夫は縄で固定して山の断崖の縁<sup>へ</sup>の上で身を屈している。《遠くから見ると、その動きは恰も鳥のように、決して不思議な種類の動物ではないように見える。》とプリネイは観察していた。《鉞夫は水平にとり水流の道筋に線を引くように下がり<sup>を</sup>を殆ど吊るした。このようにして鉞夫は自分の足場を確保出来ない位の所へ水流を導く。》

減多に無いことだが、激流の中に3千オンスもの重さに達するような天然の金塊が露見することもある。どうなろうが土砂・砂利の破片は、鉞夫が岩盤に彫りあげたひと続きの階段に下って押し流される。金の粒子を集めるために、そのひと続きの階段にはハリエニシダ<sup>トビ</sup>(西ヨーロッパやイタリアに生息し、<sup>トビ</sup>棘々した葉が密集している。)が覆

われている。それからそのハリエニシダをかき集めて乾燥し、それを燃やして、その灰から金を取り出すのである。

ローマ軍の鉱業技術はその後百年で著しく発達したが、続いて起こる侵略でポルトガルを一時的に混乱させた後に鉱山の多くは置き去りにされてしまった。乾燥した鉱山で連続操業するのに十分な水量をどのように揚水して維持していくのかの将来図を誰も描けなかった結果である。19世紀になるまで、<sup>うま</sup>巧い採鉱方法を編み出せなかった。

ローマ軍はテージョ川の南、アレンテージョ地方の、銅、銀、錫、亜鉛、鉄の鉱山を接収した。ハンニバルが侵攻してその鉱山を管理している時、カルタゴ人が採鉱に従事し、その採掘規模を格段と拡大させた。鉄が錆びないように添加する白鉛（炭酸水酸化鉛）もその鉱山には埋蔵されていた。

著名な銅産地は2つある。1つは、1860年代まで英国の鉱山会社が露天掘り方式で採掘し続けてきたサン・ドミンゴである。もう1つは、深さが200米にも及ぶローマ式立坑を備えたアルジュストゥレル(Aljustrel)であり、今も操業している。

ポルトガル北部にある金鉱山の全てが国有で操業されていた。アレンテージョでは、採掘権は個人企業や採掘会社グループに売却された。労働条件は大層厳しかった。採掘権を取得しても採掘会社が採掘を開始するにはたったの25日しか与えられず、さもなければ再び国有化されてしまった。売る前の段階の鉱石や精鉱した金塊に対して高税を課された。グアディアナ川の土手にある船着場に通じる道路には、略奪されないように見張り番が配置されて巡回していた。それでも夜中にこっそりと移すことに上手く行くものもあったようだが、盗人は捕まえられて、長期間に亘る強制労働の処罰を受けた。

採掘は断トツに儲ける営為ではあるけれど、それは北部と南部のごく限られた地域であった。国全体として、ローマ人がルジタニア人の生き方に衝撃を与えたのは、前に述べた経済も同様だが新しい耕作技術の導入であった。オリーブ、葡萄、穀物

類は既に栽培されてはいたけれど、非常に小規模であった。イタリア人の移住者は最新技術や様々な栽培法を導入した。そして零細な地主を摘み出して大きな農場に集約し、あるものは2百ヘクタールを超えるものもあった。

小麦、果物（蜂蜜や乾燥果物にして保存した）、エスパルト草（縄・綱や帆布の材料に使われた）が、ベルギー、オランダ、英国、イタリアに輸出された。ルジタニア人のオリーブオイルの最高級品は、ローマ帝国の中で最高なものに見做されて割増料金が付いて売られていた。

紀元後80年間ワインの売れ残りがローマ帝国に貯まってしまい、20世紀の終わりにはヨーロッパがワインの湖になる位の大量だった。皇帝ドミティアン(Domitian)の勅令がルジタニアに課せられた。その勅令は、ワイン用葡萄園は根こそぎ刈り取り、穀物類を作付けした畑地に変更せよとのことであった。皇帝の勅令によりポルトガルのワイン生産量は半減してしまったが、以降ワイン醸造所が集中して品質向上に努力して繋がったように思われ、割増料金のついたルジタニアのワインの輸出が盛んになった。凡そ2千年経った今現在もテージョ川南の、ローマ人が最初に植えた葡萄園ではワイン作りが行われていて、今もなおイタリアに出荷され売られている。アゼイタウンにあるワイン醸造所ジョゼ・マリア・ダ・フォンセカ(José Maria da Fonseca)からランセルのロゼも含めて350万本にも上る。

紀元後212年まで、国際結婚の世代を通じて国民の中には高度な同質同種性志向があった。その年に、皇帝カラカラ(Caracalla)は奴隷を除いたローマ市内に居住しているが、今まではローマ市民でなかった全ての人間が市民権を自動的に保障するという法令を發布した。移入者と土地の人との間の正式な区分を取り払うことは、ローマ後を睨んで結束しようとする意図が隠されていた。皮肉なことに、その法令が移民者を一体化する手助けをもたらす結果になってしまった。

ローマの国営企業は鉞業を管理していた。大規模農場や工場は個人が所有されていたが、ごく例外的に上流階級のイタリア人は農場を集約するどころか、殆ど地主

## 第2章 大西洋のローマ

の役割を果たさずにローマに住んでいた。国営企業、私営企業が上げた利益の大部分はローマに送金されたが、それでもローマはその送金額が充分とは思わなかった。

ローマ自身がどういう方法で贅沢さと豊麗さに貪欲なほどに追い求め、その結果崩壊してしまいその意思を見失ったのか、そして野蛮人がその出入り口から入ってくるのをどう守るかについて、多くの言葉を使って書いている。ローマ帝国の権威が失墜した時、植民地からの送金要請はもはや無くなってしまった。益々曖昧になってくる市民権の代償が外国へ税金を支払う義務と化して、いよいよ我慢出来ない状況になって来てしまった。

《ローマの平和 ‘*Pax Romana*’》と呼ばれる長い間、ルジタニアで、地方自治体は民主主義の方向へ進み、考えられる程度までは自治政府の共同社会に向けて徐々に進むことを受け入れた。市民は行政長官を市民の中から選び出して、地方自治体を作った。税も徴収した。道路、橋、水道橋、寺院、浴場や劇場などの公共工事に、多くの税金が使われたという考古学的証拠資料が残っているのである。

でもローマからの租税要求は増加の一途を辿り、衰えの見え始めた自治体のサービスと改善のために税金は使われた。ある1通の勅令がローマから発布された。それは不法な輩<sup>やか</sup>には、苦痛を与え追放し、逮捕し、厳罰なる処罰をするようにという内容である。租税請求書に対して支払わなかった者は、奴隷に売り飛ばされ、刑務所に拘束された債務者よりもより劣った悪とされた。行政長官に立候補する者が居ない場合には、ローマはその地位を世襲制にする旨決定した。ローマ税の徴収者であるルジタニア人の父親の後を継いだルジタニア人の息子が、死刑宣告を受けた事例さえある。

逃走には次の方法があった。多くのルジタニア人の若者はローマ人の外国地域で入隊し、他の植民地、例えば北アフリカ、ガウル、英国にて暴動を制圧するために派兵される。ある者は、皇帝コンスタンティヌス(Constantine)と一緒に植民地からローマの包囲を解放するために皇帝の行軍に参加したが、ゴート族が既にローマ

を占拠しているのをただ見ていただけであった。

地元を集約化されるのを避けながら裕福な名士となった、ルジタニアに住むイタリア人は、大多数の同意によるカースト階級制度と同じく、今は生き延びたに過ぎない。それらを守り通してきた3つの地域の内、2つは金銭を守るために組織が解散させられた。それからイタリアのローマ当局自身が挑戦を受ける状況になってしまった。ルジタニアのイタリア人名士たちは、周りの人々と決して調和しなかったため、彼らの生まれ故郷が北ヨーロッパの野蛮人によって侵略されていることを知らされることになってしまった。



## 第3章 キリスト教国の盛衰

ローマ帝国の権威に翳りが見え始めた時期、ローマに追従していたポルトガルに関わる資料が極端に少ないためか、歴史家はさりと通り過ぎてしまっている。ある年表では、ローマ軍が北部にあるシャヴェス(Chaves)のタメガ(Tâmega)川に架ける橋を完成した紀元後104年から4百年へと豪く飛躍しており、ドイツからの宗教亡命者のことには何も触られていない。

その途切れた間に起きた、無視できない程のその亡命事件が重大な出来事だったかを我々はそれを上手く繋ぎ合わせなければならない。

ポルトガルの広い地域に亘り紀元後250年辺りに国を横切って荒れ狂った破壊という、明らかに恐ろしい波で砕けた石塊が置き去りにされたかを、考古学者が発見している。その被害は侵略したヴァンダル遊牧民のせいとされているのが通説である。ところがジョルジュ・デウ・アラルカウ(Jorge de Alarcão)教授は、それをヴァンダル遊牧民か他の門外漢の集団と何とか関係付けようと試みるも、実はその手掛りのないことが分かった。荒廃させようという最初の大波はゲルマン民族襲来よりずっと以前に押し寄せ、地元住民を経由して一撃が加えられたことは明らかだ。

考古学上の発見から破壊者や略奪者の行為は無差別ではなかったことが明らかになっている。彼らの標的は、あり余る所有地を抱え、利益ある経済活動を管理し、自分達の奴隷や雇用人を残酷に駆使した、裕福なイタリア人達に向けられた。工場や、自分自身も住んでいた壮大で贅沢な荘園も破壊された。外国人の上流階級が寛ぐために寄り集まる、植物生い茂るコニブラ保養所の周囲には突貫工事で防護壁が立てられた。しかし防護壁は暴徒によってその後直ぐに取り壊されてしまった。

略奪者から隠そうとした多くある中で特に目立つ物としては、寺院の燭台や先キ

### 第3章 キリスト教国の盛衰

リスト教徒の祭儀用装飾品などである。これら隠れた事実から、大掛かりな暴動がイタリア人らに向っての単なる憤慨の表れだけでなく、先キリスト教徒・ローマ人の経済的、社会的不正行為に対して、初期の教会への改宗者の反抗というキリスト教への闘争が、はやくも表面化していたものと想像できる。

ローマ帝国のドミティアン皇帝によって発布された勅令から、それに対して即座に憤怒を露わにしたことを窺い知れる。すべての者が、帝国公認の寺院にてローマの神々に敬意を表して貢物を捧げ、その実施証明書を持参するよう勅書に書かれていた。2世紀初頭に活躍したイベリア歴史家キンティリアン(Quintilian)は、彼が生きた時代に、キリスト教は大西洋沿岸まで既に伝来していたと書いている。キリスト教に執着するという事は、実は普遍性から遠ざかったものになるが、地中海の東に位置し衰退しているローマ帝国と真反対の国からルジタニアに来ている好敵手となる宗教の中で、キリスト教は最も新しいものであった。最初の伝道師がルジタニアに来た時に、今日の我々が一番の特色のひとつと思われるキリスト教の概念の幾つかは、ルジタニア人にとってもはや新奇なものには映らなかった。エジプト人のイシス(Isis)信仰から、ルジタニア人は神の子イエスの死と復活という神学を既に良く知っていたし、更にペルシャ人の信仰ミトラス教(Mithras)から、洗礼や聖餐の秘儀についても十分に承知していた。幾人かの祭司は、別々の寺院でミトラス教やキリスト教の両方の司祭を務めていた。ミトラス教は、ルジタニアのキリスト教と少なくとも2世紀の間は共存していたのである。

キリスト教が少なく見ても半ダースにもなるほど多くの信仰と競合し、一方、分裂もしたのに、顕著な急成長を惹き起こしたのは何故なのだろうか。イエスの教えに、そんなに遠くない過去にイエスは神の子としてこの世に来られたが、ローマ人を抑圧していた同じローマ帝国支配階級者によって磔刑にされたにも拘らず、凱歌を奏でるかのように神により復活されたことが黙示されている。

これに付け加えるならば、大西洋側のイベリアには、イエスが《雷の子》と渾名を

### 第3章 キリスト教国の盛衰

つけた弟子・ヤコブ(James) (ヘブライ語では Jacob)への衝撃が、特にある。地方伝説を確かめてみると、イエスが紀元後32年に磔刑にされ、ヤコブがその10年後にユダヤに戻って首を刎ねられ、その間にこのキリスト教徒に《良い知らせ》がもたらされていたのである。

伝説によると、ヤコブの遺体はサンチアゴ・デゥ・コンポステーラ (英語の意味は星座の聖ヤコブ) の大聖堂の下にある石棺に安置されているという。そのサンチアゴはポルトガル北部の国境に位置するガリシアにある。ヤコブの頭部はブラガに近い町のポルトガルで最も古い聖堂に安置されていると信じられてきている。現在でも未だ毎年、数10万人もの巡礼者が敬意を表すために向い、更に殆どが好奇心に駆られた多くの観光客がサンチャゴに押し寄せている。

聖ヤコブの遺体が教皇外衣に包まれ、星に囲まれ、ユダヤで処刑された後、此処に飛んで来たという伝説と同様、ヤコブが過ってイベリアを訪れたということも有りそうにない。12世紀に、1人の巡礼者がブラガの大司教とエルサレムで居合わせてヤコブの頭部があると知ってポルトガル北部の聖堂に頭部を持ち帰ったので、この伝説はヤコブの頭部無しの状態にしなければならなかったのであろうか。その頭部をそこからサンチアゴ・デゥ・コンポステーラへ送る特命を受けたレオン国王の密使によって頭部は盗まれてしまった。サンチアゴの大聖堂に安置されている石棺には、マグヌス(Magnus, Maximus)皇帝の命で、4世紀に異教徒として告発されて処刑されたゲルマン民族の伝道師の遺体を、その儘、北ヨーロッパで迫害された彼の従者が艦隊に乗せて運び、そこに納棺したのかも知れない。

聖ヤコブ信仰の説得力や根強さが、迷信以上に昇華されてここでは影響力を及ぼしている。兎に角ヤコブのものだという教えが大きな衝撃として持ち上がった。新約聖書で『全キリスト教徒への手紙、又は、実践的キリスト教』と呼ばれている聖ヤコブの垂訓は、大西洋側イベリアにまで伝わった最初の聖句であろう。福音書最初のマルコ福音書が書かれた紀元後72年より前の時期に書かれたものらしい。ル

### 第3章 キリスト教国の盛衰

ジタニア人の傭兵が北アフリカでローマ第7軍団の兵役に就き、そこで東方から来た伝道師によって改宗して帰還した際にそれを携えてきたと思われる。

その『全キリスト教徒への手紙』は、特定の人や地域社会宛に出されたパウロの手紙と区分するために、初期の教会では『万人の手紙』として知られており、パウロの手紙は精霊的認識や共同社会的キリスト教徒の信仰生活に関したことに多くが割かれている。彼の手紙はパウロのとは対照的に『完全な律法、つまり自由の律法』という彼のメッセージである。彼の手紙は富めるものに対して貧しいものが聖なる蜂起に立ち上がるよう鼓舞していると読まれた。残存してきた『万人の手紙』の写本版が7つあり非常に似ているが、富んだ人が豊かであるというそのことを<sup>とが</sup>咎めてはいない。彼は次いでながら、物質的財産は必然的に崩壊するという無常をただ警告しただけである。良い行いをし、人間らしさを持つ多くの仲間を虐待してきた巨大な富とは何かを追及するうちに、その富に対して彼は抵抗したのである。

「あなた方に殿様顔で威張る人は富める人ではないのではないですか。」と彼は問うた。「あなた方を裁判所に引いていくのも富める人ではありませんか。あなた方の尊い御名を汚すのも彼らではありませんか。」

彼は今度、富める人に問うた「あなた方の畑の刈り入れをした労働者への未払い賃金が、叫び声を上げていますが聞こえますか。」そして彼は警告した「繰り返している叫び声は天の主の耳に届いています。」

彼にとって信仰は不十分なものであった。宗教的信念は行動を通じて表現されなければならないと考えた。「私の信仰をあなた方に示すことが私による行ないなので、行ないのない信仰は無用なものです・・・、完全な律法、自由の立法を一心に見つめて離れない人は、直ぐに忘れる聞き手にはならないで、事を実行する人になります、こういう人には、その行いにより祝福されます。」

彼は、肉体的暴力は言うまでもなく、言葉の暴力や批判を彼の弟子たちに禁じた。「慈悲は審判を嘲笑う時に与えられます・・・、正直な者を非難し、殺す者は富んだ

人である。」

ヘロッド・アグリッパ2世(Herode Agripp II)は聖ヤコブが有罪であるとして紀元後42年にユダヤにて処刑した。ユダヤから西へ4千キロ離れたルジタニアの貧乏人が、まるで自分がユダヤにいたかのように、その同じ瞬間に彼からの叫び声を耳にした。

ここで統治する特権をローマから与えられていた階級は、ローマから鉱物と農作物の注文がなくなり、更にローマ軍による防衛もなくなってしまった。奴隷の生活と労働条件は劣化の一途を辿ったので、奴隷は日増しに働かなくなった。所有者はもはや生産手段を失い、奴隷は自由になり給料が保障されるなら再び働きに戻るといふ契約交渉に転換せざるを得なかった。

しかし、生産物の市場がなくなって給料も支払えなくなった。ルジタニアにあるローマの地方官僚と裁判官は、架空の権力に<sup>すが</sup>縋りながら永く生き延びるため、全面的に屈服した。そして労働者階級が崩壊した結果、暴徒の規制は解除された。今や平和と秩序をもたらす大衆性を持ち、充分なる尊敬を集めて指揮できる人々は唯一キリスト教司教であった。彼らはローマ司教やローマ教皇の新しい勅令を認めることに異議を唱えることの出来る唯一の集団でもあった。3世紀末までに、教会が行政と司法の提供者として働く役目を担い、ルジタニアが未だ堅持していたある種の政府機能を持つようになったのである。

首都メリダの司教が、実は自分自身の為であったのに豪華過ぎるほどの聖職衣や聖餐容器を教会への忠節と称して寄贈した廉で非難された。しかし彼は町に初めての病院を建てたりもした。その病院では、装薬なくして病気が処置され、ホスピスもあり、外来患者を収容でき、且つ無料でもあった。彼は興業（工業ではない）の発展や繁栄を築くよう、僅かな金利でお金を貸し出す銀行も設立した。

4世紀の初めに、アヴィラ司教のプリスシリアン(Priscilian)は、ポルトガル地方の貧民地区で多くの崇拜者連を集めた。彼はおおっぴらに仲間の聖職者を富裕と

### 第3章 キリスト教国の盛衰

欲ばりに対して<sup>けんせき</sup>譴責し、貧困や物資の欠乏は尊ばれるものであり、神が特に貧しい境遇を尊びなさいと言っておられると説き、禁欲と菜食主義を主唱して厳格な自己否定を説教した。

この問題で彼は聖ヤコブの言葉を繰り返した。三位一体の教義を否定することで正統派教会に対して挑戦しようとし、イエスが神の子として生まれたことを否定し、我々と同じ普通の人間であると説いた。イエスは聖霊を神によってのちに満たされたのであり、これは決して比類ない出来事ではなかった。神に十分に喜ばれる行ないをする男性は、現在も将来も神によって祝福され、預言者が同じように授けていて、女性は神に吹き込まれた男性と同じであるから、司祭として仕えるのに男性と同じく<sup>ふきわ</sup>相応しいと説いた。

プリシリアンとキリスト者になろうと彼の挑みに乗った貧者は、機会あるごとに公認教会からは異端者として非難を受けた。当時のキリスト教世界には包容力があつたように思える。裕福な資産家は、教皇の聖マーティン・ツールズ(St. Martin of Tours)や正統派に対して《プリシリアン主義》を禁止するよう強く求めたが、それを承認する前に彼らは非難をやめてしまった。物質欲を大事だとは主張しないその宗教によって今までの全ての財産が台無しになってしまったので、彼らはプリシリアンを捕えて処刑してしまった。これがプリシリアンの考えを大衆に<sup>もたら</sup>染み渡らせるのに思いがけないほど絶大なる効果を齎した。

特にキリストについてのプリシリアンらの考え方は、アリア語族の教えに従っていた北ヨーロッパのゲルマン民族との共通性を持っていた。ローマ・キリスト教という公認された軍事力で、常時抑圧された状態に置かれて1世紀もの間生活してきたゲルマン民族が、この異端者となる結果を引き起こしてしまった。時には故国を探し求め、略奪を繰り返し、復讐をしながら、ゲルマン民族はバルカンからギリシャへと欧州を跨いで移動した。少しの間、彼らはフランスの多くの地域を統治した。彼らはローマに侵略し、略奪をして、イベリアに向かい、その地に共通の

信心家と一緒に生活することに落ち着いた。

この西ゴート族は、彼ら外国の規則を押し付ける征服者の如くに度々描かれて来ている。しかしポルトガルでは彼らが軍事的に勇敢であろうが、移民してきたのは多分5万人以下であって、当時のルジタニア人の人口はその20倍程度だった。

ブラガのカトリック大司教・聖マルティアーニョ(Martinho)が、彼らの指導者を王として崇めて聖油を塗ったが、しかしカトリック教への改宗を犠牲にしてまで……。そして何の王？ 彼らが持参してきたゲルマンの法律と慣習はゲルマン人の統治者にのみ適用された。多くを占めるその他の者は、教会によって以前に管理されていた慣習や法律に従って生活し続けて何の変化もなかった。

ブラガの聖マルティアーニョは修道士であり、ハンガリー出身であるが、ポルトガルに修道会主義を導入するために派遣されてきた。宗教的な事柄と世俗的なことの両方の腕前を持ち合わせ、清廉潔白で知られ、簡素な生活をする、高度な教育を受けた司祭と修道士の一連の大共同社会になって行った。聖マルティアーニョも一緒に、ラテン語が唯一有効な礼拝式言語であると宣言した。それでもって一握りの教会以外では、ゲルマンからのゴシック言語が使われなくなって行き、ゴシック語のミサはなくなり、ゴシック言語は完全に消えてしまった。

ブラガ公会議にて、聖マルティアーニョは三位一体のカトリックの教えを満たしていないイエスの見解は不当と訴えた。同時に彼は、地元のカトリック教徒がゴート族と結婚することを禁じるとその会議での発言を結んだ。

しかし西ゴート族の王レジェスウィンス(Reggeswinth)は、ゲルマン人こそ正当であると自分で勝手に決めて、聖マルティアーニョの教勅を突き返した。これが聖マルティアーニョの、そして彼を信じる人々の没落を招いたばかりか、ポルトガルのキリスト教主義を全体が共有する結果を齎してしまった。

死に遭遇したときに両親どちらの遺産に対して今日のポルトガルで再び適用されている因習的地方法律の下では、その遺産は、残されたどちらかの配偶者と子供達

### 第3章 キリスト教国の盛衰

に平等に分与される。女性も両親の遺産相続する権利を兄弟と同じく有していたし、今度は彼らの番になって遺産を遺言で譲れた。ゲルマン人の法律が彼らに課した女性は相続権を失い、相続した遺産は遺族の子供達には分与されず全てが長男のものになる。これが専制政治への不満として溜まっていく原因になっていった。

ウィティザ(Witiza)に代わっていた西ゴート族王が710年に暗殺されたが、明かに犯人は貴族の若き息子達であった。彼らはウィティザの長男アギラ(Agila)が新たな専制者になることを認めず、代わりに犯人の1人、ロデリック(Roderic)にすべきと喝采して承認した。アギラは北アフリカに使節を送りカリフからその王位に異議を唱えるよう支援を要請した。アギラは、ベルベルの軍隊がポルトガルの新しい体制を倒す為に、この努力の褒美として略奪を許し、北アフリカに略奪品を持ち帰るためポルトガルへ上陸してくるのを心に描いていたのだろう。アラブの年代記によるとカリフのその時の対応は実は生温かった。「調査するのに最小部隊を送れ。少なくとも現在は、海を渡って探検するような危険を犯してまでも大大隊を晒すな。」

711年にタリク将軍がその数なんと7千もの軍勢を引き連れて欧州に渡ってきた。彼らは巨大な岸壁に上陸した。その名はジブラルタル(Gibraltar)と現在もまだこう呼ばれているが、それはこの北アフリカ人司令官の名、ジャバール・タリク(Jabal Tariq)に由来する。

レドリックはタリク(Tariq)将軍率いる軍勢を上回る軍隊を行軍させて彼らと対峙した。彼は精鋭な西ゴート族勇士の中の中央師団の戦闘で自ら采を振るっていた。他の2個師団は彼の中央師団の側に配置され、彼に内緒で陰謀を持った将校が指揮していた。彼らの部隊は南イベリア人が多く占めていて、彼らは酷く嫌っていた体制の防衛のために従軍していた強制徴集隊であった。指揮に服従しながら、がしかし、南イベリア人兵士は大層喜びながらイスラム教徒の方へ駆け出し、彼らを解放者として迎え入れた。レドリックは戦闘で討ち死にしたと推定されている。つまり彼を追跡しても見つかっていない。生きているのか死んでいるのか。



### 第3章 キリスト教国の盛衰

タリクは多少の抵抗を受け、たまには歓迎されながらも、部隊はイベリアの中に突き進んだ。退いた西ゴート族の王族と貴族は、一緒に司教らと、北のガリシアの方へ逃亡した。タリクがローマまで安全に辿り着くまでは、イベリア教会上座のメトロポリタン（スペインのサラゴサにある）には留まらなかった。

## 第4章 ヨーロッパにアラブ文明を持ち込み

カリフのムサ・イブ・ナセル(Musâ ibn Nsser)は視察のため、北アフリカからイベリアへの海峡を渡ってきた。それまでにムサは軍勢の前線に到達し、海岸線の北2百キロ米を越える所にあった。司令官であるタリクはムサを歓迎して馬から丁重に下り立った。アラブの年代記によればカリフは激怒しながら鞭を打ち、皆の前で「私の許可も得ずに何故今まで前線に留まっていたのだ。私の命令は、奇襲攻撃したら即アフリカに戻れ！であったはずだ」と怒鳴りつけたとある。

ムサはその立地条件の中に驚くほど潜在能力があるのを直ぐに分かったので、そう長く留まる必要性を感じなかったのだろう。イベリアの土地は降雨量が多くて温暖な気候で、地中海側アフリカよりも一段と肥沃なものだった。そこはアラブ人の挑戦者に《薄黒い海》と言われ、ずっと長い間苦しめてきている大西洋に面しているが、鉱石や宝石が豊富であった。最初に起きた戦闘直後にはもう指揮官階級の多くが逃げ出していた。大部分の司教、司祭、修道士らが立ち去った今、最大の集団は、通商にも卓越していたユダヤ人であり、教会で説教され、また実際にそうされてきた反ユダヤ人気質から解放してくれると信じて、彼らを大歓迎した。教会から仰山搾取され続けていたキリスト教徒の多くが、過去の体制より遙かにましであるように見えたので、アラブ人を受け入れる用意が既に出来ていたようだ。

712年6月にムサは1万8千のアラブ騎馬隊と歩兵部隊の軍勢を引き連れて上陸した。セヴィリアに住むユダヤ人が、少人数でしか警備していない城門を開けて、軍勢を入城させた。司教の監督下にあったルジタニアの首都メリダは、強く抵抗を示したが凡そ1年間の包囲でもって陥落してしまい、他もほぼ無血状態で征服できた。アラブ軍はイベリア北部を通り抜け、ピレネーを越え、パリ南2百キロ米にあ

#### 第4章 ヨーロッパへアラブ文明持ち込み

るツールズまで進軍したが、彼らが止められる前に退却を余儀なくし始めた。

ムサの侵攻を容易に誘引してくれたウィティザ王子に、ムサは全部で3千もの農場を所有させ、新政府の上級ポストに就くことを承諾した。既にアラブの統治を受け入れた平民には、彼らの生活が安寧になるように考慮した制令を發布した。逆らった者は、財産全てを没収されてしまった。

アラブ人は、その後ポルトガルには4百年もの間、居続けた。(南スペインには更に250年間も続いたことになる。) アラビア文明はこの地で発展し、中近東や地中海沿岸アフリカ以上に華を咲かせ、シリアから来たアブデウ・アル・ラーマン (Abd-al-Rahman)の統治時代に当る10世紀頃がピークに達している。

このカリスマ的で抜け目なく教養ある王朝の創始者は、首都をカディスに興し、イベリア全土を統治するようになった。彼らは北方欧州人を総じてヴァンダルと呼んで、その地を意味するアンダルシア(al-Andaluz:Andalucia)と名付けた。現在のポルトガルにあたる地域の多くがこの時代の3つの首長国で統治されていた。即ち1つ目は al-Qunu 現在のアルガルヴェ、2つ目は al-Qasr 現在のアレンテージョを含む、3つ目は al-Balata リスボン、シントラ、サンタレムを含むテージョ川の北部である。

何がアラブ人にこのような驚くべき征服を奮い立たせたのかを19世紀の歴史家が論じている。その1人アメリコ・カストロ (Américo Castro)が、《それは西欧州人のキリスト教をイスラムの神に引き渡す聖戦(jihad)である・・・異教徒が改宗しなければ剣を持ってでも・・・。》と描写していた。また別の歴史家リカルド・コネツク (Richard Konetske)は、《彼らがどっちから来たかは兎も角、もっと快適で有益な土地を所有したいが為の、ほんの僅かな決まりを提案したに過ぎない。》と見た。

この2人の歴史家の論争は、人々が奇妙な動機でもって行動するという、共に誤った推論に基づいていた。通常以上に、それらを不正確のままに混同してしまっているようだ。ただ8百年間も曖昧にされ続けてきた軽微な証拠を正気づかせるのに、

#### 第4章 ヨーロッパへアラブ文明持ち込み

この論争が役立つ結果になった。

イベリアの征服者アラブ人のイスラム教への係わり合いは非妥協的なものだった。キリスト教に信仰を改宗し、またはキリスト教からイスラム教への改宗に不同意するようなアラブ人の人々にさえ死刑の処罰で臨んだ。アラブの研究者でベルギー人ラインハルト・ドゥツィ(Reinhart Duzy)は、9世紀頃のイベリアにてキリスト教徒に改宗したイスラム教徒の判例集を翻訳し1862年に出版した。通例の磔刑だと道端に磔の柱が、2人のブタ野郎の間に置かれるものだった。それとは対照的にモハメッド(Mohammed)が聖典コーランを公然と侮辱したキリスト教徒は、いとも簡単に処刑された。

9世紀半ばに自ら《新・熱狂者》と呼んだキリスト教徒の集団が形成された。欧州全体に亘る多くのキリスト教徒のように、その集団はこの世は向う千年終末論、キリストの再来、審判があると信じていた。キリストに優先して聞き入れて貰い、煉獄を通り抜けて天国へ直接行けるように彼らは特に目指した。キリストに十分に祝福されるように彼らが選んだ方法とは、預言者モハメッドを公然と侮辱した上で、イスラム教徒から自分を打ち首されることであった。

似非犠牲者によって注がれる任務には、アラブ人の役人はそれ程拘らなかつた。イサク(Isaac)兄がタバノスの修道院からゴールドバへの旅をした。彼は怪しむ気配のない長官の前に出てこう叫んだ。「あなた方の預言者は、あなた方に嘘をつき騙している！マホメットは、自分と共に多くの罪の無い人々を地獄へ引き摺り落とし、呪われている！」

長官はその修道士の顔を平手打ちした。イサク兄は答えた。「あなたは、アラーの神ご自身のイメージを傷つけているのだ、よくもまあ出来るものだ！」

長官は続けた。「お前は酔っ払っているのだ！理性がないぞ！そんなことを口走ると死刑という法の裁きを受けることを知らんのか！」

「私は今まで一度もワインを口にすることは無いし、自分が何を喋っているか勿

#### 第4章 ヨーロッパへアラブ文明持ち込み

論知っている。」と修道士は答えた。「私は死刑の裁きを喜んで受ける、天の御国へ真実を喋って虐げられるものは、神によって賛美される。」

イサクは間違いなく気違いだから、免罪にするよう長官は上司のカリフに上申ししたが、カリフはそれを断った。851年6月3日にその修道士は、絞首刑台に吊るされて首を刎ねられた。《新・熱狂者》が彼の葬儀で凱旋賛歌しないように、遺体を茶毘たびに付して遺灰は川に投げ捨てた。でもイサクは新熱狂者らによって早速、聖人と崇められ、彼の殉教の間に、後で、いやその前に起きた奇跡の全てが彼によって生じたと言いつらされるようになった。

シセナンド(Sisenando)という司祭が、イサクが天国から自分の処へ舞い戻り、自分も殉教しなさいと勧められた夢を見たとき、夢から目覚めた後、アラブ人の役場に行って預言者を罵ののしったために、死刑執行を言い渡された。処刑台に登る前に、助祭パウロ(Paul)に自分を手本にして続くように言い残した。4日後にパウロも殉教した。

これらの殉教の状況が新熱狂者の師匠であり、『聖人の追憶』という本の著者エウロギウス(Eulogius)によって、読者に吐き気を催させるほど克明に記録されている。

パウロの殉教の数日後にサンショというエウロギウスの弟子が、師匠に急き立てられて預言者を侮辱した廉でまた首を刎ねられてしまった。これはエウロギウスの著書の全ての章を書くに相応しい材料になった。エウロギウスは、次の日曜日にイサクの叔父も含めてタバノスから来た6人の修道士が役人の前に出た。彼の本によれば、「我々は聖なる兄弟のイサクとサンショの御言葉に共鳴する者だ、今や呪われた預言者に復讐しているのだ、お前達は残忍な拷問をするが良い！」と叫んだ。

彼らは首を刎ねられた。

今度はイサクの妹マリアが夢を見る番が回って来た。彼女はそれを友人のフローラに打ち明けた。自分は最愛の兄と再び結び付けられ、フローラが、イエスとイサクがひとつに結び付ける役割を演じる運命にあるという夢であったと。2人はまた

#### 第4章 ヨーロッパへアラブ文明持ち込み

役所に向いて預言者を侮辱する言葉を浴びせた。長時間に亘って2人がそんなに馬鹿げたものではないと役人は弁護した。2人は主張し続けたが、役人は審判を下す結論を出さずに、牢獄に幽閉してしまった。

役人は、2人がぎょっとして正気を失うような審判を使者に持って行かせた。2人が自分の主張を撤回しないのなら、売春行為を強要するという死を選ぶよりも最悪と考えられていた、敬虔な処女を2人に男どもが奪うぞという脅しであった。

また役人は、《新・熱狂者》に反感を持つキリスト教徒が牢獄にいる2人を訪れるよう仕向け、2人が生贄いけにえになるのは無意味なことだと思い留まらせるように試みた。悲劇なことに、彼らは、マリアとフローラと、更にエウロギウスと面会することを受け入れた。エウロギウスは勿論、この麗しき若き処女の殉教者の物語の次章を執筆できなくなることを酷く嫌った。エウロギウスは彼らの前にひれ伏した。彼は畏れたような口調で彼らに話した。神様は2人が天使になるよう既に御光を放たれて、2人の頭上にはもう微光が輝き、天国の王冠が準備されているのが見えると話した。

売春行為を強制したら罰せられるという法律は当時なかった。マリアとフローラは851年11月24日に処刑台に向った。2人はエウロギウスとは違って・・・喜びの瞬間を顔に出すことはなかったようだった。その時が経過してから、エウロギウスは《神は我々に深いご慈悲と大きな祝福をお与え下さった。私に教えを乞うた我々の処女は、悲痛の涙を流しながら殉教支配者に打克ったのだ。》と書いている。

エウロギウスが役人に対して憤慨してしまった結果、役人は4百回の鞭打ち刑を宣告した。鞭打ちの痛みを恐れてか、彼は即死できるような処罰を嘆願した。アラブ人の年代記作家が《私の靈魂を創造主の御許に返してください！私の身体をかき乱すあなたの鞭を許しはしない！》と怒鳴ったと、彼を記述している。

859年のある日、役人はエウロギウスを斬首した。後に、エウロギウスが書物に書き表した殉教者と一緒にされた彼の遺骨は、アラブ人の貿易商人によって取り返されて北方欧州のキリスト教王国の大使に売られた。その王国では崇められ、多

#### 第4章 ヨーロッパへアラブ文明持ち込み

くの奇跡がその国の人々の間で起きたとされている。

アラブ人の統治下で住むキリスト教徒の殆どはこれらの出来事にぞっとさせられた。エウロギウスが処刑される数年前に公表した彼への公開された書状は次のことを予言していた。《カリフはキリスト教徒が宗教を自由に信じることを許しておられる。カリフはあなた方を抑圧していない。あなた方が殉教者と呼んでいるがそれは違う、あなた方は自殺をしているのだ。福音書を読んだならば「自分の敵を愛しなさい、あなたを嫌う人たちに善行をしなさい」を知っているでしょう。モハメッドを中傷するよりも聖ヤコブの言葉に耳を傾けなさい。‘中傷する者は御国には入れません’》

その書状は更に続く。《モハメッドは我々にこう言っておられる。「自分が偽りの預言者だということをキリストが証明しようとし、このようなキリスト教徒の狂信さを吹き込んだとしたら、我々をキリスト教信仰に改宗させ、キリストは狂信者を通して奇跡を起こしたであろう」しかしキリストは奇跡を起こしていない、キリスト教徒は死刑執行によって何も得るものがないし、イスラム教徒はキリスト教徒から何も不都合なものを受けていない。》

キリスト教徒の農夫や商人の所有物になっている奴隷に対して、イスラム教はこの世で本当の自由とは何かの展望を明らかにしている。奴隷を自由の身にするには神に喜ばれるとコーランは書かれている。奴隷がキリスト教徒社会からイスラム教徒社会に逃げ込み、少なくとも2人の証人が「神はひとりだけであり、モハメッドが預言者である。」と証言したら、その奴隷に庇護権が与えられる。奴隷がコーランの教えを受け入れ、且つコーランの教えを守って生活する限り、彼らは資産を所有でき、結婚できるなど多くの諸権利を享受できた。

奴隷を所有するキリスト教徒は、闇に乗じてイスラム人の管轄領内に乗馬警護団を送り込み、自分たちの奴隷を再び捕まえようと試みて成功することもあった。捕えられなくて済んだ奴隷の多くに対して、イスラム人は果物、レタス、野菜、菓草

#### 第4章 ヨーロッパへアラブ文明持ち込み

を栽培して販売できる量を収穫出来るほどの大きな区画用地を与えた。それらはキリスト教の司教が逃げ出したあとに彼らから没収した所領地であった。

灌漑技術はアラブ人によって導入された。それは今まで欧州では知られていない画期的なものだった。それはアレクサンダーから持ち込まれたものであった。10世紀に南イベリアに来たイブ・アル・バサル(Ibn al-Basaal)とイブ・アル・アワーム(Ibn al-Awaam)という2人のエジプト人の農学者がその地方の条件に合った専門的技術に適う手順書を書き残している。

これには、水車・揚水機・用水路・用地管理・畜産・植物繁殖法・作物の栽培・土地の滋養・収穫物の市場との対応など設計・建設施行・操業のノウハウが書かれている。

トマールの川岸にある庭園でその革新的な水車が複製品ではあるが現在も稼動し、今のナバウン川の水流で水車が水を掬って灌漑用水路に放流している。中近東から導入された植物は、バナナ、ココナッツ、サトウキビ、油椰、トウモロコシ、米などであった。アラブ人は大切な植物として、レタス(英語 lettuce,ポ語&ア語 alface)、大蒜(にんにく onion,ポ語 cebola)、人参(carrot,ポ語 cenoura)、キュウイ(cucumber,ポ語 pepino)、林檎(りんご apple,ポ語 maçã)、梨(pear,ポ語 ervilha)、葡萄(grape,ポ語 uva)、無花果(いちじく fig,ポ語 figo)の栽培を奨励した。

ポルトガル人が日常食するものに多く影響を与えたこれらの食べ物は、今もなお注目されており、北欧人の医学研究者らがポルトガル人の心臓病発病率が何故低いのかの糸口を研究していた位である。ポルトガルの一部で使われ続けているアラブ語は、多くの食物類(米:ポ語&ア語 arroz、砂糖:ポ語&ア語 açúcar)、灌漑用水、食物を貯蔵する倉庫(ポ語&ア語 armazém)などの言葉に見られる。

アラブ人によって始められた耕作様式は、イタリア人やドイツ人や教会が所有する荘園や、家族単位で所有して栽培した園芸用畑用地の代わりに、シントラの近くやその他の地域において今も存続していてそれを見ることが出来る。彼らの収入は、今や地方にある工場やビル街の商店からの稼ぎに依存しているのが実態である。そ



#### 第4章 ヨーロッパへアラブ文明持ち込み

の畑用地はきちんと耕されて、オレンジやレモンの果樹の下に葡萄園を作り、その畝の間にはサラダや花々を育てている。政府関係の農学者は、これは効率が悪く、しかももっと合理的に農業ができる単位にグループ分けをしようとする今までの全ての企てに農夫らが抵抗していると零<sup>こぼ</sup>している。この数世紀で成長して来ていた農夫らが勤王から多様化へと、植物に関して新しい《ヨーロッパの多品種化》を受け付けて来なかったのとこれは丁度似ている。彼らはこのようなやり方で作物を提供する欧州人の最後の仲間であり、週末に農作物を売る市場に押し掛ける群集が如何に大衆的で、且つ保守的であり続けているのかを示している。組織的な農業経営には戻らない人々であった。

アラブ人がこの地を征服する前は、田園の村落や小規模の町に住む人々は、その地主によって管理されていた。ところが徐々に地主は教会を意味するようになっていった。聖パウロの生き方と皮肉にも真反対になった教区司祭は強奪的な税取立て人になってしまった。司祭は、ある時は大地主として振舞い、若しくは町長又は行政長官として、若しくは福祉の提供者として尊敬の眼差しを受けながら振舞ったが、教区司祭として掛る費用より遙かに大金持ちに成り上がって行った。

アラブ人の統治下、生まれながらの、又は改宗したイスラム教徒の何れも、殆どの租税から免除されていた。税などによる国の歳入が赤字になった為、イスラム教の伝道活動に対して国家財政の見地からその免除に苦情が続いたと年代記の記録がある。教会が取り立てていた金額よりも税金はそれほど重税でなく支払が可能なものだった。司祭が居なくなって教区行政にぽっかり穴があいてしまったことを埋め合わせることにアラブ人は関心を抱かなかった。このことがウス・オーメン・ボンズ（“os Homen Bons”）、文字通り《善良な男達》という著しい動乱を導く結果になった。彼らは村議会や小都市議会を形成し、議員は広場に集まって歳入案を審議し、保守や修理や他の公共事業に関して奉仕作業を行ない、地方の司法管理、地方争議の調停、社会福祉で特に未亡人<sup>むいめ</sup>や鰥夫に対する活動を行なった。またオリーブ油圧搾、

#### 第4章 ヨーロッパへアラブ文明持ち込み

ワイン製造、作物をアラブの商人らの市場に卸すなどの組織化を促進した。牧師の不在時に、彼らの記憶に従ってカトリック礼拝式の代表的な、洗礼式、結婚式、葬儀を都合したりもした。

北部ポルトガルでは《ブラガの典礼》(時々西ゴート族と勘違いされる)としてその時から由来する口述式の伝統的ミサをヴァチカンはそれ以来認め、今でも未だ時々典礼が行われている。告解はいたって簡単でラテン式のミサと比べてもそれほど屈辱的なものではない。聖杯はミサが始まる前にされミサの間には行われない。

《善良な男達》の制度はポルトガルの田舎で栄え続けて来ている。その共同社会は、そのような美德が噂以上に支持されている、アメリカ合衆国のある地域よりもっと顕著なもので、西側諸国の中で最も独立心が高く自給自足体制が残っている。現在その名前を冠されているのはボランティア消防協会である。森林火災が発生した時、非常に高度な訓練を日常受け、高度な設備を持ち、実際に果敢に消火活動を、それも無報酬でやっている。更にこれは彼らの任務から見て僅かな領域である。

私も一時期会員であったアルモサジェムにあるボランティア消防協会は、街区の約5分の1に相当する広さの土地を所有している。この地では市議会というよりは《善良な男達》と呼ばれ、幼稚園の安全な遊園地、図書館、博物館、コンピュータ室、スポーツ・ジムや室内ホッケーのリンクを備えた体育館、ヘリポート、法律相談室、医療診療所などを抱えてサービスを提供している。診療所では救急看護師や開業医による医療サービスだけでなく、リスボンから毎週定期的に通う専門医も抱えている。最先端のメルセデス・ベンツ製救急車導入がある要望で最近実現した。またある要望により水泳プールを備えたコミュニティー・センターも建設された。

我々のボランティア消防団は管楽器楽隊の解散を毛頭考えていない。ジャズバンド、舞踊楽隊、室内オーケストラ団、グレゴリオ聖歌隊などと寧ろ発展させている。ぞっとするような社会儀式や豚殺しパーティー(12月遅くから1月に2日間掛け、豚を殺して、ソーセージ、燻製、touchinho 腹部などに加工処理して保存する。初日のパーティーでは、sarrabulho

#### 第4章 ヨーロッパへアラブ文明持ち込み

と言う、米、内臓、血を腸詰にしたものを茹でて昼食に食する。) など、ポルトガルの風習を一方では保持するのにも寄与している。

アラブ人は、奴隷を解放して置き換わる人々を、海上で誘拐する悪行を働く北欧州の貿易商人や地方の略奪者から手に入れていた。この第1波は、ドイツ人が東欧州を侵略した戦争で捕虜にしたスラブ人の囚人であった。スラブ人女性はハーレムに送り込むべく高額を支払って買われた。幾人かのスラブ人男性は宮廷に取り立てられて頭角を現すものも居た。彼らはアブデウ・アル・ラーマン3世の統治時代まで数多くて、スラブ人は全ての欧州外国人という名称になったほどであり、アラブ人の王は、わざわざ自分の毛を黒く染めてスラブ人と間違えられないように心配した位であった。また別の奴隷として南方のイタリア、ベルギー、フランスから連れてきた。特にフランス人の奴隷は、ハーレムで働く職員となるために去勢した男の最大供給源であり、少年らを取引する際の処置用、運送用のコンテナ(家)は主にヴェンダン(Vendun)(現在のマドリッド近傍)向けだった。

都会ではアラブ人による改革が行われ、学校それも度々学費無料の、当時の欧州では数百年前までは初めての大学が導入された。以前には事実上読み書き出来たのは司祭や聖職従事者に限られていた。それは国王や貴族ですら読み書きが習得できなかったことを意味している。

南イベリアのアラブ人統治者は、読み書き能力向上を一般市民に図ろうとした。学校で教えられる読み書きはアラビア語であり、算数、歴史、地理などもアラブ語による教材であった。ラテン語を喋れる古い世代の連中はこのことに憤慨した。854年の日付がある小冊子”*Indiculus luminus*”に以下のことを訴えている。《気品の高い雰囲気のある、流暢な会話ができる我々キリスト教徒の若人は、アラブ人の雄弁に毒されている。アラブ人はモハメッドの著作を貪り読んで議論して、美辞麗句をいつも振り回して称賛しているが、彼らは教会文学の美しさを何も分かってはいない。キリスト教徒は自分達の法律をあまり知らないので、彼らはラテン語に

#### 第4章 ヨーロッパへアラブ文明持ち込み

殆ど関心を示さず、友人の健康を相手に分かるようにアラビア語以外で質問出来る、手紙を書くことが出来るのは百人中で1人位でしかない。》

改宗しなかった都会に住むアラブで教育を受けたこのようなキリスト教徒は、多くの場合は日常言語としてアラビア語を使っただけでなく、アラビア風の衣装を纏い食事や文化も一イスラム教そのものの信奉を除けば全ての日常生活を受け入れた。彼らはモサラベ(Mozarabs)として知られるようになった。《啓典の民》とアラブ人から尊敬されていたユダヤ人は同じように適応した。同時代のキリスト教徒のようにユダヤ教徒の中にアラブの有名な科学者や学者になるものが現われた。

アブデゥ・アル・ラーマン時代の終期、12世紀の初期に、アラビア人の地理学者として有名なアル・イデゥリシ(Al-Idrisi)が、現在のポルトガルを旅行した。我々の上述した情報は彼からのものである。

アル・イデゥリシは、西ゴート族時代以外には廃坑になってしまった鉱山を見つけた。西ゴート族は鉱山を拡張し、更に深く掘り込んだ。鉱夫は、掘削する者と製錬する者と、水銀を用いて金を抽出する者にとにグループ分けされた。工夫を凝らしたプールを作り、金抽出のために利用された。

リスボン地域の農夫はアル・イデゥリシに、アラビアから移入した多品種の小麦は、既にここにあって植え付けてからたったの40日で生育すると自慢したという。南部地方では、特に良質な果樹園があって、実に繊細な味の美味い無花果を収穫出来ていた。

アラブ数学と地方の美学が融合して、U字型のアーチ、装飾状の漆喰、絵タイルを多用する他とは全く異なる、見て楽しい建築様式が発達したと、彼は書いている。また窯業やガラス製造業や金属加工業などの技芸が高度に発展した。十字軍にまもなく発見されて、リスボンを始め主要都市は、上水、公共浴場、下水設備を十分に整備されたばかりか、要塞化もきちんと施された。

テージョ川河口南にあるセツバルは、造船所の町として繁栄して行くのに必要

#### 第4章 ヨーロッパへアラブ文明持ち込み

な素材である松の大農園に囲まれていた。アル・イデゥリシは、コインブラにあるモンディゴ川の土手にある庭園を称賛している。その庭園は私自身が1996年に著述しているが、未だに保存されている。北に行けば、略奪を欲しい儘にする騎馬隊の種族が生活していることをアル・イデゥリシは報告している。フランスと英国から援助を受けながら、十字軍はその後直ぐに侵略してきた。キリストの名の下に十字軍は4世紀に渡って作り上げたアラブ建築物、芸術作品、灌漑システム、風車と水車による製粉設備、倉庫や造船所などを破壊しようと組織的に準備をした。

その破壊程度は、アラブの影響の全ての形跡が実際に撲滅してしまったということよく言われる。しかし我々が見る限り、幸いにも事実とはかけ離れているようだ。

アラブ語とアラブとを区別することは、ここでは大切なことである。例えば医学や哲学や教育における偉業は、イスラム教徒と一緒に働き、又はパトロンの下、アラビア語を喋るユダヤ人やキリスト教徒であった。南イベリアの王室的、学者的なアブデゥ・アル・ラーマン王朝の下で3つの宗教全ての信者が一緒に協同し、西側世界で芸術的にも、科学的にも最も進歩を遂げたことがまだ見受けられる。

今日、女性人権問題や言論の自由に対する過激的な騒動に関し《テロ行為》又は《原理主義》の接頭辞に《イスラム教の》が度々つけられるが、欧州の北部へよりも南イベリアに根付き広がったイスラム教が、西欧州の文明に寄与したことを呼び戻し、認識する必要性が大いにあるのは否めない事実である。ポルトガル中央に位置するサンタレムにあるモスク(イスラム教礼拝所)は、7百年以上も使われていなかったにも関わらず、シナゴグ(ユダヤ教会)と聖フランシスコ修道院と並んで保存されて来ている。ここではスペインに於けると同じく、カトリック教徒、ユダヤ教徒、イスラム教徒による諸活動が展開され、お互いに許容し合い、実際に相乗効果も出て、教養的、文化的な力強さを再び繰り返されたのであった。

数学の創造に結び付く零という概念の存在を最初に認識されたのはゴールドバにおいてであり、その結果、高いアーチ形天井の建造物の建設を可能にした建築設計の

#### 第4章 ヨーロッパへアラブ文明持ち込み

計算に繋がった。このことやその他のアラブ人による建築技術は、アラブ人が教えたキリスト教徒を通して、アラブ人の排除を切り抜けて生き残った。シントラにある国立王宮で、アラブ人の建築技術を今日でも見ることができ、またバターリヤにある異国情緒豊かな大修道院でもまだその技術を見ることができる。

医学は複雑化した新しい段階にまで発展した。青年期の概念から子供に対する治療が、専門領域として区分されるようになった。10世紀の半ば迄に、アリブ・ビン・サイデゥ(Arib bin Said)が、婦人科学、胎生学、小児科学について主専攻科目用教科書の著作を完成させた。その著作は、医学書の中で世界の分水嶺に相当するとも云われており、ヒポクラテス(医学の父といわれる)や他の抽象的なギリシャ理論よりも、臨床医学と病理学に基づいたものである。人間に環境が及ぼす影響や食事に関する経験的な研究が急速に発達した。外科の新技術や新設備にも工夫が加えられ、16世紀になるまで西欧州にてそれらが利用され続けられてきた。

アラブ人がポルトガルから駆逐されてから大分経って、リスボンに住むユダヤ人物理学者の子息ペドロ・ヒスパーノ(Pedro Hispano)が、アラブ語で書かれた医学書をラテン語に翻訳し現在も残っている(何箇所かは、ユダヤ教徒の、またキリスト教徒の医師が著作している)。彼は『*慈善の宝庫 "Thesaurus Pauperum" 医療費を払えなくともあなたは診療を受けられる*』なる題名を付けて発行した。

ペドロは1276年にポルトガル人の唯一の教皇ジョン21世となるためにローマに行っていた。彼は教皇に選出されて数か月も経たない内に、ローマの北ヴィテルボの教皇庁にある彼が建てさせた図書館の天井が崩れて落ち、中にいた彼が憤死してしまった。この悲劇が、教会が国家に従うのか、それともその逆なのかについて、ポルトガル国王との激しい遣り取りを引き起こし、その《事故》が、王らしく権限を委託されてしまったという嫌疑が、広く流布された。

印刷機の出現によって、『慈善の宝庫』は更に翻訳されて欧州の殆どに出版された。ペドロが亡くなって2世紀が経っても医学参考書の標準的なものであり続けた。ペ

#### 第4章 ヨーロッパへアラブ文明持ち込み

ドロは“狂気”に関する論文も書き表した。その論文はアラブ人よりは早く初めて書かれたと断言できるが、悪魔に取り付かれた靈魂の出現ではなくて医学的処置が必要な病気であることを論じている。5百年前に精神医学が内科という専門分野に発展して、ポルトガルの神の聖人ジョアンの先駆的研究に引き継がれている。彼は創始者として、現代の精神病医学者にも広く崇められている。

アラブ人は、西欧州では以前に知られていない古代ギリシャ哲学者の書物をアラビア語に翻訳して中近東から持ち込み、ポルトガルでアラビア語からラテン語に再度翻訳された。教皇になったと前述したリスボンのペドロが、アリストテレス (Aristotle)の論理学理論の説明を噛み砕いて、この領域においても顕著な貢献をし、中世時代を越えた重要な研究として残され続けてきている。アリストテレス論理学の歩調を記憶に留める努力をして彼が構成した格言的韻律が、ポルトガルの中等学校で必須科目である哲学の教練で子供達に、実際、今も教えられている。

最後には、同様に250年後にスペインから追い出されたアラビア人が、どうやってポルトガルから追い出されたかは次章にて述べる。アラブ人を追い出そうと繰り返したにも拘らず、ポルトガルのそれ以外からは駆逐されてもアラブ人がアルガルブに1世紀に亘って居続けたという話の方が、この段階では的を射ている。

アルガルブはアラビア語の《西》を意味する *al-Gharb* から名付けられている。その首都シェルブ(Xelb ; 現在のシルヴェス Silves)は、アラデウ(Arade)川沿いの北にあり、国際的にも重要になったアラビア文化の中心地として発達した。11世紀には、学者、作家、芸術家、音楽家がバグダッドやイエメンより東側に離れた此処に移動してきた。シェルブにて喋られ、書かれるアラビア語の言語学上の純粋さと優雅さは、《西のバグダッド》と知られるようになった町のアラビア人を通じて有名となった。

有名な詩人モハメッド・イブ・アマル(Mohammed ibn A'mmar)は、アルガルブの統治者であり、その黄金時代を統治した。彼はアルガルブに生まれ、父は北アフ

#### 第4章 ヨーロッパへアラブ文明持ち込み

リカから移民としてきた小作人であり、学校を出た後、創造的物書き研究所で研究活動を続けた。両親は彼を何も援助することが出来なかった。彼は1040年のベルベル族による急襲から、セヴィリアのアル・ムタミド(al-Mu'tamid)王子のアラブ騎馬隊の指揮によってシェルブを奪い返したのを褒め称える詩を詠んだと、アラブの年代記が物語っている。実際には王子は11歳であったので、彼の指揮は名ばかりのものであった。王子は詩歌を非常に好み、その詩歌の書物を大量に購入し著者と会うように手配した。そして何とその著者と激しく恋に陥ってしまったのである。

アル・ムタミドは12歳になったばかりの王子を、彼の父親がセヴィリアの統治者に充てると公布した。王子が取り付けた約束の1つが、詩人であるイブ・アマールに首相とすることであった。2人は一緒に長蛇な凱旋行進の先頭の馬に跨って、シェルブの大通りを通り抜けアルガルブへ向った。イブ・アマールの首相として取り組んだ仕事は古くなった詩篇を落ち着かせることであった。数年前に彼は詩を詠んで、それを町で1番の金持ちの商人に送った。それは飢えをしのぐための食物確保の始まりであった。普通は家畜用の餌になる大麦1袋を商人は送った。今度は、イブ・アマールは、何と銀が詰まった同じ大きさの袋をその商人に送りつけた。同封されていた書状には“私が飢えていたときは、あなたは小麦を送ってくれたが、私は今度あなたに金を送らしましょう”と書かれていた。

新しい統治者になってからのシェルブの町の描写には、飾り立てた商店街も含めて、中近東や東洋から輸入してきた絹織物、陶磁器、香水、香料、金の線状細工品などの贅沢品に向けられ、そして川岸には華麗な薔薇の庭園や、丘の向こうの小高いところにある宮殿などについても触れられていた。その丘の頂にはベランダ付きのお伽物語のような宮殿があり、宮廷では、演奏会、詩吟、舞踊、ワイン付きの盛大な宴会が繰り広げられていた。イスラム教は飲酒を禁じていたが、アルガルブでは長い間、許されていた。夕方の礼拝時に祈禱師を呼んだ時には、王子と詩人（首相）の2人は手に手を取り合いモスクに入り、即興で詩篇を交替しながら詠んだ。



#### 第4章 ヨーロッパへアラブ文明持ち込み

その記録によると以下のものであった：

王子：「光塔が祈祷しようとする汝を呼んでいるのをお聞きなさい。」

詩人：「アラーの神が汝の多くの罪業をお許し下さるとの希望をお聞きなさい。」

王子：「汝が真実であることを示せば、アラーの神はお許しになさるに違いない。」

詩人：「心から信じている限りは、自分の言葉で述べるがよい。」

王子のイブ・アマールへの心酔と同棲というスキャンダルが、父のセヴィリア王に降り掛ってしまった。王はその詩人スペイン北部にあるサラゴッサに追放するように命じた。更に王子にはセヴィリアに戻るよう召喚し、結婚するように厳命した。王子は奴隷の女を買い、妻にした。

王子の2人の妻についての逸話は、その1人は奴隷であったかどうかの疑問はその儘になっているが、今も語り継がれてきている。アンダルシア地方は滅多に雪は降らないのに例外的にある寒い冬に雪が降り、彼女（男性の詩人）が、真っ白に雪が積もった小高い丘を眺めて大涙を流したと。彼女は夫にこう言った。「貴方の我儘のせいで私は泣いて悲しんでいるのです。何で毎年このように雪を降らせてくれないの？」

そこで王子はその丘にアーモンドの木々を植えつけさせ、毎年白い花が咲き、雪のように覆い尽くすように命じたという話である。

2番目の逸話によると、乗っていた四輪馬車がある建物の前を、そこは女奴隷の団が裸足で煉瓦に使われる粘土を踏み続けている所を通り過ぎようとしたとある。彼女らの宮廷での生活はあまりにも自由がないと夫に不平を零しているのだという。王子はそれを聞いて嫉妬の涙に溢れてしまった。王子妃は友人を連れてきて数日間粘土踏みをしたいと王子にせがんだ。中庭一面が褐色の砂糖と香料で蔽われ、薔薇香水で撒き散らすように王子は命じたので、王子妃の侍女らがこれで高級な泥を満足するまで踏み潰せるようになった。

王子ムタミドの父が亡くなって王子は王位に就き、妻と離縁した。王子はイブ・

#### 第4章 ヨーロッパへアラブ文明持ち込み

アマールを再び呼び戻してアルガルブ知事に任命した。聖地への船旅の迂回路として十字軍はアラデゥ川を遡上した。十字軍は陸路で行軍していたリスボン、コインブラ、ポルトの司教が指揮しているポルトガル軍と遭遇した。合流して、シルヴェスの都市を暴れ回り、そこを占領した。

ポルトガルの司教は征服の話をまとめた。リカルド(Richard)王と側近人は、今までこうして来ることが出来た謝礼として、自分の都市が略奪されるのを放任した。彼らは都市を徹底的に破壊尽くしたが、大小を問わずモスクだけは手をつけなかった。司教はモスクを大聖堂として奉獻し、十字軍から来た神父ナカラオ(Nacalao)、フレミッシュ司祭をその司教として任じた。

アルガルブのアラブ詩人であるイヴ・アル・ラバン(Ibn al-Labban)はこう詠んでいる：

我々は未来という手の中にあるチェスの駒のようなものだ。

そして王様の駒は歩（ポーン）に落されるに違いないし、

この世にはもう注意を払う必要はない。

またこの世に住む人たちは、

いまやこの世が終末を迎え、

名前に値する人々はいない。

## 第5章 キリスト教徒のレコンキスタ

シャンパーニュ伯領のユーグ・ド・パイヤン(Hugues de Paynes)は、1126年にエルサレムでの滞在を終えて欧州に戻り、新しい騎士団の従士を募り、資金を集め、教皇からの賛美があるよう求めた。彼はもう1人のキリスト教徒で騎士である聖人オウメル・オブ・ゴデフレーデ(Aumer of Godofrede)と一緒に、テンプル騎士を探し出す考えを持っていた。騎士団の目的は、ソロモン王が建てたヤハウェの神殿があったと信じてられているエルサレムにある教会を警備し、巡礼者が聖地に巡礼するのを護ることであった。

テンプル騎士は、初めはこの警護という目的に適おうと自分自身を処していたが、後の世代までは続かなかった。その騎士団があった最初の5年間、テンプル騎士は、新しい規範のキリスト教徒国を、それはポルトガルではそう呼ばれた、創り出だそうとして奉仕活動に専念した。長い年月が経ち、フランスやその他の騎士団は壊滅されるような迫害を受けたが、ポルトガルでは19世紀まで形を変えながらも栄え続けた。テンプル騎士団の歴史とポルトガルの歴史は、内では対<sup>ついで</sup>になる時もあり、また独立独歩のときもあつたのである。

騎士団は西欧世界では、どんな君主国よりも、忠義<sup>うおべ</sup>が上辺だけのものになっていた教会よりも、一番の金持ちの団体になっていた。しかしその発端では、その設立者は実に貧窮<sup>うおべ</sup>していて、徽章には2人の騎士、恐らくはユーグとゴデフレーデだろうが、1頭の馬に騎乗した姿が描かれていた。

ユーグは西側諸国の中で当時一番栄えていたブルゴーニュ(411年にゲルマン民族の一派のブルゴーニュ人がローヌ川領域に侵入して建国)に着いた。そこは当時、欧州の商業や文化の十字路に当たっていた。キリスト教徒の年代記によると、ユーグがそこを訪問

## 第5章 キリスト教徒のレコンキスタ

したのは、クレルヴォー大修道院長の聖人ベルナル(Bernard)に嘆願する特別な目的があった。ベルナルの令名は教皇らの互選で決まり、教皇らに実質的に権限を執行できる1人の教皇であった。ブルゴーニュ王族公爵のいとこの1人が慢性の貧血症と胃潰瘍と高血圧症と偏頭痛を患っていた。25歳の時に彼は4人の兄弟と、17人の貴族のいこに対して、不動産や邸宅の財産放棄を説得させ、耐久生活するように誓わせた。でも自制というスタイルが、ブルゴーニュ王国にある修道院では徹底されていなかった。その重鎮であるベネディクト会・クルニー大修道院の修道士は、豪華な食べ物と時代もののワインを飲み食いし、年間の殆どをパリにある豪華な住まいで暮らした。土地、宝石、美術工芸品、現金などの寄進を懇願しながら、大修道院長は神から喜ばれる以外の行為の何ものでもない<sup>うそぶ</sup>と嘯<sup>うそぶ</sup>いていた。

ベルナルが建てた修道院では、修道士は藁の上に横たわり毛布も使わず暖房のない寄宿舎にて睡眠をとっていた。彼らは6時間の睡眠をとり、昼間は自由な時間はとれず、祈りと肉体労働に打ち込んだ。ベルナルは自分の病気に起因する味覚喪失になっていて、生野菜と温野菜でしか口にせず、その菜食主義を修道生活にも仕方なく持ち込んだ。新たに再建されたシトー修道会の長として彼が抱いていた幾つかの<sup>こころざし</sup>志<sup>こころざし</sup>の中の一つは、教会の大きく崩れたモラルを取り除くことであった。彼は隠修士の住むような掘っ立て小屋を敷地内に建てて漢方医に付き添って貰いながらそこに住んだ。その小屋から書簡、お説教、熱心な勧め、小冊子などを矢継ぎ早に送り続けた。

これらを通じて司教や司祭の墮落や頹廢<sup>おとろけ</sup>を公<sup>おとろけ</sup>に非難した。聖ヤコブに共鳴し、彼は自分らの階級の人間が小作人を抑圧していることに対して、小作人の権利を弁護した。彼はユダヤ人らの信ずるユダヤ教を差別するのを禁じた。女性への慈しみの神性ある純潔なマリア崇拝を通して、女性を尊重させるようにと啓蒙活動をした。

テンプル騎士団をポルトガルに創ろうと、誰が初めてその考えを持ち出したのかは未だ分かっていない。しかしブルゴーニュ修道院の年代記やイレネ・ヴァーレリ

## 第5章 キリスト教徒のレコンキスタ

イー・ラドット (Irineé Vallery-Radot)兄が書いたベルナルに関する信頼性の高い伝記から我々は知ることができる。 Templar 騎士団の目論みは、イスラムの西脇腹に、新しい、模範となるキリスト教徒の国を創設することであった。それはイベリア半島の北側にあるミーニョ川から、サハラ砂漠の丁度北に位置する南モロッコの現在の地名アガディールに南に向った間が対象であった。3世紀経った後、つまりポルトガルが欧州でも最もお金持ちの国になった時、モロッコを征服することによってベルナルの計画を実現するために望み続けてきたものであったが、国の歴史でも災難が続出して没落状態で、スペインのやり方に2世代の間、苦役に甘んじることになった。

ベルナル家は11世紀終前以来イベリアに盛んに関心を抱いていた。彼のおじさんに当たるブルゴーニュのアンリ伯爵が、レオン・カスティーリャ(エル・シドと戦い、戦死した)の国王アフォンソ(Afonso)を救援するため私兵隊を引き連れて行き、アラブ人との戦いに加わった。戦費はアフォンソの次女を王妃として嫁がせるという約束であった。アフォンソは、ミーニョ川とドウロ川に挟まれたポルテウカーレとして知られている細長い大西洋沿岸地帯を王妃の持参金として分け与えた。

ユーグ・ド・バイヤンがブルゴーニュ王国に辿り着いた1126年に、伯爵アンリ(Henry)が14歳という若さで亡くなってしまった。王妃テレーザ(Teresa)は祖父にあたる、後に父の後を継いだエンリケになるアフォンソを、ひとり息子として産んだ。アフォンソ・エンリケ(Afonso Henriques)が15歳になった。テレーザが摂政政治をしている間、アフォンソ・エンリケをレオン・カスティーリャの新王とし、いところが新王に臣従の礼を持たせたが、アフォンソ・エンリケは元服したら何とテレーザを城内に幽閉してしまった。ブルゴーニュ王国の公爵のいところであるマファルダ(Mafalda)、つまりサヴォイのアマデウス2世(Amadeus II)の娘と結婚した。アフォンソ・エンリケは自分が王になる権利を持っていると宣言したが、彼が、正確に、何時、何処で、どうやってそうしたのか答えようがない。彼についての公式な

## 第5章 キリスト教徒のレコンキスタ

年代記によると、オウリーク(現在のベージャ)での戦闘でアラブとベルベルに圧倒的勝利を挙げた後、兵士らが成り行きでそうしたと記述されている。がしかし、そのような戦闘があったのか、またオウリークという地名が存在したのかの考古学上の証拠物件が、書物が、ある訳ではない。

他の史料によると、当時のドウロ川南部はムーア人(イスラム教徒)の統治下にあり、北アフリカから来て其処を警備していたベルベル人の兵士らが、糧食不足に不満を抱いて暴動を起こし、アラブ人将校に挑み始めたというのははっきりとしている。その暴動の状況はブルゴーニュにまで報告された。反目し合っているムーア人らを一掃するために、選び抜かれた戦力を派兵する計画が練られ、キリスト教国への脅威として捉えられた。

トロワ公会議(1128年)がローマ教皇(ホノリウス二世)、フランス、ドイツの国王が参加のもと、十字軍を新たに増強出来ないかを議論するために開催された。ベルナルはその会議に参加しようとはしなかった。でもローマ教皇はベルナルが会議を主宰するように依頼した。ベルナルは自分が病気であることを訴えたが、ローマ教皇はトロワへ彼を運べる、‘藁’と‘籠かき’を送り込んだ。

その公会議の第1議題は、テンプル騎士団の創設を承認することであった。騎士団の巡礼者を護るという役割は最早なくなり、寧ろイスラム教徒を打ち負かすことであった。ベルナルが新兵を懇願するのを諭したので、逆に質問責めにあった。彼は、人間全てはあなた方の近くに居るのではないかとその懇願に対して断った。隣人を殺すということは、たとえイスラム教徒であれ、キリストの掟に反することであり、イエスも十二使徒も聖戦を唱導するようなことは決してなかったし、皆が懇願しているのはまさしくそれであって、キリスト教徒が侵略者側ではなくて犠牲者であったと説教した。

病気で気弱になったためなのか、ベルナルは圧力に屈してしまった。イエスが聖人ペトロ(Peter)に剣を鞘きやに戻すように命じた時、自分がひどくびっくりしたし、

## 第5章 キリスト教徒のレコンキスタ

兵士らが武器を捨てて初めて降服するのを要求せずに、洗礼者の聖人ヨハネ(John)が兵士らに洗礼を申し出た場合もそうであったことを、ベルナルは説教した。(新約聖書—マタイの福音書 26章—52節に「剣をもとに納めなさい。剣を取る者はみな剣で滅びます」とある。) 彼らは偽証していない人々を責め立てないようただ約束すべきであった。(ルカの福音書 3章—14節) (ヨハネは兵士たちに言った。「誰からも、力づくで金をゆすったり、無実の者を責めたりしてはいけません。») 聖アウグスティヌスが、武力行使はある時には神により義戦ともなり、正義になると言ったこともベルナルは指摘した。

1128年1月にトロワでローマ教皇により Templar 騎士団の創設が公認された。アフォンソ・エンリケは自分の誓約と国として忠義をたてる書簡をクレルヴォー大修道院長ベルナルへ送った。6週間後の3月中旬にユーグ・ド・パイヤンと新たに盟友となった一団がポルテッカーレに着いた。この旅程の速さは、馬に乗っての旅だったとしても驚きをもって言われている。ブルゴーニュ王国は羅針盤の4方位に広がっている複雑な水路の中心にあった。修道院の庭にある掘っ立て小屋に住むベルナルに意見を聞くためにローマ教皇がイタリアの地中海沿岸を船で遡上し、それからマルセイユからローヌ川を上ってクレルヴォーに来た。ユーグと他の騎士らはライン川を下って大西洋に向う逆のコースをとった。彼らは潮流と吹いている風に乗って南方に急いだ。現在のレイリアに当たる町の近くのソウレ川の河口にあるベルベル人の城郭を占領してそこに居を構えた。

ポルトガルの歴史の中でこの時代を美化する風潮はサラザール独裁政治下で特に書かれたが、人気ある現代歴史家 ジョゼ・ヘルマーノ・サライヴィア(José Hermano Saraiva)により最近修正が加えられて来ている。アフォンソ・エンリケと騎士らは、自分達を永い間それほど軍人として振舞っていたのではなくて寧ろ盗賊のようなものだったと指摘している。彼らは敵地を襲い、略奪をし、且つ市民を誘拐して奴隷としてきた。

最も伝説的にいわれている騎士 《大胆不敵なジェラルド ”Fearless Geraldo”》は、

## 第5章 キリスト教徒のレコンキスタ

イスラム教徒から誘き出されてキリスト教徒に売り渡された人物であった。真夜中にイスラム教徒の町々の城壁を見えないようにしてよじ登ることを得意としていた。連隊がそこに駐屯している間、町民が大騒ぎをさせておいて、夜明け前に自分は出来る限りの盗品をして、姿を眩ましたのである。

けれどもジェラルドは、現在のスペインとポルトガル国境近くにある町バダホシュで襲撃中に、イスラム教徒によってではなくてカスティージャ人によって終に捕らえられてしまった。アフォンソ・エンリケはそこで救出隊を送り込んだ。国王が町の城門を通過して馬に乗っていたとき、落とし門が国王に直撃して右脚を砕き、捕まってしまった。国王の家族は莫大な身代金を支払ったが、国王の脚は複雑骨折のために快復せず、2度と馬には乗れなくなってしまった。ジェラルドは脱走し、イスラム教徒の軍隊に入隊し、今度はキリスト教徒の町々を襲撃して殊勲をたてた。ジェラルドは軍隊を辞めた後、北アフリカに封土を褒章として与えられた。

アフォンソ・エンリケの40歳誕生日を祝うため1147年に、新騎士団に乗り出した。再びブルゴーニュから来て、その目的はキリスト教徒とイスラム教徒との手詰まり感を終わらせることにあった。キリスト教国の士気は一般に低く衰退していた。一方東方ではイスラム教は黒海から前進しながら発展を見せてきていが、スラブ民族の世界からの脅威があった。聖ベルナルと見習い修道士のローマ教皇エウゲニウス3世は、第2回の十字軍の開始を送り出すために乗り出した。

聖ベルナルから、いとこのアフォンソ・エンリケ宛に出された書簡が残っていて、それを運ぶ騎士に紹介と指示をしながら“ポルトガルの輝かしい国王”として差し出されている。これらの騎士たちがポルトガルに着いた時、アフォンソ・エンリケとユーグ・ド・パイヤンはテージョ川の上流の指揮範囲を占拠した町サンタレムに騎士たちを導いた。騎士たちはイスラム教徒統治者に使者を送り、降参するか、若しくは攻撃すると3日間の有余を与えたが、騎士団の数が少数であると見て、その統治者はそれを無視した。



## 第5章 キリスト教徒のレコンキスタ

4日目の夜明けに騎士たちは城壁に攻城梯子を設置した。そのうちの3つのみが崩落する前に何とか壁の頂部まで達した。騎士3人が2人の警備兵を殺し下の方へ道に沿って降りて行き、正面の城門に出た。彼らは城門を難なく開けて、他の騎士らがどっと城内に突進した。騎士らはベルナルの前で個人的な褒美は一切受け取らずただキリストのために戦うと誓約した。無防備の住民を、その殆どがキリスト教徒であったが、襲撃して血の海に化してしまった。そして住民らの貴重品をかつ<sup>き</sup>浚い、一方生き延びた市民は、リスボンに避難場所を探し求めて南方へ逃げていった。

アフォンソ・エンリケはサンタレムにある全ての教会を騎士が所有すると認めた。アルコバッサにある大修道院の壁にアフォンソ・エンリケを描き、且つサンタレムを占領後、ベルナルの援助に対する謝礼文を書いた絵タイルが嵌め込められた。

この戦勝に元気づいたブルゴーニュ人は、フランス、ドイツ、オランダ、ベルギー、英国を通して広まった騎士の採用活動に乗り出した。英国はノルマン人によって占拠されて、且つポルトガルを支配しようと2回も企てたが失敗したノルマン人による統治下になった。総勢3千人もの騎士が、騎士団に所属する署名をした。164もの艦隊が騎士らを運ぶために集められた。船はライン川とセーヌ川を、更に英国の川を南海岸沿いに下り、デヴォンにあるダートマスの船着場に全部集結した。

ポルトガルの英国人に対する歴史的恩義に関するテーマを著述する際には、英国人による探検に、欧州大陸に住む従者が殆ど同行していないことを、英国の歴史家により度々異議が唱えられてきていた。当初の探検目的が、聖地への十字軍であると疑いも無く受け入れられていたが、途中ビスケー湾を襲っていた暴風に遭ってしまい、船の修理と新鮮な食料と水の補給のためにポルトに入港した。ポルトでは、占領されていたリスボンを解放するまで、旅を進めるのを遅らせるようにアフォンソ・エンリケから懇願されたと通訳を介して彼らに伝えた司教から、料理を惜しげなく振舞われたと、物語は続いている。

ブルゴーニュの年代記による状況証拠は違ってくる。それによると別の見方であ

## 第5章 キリスト教徒のレコンキスタ

り、探検の目的地は常にポルトガルであったと示されている。艦隊はダートマスで集結し、そこから出帆した。何故ならビスケー湾を横切って前進するにはダートマスが最良の避難港として旧約聖書の時代から知られていたからであった。その航路はその後数百年もの間、北欧人の全てが利用したものである。

この冒険は悲惨な第2回の十字軍とは異なって唯一成功したもので、聖ベルナルと彼の門徒である教皇に恥辱をもたらしたものであった。

1147年に起きたリスボンの包囲と占拠に関する我々が持っている知見では、ケンブリッジ大学・クライスト・カレッジの図書館に現在の目撃者の報告から、従軍司祭の騎士に付き添っていたノルマン人司祭によってラテン語でもって書かれたものであると考えられている。

リスボンは北欧人に対して凡そ4百年もの間、実質的には鎖国されていた。その司祭は、知られている世界、大西洋の南限界にある境界を超えてそれを記述した。リスボンはアフリカとあらゆる交易をして欧州の中で最もお金持ちの都市であるとの評判があったと。

騎士団がリスボンに到着した時代には、都市の人口はサンタレムからの避難民が流れ込み15万人以上、そして数えきれない妻子でもって膨れ上がった。当時のパリの人口が5万人、ロンドンが3万人であったことで比較出来る。その司祭の書物によれば、《リスボン住民とは、シントラ、アルマダ、パルメラに住む商人やスペインやアフリカから来た多くの商人を含んでいた。》とある。リスボンは丘の上に位置し、段々を下りていくその城壁はテージョ川の右岸の方へ右下がりに広がっていて、城壁によって僅かに遮られていた。城壁西側の向こう側は郊外になっていた。北方からの侵略者は驚いた。《果樹や葡萄に適した豊穡な土壌は何ものにも劣らないものだった。更に値の張る贅沢な物や消費する生活物品ともに全てが豊富にある。金や銀も豊富であり、鉄鉱山にも事欠かなかった。オリーブの木々も繁茂している。栽培に適さない、不毛の、収穫に報いることが出来ない土地は皆無に近かった。海水

## 第5章 キリスト教徒のレコンキスタ

を煮て製塩するのでなく岩塩を掘れば良かった。無花果<sup>いちじく</sup>は貴重なので普通は少量しか口にできないのに、実に豊富にあった。》とまたその司祭は書いている。テージョ川は水源としても豊かであり、魚介類も潤沢に生息していたと云われていると。

《十字軍が到着するか早いか、イギリス人とノルマン人の騎士らがストライキに入った。無傷で満足できるよう自分たちを援軍しないならば、ポルトガルのキリスト教徒の部隊でもって援軍を分かちあえないならリスボンを占拠しないと宣言した。リスボンの北部に駐屯していたアフォンソ・エンリケは丁重に譲歩した。イスラム教徒によって絶え間なく悩まされながら富をためることが本望ではない。我々の領土の一体何が、彼方たちの物として大切なのだろうか。》と更に続く。

公式の勅許が書き出された。アフォンソ・エンリケはその勅許で以下のことを約束した。「リスボンの町が包囲されて私と一緒に居残り続ける騎士たちは、自らの権力と所有物を取り入れることが出来、敵方の所有物を引き留めておける。私自身と全ての従者はそれらを絶対に自分らの分け前として貰わない。リスボンを陥落できた暁には、探し求め、略奪するまで自分の物となり、維持できる。それらを満足行くまで略奪し尽した後に、私の手元に戻されれば良い。」その結果、リスボンと周りの用地は侵略者の間で地位に従って配分された。彼らと相続人はポルトガルの関税と税金から免除されるようになった。

アーチェレ・ザエール卿が騎士団の司令官であった。彼はリスボンを見渡せ、《投槍がほぼ届く距離にある》丘に幕営するように命じた。アーチェレ卿は自分の天幕を張り、同僚の貴族ヘルベイ・デウ・グランヴィル(Herbay Glanvill)が、司令官の傍に張った。全ての騎士らは船に戻って、夜中は船内に泊った。

翌朝九時頃に、騎士は投石器を設置して町に向って投石し始めた。他の城壁側では、イスラム教徒やモサラベ(再出；ムスリム支配下のイベリア半島、とりわけアル＝アンダルスにおけるキリスト教徒のことを言う。)が屋根によじ登って石を投げ返してきた。郊外で自分流に戦闘している他の騎士は酷い抵抗を受けた。彼らは増援隊派遣を要請した。そ

## 第5章 キリスト教徒のレコンキスタ

の増援隊が到着した時、バリスタ兵器からの矢や石の弾丸の雨に遭い、多数の死傷者が出た。日没直前にイスラム教徒やモサラベは再び挑んだが、黄昏までには騎士によって郊外は制圧された。

その後数日間、小競り合いと侮辱行為の遣り取りが続いた。キリスト教徒が、モハメッドは売春婦の<sup>せがれ</sup>倅だと叫んだ。イスラム教徒は、すかさず十字架に唾を吐き小便を掛けて、その十字架を騎士らに向けて投げつけて応じた。今まで英国人とノルマン人は、町の城壁の西側に陣地を取っていた。ブルターニュ人は前方の川を警護した。ドイツ人、フランス人、フランドル人（ベルギー人）は、城壁の東側に陣地を取った。ドイツ人は、独自に先手をとり城壁の下のトンネル掘りを5回ほど試みたが、完璧に撃退されてしまった。英国人とノルマン人は、車輪の上に30米もの高さの木製檣を建造した。彼らはそれを町の城壁にまで押して行き、砂で着き固めて固定した。そこでは、昼夜間わず、休みもなく敵によって砲撃を受け、4日経っても、我々は過酷な労働を虐げられ、且つ無益な防備で大打撃を受けて燃え尽きてしまった。騎士たちはその後1週間、元気を取り戻すことは不可能だった。年代記作家でないブリストル（イギリス西部の港湾都市）出身の騎士で従軍司祭が、反乱を起こすよう騎士に勧めた。ノルマン人、英国人と他の国の騎士との関係は更に悪化した。ドイツ人の幕営地で行われた朝のミサの時に、聖餐のパンが鮮血に浸ったものになってしまったという話が流布された。ノルマン人と英国人は、これは主なる神様からの譴責であり、彼らの残忍な行為に対する嫌悪が現れたものと考えたくらいである。

リスボン包囲が6週間に入ったときのある夕方、10人のイスラム教徒が、城壁下に流れる川へ小舟を置いて乗り込み反対側の岸に向って漕ぎ始めた。ブルトン人はそれを見つけて舟を出して後を追った。イスラム教徒は小舟から川へ飛び込み、町の方へ向って泳ぎ始めた。彼らはパルメラやエヴォラやテージョ川南の地方のイスラム支配者宛のアラビア語で書かれた書簡が入っていた鞆を隠しながら立ち去った。その書簡には、《野蛮民からリスボンの町を解放して欲しい。》と援軍を差し延

## 第5章 キリスト教徒のレコンキスタ

べるよう嘆願していたのだ。イスラム教徒の多くの貴族が死に、パンや食べ物が絶望的なほど貧窮していることなども書かれていた。他の配達人は途中で捕らえられたが、エヴォラの支配者からリスボンの統治者宛の書簡を携えていた。《ポルトガル国王によって休戦協定に入って以来もう永く経つが、私は国王に信義と応報の戦争を破談にすることは出来ない。彼らに金銭を支払ってでも、安全を確保して欲しい。》

ノルマン人騎士で従軍司祭は、彼の評価を《我々騎士らの魂は敵に対して戦い続けるように大いに勇気付けられた。》と書いている。シントラを急襲しようと向った騎士団は引き返して、戦利品を積み込んで包囲されていない他の場所へ移動した。

ブルターニュ人がテージョ川の南岸から引き上げたので、イスラム教徒の一団が攻撃を仕掛けて数人のブルターニュ人を殺し5人を捕虜とした。英国人、ノルマン人らは、アルマダの南岸にある町で、報復するための不意の襲撃に出陣した。彼らはその日の夕方2百人ものイスラム教徒とモサラベの捕虜を連れて、80もの打ち首を持って帰還した。それに対して彼らの損害は1人の死者だけで済んだ。彼らは打ち首の頭を槍で刺してリスボンの城壁の上に並べて晒した。

《彼らは嘆願しに我々の所に現れた。打ち首の頭を返すように乞うた。》と騎士の牧師は言っている。《それを受け取ってから、深い嘆き悲しみを持って城壁の中に埋葬した。悲嘆の声と嘆きの沈痛な叫びが夜中中、町の到る所で聞こえたという。この見事な探索の大胆不敵さは、敵に対して最大の恐怖としてその後与え続けた。》

城壁の近くの屋外で昼食を摂っていた騎士の数人が、食べ残した無花果をそのの場所に残したところ、人々がそれらを取るために町のほうから忍び込んで来るのを目撃した。その後数日間彼らは残飯をその同じ場所に置いておいた。それからカツオドリ用の落とし罟おなをそこに置き、町の人々が罟に引っ掛かるのを見てゲラゲラと笑っていた。リスボンの町の建物は密集しており城壁内に埋葬出来るような墓地の空き地すら無く、到る所に死体から出る異臭が漂っていた。貧しい人々は、寧ろ騎士側の方へ逃げ込むようになった。彼らは食料を乞い求め、町の状態に関する役立

つ諜報を代りにもたらしてくれたのである。

15週間経った時、ドイツ人らは城壁東側の下にトンネルを貫通させることに終りに成功させた。そして燃え易いものをトンネルの中に置き燃やした。《夜明けに、約30腕尺(凡そ6.5米)の長さもの城壁が崩れ落ちた。それから城壁を警護していたイスラム教徒らが、今日今直ぐ最後となり、死ぬに違いないし、最大の慰めになるであろうという悲痛の叫び声が聞かれ、イスラム教徒は警護に当たっている全員が城内に集まった。ケルン人とフランドル人の騎士らが正門突破をしようと出て行ったら撃退されてしまった。彼らが警護のイスラム教徒らと接戦して会戦して打ち勝てないでいるとき、矢が届く距離内にて怒り狂って彼らに攻撃を加えたので、彼らには密集した太矢がハリネズミのように見え、彼らは仁王立ちして防戦し、恰も無傷かのように耐え忍んでいた。》

ドイツ人はその幕営地を撤収して、くたくたになってしまった。ノルマン人と英国人が入れ替わってそこへ来たが、彼ら自身が不和を作ったと告げたドイツ人によって要撃されてしまった。ノルマン人と英国人は新しい櫓を建て直して、火玉矢や投石から守るために牛皮の覆いを全面に張り巡らし、その後ブラガ大司教によって聖水を振り掛けて清めてもらった。その櫓は町の塔に向った坂道を押しながら上り、イスラム教徒は最大限の守備隊を引き連れてきた。騎士は櫓を西方向に10米押し上げた。ノルマン人と英国人の石弓隊と射手隊は大掛かりな砲撃を開始した。夜が来て戦闘は徐々に静まり最後には止まった。翌朝騎士は満潮になるまでその櫓から降ろされてしまった。イスラム教徒は攻撃するのに好機到来と見て取った。《潮は直ぐに引いて、敵は疲労困憊こんぱいの中での争いを諦めてしまった。》と騎士の司祭は言っている。騎士は砂浜に集結し、櫓を城壁から1米よりほんのちょっと大目に移動した。彼らは城壁の上にあった橋を下ろした。《イスラム教徒が、橋が広がっている異常を見て、大声で叫び、楯を下ろし哀願するかのように手を広げて、休戦を要求しているように見えた。》

## 第5章 キリスト教徒のレコンキスタ

騎士5人が国王アフォンソ・エンリケと一緒に降伏を交渉するために町から出てきた。騎士らの一団が彼らを殺そうと試みたが、ポルトガル人によって未然に防がれた。ノルマン人と英国人がまとまり、ドイツ人とフランドル人が一方まとまって、略奪品をどう分け前にするか激しい口論が始まった。イスラム人とポルトガル人らはそれをお互いうんざりしながら見ているだけだった。

最終的には以下の事項が合意に達した。150人のノルマン人と英国人が町に入城し、150人のドイツ人とフランドル人が町の塔を所有する。リスボンの市民は全て彼らの所有物として宛がわれた。それから全ての住居、倉庫、お店の調査がなされた。資産を隠そうとして見つかったイスラム人は誰もが首を刎ねられた。残りの市民は自由であることが許された。イスラム人のリスボン統治者と直近の家族は資財を持ち続けることが許された。騎士団の司令官であるアーチェレ・ザエール卿がむやみに欲しがっていたアラブの雌馬は、その資財の例外であった。

イスラム教徒は城門を開けた。騎士らは城内になだれ込み、直ぐさま殺戮、強姦、略奪と、暴れ回った。その襲撃はイスラム教徒にだけとは限らなかった。リスボン司教の喉も切られた。多くのキリスト教徒は十字架と聖母マリア像に危害を与えないよう希望を抱きながら抵抗した。イスラム教徒が彼ら自身に危害を与えないため<sup>ぼうとく</sup>に冒涇したとして、彼らは殺された。

《全ての中の一部に何と喜ばしいことがあるのだ。》と騎士の司祭が記録している。《全ての中の一部に何と並外れた誇りがあるのだ。主なる神様と最も聖なるマリア様を称賛し敬意を称するのために、キリスト教国に魂の救済をもたらす騎士団旗が、リスボンを征服した‘しるし’として町の中で最も高い塔に掲げられて、喜びと敬虔を引き裂く流れは一体何だ。一方では我々の大司教と司教と一緒に司祭や全ての市民と共に、引き裂きも無く、素晴らしい歓喜をもって *Te Deum Laudamus* (ラテン語で「われら神であるあなたを讃えん」というキリスト教聖歌の一つ。) 聖歌を詠唱していたのだ。》

## 第6章 キリスト教徒の平和

キリストの名においてリスボンを占拠している間に、外国人の騎士は市民から何の抵抗も受けずに司教を殺してしまった。彼らは従軍司祭である神父ギルバート・ハステイング(Gilbert of Hastings)をその司教座に就かせた。

イスラム教徒が統治していた370年もの間、ポルトガルのキリスト教徒は他のキリスト教国から孤立していたので、独自に編み出した典礼を発達させることができた。それが現在ブラガの典礼として知られているもので、ヴァチカンの教勅を尊重しつつも特別な典礼にはポルトガルにおいてよく耳にするものである。その当時、司教ギルバートは英国式聖餐式を支持して、どうにかこうにか典礼を抑え込んでいた。他のやり方を採る聖公会の教会では、聖堂参事会会員に任命されている十字軍を従えていた英国人とノルマン人の司祭の3分の2もが彼を支えていた。

国王アフォンソ・エンリケは司教ギルバートのために宮殿と大聖堂を建て、外国人司祭が宿泊できる館を与えた。十字軍の平修道士の多くが自宅に戻り更にリスボン市内に住みたがったので民家略奪を容認した。アフォンソ・エンリケはリスボン東、テージョ川北岸のヴィラ・フランカ・シラの周りに付属建物付き農場を彼らに与えた。新しい国で野蛮な人間に家を与える事に対して、国王の顧問が国王に異議を唱えたというポルトガルの逸話があるという。“皆が野蛮という人々が、実は我々を護るのに必要な紳士なのだ”とアフォンソ・エンリケが答えたと言われている。

クレルヴォーのベルナルがブルゴーニュに戻り、南西欧州の宗旨に関する現実の論戦がまだ続いていた。それは異なる戦場での軍事的戦闘から威圧するという別のやり方で行われた。ベルナルが率いていた Templar 騎士団のシトー会修道士は、破門の必罰に処するとして暴力を放棄していた。どちらも彼らは伝道師として出掛



けた。彼らが求めていた改宗とは、キリストに個人的により順応させる過程を徐々に行ない、彼ら自身の靈魂でもあった。修道院の壁を越えた俗世界では、福音は説教されずに演じられた。彼らはキリスト教徒の生き方の方が、イスラム教徒のそれと比較して、非常に大きな魅力があると何とかして説明してきていた。

アフォンソ・エンリケは、現在コスタ・ダ・プラータ、銀の海岸として知られるリスボン北の大きな土地の実質的な統治権をベルナルに与えた。その土地はポルトガル中央部に位置する石灰石高地から、レイリア北部オビドスから大西洋に接するナザレにまで広がっている。ブルゴーニュから占領しようとして来たシトー会修道士は、自由に自分らの法律を作り、自分らの司法、徴収税、自ら選択して企業を設立し管理してそこを統治した。宗教問題において彼らはギルバートと他の司教により監督され、ベルナルを通してローマ教皇への服従からは免除されていた。

しかし彼らが与えられるべき所領は<sup>ことごと</sup>悉く遺棄された。過去の世紀の間、その用地はキリスト教国とイスラムとの間で絶えず移動している辺境地であった。捕虜や奴隷にはならなかったか、若しくは、捕虜又は奴隷になっても殺されなかった人々の殆どが、脱走出来たか又は疫病で死んでしまった。

ポルトガルからの修道会追放に伴い、修道士は1834年にはついに国外へ追放された。12世紀から13世紀に掛けてブルゴーニュから彼らを連れてきた移民者の子孫は、そこで今も未だ農耕作業をしている。主要道路を外れてその地域を現在車で走ると、8百年前の、シトー会修道士が農作業を再現したかのように見てとれる。リンゴ、桃、西洋梨、マルメロの果樹園が、オレンジやレモンの柑橘類果樹園やメロンや苺畑や、香草畑に蜜蜂の巣箱と一緒に点在している。食用蝸牛、鶉、<sup>かきん</sup>家禽類、そして家庭的な農夫が居る。石ころだらけの斜面には葡萄畑が広がり、砂地の海岸の平坦地には松林が広がっている。

シトー会修道士かベルナル派修道士が、欧州で当時一番発達していた多種類の栽培法や作物栽培学を持ち込んだとして知られている。彼らはまた採鉱、製錬、鉄

## 第6章 シトー修道会の平和

製品の製造、沿岸では造船、漁業、製塩、更に塩漬け乾鰯の製造に関して組織立てた。ジャムの製造法や保存法はベルナルのレシピとして今もなお商業化され続けており、これらの食料品、農場手作りの燻製ハムやソーセージも同様に、レイリアにある聖ベルナル祝祭日の物産展で陳列して売られている。ベルナル派はガラス吹き作りやガラスカット技法を導入し、アトランティス・クリスタルは今もこの地方で最も世界的に知られている製品である。

ベルナル派修道士は新社会的通念もまた持ち込んだ。彼らの領地内では奴隷制度は禁止された。葡萄園では他の企業と同じように労働者に正当な報酬が支払われ、修道士らは労働者に過重な負荷が掛らないように振舞い、同じ仕事を一緒にやった。読み書きの能力即ち混成通商語とラテン語を理解させることは、教会が教える分野であった。ベルナル派修道士はラテン語学校を自由に設立出来た。大修道院長は他にも重要な職務があったが医療福祉主任として国王の顧問となった。貧窮者には食物を与え、必要な衣服や住居を、病気の治療を、若者への教育を、老人への扶養などの必要性を彼は見抜いていた。16世紀から18世紀の間の全盛期に、その地方を訪れた新教徒の英国人旅行者によって、この顛末は感傷的に疑念を抱かせたのであろう。メジャー・ダリンプル(Major Dalrymple)は、ベルナル派修道士から酒食のもてなしを受け、1774年の日記に“この天界の司祭は、この世の富を沢山持っていて、ものぐさに無駄にのたうち回り、社会にとっては邪魔者である”と、書き綴っている。

それから10年後に、この地での寒冷紗・織物店経営破綻をスコットランドの商人ウィリアム・ステファン(William Stephens)が、「修道士は自分達の余計な糧食を分配しながら怠惰を奨励している。これは経営が無為であり、働く者に対する支配を単に弱めるだけだ。」と、ベルナル派修道士が地元民に気前が良いことを非難した。

ベルナル派修道士は、アルコア川とバッサ川の合流で出来た盆地が首都となる

よう選択し、その新都市をアルコバッサと名付けた。彼らの保護用にとアフォンソ・エンリケによって与えられた丘の上に建つ城は、ずっと地震と秘蔵物を漁る輩によって破壊尽くされて来た。アルコバッサのサンタ・マリア大修道院は今もある。それは、ベルナルが生涯でポルトガルに建立した24大修道院の中の1つであり、彼の命を受けて欧州に建立された340ものキリスト教徒大修道院の中で、最南端にあるものである。その教会堂は地中海地方で現存する教会堂建築物のどれよりも最も美しいものであろう。それはブルゴーニュにある何よりも、サン・ベニーニュ(Cistercian abbey Fontenay) (シトー派修道院本部クレルヴォー大修道院は精神異常犯罪人の監獄に改造されている)さえも凌ぐものだ。

他で努力したものでシトー派修道士による建築術の探求は如何に単純化し美を見出すかにあった。これが多くの論評者に《地味な様式》といわしめさせた。しかしそれはアルコバッサの教会に足を踏み入れた時に、心に撥ね返ってくるような言葉ではない。ベルナルは教会建築でステンド・グラス、金箔、彫像を使うのを禁じた。高い丸天井にまで伸びている白くて細長い柱のある長い 一私はポルトガルで一番長いものと思う— ネーブ (教会堂中央の一般信者席のある部分) に、鉛で覆われた窓枠に固定された透明なガラスから差し込む一筋の光線が点在していた。その図柄と対称性が各々の座席間通路に繰り返されている。中央を越えて下に行くと、お互いに向かい合った教会堂附属礼拝室があり、1つは国王ペドロ 1世(Pedro I)の、もう1つは皇后イネス・デウ・カステロの石棺が置かれている。王子ペドロは父親君の承諾なく、侍女としてポルトガル宮廷に仕えた1人の貴婦人と結婚したため、その貴婦人は、その後の命により殺されてしまった。ペドロは遺体をミイラにした。そしてペドロが王位に就いた時に、彼はミイラを自分の隣に立てかけ、延臣らにミイラの手に接吻をさせた。ペドロの石棺の足元には、死体が臥す病床で、スプーンで食事を与えられ、最後の聖餐式を受けている姿の浅浮き彫りがある。イネスの石棺の足元には、ある者は天国に架かった大理石で出来た梯子段を歓喜で両手を挙げな

## 第6章 シトー修道会の平和

から登っており、またある者は地獄に続く岩だらけの坂道を、慄きを持ちながら這い下りている、最後の審判が下された光景が描写されている。

1279年、18歳で王位に就いた国王ディニス(Dinis)は、教会堂の横に修道院本体を建立すると約束した。それには国王は大修道院長、修道院長らと一緒にその会議に度々参席したことのある参事会の会議場、皇后イネスと居住した一時期にあった王家の寝室、謁見室、王家の霊廟も含まれていた。ポルトガル君主で最も偉大な1人と言われた国王ディニスはアルコバッサの《農学者の兄弟たち》と親密になって年代記作家から《農場主の王様》と称させたほどである。土地を開墾した農場主は、収穫物に対する課税から免除された。修道士から助言を受けて荒地から耕地への改良した小作人は、10年以内に自由保有権を認められた。

シトー派修道士が海岸の平原に松林を大掛かりに植林し始めたが、それは本来皇后イザベル(Isabel)の個人事業であった。そのシトー派修道士が松材から船を作る作業場も建設し、拡張もした。遙かにテサロニケ（ギリシャの都市 Tessaloniki で、新約聖書のテサロニケ人への手紙 第1、第2に出てくる。）まで遡って古代ローマ時代以来、初めてポルトガルが他の欧州の国々、特にフランドル、英国との貿易を始めた。地中海から大西洋への技能や技術移転は世界を変えてきたが、造船技術者と30人もの海洋船長がジェノバから採用された。ジェノバから来たマヌエル・ペザグナ(Manuel Pessagna)は、姓をポルトガル人の姓ペザーニャ(Pessanha)にかえてポルトガルで最初の海軍大将になった人で、海賊の見張りや貿易の任務を負っていた。彼と彼の親戚は貿易で成功を収め、英国の国王エドワード2世(Edward II)お抱えの銀行家となった。エドワードが当座借り越しの返済に窮した時に、銀行家の代理人が勘定を清算するまで英国の関税を徴税した。

国王ディニス治世の下では、ポルトガルは保険業務の革新を最初に手掛けた国である。船主は新しく創設したリスボン保険会社 (Bolsa de Lisboa) (Stock Exchange of Lisbon : 株式取引所) に保険料を支払うことにより、海賊による略奪され嵐での沈没し

## 第6章 シトー修道会の平和

てしまった商船を賠償されるのである。国王ディニスはポルトガルに高等教育の礎を築いたことでも知られていてパリから教授を招聘した。最初の頃の大学が大都市リスボンにあって学生が放縦で放任し過ぎたと言われて、国王ディニスは質実剛健な雰囲気のコインブラに新しく大学を移設することを決めた。彼はポルトガル文学の父ともまた称された。彼の時代までは教会関係以外に文学らしきものは無いに等しく、その殆どがラテン語又はブルゴーニュ語（度々プロバンス語と間違って呼ばれる）で著わされていた。国王ディニスはガリシア人（Galaico）（Galiza ガリシアで現在のスペイン西とポルトガル北部国境の北側）の言語を擁護して、明白にポルトガル語としてガリシア語を適合させようとした。この中に、彼は数多くの詩や叙情詩を詠<sup>うた</sup>った。

国際的に認められている国王ディニスの偉業とは、テンプル騎士団を残存させると保障したことであったであろう。この戦闘的で且つ神秘的な修道会に関して出版され、私が目を通した全ての書物には、フランス国王フィリップ4世(Philip IV)による迫害と教皇クレメンス5世(Clement V)による大勅書によって、騎士団が消滅させられたことは勿論であると、書かれている。14世紀初頭までフランスでのテンプル騎士団は、パリが持つ資産の3分の1に相当する分を持つような、驚くばかりの広さの資産を手に入れていた。フランスの王族の中には負債が重く押し掛けている者が多かった。国王フィリップ4世は、ベルギーを軍事的占領するに必要な財源への大きな新しい借款を得ようとしていた。総長のジャックス・ド・モレー(Jacques de Molay)はそれを断った。1307年10月13日の夜明け前に、フランスに居たテンプル騎士団全員が、国王の差し向けた役人によって逮捕され、風潰しで発見された全ての財宝は王室のものとして没収された。修道士は、十字架に唾を吐き掛け、偶像崇拜、《淫らな接吻》を含めた侮辱でもって攻め立てられた。（テンプル騎士団入会の儀式で背教、侮辱、猥褻、男色などがあつたと拷問による自白を強要されたといわれている；レジーヌ・ペルヌー著、南條郁子訳「テンプル騎士団の謎」創元社82～83ページより参照）かなりの修道士がパリ西の広場で生きたままの火炙り刑に処せられた。その殆どが終身刑の判決を言

## 第6章 シトー修道会の平和

い渡された。教皇クレメンス5世はローマ教皇大勅書（ラテン語 *Pastoralis Praeeminentiae* 英語 Papal Bull）、即ち各キリスト教国のtemplar騎士団を逮捕し、彼らの財宝を没収せよという命令をキリスト教国全ての君主宛に差し出した。そして陳腐的な言い回しをすれば、それがtemplar騎士団の終焉でもあったともいえる。

彼らのある者は逮捕を免れて逃走した。彼らがキプロスに蓄えていた財宝は没収されずに残った。国王ディニスのローマ教皇の大勅書にとった態度は嘲笑的であった。彼の王国は修道士の存在を大いに認めていた。彼はスペインとの国境で現在は彼らを必要と見ていた、templar騎士団に対する告訴審理委員会の長・リスボン大司教であった。大司教は、騎士団には全く罪は無いとの審理結果を得た。国王ディニスはローマ教皇の要求、つまりポルトガル内の修道会を廃止し、その財宝を没収するという規定を表向き従った、と同時に彼は新体制のキリスト修道会を創設すると発表した。その会長と他の会員全てがtemplar騎士団であった。新しさを装ったキリスト修道会に、彼は没収した資産や他の財宝全てを与えた。迫害を受けて逃亡した修道士はここに帰ってきたのである。キプロスに蓄えていた財宝を持ち帰ったが、その一部が未だ地下に埋蔵されていると今でも信じられている。

キリスト修道会騎士はテージョ川の合流点に近いナバウン川の岸にあるトマールに本部を設立した。その壮大な要塞化された修道院はトマールの町を今もなお見下ろしている。祈祷堂は八角形をしていて、templarの姿は神と人類との調和を表徴するように設計されていた。エルサレムにあるソロモン王が建設した第1神殿がこうして建てられたと騎士は考えた。戦争の心構えを常日頃重要視している修道士は祈祷堂のミサには騎乗して参列した。

兵器、馬具、衣服、陶器、家具、農耕器具などを作る、町に住む職人に騎士は魅かれた。所領の大部分が国王から彼らに戻されたので、新しい階級である地方大地主へ農園に区画して与えた。地方の公文書によれば、恐らくtemplar騎士団の共鳴者がフランスから来ていたと書かれている。この人達は修道会には所属せず世俗的

な生活をした。自由保有不動産の条件は、彼ら自身が騎兵隊士官としての訓練を持続し、自分の農園従事者が乗馬しながらの戦闘と剣術教練にも励むことであった。

国王ディニスは1325年に亡くなり、未亡人となったイザベル・アラゴンはコインブラにある修道院に隠遁した。イザベルが12歳のときに結婚し、未だ若い時に母親となった。一夫一婦主義者では決してなかったが、ディニスはイザベルに嫌疑を掛けて暫くの間幽閉したことがある。彼女は幽閉から解放されてからは、虐待を受けて捨て子になった子供達を養護する施設をリスボンに設立した。彼女はポルトガルで今日聖人と呼ばれている1人でもある。ある日、王宮の厨房から子供用のエプロンを広げて食べ物を入れていたら夫君から話し掛けられ、食物を盗んだのではと怒られながら責められ、彼の要求で彼女はエプロンを落としてしまったら、なんと花片が散ったという伝説がある。

皇后イザベルは家族騒動を収めようと半生を捧げている。彼女の王子アフォンソが父君に対して武装蜂起し始めようとした時、それを思い留まらせた。他の場面では、夫君の騎馬と王子の騎馬との間に騎乗して、自分を先ず攻撃するように敢えてその位置に居た。後を引き継いだ新王のアフォンソ4世(Afonso IV)は、カスティーリャ王国に軍を進めた。これを知ったイザベルは修道院の回廊を出て、ポルトガル軍の後を追った。彼女は説得して辛うじて開戦を止めさせたが、帰還の途中で黒死病に恐らく罹ったのか死んでしまった。ポルトガルを支配したブルゴーニュ王朝時代の偉大な日々は、その彼女でもって途絶えている。

欧州中に荒れ狂って襲った恐ろしい黒死病の時代であり、ポルトガル人の年代記作家によれば、3人に1人の割合で死んだ。生存者の何人かは幾人かの親戚からの相続を僅かな期間のうちに受け継ぎ、新富裕層になった者もいた。英国、フランドル、ジェノバの商人は、贅沢な趣味を満たすためにリスボンに店を出店した。田舎では、農夫が労働力不足に託けてより良い報酬と労働条件を求めて恩恵を探し求めた。ろくに満足を得られなかった多くの連中は港町に移動して海外からの贅沢品の

柳籠を荷卸し作業して比較的に高額な金を稼いだ。司教であり国王のフェルナンド1世(Fernando I)はこの交易で金になる仕事の分け前を要求した。国王フェルナンドは王家が小麦の注文時に値段を固定し、更に再販して2千倍以上に値を吊り上げることが出来るように試みて、非難轟々<sup>ごうごう</sup>となったとかいわれている。

国王フェルナンドは隣国間の平和を促進しようと別の外交目的でもって、カスティーリャのお妃と婚約をした。しかし彼は既婚のポルトガルの貴婦人レオノール・テレス(Leonor Teles)に恋情を持っていた。リスボンに住む仕立屋のフェルナウン・ヴァスケス(Fernão Vasques)が、宮殿に向けて反対の誇示行為をしたため首を刎ねられた。

国王フェルナンドは38歳で死んでしまった。未亡人になったレオノールが皇女の摂政になった。ただ皇女の実の父親は、ポルトガル宮廷の伯爵ジョアン・フェルナンド・アンデイロ (João Fernandes Andeiro)、ジョン・オブ・ゴント(John of Gaunt) (ランカスター公、英国国王エドワード3世の第4子) 大使ではないかと広く信じられていた。彼がポルトガルの実質的な統治者であったと世間は見ていた。

カスティーリャの国王フアン1世(Juan I)はポルトガルの軍隊を正規軍に加え、その軍隊でグアルダの山岳地要塞を攻略した。バルナルによる支援を受けてポルトガルで設立されたアヴィス騎士団は南方辺境地の警護を引き受けさせられた。この勇敢な修道士の団長が国王フェルナンドの庶子で異母弟であったジョアンであった。カスティーリャ人によるグアルダ要塞占領の情報が前線に向う途中の彼に届いた。彼は不意に迂回して引き返し、リスボンに馬を馳せた。宮殿で、自分の軍隊の増強は望み薄である旨を女王レオノールと伯爵ジョアンに話した。議論をしている内にジョアンと伯爵ジョアンは女王謁見室から退室して別の部屋に行った。ジョアンの側近は二人が窓際で真剣に話し合っているのを見た。そしてジョアンが短剣を抜き、伯爵ジョアンの頭部を突き刺したのを側近は目撃した。彼らは扉を通り抜けて部屋になだれ込んだ。それから彼らは伯爵ジョアンに向って剣を持って走った。



## 第6章 シトー修道会の平和

女王は川を遡上して王室の諸領地があるアレンケールに逃走し、それからサンタレムに逃避した。そこは彼女が国王ファンによって誘拐されてカスティーリャから移送されてきた所であり、修道院に幽閉され残りの人生を過ごした場所でもあった。市民は、アヴィス騎士団団長のジョアン(João of Avis)が宮殿の中で監禁され、危険な状態にあると叫びながらリスボンの通りを往来した。すると大勢の群集が通りに出てきて、ジョアンが宮殿から無傷の姿で登場したので、民衆はジョアンを国王にすると歓呼して認めた。その雰囲気は外国人にとっては敵意に映った。ジョアンが、ユダヤ人街を略奪することから彼らに思い留ませようとしてもそれは困難であった。リスボンの司教はカスティーリャ人だったので、リスボン市民は鐘楼の上部から彼に物を投げつけた位であった。

これは欧州で一般的に非常に大きな社会動乱の時代であった。しかし英国でワット・タイラーと同志が無残にも鎮圧され、フランスやイタリアにおいても同様であった時、ポルトガルでは一般の市民が優勢であった。女王レオノールまたはカスティーリャを支持していた古い貴族はプロヴァンス・アヴィニオン教会と一緒に神の恩寵を失った。新しい貴族階級はリスボン・ギルドを構成する商人や工芸職人であった。貴族と聖職者とそれより今や上位にある平民とで構成される議会（コルテス）がコインブラに召集され、ローマ教皇からの1通の書簡が読まれた。アヴィスのジョアンを除いた如何なる他の王位就任者は正当ではなく支持しない。王室の年代記作家のフェルナウン・ロペス(Fernão Lopes)は、《新しい世界が来ている。良い奉公と重労働によって殆ど喋れない低い身分階級の息子に当たる新しい世代が騎士を作らせた。他の者は忘れ去られてしまった昔の貴族爵位の威力を借り、その子孫は現在も自分たちを貴族と称し且つそのような処遇を受けてきている。アヴィス騎士団長を偉大な人にした多くは彼らにも良くして、20人いや30人も昇階級した護衛官と共に昇階級して行った。従軍時には彼らは昔の貴族階級の下位の者に付き添われていた。》と書いている。

## 第6章 シトー修道会の平和

そうこうしている間にカスティーリャ軍が進撃してきた。国王フアン1世はサンタレムに居を定めた。カスティーリャ軍の歩兵隊はリスボンを行軍し、要塞を幕営した。彼らは、ヴィスカヤから航行して来ていた艦船から上陸している国王フアン1世の別部隊によって合体され、陸地と海を包囲した。彼らの幕営地は黒死病が襲い掛り1日で何と2百人もの兵士が死んだ。10日経って、生き延びた兵士は黒衣を纏って逃げ出し、同志の死体は粗末な棺に入れてラバの背中に括りつけて運び出した。

国王フアン1世が自分の軍隊を他の軍隊とで再編成してより大きな攻撃を仕掛けるとの諜報がリスボンに届いた。当時のポルトガルの人口は2百万人を恐らく超えない程度であったが、黒死病が襲われてしまい、敵軍を撃退できるような体格の男子の人数は僅かなものになってしまった。

アヴィスのジョアンは、リスボンに住む英国人の服地商トーマス・ダニエル(Thomas Daniel)とポルトガル人のユダヤ教徒ローレンソ・マルチンス(Lourenço Martins)の2人を英国の国王リチャード2世(Rechar d II)の宮廷に1385年に送り込んだ。プランタジネット(英国中世の王家)は自らの忌々しき軍事的な問題を抱えていた。英国はフランスとアラゴンの海軍によって他の国から分断されっぱなしであった。英国の船舶操縦術は、プランタジネットが不器用に桶のような船を操る古風なものであった。各船に百人の漕手と、各個の小隊に弓引手と投石機射手を乗せたポルトガル・ガレー船の速い、操舵性の良い小艦隊が英国を救出すべく派遣された(マルチンスは英国に居残って1960年代まで続いた銀行を設立し、その銀行はバークレイスに引き継がれた)。

その見返りにポルトガル人は英国で傭兵を募って軍隊を作るのを国王によって許された。英国艦隊がポルトガルに初めて入港した時、国王フアンはポルトガルの戦略的な都市・ヴィゼウを攻撃しようとシウダド・ロデウリゴに自分の部隊を引き連れて来ていた。彼らは、トランコソでポルトガル軍隊と対峙し、英国流の戦闘方式

## 第6章 シトー修道会の平和

を初めて使った。カスティーリャ軍に向って騎乗する代わりに馬から降りて、塹壕<sup>ざんごう</sup>や他の防御施設を掘り始めた。カスティーリャ軍がそれを突破しようとして疲れ切った時、弓引手が突如歩兵に聳え立ち、カスティーリャ軍が逃げ去るまで、投石し、弓矢の一斉射撃を加えた。

しかし、フアンは部隊を再び召集してリスボンに向って行軍した。テンプル騎士団の最初に本部が置かれていたソウレで、名高い若きポルトガル人師団長ヌノ・アルヴァレスが国王フアンに会いに騎乗し、正式な挑戦状を突きつけた。戦闘は今も聳え立ち、それを記念しているバターリャ大修道院に近いアルジュバロッタ(Aljubarrota)で行なわれた。ヌノ・アルヴァレス(Nun' Alvares)がとった開戦準備は、リスボン市内の通りを除いた絶壁や岩石の多い尾根地帯に兵士を集結したことであった。カスティーリャ軍は迂回道を通してそれを回って行軍し、ポルトガル軍と英国軍の背後に接近した。ヌノ・アルヴァレスは突貫工事で掘っては土塁を作り、自分の部隊を楔形状に配置した。1385年8月14日夕方カスティーリャ軍が射程内に来た。彼らはその日は長い行軍で疲れ切っていた。また戦闘経験の浅い若き貴族が指揮官だったからか、多数で掛ればポルトガル軍と英国軍をそんなに時間も掛けずに撃退できるとの確信を持っていた。カスティーリャ軍の騎馬隊がポルトガル軍の囲いの中へ真直ぐに疾駆して行った。ポルトガル軍と英国軍の兵士は彼らの両側にある藪の中から蜂起し投石や弓矢で襲い掛かった。楔の頂点に当たる所から他の部隊が前方に向って突進し、剣や斧を持ってカスティーリャ軍を叩き切った。カスティーリャ軍の旗手が打ち倒れた。旗手の僚友が引き返し始め駆け出した。兵士達を逃走させてやり、国王フアン自身は彼の王宮別館を離れた。アヴィスのジョアンは別館を解体して主要な国家行事用として利用した。国王の野外礼拝堂にあった聖餐式を描いた3枚続きの宗教画は現在ブラガにあるヴィネ教会にある。カスティーリャ軍が使った巨大な厨房はアルコバッサ修道院の中にある。アルジュバロッタそれ自身は、逃亡した9人のカスティーリャ軍兵士をパン屋の主人が鉄製のパン用

## 第6章 シトー修道会の平和

籠<sup>かご</sup>で殺したことを称賛して、その未亡人への記念館となっている。こうして3時間に亘った戦闘は、近隣諸国からの平和をポルトガルに凡そ2世紀の間、手に入れることが出来た勝利であった。

ロンドンのウエストミンスター<sup>Westminster</sup>の星室（中世の英国では皇でなく星）にて、国王アヴィスのジョアンと国王リチャード2世との間で条約（ウインザー条約1386年）の締結交渉が行なわれ署名された。この条約は少なくとも英国人によって進められたものだが、世界中で一番永く続いた条約である。本質的に、リスボンを開港して英国に特惠貿易をさせる見返りに、英国がポルトガルを共同防衛することを誓約したものである。並行して合意したのは、国王の叔父に当たるランカスター公爵ジョン・オブ・ゴントをカスティール<sup>Castile</sup>王国に就けるのをポルトガルが支持すると誓約することであった。ジョアンは法律的に見てローマ教皇が独身の誓願を解除していない修道士であったにも拘らず、ジョン・オブ・ゴントの第1王女フィリッパ(Philippa)とアヴィスのジョアンとの婚約が交わされた。

ランカスター公国の公爵領はイングランドの中で最大のものであった。ロンドンで、ジョン・オブ・ゴントはサヴォイの公邸に王宮の大きさに匹敵するような宮殿を持った。国事の中で、ランカスター公国は騎士評議会の常設開催場所として重要な意味を持っていた。今もその公爵領は永く経過して来ているけれども、ランカスター公国は無任所大臣として内閣の1常設の地位が続いている。個人財産について付け加えて言うならば、ジョン・オブ・ゴントの遠征時に財政援助用抛出金3千ポンドを議会は認めた。

国王リチャード2世は公爵と公爵夫人がプリマスから帆を揚げて出航するのを見た。初めて国王は二人の夫々に王冠を身に着けるように贈った。一度はカスティール<sup>Castile</sup>が彼らのものだったが、これはそうではなかった。

公爵の軍隊はサンチャゴ・デウ・コンポステーラを簡単に征服し、ランカスターの宮廷がそこに築かれた。アヴィスのジョアンはミーニョ川の岸に行き、移動可能

なカスティーリャ王宮別館を建て、いずれ義父となる人を歓迎した。

ポルトガルの部隊はカスティーリャ攻略するために英国軍と共に公爵の指揮下に置かれた。しかし公爵は何も抵抗されることはなかった。彼の軍隊はスペイン原野の真夏の猛烈な灼熱に負かされ、糧食を得ることも出来ず、地方の支援も受けられず、挙句の果ては黒死病に襲われた。ジョン・オブ・ゴントは居残り部隊を置いて海岸線に退却し、彼の宮廷はバイヨンヌに移動した。

フィリッパはアヴィスのジョアンとポルトで結婚式を挙げた。婚礼のミサをした後、2人は白馬に乗り司教の館に向った。その館の寝室でフィリッパは侍女に衣服を脱がされてベッドに入った。夫君ジョアンは騎士と一緒に寝室に入り、婚礼で用いた杯にワインを注いで飲み干し、自分で衣服を脱いでベッドに入り、司教と司祭の従者が2人に祈りを捧げてその寝室から全員引き下がった。その時フィリッパは26歳になっていた。フィリッパがポルトガル宮廷に外国の英国流の極端に潔癖でお堅いものを持ち込んだと、ポルトガルの年代記作家がフィリッパを評して零している。英語は“もったいぶった偽善的な言葉使い”の言葉しかないことをアヴィスは特に驚いてはいなかったとも書いている。私生児であるポルトガル国王を認めるべきではないということはアヴィスのジョアン以前に先例はなかった。一夫一婦制を皇后フィリッパが固執することは宮廷中に広まった。私生児である王子、王女は、直ぐに結婚する命令文書受け取って、疑われてもしようがない状況に陥って気づかれた。皇后フィリッパは百回以上もジョアンに愚痴を零した。ジョアンが避暑地シントラの宮殿で侍女を抱き締めているのをフィリッパが見つけて、夫君に一度強く注意したと言われている。2度目の現場を見つけた際、彼女は彼の小姓を前庭にてひあぶ火炙り刑にした。彼女は16年間で6度懐妊して、その6人とも成長した。第1王子デュアルテ(Duarte)が1433年に父君から王位を引き継いだ。第2王子ペドロ(Pedro)は欧州の宮廷や大学を旅して、ポルトガルに膨大な知識を持ち帰った。その中には財宝の他にヴェネチア人が著した解剖学の教科書やマルコ・ポーロの東方見

## 第6章 シトー修道会の平和

聞記がある。第三王子エンリケはキリスト騎士団の大団長に推挙された。英国人の母君はモロッコを征服してイスラム教徒を追い出し、モロッコをポルトガルの領土にするポルトガル人の宿願を成就したいとエンリケに徐々に教え込んだ。

エンリケと仲間の騎士らはセウタを侵略する準備を進めていたとき、皇后フィリップパは黒死病で瀕死の状態で寝床に臥していた。彼女はエンリケを枕元に呼び彼の儀式用剣に接吻し、《エンリケが不信心者の血の中で自分の手を洗うように》と誓わせて息を引取ったと、年代記作家は書いている。彼女の最後の行為が、エンリケ (Henrique)航海王子の、生涯の仕事の門出となった。

## 第6章 シトー修道会の平和

## 第7章 エンリケ航海王子の不運

以前にはあまり知られていなかった、そして丁度4百年前に亡くなったポルトガル王子の伝記出版が1868年にあり、ロンドンで驚異的なベストセラーになったことがあった。リチャード・メイジャー(Richard Major)が著した『エンリケ航海王子の一生』は、彼について書かれた書物の中で、エンリケの生誕地のポルト以外の地で、初めて出版されたものである。

王子を《ザグレスの賢人》と称したメイジャーは、王子は背が高くハンサムで、豊かな自己修養と目的意識を持ち、傑出した学者であり、且つ行動力のある1人のルネッサンス時代の高貴な人物像として描写している。王子が欧州大陸の最南西端に位置する岩だらけで吹き曝<sup>さら</sup>しのザグレスに設立した航海大学校で、欧州全体で最も才気あり、彼方此方<sup>あちこち</sup>から募集した給費生に質問や議論をし、一方自分が戦闘の中にいるときの冒険を夢見て、自分の望遠鏡を通して大西洋を見つめながら、海図や船の設計図を研究していたことを、メイジャーの本から読者は読み取れる。

王子が世界の果てまで航海し、海洋が落ち込むような《果て》は存在せず、しかも地球は丸いものだという、驚くべき発見をしたことを、読者は鵜呑みにしている。

王子エンリケの名声が世界中に広まってしまい、新しい世代のポルトガル歴史家が自分の記述に迫真性を持たせることが出来なくなってしまった。過去の英雄の正体を暴露する所作は旧来の習作に見当たらないで来ている。真の偉業の卓越性とは、それを成し得て、真に目立った人物像に付随して来るものとして定義される。地球は丸いものだということは、南欧州で、少なくともアラブ人の統治時代から既に知られていた。10世紀までには、地球の直径は20キロメートルの精度でもって計算されていた。海を見渡せるポルトガルの海岸の絶壁からは容易に地球の曲率が分かった。



## 第7章 エンリケ航海王子の不運

王子エンリケは国王ジョアン1世と皇后フィリッパとの間で生まれた5人の王子の3番目であった。当時の宮廷人による評価では、知性の面ではエンリケが劣ると考えている。デュアルテは国家統治に<sup>長</sup>け、ペドロは欧州の王家や大学を旅し新しい知識を持ち帰って図書館で活用できるようにしたのに対し、エンリケは狩猟や《中世のヘンリー王様万歳》馬上の槍試合のようなスポーツに優れた才能を発揮した。

エンリケのことと云われていることが、必ずしもエンリケであるとは限らない。官選の年代記作家によるエンリケに関する評価に関してポルトガル語で書かれた本が、メイジャー氏がポルトで書いた《英国人のポートワイン貿易の生まれ故郷》よりも以前の2年間、『ポルトガルとブラジルの大百科事典』の著者目録には見当たらない。

エンリケは66歳と結構高齢まで健康で生きたが、彼の人生の中でたった2回だけポルトガルを離れ、そこはそんなに離れた所ではなくてモロッコ北海岸であった。2回目の時は、タンジェの最高指導者カリフの手で人質になった若い弟フェルナンド(Fernando)王子を残して離れたが、それは彼が幸運であったと良く語られている。エンリケ王子はそれからカリフとの約束を<sup>反古</sup>にした。若きフェルナンド王子はフェシュで捕虜になり死に、彼の遺体は町の城壁から足首に縄を掛けて吊るされた。

彼の人生の中で、王家から資金提供を受けてポルトガルから出帆した探検航海で、自分が責任を負ったのは3回を下回る。その航海は西アフリカの海岸を下るやっと半分以下のシエラレオネよりも遠くはなかった。年上兄の国王ドゥアルトはエンリケにサグレスを開発できる特権を与えたが、カディスで《スペイン国王の顎鬚を焦がした》廉から、エンリケが宮廷に戻れるように援助を求めた時、これが少し質素な建物に我を忘れることは決してなかったと、フランシス・ドレイク(Francis Drake) 卿が大袈裟に言っている。エンリケが、カタロニア人の地図製作者、天文学者、ユダヤ人の学者といった自分の仲間を維持していくために自分の手持ち資金で支払ったという。当時はサグレスや他の何処にも航海学校があった訳でもなく、

それに似た代物もなかった。王子エンリケはラゴスに近いラポセイラのアルガルブ村で避難のような生活をしていたのである。

でも現代の歴史における王子エンリケの役割は確かに突出したものの一つである。彼は欧州人がアフリカ黒人を奴隷として貿易する生活をもたらした産婆でもあった。

しかし19世紀中頃は重要な歴史的再評価の時代であり、新しい時代が過去からの新しい英雄を必要とした。クリストヴァン・コロンブス(Cristóvão Colombo)は実際には悪党で、嘘つきで、北アメリカの発見者としては恥辱に満ちて死んだと、断言できるとアメリカ合衆国の歴史家が書いた。これは何れ知れるとして、真実を持つてすることは滅多になく、嫌いな英国人の役割を軽視して全てが行なわれている。

メイジャーが本を著すまで、奴隷はもはや社会的に受け入れられていなかった。彼は王子エンリケが奴隷貿易から遠ざかるためにある見え透いた企てをしたのを、1章全体を使って述べている。王子エンリケを少しでも英雄として何故描写したいのだろう。その答えは、英国がアフリカやアジアの人々を服従させようという過程にあり、ポルトガル人による統治下であり、夫々自分の母国であったことにある。耕作し食物や他の生産物を生産するのに、アメリカ合衆国南東部では、奴隷を所有する農業従事者で達成できるコスト以下で多くの人々を労働させていた。そのような服従の道徳性に、特に欧州大陸において疑問が投げ掛けられていた。

実際の人物の代りに、王子エンリケがこれらの国々と人々の第一の発見者・ポルトガル人であると同定することに、英国の帝国主義のためにメイジャーの研究を宣伝する意味があった。英国人の母を持つ王子エンリケのために、完璧なほど流暢に英語を話す英国人（厳密に言えばアイルランド人）の家庭教師をつけて、国王ヘンリー4世(Henry IV)のいここによってガーター勲爵士が作られてしまった。要するに王子エンリケが全然英国人でなかったとしたら、彼は有り得るそれに似たものであった。彼の特殊な才能と冒険的勇氣は彼の血統に関わる英国人側から来たもので、それらは大陸の欧州人の特質よりは寧ろ英国人にあるのだと英国人間で論争があっ

たくらいである。

エンリケの本当に重要な地位は、テンプル騎士団を改名したキリスト騎士団の総団長であった。騎士団の大きな任務はポルトガルをスペインから守ることであった。彼らは自分達で資金調達をし、国境を横切ってくるスペイン人から略奪をし、地方のポルトガル人が所有する資産を守るからと言ってはお金を要求して、自分達の報酬を引き上げて来ていた。二つの王国間の条約締結は、平和だけでなくキリスト騎士団のための財政破綻の見通しまで齎した。あるポルトガルの歴史家が《平和とは誰もが参加したくない宴会のようなものだ。》と書いている。1413年に聖ヨハネ騎士団（ホスピタル騎士団）の修道院次長が、未成年の王室結婚について話し合うために行ったシシリアへの航海から戻ってきた。その帰路、ジブラルタル海峡の南にあるイスラム教徒の主要な貿易町セウタに暫しの間停泊した。彼を前方に連れて行く船を待っている間、彼は町の中や周りの地方を知るのに必要な時間を十分に持てた。セウタは、宮殿が隣国と内乱に携わっていたために、ずさんな防衛体制であった。2万人もの商人が、香辛料、希少な東洋織物、絨毯、インドからの貴重な石、サハラ以南からの金などの取引をそこで携わっていた。

ポルトガルだけでなく欧州全体が金<sup>きん</sup>渴望の虜になっていた。ローマ人が開発し、イベリアの植民地化の間に高度化した金鉱業の技術的知識は、帝国の崩壊に続いた大混乱の間で失ってしまった。これらの工業技術、とりわけ深い立坑から水を汲み上げ、外気を導入することは19世紀遅く再び考案されたものであった。金はアラブの商人、セウタの商人も含めて欧州人に需要のある商品であり、東洋の香辛料と交換されていた。必要としていたアジアの調味料が食用に適したのも相俟って、肉を食する習慣が欧州を介して広まった。金が東洋に流出して行ったので、蓄えてきた国庫は決定的な下落に直面した。彼らは金貨を改鑄し始めたがそれは水の泡となり、貨幣の信用危機を作りだし国内外で商売上の損害を蒙った。

エンリケの、官選の年代記作家アズララ(Azurara)は、シントラ宮殿の部屋で助手

## 第7章 エンリケ航海王子の不運

と一緒にあって、机の上に、砂の入った大袋2個、豆が4ガロン、薄粥用の鉢、リボンの1巻き、聖ヨハネ騎士団の修道院次長がこしらえたセウタとその近辺の模型が置いてあるものが果たしてどれほどの価値があるのか再計算していた。

襲撃団や略奪隊を組織化するのにほぼ2年間を必要とした。それを立ち上げる時に1万9千人の兵士と1千7百の漕手から成っているとは非常に驚くべきことである。造船そのものが大変な仕事であり、それらは240隻もあった。部隊の輸送船と同じく、2段や3段の漕手用座席を持つ戦闘用ガレー船59隻と略奪品を納める空の貨物船60隻も含んでいた。ポルトガル部隊はノルマンディーやドイツから来た騎士団と合流した。エンリケの非嫡出子が半分の妹と結婚した英国の伯爵アルンデル(Arunde)が、十字弓引兵を送り込んだ。

略奪は私的な冒険であった。エンリケの父君・国王ジョアン1世と上の兄デウアルテはエンリケと一緒に航海に出掛けたにも拘らず、ポルトガル国家は何も公的なものではないと明言している。議会は助言もしていないし、財政基金に対しても尋ねていない。これはキリスト騎士団を豊かにするための単に騎士団による冒険であった。従ってポルトガルの旗は掲げず騎士団の表徴の十字を帆と長旗に飾った。ローマ教皇は称賛と激励のメッセージを送ってきた。イスラム教徒を害する全ての行為は、キリスト教徒の神に祝福されるというのが教会の基本的な考えであった。

その艦隊がリスボンを出帆した丁度その時に、皇后フィリッパが亡くなった。フィリッパが王子の中で一番熱愛したとエンリケの年代記作家が描写したが、そのエンリケは喪に服するような余裕時間は持ち合わせていないと言いつつ。確かに彼女は息を引取る時に、わざわざ彼に自分の死が事を遅らせてはならないと、愛しい望みだと話し掛けて来たことを彼は話した。

航海の途中に2度嵐に遭って通過後、艦隊は夜にセウタに錨を下ろした。夜明け直前に、エンリケはセウタの町の襲撃をするよう指揮した。軍勢は町の主門を素早く打壊し、市民が無抵抗だと読み取った。艦隊が到着する前に侵略規模を見て来て

いたカリフと顧問は、防御しても役立たないし、矢鱈に市民の犠牲が出るだけで、軍隊を撤退すべきと結論付けていた。エンリケと騎士数人が砦に向い、カリフの降参文書を渡そうとしていたジェノバの商人の一団が隠れているのを見付けた。

従軍司祭が大きなモスクを教会に見立てて奉獻した。当座しのぎの高い聖餐台の前での聖餐式で、国王は自分の子息にヴィゼウ公爵位を授与した。残留していた艦隊は海岸に殺到し、街中に入り、略奪し始めた。金の延べ棒や金貨を限なく捜している間に、兵士達は、香辛料や胡椒が入っていた大袋を裂いて開け、貴重な磁器類を叩き割り、見つけ出した財宝によって報酬を受け取った。指揮官は兵士らの略奪行為には寛大であった。ある者はカルタゴ人の寺院にある華麗な曲線を持った大理石製柱を解体して船に載せて持ち帰った。それが現エヴォラ大学にある柱廊式玄関を支えている。

騎士と従者が略奪品を積んだ船でポルトガルに戻った後、略奪され尽くされたセウタは彼らによりポルトガル王冠章を譲り渡された。セウタの周りは大陸から完全に切り離されていて、実際そうであったが、それ以上の使い道は無かったが、地中海と大西洋の合流点で通過港としては有用であった。1425年のコルテスで、ドン・ペドロの摂政が「セウタは何も重要でもないのに、人々を食わせ、軍隊を配置し、お金が掛り過ぎる。」と苦情を既に言われていた。ポルトガル宮廷の英国人のいところがセウタをもう捨てた方が良いのではと助言した。さもなければ面子を失うのを多分恐れてか、ポルトガルは更に200年間以上もセウタを所有していた。

エンリケはセウタでのやり方で別の略奪に乗り出すことを決めた。今度は1437年にタンジールである。その他の欧州の騎士と王族は、今回は彼に断った。彼は英国、フランドル、ドイツから正式に断りの連絡を受けた。ポルトガルにおいて、その遠征に大衆が熱狂するようなものが見られなかった。1万4千もの兵士が必要とエンリケは試算した。歩兵は服役していた囚人の恩赦を認めて、彼らを当てた。3千の雇い兵弓引隊と、乗用馬、騎士の従者、馬丁を従えた3千の騎士のたった4

## 第7章 エンリケ航海王子の不運

千しか集められなかった。エンリケはもうこれ以上の遅延は駄目だと遠征の出帆をすべきと決断した。セウタの統治者である伯爵ヴィアナは、エンリケに対して助言した。それはセウタの背後に彼の艦隊が居ることの危険性であった。エンリケは兎に角、準備を進めて1437年8月23日、蒸し暑い日に出帆した。

彼は自分の艦隊をテトゥアンの近くに上陸させ、タンジールに向って行軍を進めた。町の城壁が視野に入る所まで来た時、自分らが持って来た攀じ登り用の梯子が余りにも短い物であることに気付いた。エンリケは次の行動の作戦を考える間に、砦の幕営地を準備するように命令した。彼が選んだ幕営地は決して満足するものでもなく、川もなく、物資供給の防衛線もなく、海岸へ逃れそうな所でもなかった。彼らに対峙した相手は4万の騎馬隊と6万の歩兵隊であった。その日の内に、カリフが馬上から叱り付けていたベルベル人戦士の軍勢によって、自分達が包囲されているのを斥候が見つけた。その後小競り合いがあつて、エンリケが乗っていた馬が殺され、捕まるのから逃げるので精一杯であった。

糧食も底を尽き、自分の馬を殺し始め、薪を集め、荷鞍から干し草を取出し燃やして馬肉を焼いて食した。貯めていた水も無くなってしまった。官選年代記作家が《多くの兵士が泥濘ぬかるみのほんの僅かな水分を吸い込もうとしながら、彼らの唇を泥濘にくっ付けたまま死んでいた。》と書いている。

10月中旬までエンリケは休戦交渉をしていた。この交渉は、それ程時間は掛らなかつた。海岸に停泊中の船に戻るその返礼に、ポルトガル軍は馬、兵器を含んだ全てを撤退させる、ただ例外は兵士が着用している衣服だけという取り決めであった。ポルトガル軍はムーアのセウタまで引き返すことでもあった。ムーア軍はエンリケの弟フェルナンドを、セウタを返還するまで人質として拘束した。カリフの誠実を示すものとして、自分の息子一人をエンリケに相互人質として差し出した。

海岸に出る途中に、衣服・髪を引きずって汚れた、無防備になったポルトガル軍は山賊に襲われてしまった。エンリケと従者は何とか逃げ出したけれども、これは

休戦協定に違反するものだからポルトガルはセウタを明け渡さないと宣言した。フェルナンドを戻すようエンリケは要求したが拒否されてしまった。その代わりに、フェルナンド解放の交渉をする為に外交使節団をタンジールに続けて派遣したが、彼の幽閉条件が寧ろ徐々に悪化されるという結果になった。最初の使節団は家の客人としてカリフが殆ど便宜を図ってくれているのを見た。しかし二回目の使節団は、フェルナンドがカリフの庭園で働き、カリフの鞍くらの汚れを取る作業など奴隷の身分に落とされているのを目撃している。

1438年6月、王家一同がエヴォラに会した。フェルナンドを迎えるというよりは国王ドゥアルテは、ポルテラにある避暑地別荘にいたエンリケに抗議するために南に馬を走らせた。国王付き年代記作家によると、フェルナンドを救出するには2万4千もの軍が必要と申し出たという。国王ドゥアルテは、明らかに絶望感に打たれながらエヴォラに戻った。そしてその年、49歳で亡くなってしまった。

モロッコでは、フェルナンドは手錠を掛けられて小役人が使う便所の隣の土牢の中に押し入れられていた。それから彼は、禿鷲が喰い千切れるように城壁に足首を結ばれ吊るされ、彼が未だ生き延びたか、それとも死んだのか分かっていない。

王子エンリケはそれから決して宮廷には戻らなかった。キリスト修道会の総団長として、彼は職権上のアルガルブ統治者でありアルガルブで残りの人生を過ごした。

ムーア人により永い間占拠されていたアルガルブはポルトガルの一部分ではなかった。確かにアルガルブは分離され続けて20世紀まで王国を殆ど顧みないで来たし、20世紀まで二つの国々の間の交通が外洋航行船という手段でしかなかった山脈によりポルトガルから実際に分断されていた。王子エンリケの時代では、アルガルブの少ない人口は、商取引人、漁師、職人と殆ど同様に少ないもので成っていた。実質的には農夫は居ないに等しかった。農夫の殆どが、自分達の土地をテンプル騎士団によって没収された時に、新しい暮らしを求めて北アフリカに逃れた。アルガルブは数本の川が流れていて南欧州では一番肥沃な地域であった。例えば南中国原

## 第7章 エンリケ航海王子の不運

産の柑橘類の木が根付いて繁茂するような欧州地域の一つであった。王子エンリケが抱えていた問題は、その土地を耕す労働力に不足していたことであった。人口不足のポルトガルが、自分で自国から労働力を確保するのは無駄であった。農作業をやる人が少なく、土地の殆どが耕されていなかった。

海を越えたアラブの社会には、サハラ以南から誘拐し連れてきた黒人の奴隷売買が盛んであることがエンリケと彼が主宰する諮問会で知れ渡った。アルガルブの土地を耕すのに黒人奴隷を手に入れば十分だとエンリケは考えたのではないか。何回かそれを試みたけれども、欧州人の誰一人、暗黒アフリカには未踏破であり、いつも戻って来てしまっていた。最も新しい試みが約1世紀前になされ、ジェノバ人がこの探検に出発したが、行方不明になってしまった。その障害は悪名高きボジャードール岬であった。そこはタンジールの南1千5百キロ米にある西アフリカ海岸で突き出た所である。ここで、岩に潮流が船を浴びせつけて、船は粉々に壊れて木片と化する。

「獲得出来る希望の方がより大きくないような危険なんてない！」と、王子エンリケは言ったと云われている。

王子エンリケの成人時代に経験した船の設計分野は急速な進展を遂げ、且つ目を見張るような進歩が見られ、今でさえそれが残っている。セウタの彼の攻略はガレー船により行なわれたが、ガレー船は風向きが右なら帆は巻き上げられた。20年の間に、カラヴェル船はキリスト修道会の保護の下で発展を遂げた。その後の80年で、それは<sup>すた</sup>廢れて、もっと大型で高性能なガレオン船に取って代わった。しかしカラヴェル船は、欧州が他の世界から孤立していたのを初めて突破する手段となっていた。その急激な商業発展の可能性は最初から認識されていて、キリスト修道会はその新技術の独占権を諸外国のスパイから護ろうと決めていた。その進歩には実に多くの秘密が覆い被されていた。この活動拠点<sup>すた</sup>がサグレスであったと、かくて伝説が創り出されたのである。実際の拠点は、グアルディアナ川の岸カストロ・マリ



## 第7章 エンリケ航海王子の不運

ムであったと思われる。設計や造船技術に関する重要な記録は、ナポレオン侵攻中にフランス軍がポルトガルから盗んだ物の中にあり、未だに返却されていない。アルガルブにいたフランス公吏によって盗まれたか<sup>だま</sup>騙して取られたアフリカ大西洋海岸の新地図は、ジロンド県（フランス最大の県）にある公文書局で、そう何年も前に発見されたものではなかった。

これらの新船はガレー船よりも細長で軽量であり50トン位であった。船を巧みに操縦するのに必要であった漕手12人の代りに、一つの単純な船尾に付いた舵があった。船首と船尾に付いた三角帆が、風を横切って前方へ船を進ませ、船が風の中に間切るのを可能にした。1時間で10ノットという速度が出るようになった。

櫂力から帆力への置換えは船員数を少なくとも4分の3も減らして、80人から20人に恐らくなつたのであろう。これは、水、食糧（干し肉、干し魚、ヒラマメ、オリーブ、大蒜、チーズ、アーモンド、干し葡萄、堅パン、蜂蜜）や運ぶべきその他の備え食糧の量を劇的に減らし、食糧補充無しで航海出来る回数が増えた。

これらの技術革新は、操舵器具と操舵法にも著しい向上を等しく齎した。それらは羅針盤、ポルトラノ型航海図(**Portolan chart**)、天文観測儀であった。天文観測儀は長い間使われたが、アラビア人がイベリアに持ち込んだものであろう。しかしそれはそれまで修道士、ユダヤ教指導者、占星家が最も愛用した科学の玩具であり続けた。今は実際に使われている。天文観測儀は、北極星の高度で測った緯度と太陽の高度で測定した時間とを航海者が識別できた。

海岸線を接近して追った後、そこから離れて航海したギル・エアネス(Gil Eanes)が、1435年にボジャドール岬を回った初の欧州人となった。岬の南に、彼は荒涼とした海岸に上陸した。そこで彼は名前を知らない植物を掘り上げ、樽の中に植え付けてポルトガルに持ち帰ったのがローズマリーと名付けられていたものである。

次の年にエアネスともう1人の船長アフォンソ・ゴンサルヴェス・バルダイアは、再びボジャドール岬を回って更に南下した。彼らは、とある湾に入港し、砂浜に人

間とラクダの足跡があるのを見つけた。

欧州人とアフリカ人とが初めて出遭ったのは、翌年の1437年だった。それは好都合であった。バルダイア(Baldaia)はアルガルブにあるラゴスから出発し、少なくともアフリカ人1人を誘拐して、死なせずに連れて来る使命を担っていた。セネガル川の河口に着いて、海岸にいる2人の若者に賭けた。2人とも貴族ぶっていて、17歳位の年恰好に見え、馬に乗っていた。彼らはあっ晴れな人狩りの腕前があると見て選んだ。彼らは奥地に数時間掛けて乗馬し、凡そ20人程の一团と出くわした。一团は、敵の意図に感付いて大きな岩陰に逃げ込み2人の若いポルトガル人に引き下がるまで槍と石を強く投げつけた。

彼らが一旦船に戻りその出来事を話した後、バルダイアと大勢の人狩り隊が出くわした地点へ遡上した。これは断念してしまったが彼らは人情というものを持ち合わせてはいなかった。海岸を一寸下った所に、椰子の繊維で作られた漁獲用の網と漁具が捨てられているのを見つけた。キリスト修道会に彼の探検費用を構わなくするためには、これだけでは不十分だった。アザラシの群れに遭遇し、捕獲し、殺させ、毛皮を大量に確保した。これは今回の航海費用を償って隠せるほどであった。

1441年に、ヌノ・トリスタウン(Nuno Tristão)がアラビア語の通訳を同乗させてラゴスから出帆した。セネガル川の河口に着き、既に来ていたポルトガル人の船長アントウン・ゴンサルヴェス(Antão Goncalves)と会った。ゴンサルヴェスの目的はアザラシの毛皮を集めることであったが、トゥアレグの男と黒人の女が海岸で彼らを監視しているのを知り、彼らを捕まえて自分の船に拘束したのに、通訳が彼らとの会話をしくじって2人を解放させてしまった。

比較的涼しい夜中、秘密裏にトリスタウンは人狩り隊を奥地へと進めた。夜明けに彼らはトゥアレグス兵舎に着き、直ぐにそこに攻撃を仕掛けた。彼らは4人のトゥアレグス人を殺し10人を捕虜にしたが、その中にアラビア語を流暢に喋る隊長が含まれていた。彼の名はアダフ(Adahu)であるといい、皮肉にも奴隷売買人だっ

## 第7章 エンリケ航海王子の不運

た。トリスタウンはアダフの部下6人を釈放し、トリスタウンが更に南方に出帆している間にゴンサルヴェスはアダフと3人の捕虜を連れてアルガルブへ帰還した。

ラゴスでは、王子エンリケはアダフと連れを上辺<sup>うわべ</sup>の儀礼でもって受け入れ、捕虜の騎士とその従者を歓迎した。彼らは欧州人が着る衣服を与えられ、心地良く宿泊した。王子エンリケとその仲間の騎士はごく自然に好奇心を抱き、通訳を通してアダフに対して長時間に亘り質問を繰り返した。一番に興味を抱かせたのは、サハラ砂漠の向う側に広がる緑が青々と生い茂った、黒人達が住む国々についての彼の概観であった。

アダフは、自分と連れを解放するという契約を王子エンリケと遂に合意に至ることに成功した。トゥアレグス人の1人ずつを解放する代価は、黒人奴隷4人に相当することで合意に達した。アフォンソ・バルダイアは、トゥアレグス人が即座に消え失せたセネガルに彼らを連れ戻すべく出帆した。8日経って、白いラクダに乗った1人のムーア人が海岸に下りて来た。彼はバルダイアに手渡すためたった10人の黒人奴隷を引き連れて来た。しかし彼は、皮革製の楯1つと駝鳥の卵数個と砂金でもって少ない分を埋め合わせた。人狩りと贖<sup>あがな</sup>い金という慣わしは海岸地帯に沿って直ぐに広まった。捕虜を売るために欧州へ連れてくる費用をわざわざ掛けてまで、そして捕虜を売れたとしても即座に幾ら戻りがあるのだろう。その後直ぐにポルトガル人の人狩り隊は、ナウン岬にあるアラブの奴隷取引所を襲撃し、18人のムーア商人を捕まえた。此処での彼らは、ギニア黒人奴隷51人とライオン1頭の身代金を払って身受けする業務をしていた。このアフリカ・ライオンが欧州の海岸に着いた最初のものだった。王子エンリケは、このライオンを船でアルガルブからアイラン島のガルウェイへ既に辞めていた英語の家庭教師への贈物として送った。

更に南に航海したトリスタウンはアルギウム島に1443年に到達した。橋の上に立って、彼と士官らが2羽の黒い鳥が水辺を横切って彼らに向って飛んできたように見えた。その鳥は大きな羽根をバタつかせ川面をピチャピチャさせていた。その

## 第7章 エンリケ航海王子の不運

鳥が近づいた時、その鳥が、実は腕と足をオールのように使っている黒人が乗って進んでくる2隻の丸木舟であることが分かった。トリスタウンの指示に従い、乗組員はボートを降ろして、その内の14人を捕まえた。その残りは孤立した安全地帯から探し出し、更に15人を捕まえた。

その年に、キリスト修道会の総団長になっていた王子エンリケは、バジヤドール岬からインド間の交易独占権の承諾を教皇にお願いして受け入れられた。その20%の分け前を将来のために用いて、王子エンリケはこの独占権をラゴスにある税関署長のランサロッテ・デウ・フレイタスと地元の商人仲間に譲った。

数ヶ月後、船長バルトロメウ・ディアス(Bartolomen Dias)の乗った船が、ヴェルデ岬と《黒人の国》に到達した。カラヴェル船6隻の艦隊は235人の奴隷を‘貨物扱い’にしてラゴスに帰港した。

騎乗していた王子エンリケはラゴスで奴隷を引取り、自分用に5人を遣すように要求した。彼の年代記作家アズララは、以下の記録を書くことを忘れていた。

＊＊1444年8月8日、暑さを避けるため夜明け前に船員は奴隷を上陸させた。彼らは町の外のある場所に集められた。ある者は比較的明るい肌色をし、白黒混血より幾らか明るい肌であった。明るい褐色の肌色の者や黒子のように黒い者も居た。ハンサムな者や均整のとれた者もいれば、一方酷く醜い顔の者や、地獄から這い上がって来て現れたような形相をした者もいた。がしかし同情だけでは動かされない心で我々の仲間の誰が苦しんだのだろうか。奴隷は頭を俯かせ、顔は涙でぐしゃぐしゃ。ある者は天をじっと見上げて、神の思し召しをとの祈りをしているのは明らかだ。ある者は自分の両手で顔をピシャリと平手打ちして、地面に自分の体を伏せるように投げ出しているのを私は見た。

嘆き悲しむ聖歌を歌い始めていたが、我々には歌詞の意味を理解できなかったけれども、彼らが我々に悲しみを伝えたいということだけははっきりしていた。

いよいよ奴隷の分配をしようとした瞬間に彼らの苦悩の状況は最悪になった。子

## 第7章 エンリケ航海王子の不運

供を両親から引き離し、夫と妻を分離し、兄弟姉妹もバラバラにして公平に分配する必要があった。彼らに窮極の苦痛を与えずしてこの引き離し作業は不可能に近かった。反対側に並んだ父と息子らは列を崩して、一生懸命にお互いの方向に向って駆け出した。幼児を持つ母親らは我が子を腕の中に抱き締め、そして地面に置き、自分の身体で覆い尽くして、我が子が引き離されないように防いでいた。\*\*

奴隷の分配作業が如何に大変なものかを見物しようと群集が多く集まって来た。王子エンリケが最初に自分用として46人の奴隷を先ず貰い受けた。彼はその奴隷達を即座に自分の側近に贈った。彼にとって最も大切な願望の一つ《がしかし、彼に対する、猛烈な靈魂に関するキリスト教徒としての魂の救いを先取りしているような、言語に絶する満足感》を達成して仕入れた彼の報酬は、永遠に神・・・を見失ってしまっていたに違いない。

《彼らはムーア人が宗教に対してとった強情さよりはそれ程でないことを示し、既にキリスト教に順応していた。》

各売買は奴隷を更に分配するのに忙しかった。伝記作家アズララによると、《父親がラゴスに残り、母親がリスボンへ送られ、子供達は何処かへ送られるという、絶望が重なってしまった。》

西アフリカの大西洋海岸での欧州人による初期の奴隷売買の不安が、欧州人が人食い人種であり、彼らがアフリカ黒人を船に乗せてアルガルブに連れて行き、殺して食べてしまうと信じることによって高められてしまった。ポルトガル人の評判が先行した。1446年にラゴスで奴隷の分配が始まってほんの2年後に、ヌノ・トリスタウンが初めてガンビア川の河口に到着した。彼は2隻のボートに人狩り隊を乗せて川上へ出発した。12隻のカヌーに乗った80人もの戦士が彼らに襲い掛り、毒矢の雨を降らしてきた。トリスタウンとかなりの従者が1時間もしない内に死に絶え、船に戻ってどうにかしようとした僅かな者でさえ数日の内に全員死んだ。船内で生き延びた者は、負傷した航海士の1人と甲板員2人と、捕らえられた1人の

## 第7章 エンリケ航海王子の不運

アフリカ人の少年だけであった。彼らは一緒になって北に向って帆を挙げて悪夢の航海をし、何と60日以上も掛った。それから彼らは偶然ガリシア人の海賊にポルトガルのシネス海岸沖で遭い、陸に船を繋留させた。

トリスタウンと従者は、西アフリカとの貿易の開拓時代で唯一の犠牲者では勿論ない。その他にデンマークの貴族がいる。彼はラゴスからカーボ・ヴェルディまでの航路を開拓したエベルハルト(Eberhardt)といい、ポルトガルでは知られている。彼は自分が発明した天幕を持って行った。その天幕は30人を収容出来て、尚且つ一人で持ち運べる位軽いと彼は言っていた。彼はこれを象1頭と物々交換する考えだった。ポルトガル人は彼と天幕を海岸に残してきた。彼らが帰ろうとした時には跡形も無く両方とも無くなっていた。このことや他の出来事から推して、アフリカ奥地には白人の奴隷についての伝説が生まれた。

沿岸の酋長らが、奥地での黒人狩り、欧州人に黒人を売り付け、新しくて究極の儲け商売を思い付いた。1447年までに、黒人奴隷の供給過多になり、既に価格が下落していた。ある船長は、自分の船に兎に角、奴隷を乗れるだけ乗せ、ラゴスに向う航海を続け、余分な奴隷を海上に投げ捨てていた。その時代には、ローマ教皇の独占権が非常に保護されていた。アンダルシア馬と奴隷との物々交換（交換レートは馬1頭に対して奴隷17人）をしたあるスペイン人が、ポルトガル<sup>カス</sup>廷の厳命により彼の骨を粉々にされた挙句に、まだかす<sup>かす</sup>微かに息があった状態で彼の身体は火の中に投げ込まれた。

1460年に王子エンリケが死んだが、その以前に、年間凡そ千人もの奴隷がラゴスに入国していた。奴隷はアルガルブの人口の主だったものになり、リスボンの人口の約10%も占めるようになった。彼らはそれまではセネガル海岸のアフリカ王バドメル(Badomel)との供給契約でもって平和裏に獲得出来ていた。1航海当たりの利益率は平均して6百~7百%と非常に高く、ポルトガルからの需要が減少して来ても低下しなかった。それはスペインや北欧州の北方王国へ奴隷を輸出する伸

び率が高かったからである。

ポルトガルで奴隷制度そのものの危機が無かったとは言えない。その危機の中には王子エンリケに関するものがある。エンリケの年代記作家アズララがこう書いている。 \*\*黒人奴隷は実に親切に取り扱われ、彼らと奴隷でなく自由の身で生まれたポルトガル人召使との差別は無かった。若者は貿易について教えられた。農業に従事したいと思う者には自由にそうさせたし、ポルトガルの女性とも結婚が出来た。自立したいと思う者へは、その主から援助のために十分な持参金を贈られた。少女の奴隷を召使として引取ったような未亡人は、少女を恰も自分の娘のように躰をした。自分の意思で遺産を彼女らに相続させて、結婚資金に宛がった場合には、奴隷でない自由の身の女性として無条件で見做された。足かせを嵌められたという1人の奴隷も私は知らないし、親切に処遇されなかったということも聞いたことがない。私は奴隷の洗礼式や結婚式に招待されたことが度々あった。その時には、彼らは家族の一員としてたいそうな式が行なわれ祝福されていた。 \*\*

アフリカ人の移民が近親結婚や公有地の供与を通じて自由な人々の中に入り込んだ結果を無意識に取り込んで証拠としたアズララのこの記述は部分的には真実なこともある。アレンテージョ（アルガルブの北に直ぐ近くの田園地帯）にある2つの村、サウン・ロマウンとリオ・デウ・モイニョス、ここはアルカセル・デウ・サルに近いが、今も黒人の米作農業従事者が村の人口の大半を占めている。彼らの祖先の奴隷がマラリアの免疫性遺伝子を持ち込んだ。このマラリアは1950年代の最近までアルカセルの稲田では風土病であった。白人のポルトガル人はマラリアに感染すると死んだか隔離される一方、黒人は土地を手に入れて徐々に増えて行った。

これらの実例は勿論通例というよりは寧ろ例外であった。1555年に、ポルトガルが黒人貿易を始めた世紀の後直ぐに、神父フェルナンド・オリベラ(Fernando Oliveira)が『奴隷虐殺の告発』という小冊子を出版した。それはアフリカ沿岸諸国の国王が人狩りをして売り飛ばしていると非難した物語である。欧州人の買手が居

## 第7章 エンリケ航海王子の不運

なくては奴隷貿易が成り立つ訳がなく、従って大量の誘拐もなかった。奴隷化が奴隷のキリスト教への改宗とキリスト教による靈魂の救済を導いたことに立ち入って、アズララが王子エンリケのために熱烈に弁護をしたことをフェルナンドは非難した。フェルナンドが《我々が邪悪なそして残酷な黒人貿易を考え出した。》と書いている。

奴隷はポルトガルにおいて禁止されてはおらず、1773年までそこでは解放されなかった。これは英国より1年遅いが、アメリカよりは35年早い。ポルトガル人による奴隷貿易が1836年になるまで全面的には禁止されなかった。世界のどこかで、ポルトガルの海外領地においては、《年季奉公契約書》と名付けられて知られている奴隷制度が現実にもその後永い間続いた。

奴隷は西アフリカから連れ戻してきた単なる商品ではなかった。現在のモーリタニアにある要塞化した貿易交易所でポルトガル人の商人らの組織暴力団が暗躍し、アラビア糊、綿、象牙、鸚鵡<sup>おうむ</sup>、多くの種類の薬草類、化粧品用品、柔らかくて風味のある食肉などの交易が頻繁に行なわれた。香辛料は使い易いように精製されておらず、東洋からのそれらはヴェネチアを経由して欧州の国々に供給されていた。がしかし特に胡椒は何倍も安くてアルガルブから北欧州に多く再輸出されていた。16世紀初頭まで、ポルトガル人の胡椒取引人らは、ブルージュ（ベルギー南部）やサウサンプトン（英国南部）に永く住む邸宅を構えていた。

これらの商品の代金はどうやって払われていたのだろうか。私が既に述べたように、欧州は金不足<sup>きん</sup>に見舞われていたが、南方のアフリカや東洋を探検していたポルトガル人だけが金を動かすことが出来た。ポルトガル領土の一部であったアフリカの海岸国の国王らが、衣服、毛布、赤珊瑚の数珠球、銀製品を捜し求めていたが、なかでも捜し求めていた産物は小麦であった。1500年代まで、このアルガルブとポルトガルは巨大な産物量を輸入して、西アフリカに再輸出をしていた。ラゴスから南西1千2百キロメートルに位置するマデイラ島が、1420年代に発見されている。そこは無人島であったが、順風が吹いていて西アフリカとの行き来に好都



## 第7章 エンリケ航海王子の不運

合な港であった。《マデイラ》とは、ポルトガル語で木材の意味で、密林が一杯あることからそう名付けられたと言われている。偶然だったのか計画的だったのかどちらにせよ、森に火をつけて2年間も燃やされた。こうして肥沃になった土地はキリスト修道会の支援者らに分け与えられた。黒人奴隷の労働力を駆使して、彼らは小麦の栽培をして豊富な収穫が出来た。収穫された小麦をアフリカに出荷され、更に奴隷と物々交換を進めた。

多くの人々が豊かになるような仕掛けを作って、王子エンリケは貞節と清貧であり続けると自分の誓いに従順に生きてきて、死んだ。彼は直系の相続人に遺すような所持金は一銭も無かった。彼の遺言には、甥のフェルナンドに自分の事務所と同行した軍勢力を譲ると書かれていた。フェルナンドは譲り受けた西アフリカとの貿易独占権を、フェルナウン・ゴメス(Fernão Gomes)に1年間20万レイスの代価でもって手放した。これは、たったの1回の航海で得られる儲けに等しかったに過ぎない。付け加えて言うならば、ゴメスは1年間で百もの同盟によって自分の利権特許の範囲を広げることが出来る権利も与えられたのである。

## 第8章 国王ジョアンと偉大な探検

国王ジョアン2世(João II)の治世は、彼が1495年に40歳の若さで死ぬまでの僅か14年間続いたに過ぎない。ある現代のポルトガルの歴史家は、ジョアンが毒を盛られて死んだと信じている。それは、欧州の歴史の中でも、最も注目すべき治世の1つとされている。伯爵フィカーリョ(Ficalho)のジョアンに対する碑文はこうである。《包括的な探検と手段と到達目標の計画を創りあげたのは、王子エンリケではなくてジョアンに帰する。》と、オリヴェイラ・マルケス(Oliveira Marques)が最近書いている。

この計画は、その野望に先ず驚きを覚えさせ、それを実行する気を起こさせるものだった。それは地中海沿岸を締め、欧州西南端に位置し150万人ほどの人口を擁する富裕国ポルトガルのリスボンが、西洋の新首都として古代エジプト時代以来の文明世界の中で逆流して権力の中心に座った。当時の他国の人口と比較してポルトガルは、イタリアの8分の1、スペインの4分の1以下、英国の半分であった。その偉大な探検に、ポルトガルはメディチ家やフロンチーネ家の銀行家からの援助を仰いだが、国外からの兵站へいたんの支援は無かった。1531年に、同時代の人々の一人である英国国王が、自分のガレー船は香辛料の売買のためにリスボンへ行くし、その代わりにヴェニスではもはや呼ぶ必要はないとの謝罪の書簡をヴェニス大公に送った。それからはいつもヴェネチアの倉庫は売る香辛料が空っぽになってしまった。ヴェニスの商人らは毎年のアレクサンドリアへの買い付け遠征から手ぶらで帰って来ていた。ヴェニスの元老院議員らは、ヴェニスに財政破綻に落ち込み始めたとして、お互いに逆襲に転じた。フローレンスでメディチ家(the Medicis)が、権力と資産のこの変化に英国と比較して自分達の利益幅を勘定していたら、“昔よりも現

## 第8章 国王ジョアンと偉大な探検

在の方が優っている”ことに気付いたのである。

イタリアを訪れていたポルトガル貴族の団が、自分達の馬に金色の金具を履かせていた。彼らが落馬した時に、イタリア人の視線が錯綜するのを見て楽しむように、個々の爪によって蹄にその靴を取り付けた。リスボンは欧州の中で信じられない位の大金持ちの町になっていた。英国や同様な他の後進国からの訪問者が、富裕に満ちたリスボンの、壮大なオペラ公演、医学、建築物、宝石類などに見られる傑出した芸術や科学を見に来ていた。

高貴な聖職者、ユダヤ教指導者、数学者、宇宙論学者で構成されている学者評議会を設立したのが国王ジョアン2世であって、その評議会は後になってサグレスの航海学校の如くに呼び間違えられ、設立場所も間違えられた。その審議は多くがサンタレムで開催されたが、時折トマルの Templar 騎士団本部で行なわれた。西アフリカからの大量の金<sup>きん</sup>を買い上げ交渉した国王ジョアンは、その金からの歳入をバルトロメウ・ディアスやヴァスコ・ダ・ガマ(Vasco da Gama)そしてその他の航海費用に充てた。このようにしたのは国王ジョアンであって、クリストヴァウン・コロンブスではないし、王子エンリケを越えており、ジョアンは人類史上で最も重要な出来事の1つを達成し、他の文明から欧州の孤立を徳と罪悪のために終結させたのである。

国王ジョアン2世の相続遺産は、彼が王位に就いた時それほど魅力があるようなものではなかったようだ。彼の父であるアフォンソ5世(AfonsoV)は、カスティーリャとの悲惨な交戦に携わり、フランスの国王ルイ11世(Louis XI)に援軍を懇願しに行った。国王ルイから援軍を断られて、アフォンソは一般の巡礼者に変装してブリタニにある修道院に逃げ込もうとした。そこで彼は見つかりポルトガルへ返されてしまった。彼は議会に自分の退位を許可するように請願したが、聴聞会が開かれる前に死んだ。アフォンソは息子ジョアンに財政破綻より悪い状態を残してしまった。流通していた通貨は価値が無かった。教会からの巨額な借金に頼っていた。税金徴

収権をユダヤ人借款団に譲り渡した。

貴族にはクーデターを引き起こすムードが漂っていた。ジョアンのいとこ公爵**ブラガンサ (Bragança)**が3千の騎馬隊と1万の歩兵隊から成る私兵団を集結させた。国王ジョアンは公爵が停戦交渉するように抗弁しながら <sup>そそのか</sup> 唆した。それからジョアンは公爵を捕らえて打ち首にした。国王ジョアンは義理の兄弟の公爵**ヴィゼウ (Viseu)**に呼び出しを命じて雑談に興じていた。そしてその後扉が閉ざし、ジョアンは一気に突き刺し公爵を殺した。これを年代記作家は《一言も発することも出来ずに》と、書いている。ポルトガルを建国し、生き延びてきていたブルゴーニュ人貴族の年寄りが、際立って‘こと’の次第を変えた。彼らの諸権利は厳しく削がれ、特に裁判は宮廷に専有された。以前の国王から割譲された彼らの所領地はジョアンから返還要求を突き付けられた。膝を床について忠義を公に誓約した者は、終身の小作年期が与えられた。宮廷や国の公共施設の内部では、この世紀の間、享受し続けてきた貴族の地位や影響力は明らかに地盤沈下した。

ジョアンとその顧問は貴族ではない他の分野で有能な人々を捜し続けた。候補者は面談を受けて、彼らの素性・経歴や信用度を確かめられた。これらの審査をパスした候補者の名前が《国王リスト》に載せられ、行政、司法等々の役職は、このリストから割り当てられていった。全く新規で中央集権的で先例のない機敏な体制が、学者評議会が活力あるものを形作ったようになった。こうして、学究肌の人や教養人がポルトガルの統治に重要な役割を演じるというポルトガル独特の伝統が始まり、今日まで続いている。**アントニオ・グテレス(António Guterres)**を首相とする近時の内閣は、3分の1以上、大学教授で占められている。

クリストヴァウン・コロンブスの英雄物語では、多くの歴史家が国王ジョアン2世の歴史的な役割を目立たない役者に限定している。欧州からインドへの西周り航路を発見したいというコロンブスの提案を初めて却下し、《へま》と殆ど <sup>あまね</sup> 遍く見做されている決断をし、これまでに物差しを差し出す最大の機会を逃したのがジョア

## 第8章 国王ジョアンと偉大な探検

ンであった。ところが真実は全く反対である。インドへ到達したのはコロンブスだと今でも時々云われている。それは地球が丸いものであり、アメリカ大陸の存在を発見したのも彼であるということも含まれている。地球が丸いということは、その時代には既に知られていたことである。ポルトガル人とガルシア人の漁師らがその時代にカナダ沿岸沖で鱈を獲っていて、本土で鱈の養殖によって食物を殖やしていた。このことをコロンブスは何も知らなかった。代わりにコロンブスは、ある島に上陸した。その島を彼は西インド諸島と名前を付けたが、その2年後にポルトガル人が本当のインドへの航路を発見し、西インド諸島がもっと東にあると推量していた。悪いことにスペインのパトロンのために、彼のたいしたことのない発見を、コロンブスが自慢していることに国王ジョアンと学者評議会が警告を発し、今のブラジルの南アメリカの半分とアフリカとアジアをポルトガルが独占して残りをスペインに与える条約の交渉事に利用した。コロンブスは不名誉な格好で死に、貧弱なお墓に埋葬されたのに、そのポルトガルが欧州で最も裕福な国となったのである。

北欧州の民俗伝承の中にはこんなものがある。欧州を越えた世界の発見は無鉄砲な勇気をもった輩<sup>やから</sup>によってなされ、輩は地の果てを越えて落ちてしまう危険を冒し<sup>おか</sup>、その深みから上がってくる巨大なお化けが棲んでいて、カラヴェル船は粉々に打ち砕かれ、船乗りを貪<sup>むさぼ</sup>り喰ってしまうと信じていた。しかしこれは国王ジョアンの時代に、北欧に住む人々の他国に関する無知から来ていたことであって、ポルトガルが長足の進歩をしていたことを意味している。計りしれないほどの内密裏に行なった。ある段階で外国人が情報を嗅ぎ出して母国に報告されるのを恐れて、全ての外国人をリスボンから追い出すようにポルトガル議会が提案をした。国王ジョアンはこの提案を却下した。その代わりに彼は他の欧州の国々を欺くような偽情報のキャンペーンを張った。

北欧人の幻夢は中世の学者が描いていた科学的空想物語に根づいていた。他国には文字通り顔がなくて喉をもたない人々が住み、両肩に両目がついていてお腹に口

## 第8章 国王ジョアンと偉大な探検

があると思っていた。1つの目しか持たない女、両脚で歩くよりも機敏に跳躍できる1本足の男が居ると。2つの頭を持つ人や、植物の臭いを嗅いで自分を支え、全く口の無い人や、生きた魚を食し海水を飲んでいる人々がいると信じていた。

ガンジス川の近くの人々は生きたままのコブラを食べて4百年も生きています。ポルトガル人は北欧のこれらの神話に付け加えて船乗り業のために名声を食いにした。水と接触すると分解してしまう陰険な巨人がいたと。西アフリカの沿岸域を、危険を冒して航海していたフレミッシュ船団が座礁してしまい、その船乗りが煮えたぎる深鍋に生きたまま投げ込まれ、土人の夕食として食べられたとのことである。実際に起きたのは逆であった。欧州人が人食い人種であると信じて恐れていたのは、アフリカ人であった。それは、北欧の漫画本や民間伝承の空想にその後5百年間も残存している化身である。コロンブスの息子フェルナンドによる伝記によれば、クリストヴァウン・コロンブスはジェノバの船乗り業であった。彼が22歳の時にセント・ヴィンセント岬で沈没した船の乗組員の1人であった。彼と残りの乗組員は救助されて、ラゴスの町の人々にお世話になった。ラゴスから彼は、弟のバルトロメウ(Bartolomeu Colombo)が地図製作者として働いていたリスボンに行った。コロンブスは暫く弟の仕事を手伝っていた。それからブリistol、ガルウェイ、アイスランド、《百リーグ(100×3×1.6=約480キロ米相当)も遙かに遠い鱈漁の陸地》に、旅をする船団に乗り込む契約をした。

リスボンに戻って、彼はジェノバの商人との代理店の商売をしたが上手く行かず借金を抱え込んでしまい、大西洋横断の航海の財政的支援を依頼しに国王ジョアンに謁見しに行ったのが、当時の境遇であった。彼はこの航路が日本とインドに行くかに最短のルートであると説得する計算書類を国王に示した。でも国王は彼の言うことを信じなかった。彼の年代記作家はこう書いている。《クリストヴァウン・コロンブスの航路は永い月日が掛かるのに、自分の遂行を自慢げに、大袈裟に云い、彼の言い分の確かさよりも空想的で想像で膨らんでいることを国王は見抜いた。》

## 第8章 国王ジョアンと偉大な探検

それにも拘らず国王は、彼を学者評議会に出席させて他者の意見を聞くようにした。学者評議会メンバーは事前に提出されていたコロンブスの計算書類を既に熟知していた。その計算書の情報源はフローレンスの学者であるパウロ・トスカネリ (Paolo Toscanelli)であり、リスボン大聖堂の大司教マルティンスへ数年前に送られた書簡の中に含まれていた。ポルトガルの学者らはコロンブスの計算書類を既に処分していた。トスカネリの書簡にはこう書かれている。コロンブスは国王と学者らに対して繰り返し言った。《アンティリア (ファントム島と称されていたが現在のフォークランド島) はリスボンから西に1千5百マイル、日本は西に3千5百マイル、支那は西に5千マイルの所にある。》と。彼は、緯度1度に相当する距離の計算を間違えていた。その時にポルトガル人は既に正確な計算をしており、それを111キロメートルと見ていた。ポルトガル人は緯度22.9度と計算していたのに、トスカネリが緯度18.0度に位置するインド (現在アジアとして知られる) の西海岸を見間違いしたのが原因であった。更にポルトガルの海の男達は大西洋を1千5百マイル以上も越えて既に航海していた。現代の歴史家は、ポルトガルの船乗りがブラジルを既に発見しており、ブラジルとの交易をしていたという意見で一致している。彼らはこの交易の実態を他国へは秘密にして明らかにせず、商品をアフリカ西海岸から離れた島の遠方の貿易基地でわざわざ積み替え、貨物の出荷基地をアフリカにしていた。

コロンブスが出帆する2年以上前に、バルトロメウ・ディアスが喜望峰を廻って東洋への航路を発見していた。あまり知られていないポルトガル人のスパイであるペロ・ダ・コヴィーリャ (Pêro da Covilhã)が中近東経由で現在のインドに行き、アラブ人やインド人が作成した地図を持ち帰った。その地図には南アフリカからインドへの航路が書かれていた。

コロンブスはリスボンと借金を踏み倒して英国に向った。そこでもまた彼の計画は空想的過ぎるとして退けられてしまう。結局スペインの王家からの財政支援を受けて彼は出帆した。そして彼はカリブ海の西インド諸島に着いた。そこはトスカネ

## 第8章 国王ジョアンと偉大な探検

りの考えと計算では支那海と思われていた所である。彼は上陸した一つの島をアンギラと命名した。彼はそれから自分の業績を自慢するために欧州に帰路の航海に出た。直接にはスペインに戻らずに、不幸にもその代りにリスボンで呼び入れられた。彼は宮殿に行き、皇帝閣下が褒美として、今はカステイーリャの女王イザベル(Isabel)とアラゴンの国王の所有地を彼に呉れるように言おうと、何か甘い復讐をと彼は想像していた。彼は国王ジョアンに、自分への軽蔑と自分を信じてくれないことに対して小言を吐いた。

世界の境界線に関するスペインとの条約下でのコロンブスの発見は、ポルトガルの領域内にあるから国王の領有地になるとジョアンは指摘して答えた。

それからコロンブスはスペインの国王フェルナンド(Fernando)と皇后イザベルに謁見し、国王ジョアンからの一通の書簡を携えていた。その書簡には、ポルトガルの領有権があるのでアンギラへポルトガルが艦隊を送り込む旨の脅しの内容が書かれていた。さもなければ別の提案を持っていると。スペイン人は交渉の机に着くように急かした。この協議はトルデシリャスというポルトガルとの国境線に近い山麓のスペインの遠方地で開催された。その協議の調停人はボルジア家出身の教皇アレクサンデル6世(Alexander VI)であった。彼は両国の提案をローマで聴聞し、トルデシリャスで自分の代理人としてローマ教皇特使を出すことを約束した。その合意した境界線はカーボ・ヴェルディ島西370リーグ(約1千8百キロ米)に設定された。自分が支配していた領地が相手の所有地になった全てを明け渡さなければならなかった。船乗りが新陸地を発見した場合には、お互いに情報を流すことになった。事実その境界線の正確な位置は、その後2世紀間も未解決のまま続いた。その境界線が南アメリカをあらまし二分割し、断然、欧州に最も近い部分がポルトガルの手に落ちたことに大きな驚きを感じるではないか。表向きに云うと、南アメリカは未だ発見されるべきではなかった。スペイン人が南アメリカに関しての知識を未だ持ち合わせていなかったと思われる。南アメリカの発見をただひた隠し、外交史上で大



## 第8章 国王ジョアンと偉大な探検

成功の一つを見事にやってのけたのがポルトガルであると結論付けるしかない。ひとたび条約が締結されて、南アメリカの西アメリカ海岸はペドロ・アルヴァレス・カブラル(Pedro Álvares Cabral)により、公式上《発見》されたのである。

その条約締結の時代までに、国王ジョアン2世は、多くの、確かに奇跡に近い信用を既に獲得していた。彼が王位に就いた時に価値が殆どなかったポルトガル通貨は今や欧州で一番価値が高くなり、教会やフローレンスのメディチ家銀行家からの借金を全額返済出来た。ユダヤ人借款団に譲り渡した税徴収権を国家自体に取り戻した。2世代前にポルトガル人が探検を開始して以来、初めて国家自身が今や私的探検家に探検の権利を売ることなく遠征費用を支出できる程に裕福になったのだ。

ジョアンは西アフリカに位置するガーナから莫大な量の金を出荷することでこのことを達成した。金を獲得するために彼はアフリカの種族酋長との金取引に関して新しい抜本的な様式を編み出した。ゴーンは無節操な冒険家であったが、海賊行為に近いやり方であり、誘拐をし、皇子や皇女に対する身代金支払要求など脅迫しながら金取引を支配した。その代わりに、新貴族になった人々を、宮廷服を着飾った大使に任命し、敬服と親愛を込めたジョアンからの書簡を受けて赴任国へ派遣されて行った。民間伝承神話に反して、ヴァスコ・ダ・ガマも含めて彼らは航海者ではなかった。艦隊は船長や水先案内人に預けられていた。

ジョアン2世は、ディオゴ・デウ・アザムブージャ(diago de Azambuja)をガーナの酋長と一緒に海洋探検するために送り出した。大使が平和主義者であると不釣り合いになると強調した。それ以前の探検家によって最期には北アフリカにいるアラブ人が手に入れた金資源を見つけられていた。現在の地名アクラの周りの沖積砂の中にその莫大な量の金が含有していた。その砂金から簡単に大した費用も掛けずに金粉を篩い分けできた。更に北方のアシャンティ族により奥地から海岸に向かって金が運び込まれた。

ディオゴは自分の信任状を差し出した。トーガで身を纏った酋長は、右手に金製

## 第8章 国王ジョアンと偉大な探検

の職杖を持ち、息子と副酋長を従えて、謁見室内にある金ぴかの腰掛に座り、永遠に金取引の地位を確立する旨のジョアンからの《金を独占的に購入する》という提案を聞いて考えあぐねた。しかし酋長はポルトガル人の礼儀と礼節を目の当たりに見て感激し、それも数少ない過去の欧州人との接触と比較して大きな感銘を受けた。彼らは金取引条件が受け入れられる内容であると判断して協定が成立した。

国王ジョアンは9隻のカラヴェル船と2隻の丸舟で構成した艦隊の出航を指示した。そこには組み立て式の石造砦、倉庫、礼拝堂が積み込まれていた。これらは事前にリスボンで準備して組み立て、その後ブロック毎に番号を付し、組み立て時に分かり易いようにして解体された。この革新的とも思える荷物を積んだ艦隊は、百人もの石工と大工を乗船させて出帆した。彼らは現地でも再び組み立てるために採用されたのである。その後アクラはアフリカでポルトガルの地方自治体として発展し、欧州外で初めての欧州都市となった。セント・ジョルジ城と名付けられたアクラの最も重要なそれは、今もなお主要な陸標になり続けている。

アクラはポルトガルではセント・ジョルジ・ダ・ミナとして知られている。ミナからリスボンへ少なくとも月に1回は金が出荷されていた。ジョアンはその海岸通りに商業広場（プラサ・ド・コメルシオ）を、そして隣に彼の宮殿・ミナ館を建設し、ミナ館に金を貯蔵した。国王自ら入荷する度に出荷伝票に署名し捺印した。フランスやフランドルの艦隊が、リスボンへ向う途中で金を運搬しているカラヴェル船を襲う略奪行為を繰り返した。ポルトガル人の水先案内人の中には不平を持つものが少なからず居て、本航路を彼らに案内させた。彼らは1回の略奪で2千ドブロエス(dobrões) (ある単位)に値する金をせしめた。セント・ジョルジ・ダ・ミナの支配者がリスボンへ戻った段階で、50隻ものフランドル、フランス、イングランドの海賊船が港の外で待ち伏せていたという。それにも拘らず1500年まで、毎年4百Kg以上の金がリスボン港に陸揚げされていた。セント・ジョルジ・ダ・ミナで働くポルトガル人が金を密輸しようと企てて捕まったら、その刑罰は実に厳しい

## 第8章 国王ジョアンと偉大な探検

ものであった。しかし各人が、武官、文官の地位によって決められていた報酬、つまり金を市場でアフリカ人から購入できる権利を持っていた。セント・ジョルジ・ダ・ミナの国王直轄の財務事務所によって報酬は正当なものであるとの証明を受けることが出来た。彼らはそれから財務省により運ばれるミナ館へ戻すべくそれを送った。だが、かなりの蓄財を貯める者もいた。

王立の国庫に収められている金は、今や、ある偉大なる計画を成し遂げるために使われようとしていた。それを取り囲んでいた秘密のペールとリスボン大地震での大火で数多くの公文書の焼失によって、それをいくら想像しても我々が正確に知ることができなくなった。その特質性は際立つもので且つ明白なものであったし、そうである。他の欧州における主要な国富の源泉は東洋との香辛料交易で上げたものだった。ジェノバが香辛料交易で1つの役割を演じたけれども、ヴェネチア人によって支配されていた。彼らは獲得した利益から雄大なる都市を建設し、ダルマチア（現クロアチア）を越えて黒海の沿岸にまで拡大した帝国を造りあげた。視覚芸能ではフローレンスより**ひい**最良筋が少なかったが、彼らは自然科学に対しては奨学金を多く寄付した。特に人体解剖学や医学の分野での成果は傑出していた。あるポルトガルの医者**めい**が、国王の命でリスボンからヴェニス**あかし**の解剖学の講習会に出席のために派遣され、欧州で初めて書かれた解剖学の教科書の写本を持ち帰った。英国の医者がリスボンを訪れて買い求めた本は、その写本のまた写したものであるが、英国では初めての解剖学の教科書のように思われている。

ヴェネチアの学問に見られる致命的なギャップがあること**あかし**の証は、アラビア科学への嫌悪であった。このことは永遠に理解されないだろう。アレクサンドリアに住むアラブ人は香辛料交易を営みなむ中流階級に属し、東洋と西洋との実質的な橋渡し役を演じていた。全体としてのアラビアはヴェニスの大敵だった。

当時におけるユダヤ人の偉大な学者が学問的知識を得たのは殆どアラビア科学からだ**あかし**。アラブは彼らにとって敵であったが、ユダヤ人はアラブから学ぶことを

## 第8章 国王ジョアンと偉大な探検

止めようとはしなかった。平和な時代には、ユダヤ人はイスラム教徒であった如くに振る舞い、実質的にはそれに貢献する者の集まりであった。アラビア語は表意文字であったが、知識の中身はユダヤ人がイスラム人に為したようにユダヤ人に同程度であった。スペインで時々起きる反ユダヤ人の騒乱は、国王ジョアンに卓越したユダヤ人の知識人をポルトガルの学者評議会にスペインから招聘するチャンスを与えた。ジョアンはそれを無駄には使わなかった。王家の制令で、リスボン丘陵地帯の上等地がユダヤ教会の建設用として与え、同様の趣旨でトマールのキリスト修道会本部と修道院の下に、修道会の騎士用としてその他の土地を与えた。国王ジョアンは修道士会の総団長であったが、ポルトガルの探検船隊が出帆する、テンブル十字の船旗の下であった。

宮廷での公なる儀式では、席次に従ってユダヤ教最高指導者は、枢機卿と同じ並びを与えられた。王室会計局長官はユダヤ人であり、また王室お抱えの医師団長で、医学を超えた分野でも格別な学者であったホデウリゴ(Rodrigo)も、同じくユダヤ人であった。サラマンサ大学の著名な数学者であるジョゼ・ヴィシーノ(José Visinio)によりこのことが結び付いている。クリストヴァウン・コロンプスを後に試験しようとしていたこともあったが、コロンプスが偽医者と見做して不合格とした。

アラブ人は、今度は自分たちが世俗的な知識を古代ギリシャの智慧に頼ることになった。我々が既に言及してきたことだが、ギリシャの偉大な全ての哲学者の作品が、ラテン語に翻訳してからその後に自国語に翻訳して、西欧州人が知るずっと以前にアラビア語に翻訳されていた。西欧州の国々でギリシャ語に精通していない場合、アラビア語の再翻訳をするようになって初めて利用しやすくなったのである。この知識の財産に、ユダヤ人は自分自身の言葉の世紀を付け加えた。つまりこれらの上にポルトガル人は更にそれでもまた建てた。

彼らが発展させたと確信していることの最も大事なことは、アフリカ東海岸とアジアの西側の海洋との間にインド航路があることであった。マルコ・ポーロの旅行

## 第8章 国王ジョアンと偉大な探検

以後でさえ、まだ、ナイル川が2つの河口、西アフリカの大西洋上と、そして西アフリカの東側を持っていると推定されていて、アフリカが支那海で終わっている連続した塊のような大陸の一部であると考えられていたのである。

国王と学者は、陸路でアデンに調査団を送ることを決めた。そのアデンとは、マルコ・ポーロと随行者が遠くへ進もうとダウ帆船（インド洋・アラビア海などの沿海貿易用）に乗船して眺望して、恐怖から顔を背けてしまった地点であった。調査団の任務は、引き返すばかりでなくまた進むこと<sup>そむ</sup>であった。学者の推測が正しかったら、彼はインドに到達したであろう。学者が調査団長にペロ・ダ・コヴィーリャを選んだ。

## 第9章 調査団長ペロ・ダ・コヴィーリャ

宮廷付き牧師フランシスコ・レイス(Francisco Reis)が書いた記述から、ペロ・ダ・コヴィーリャが15世紀時代に生きたポルトガル人であり、インド新航路の調査団長(スパイの親分)だと、我々は知る事が出来る。フランシスコは物を書くためにポルトガルに来ていた。ポルトガルが東洋の香辛料交易をものにする事が極めて重要だと証明できる情報を、ペロが持ち帰るように遣わされたが、ペロはポルトガルには戻らなかった。国王ジョアン2世はフランシスコにペロを捜させたが、我々が想像するように彼はそのようにした。

ペロは平民なるゆえに苗字を持っていなかった。コヴィーリャは生まれ故郷の高地にある町の名前である。宮廷が、貴人性よりも寧ろ能力本位という採用基準で人選をしてきていた衝撃的な適用事例が、ペロであった。彼が大人になる前ではこんなことはなかった。ペロは自国で自分に適う機会を見出すべくセヴィリアに行き、アンダルシアの支配者である公爵メディーナ・シドニア(Medina Sidonia)のアフォンソ(Afonso)家に奉公することになった。アンダルシア語と同様にカスティーリャ語も学んだ。更に彼の将来の専門性を増すためにアラビア語も学んだ。ただアラビア人はもはやその地域を統治はしていなかったが、アラビア人の多くがそこに留まって自分たちの領地の如くに、自分たちの言語を使い続けていた。

ペロがどうやってポルトガルの宮廷<sup>もく</sup>に潜り込んだのかは知られていないが、セヴィリアに7年過ごした後に宮廷の一員になったことは分かっている。彼がある程度アラビア語を流暢に操れるためだったのか、北アフリカの大使として2度も派遣されている。彼はトレンシンに初めて行った。そこは綺麗な絨毯を特に製造している中心部であった。西アフリカの砂漠を横断するラクダ隊商が運搬して、フェッシ

## 第9章 調査団長ペロ・ダ・コヴィーリャ

(Fez)の商人がこの絨毯を持ち込んでいた。そこでは奴隷の売買が行なわれていた。国王ジョアン2世の治世時代、ポルトガル人は奴隷貿易には殆ど関心を示さなかった。教会に関っている階層の反対があった時代には、幾人かの商人には道義心がまだあったようである。西アフリカとの交易で、商品が奴隷若しくは金の何れかとトレンシンから絨毯とを物々交換するのが最も好都合なのかどうかを探り続けていた。ペロの指揮する調査団は、ポルトガルの絨毯発注独占権を承諾するよう総督(英語表記; Emir) (amir アミールは、アラビア語で「司令官」「総督」を意味する語で、転じてイスラム世界で王族、貴人の称号となったものである) アブ・サベット・モハメット(Abu·Thabet·Mohamet)を説得していた。トレンシンが公式的にはポルトガルと戦争状態にあること自体が承諾できなくしていた。ペロは国王からの一通の親書を携えて交渉し、数週間の内に談合が成立した。

ペロの第2次調査団は、国王ムラチック・オブ・フェシュ(Mulachic of Fez)向けだった。前にも述べたが、エンリケ航海王子にとっては2度目の航海であり、またこれがタンジールに向う最後の航海ともなったが、王子は若い弟フェルナンドを人質のままにしてタンジールを去ってしまったが、彼が休戦協定を破ったと北アフリカ人は見ている。フェルナンドの遺体は最後にはフェシュの城壁から吊り下ろされているように見えたと言われている。このことでポルトガル国家の自尊心は大きく傷つけられ、彼の遺体を取り戻さねばという主張になってきた。多分古風な騎士道に基づく挑戦しようとしたペロの働きは、これまた実に古典的なものだった。彼はムラチック(Mulachik)の婦女子7人を誘拐してフェルナンドの遺骨と交換した。ポルトガルへ帰還する途中で、また公爵ベージャ(Beja)からアラブの馬を買えるように約束を取り付けた。

今までにもペロは完璧とも云えるほどにアラビア語を操ってきたが、北西アフリカ人の方言を、彼が現地人と見間違えられる位のレベルに精通してしまった。北アフリカで旅をしている間に、アラブ人やベルベル人の話し方、動作などの独特な癖

や動きをもまた身に付けてしまった。

彼は40歳になっていた。そして宮廷護衛騎士の地位に登り詰めた。彼は国王ジョアン2世からサンタレムと呼ばれるようになった。それは父フランシスコの談話《東洋のシナモンや他の香辛料の情報源、ヴェニスに着くまでの航路》に見出される。それはひた隠されていたサンタレムの私邸にて、学者評議会会員による宇宙地理学、地理学、その他関係する問題についての集中的な講義が行なわれていた。全てこれは地方町サンタレムにて開催され、都会リスボンではなかった。外国人が住んでいなかったのが、都合が良かったからである。

コロンブスがカディスから西方向に向けて出帆して5年経過していた1487年5月17日、ペロはインドを探検するために、サンタレムの東方から旅立った。最後の謁見で、国王はペロに4百クルザードス(cruzados)を渡し、宛名が《全ての我々の領地と世界の地方へ》で、フローレンスのメディチ銀行のリスボン支店長バルトロメウス・マッシオーニが、保証する裏書入りの信用状を彼に託した。

ペロはヴァレンシアに到着した。それからバルセロナに向け航海し、更に進めてナポリに着いた。ナポリで彼は、キリスト教国の最東端のロードス島へ航海出来るように準備までしてくれるメディチ家の分家の人々に大歓迎を受けた。ポルトガル人は7年も前に、ロードス島に砦風に防備した修道院を建立してきていたので、戦士姿の修道士らは彼らが来るものと予想していた。彼らは彼がマイレブ(Majhreb)商人に相応しい衣服と蜂蜜の入った荷物を積み込んだ船を用意していた。

教皇ユリウス(Jurian)は、ポルトガルがエジプトへの交易派遣に対し、ヴェネチア人が影響を及ぼす範囲内だからと、ポルトガルに強い口調でもって警告を發していたことが以前にあった。ペロは、今は変装してロードス島を出航し、香辛料や東洋の物品をヴェニスに出荷する主要な港であるアレクサンドリアへの水路を横切った。アレクサンドリアは当時伝染病に取り付かれていて、多くの人々が熱に侵されて死んでいった。彼が自分の蜂蜜を商売する前に、その伝染病で倒れて、蜂蜜を与



## 第9章 調査団長ペロ・ダ・コヴィーリャ

えられた。地元の法律では、アレクサンドリアの総督は、旅人が万一そこで死んだら旅人の全てを所有できる権利を持っていた。ペロはそれまでに快復し、総督は既に蜂蜜を売ってしまっていたが、ペロに現金で補償した。ペロはその補償金を、新しい交易をするための商品とカイロへ行くラクダ隊商の根拠地を買い求めるために使った。

カイロの賑やかな市場は永く欧州人には閉ざされていたが、ペロはその市場には諸外国の特産品と多くの人種がいるのに気付いた。彼はマイレブ商人として素直に受け取られて、人を刺激するような感じも与えずに色々と調査をすることが簡単に出来た。ペロの調査の旅は殆ど始まっていなかった。彼は最初に会ったのはインド人で、香辛料の貿易商人であった。インドの海岸から旅をしてイエメンに入り、そこから紅海を上ってエジプトに来たと話してくれた。ペロはまたイエメンに抑えられ統合されてしまったフェシュから来た集団に出遭った。彼らはコロンブスが出帆した4年前の1488年の春に出航してきたと話した。

5日後に彼らのラクダ隊商がスエズから到着した。そこから彼らは船で旅を続け、1週間後にトル(Tôr)という町に到着した。中近東の宗教戦争で仲間のキリスト教徒から分断されていた、アルメニア人とギリシャ人のマロン派(東方典礼カトリック教会の一派)修道院の周りは、貧弱な開墾地のようなものとペロは見ている。

トルは東洋から欧州の何処かへ行く商品を取り継ぎ用の主要な港でもあった。商品は20～30トンのダウ船に積み込まれ、木材は釘を使わずにロープで縛り固定されていた。当時のダウ船は甲板がなかったので、積み込んだ荷物を椰子の葉で覆って強い日差しを避けていた。まばらにある艀装、1本のマスト、1つの巨大な三角帆を備えていた。ダウ船には多くの貨物を積載したので、海水は船の両側の上面から数センチ位になっていた。これらはアラビア海の沿岸から戻ってきたマルコ・ポーロ一行が乗っていた船からの見方であり、乗船しているものを恐がらせるものであった。ペロは自分自身に犠牲を払いながら航路を見出した。

## 第9章 調査団長ペロ・ダ・コヴィーリヤ

ダウ船は西インド海岸地帯にあるカヌール(Cananor, Kannur)に向って航海した。ペロはアデン、ペルシャ、東アジアから遠方の幾つかの地域から来ている他の船が動き回っている大きな港があるのを見つけ、その町の市場には生姜の根や香辛料など実に豊富な種類があるのを知った。地元の人々がカヌールは海岸線をもっと南下したところにある首都カリカット(Calicut; マラヤム語 Kozhikode コージコード)と比べると、交易高はそれでも非常に少ないと彼に話してくれた。

ペロは1488年のクリスマスまでにはカリカットに着いた。そこは自然港ではなく、ペロが航海してきた種類のダウ船か中国からきている大型ジャンク(シナ海付近の平底帆船)の何れかであるが、呼び出された船が浜へ引き上げられていた。カリカットはサモリム王国の首都であるが、原始的で卑しさの中にもペロは目も眩むばかりの<sup>けんらん</sup>絢爛さを感じ取った。国王の手の指と足の指にはルビーが一面に輝き、耳には宝石がちりばめられていた。そして半宝石が輝く像に乗って良い香りを発散させているバラモンの廷臣に囲まれながら、国王は金の延べ板で出来た棺架の上に乗って、道を通って行く行列の中に入って運ばれていた。町の中には外国商人用の居住地があった。国王はイスラムの法律や彼ら自身の司法の下で統治させて、事実上自主管理する飛び領土の中でイスラム教徒を許していた。商人はセイロン、コロマンデ(Coromande)、ビルマ、マラッカ、スマトラ、ベンガル、ボルネオなどの国々から来ていた。

市場での商品陳列には驚くべきものばかりで、殆どが非常に高価なものであった。欧州人の味覚からして、しきりに欲しがっていた胡椒が地元では需要が伸びていた。しかしここで売りに出される殆どが外国船から入荷するものだった。ペロは、樟腦、ワニスの原料、ナツメグ、タマリンドの実、シナモンが市場にあるのを見、中国からの陶器が大量にあり、ダイヤモンド、サファイア、ルビーや真珠も見掛けた。

これらの商品を売りに欧州へ旅するのに、西洋と東洋の間で活躍する中近東の商人は、8月から9月に掛けてダウ船を出航させモンスーンの風を利用しながら航行

## 第9章 調査団長ペロ・ダ・コヴィーリャ

し、翌年の2月に戻るのが常であって、ダウ船は東洋が好む商品を積み込んでいた。椰子のコプラ、水銀、焼きシエナ土(顔料)、他の顔料、赤珊瑚、サフラン、薔薇香水、色付き木製パネル、ナイフ類、銀、金などに、ペロは目を付けた。

ペロがこれから向おうとしているゴアは、カリカットにあるような魅力には欠けていたが、インドでの貿易拠点用として捉えるならポルトガル人にとってはより大きな魅力ある町に違いなかった。他の沿岸地帯にはヒンズー教徒が住んでいて、国王ブラーミンにより統治されていた。ゴアは一つの島で既に外国の植民地となり、イスラム教徒の手中にあった。キリスト教国欧州の国がヒンズー教の国を獲得することは軍事的に見れば不可能なことではなかったが、交易に対して対立し、妨げようとする気持が生じるのは容易に想像できる。一方、外国イスラム教徒による強奪者を転覆することは、ヒンズー教徒との良好な関係作りをするのに歓迎されるべき前触れでもあった。

ペロは今度、インド洋を横切りアフリカ東海岸に船を向けていた。これは彼にとって全ての中で一番大切な任務の始まりだった。サンタレムに立ち戻って考えてみると、国王ジョアンと学者評議会が《当時の総意に反して、アフリカは海で囲まれている。》と推測していた。そこでアフリカを周って航海するには南端があって然るべきであった。評議会は、その南端を見つけるためにバルトロメウ・ディアスを船長とする艦隊を送り込んだ。確かにペロに与えられた英雄的任務は、それまでは東洋の香辛料の原産地への南アフリカからの航路を見つけることにあった。彼は夏のモンスーンを上手く利用して速度を上げ、メリンディ(Melindi)とモムバーザ(Mombasa)経由でモザンビーク海峡へ南下し、そして再び引き返した。1489年の終わりの前にはカイロに到達した。ペロは海図、陸地の地図、天体観測機を読み取る知識を持ち合わせていた。これらは国王ジョアン2世の従者、南ポルトガルにあるベージャ出身のユダヤ教指導者アブラハム(Abraham)から教授されていた。ユダヤ教指導者はその従者の任務のために選ばれてきていたが、彼はアラブ人として

## 第9章 調査団長ペロ・ダ・コヴィーリャ

成り済ますことが出来たし、占星学者とか宇宙地理学者として実力を発揮できる人間でもあった。丁度コロンブスがカディスから出帆した1490年にインドへペロが到着したが、そのインドのデータを持ってポルトガルに戻って任務を終えたペロから、アブラハムは詳細な報告を受けた。

ペロと同じく平民であったバルトロメウ・ディアスが、1487年に3隻のカラヴェル船を引き連れてリスボンから出帆した。彼は12月26日に南アフリカのエリザベス湾に到達した。10日ほど経った時に大嵐が吹き荒れ、ポルトガルのカラヴェル船も数日間南方へ流されてしまった。そして嵐が漸く収まった。ディアスはアフリカの海岸に再び近づけるようにと期待しながら東方向に舵を取った。でも海岸線はなかなか現れなかった。彼は北コースへと切り替えた。数日経ったら、海岸が西方向に現れてきた。ディアスと船乗りは、《嵐の岬》と呼び、二度と見る事ができなかったところを周りながら航海を続けた。彼らは、《牛飼の湾》と名付けたある湾に入り上陸した。ディアスはコンゴから通訳を連れてきていたが、通訳は現地人と共通に話せる言葉を見出せなかった。牛飼は投げ槍を引き出したり戻ったりして彼らに攻撃を仕掛けてきた。ポルトガル人が上陸した地点がグルート・ヴィス川であることを後で知った。ここではもう耐えるのが精一杯であって、ただ船乗りを連れて行くとだけ知らせた。ディアスは自分の士官らの間で投票をやらせ、彼らは満場一致で船乗りと合意に至った。アブラハムがカイロからポルトガルにちょっと前に戻って到着しているそこに戻るため彼らは出航した。大西洋からインド洋までの航路のディアスの海図は、ペロがとった南東アフリカからインドへの航路とほぼ完璧と云って良いほどに一致していた。

ペロ・ダ・コヴィーリャウンはポルトガルには帰らなかった。カイロで、アブラハムが彼に国王からの新たな任務を伝えた。これは伝説上のプレスター・ジョン (**Prester John**) 王国 (伝説上の東方キリスト教国家の君主。ポルトガル語表記は **Preste João** プレステ・ジョアウン。司祭ヨハネを意味する) を探し出せというものだった。この2百年間多分普通

## 第9章 調査団長ペロ・ダ・コヴィーリャ

の欧州人が抱いていたプレスター・ジョン王国とは、現在の科学物語である宇宙の外側にある偉大な帝国の1つに類似したものであった。イスラム教徒の軍隊が第1段階で我々が見たように、東欧州を横断してパリに8キロ圏内までに進軍したとき、キリスト教徒のプレスター・ジョンが背後からイスラム教徒を攻撃するために上陸するとの期待が西欧では高まっていたのである。他に希望を持てるようなものが無く、神話というよりか殆ど偽宗教に潤色されてしまっている。王国を想定した地図と物語は1185年にウイーンで発行されている。その中で国王は全インド人の全君主として描かれ、10もの王国の国王であった。宮殿は水晶で出来ていて、綺麗な石のモザイクで出きている花々が咲き、屋根は金で出来た柱で支えられていたという。中庭には、永遠に湧き出る噴水があった。プレスター・ジョンは金製の玉座に座り、ライオン、虎、狼、半身鷲半身ライオン、一角獣を傍に従えていた。口から炎を吹き出すと皮膚の色が白から黒に変化する大蛇を飼い、更に水に接するといるかとへんげ海豚に変化する象も飼っていた、

欧州人に最も興味を抱かせたのは、何と言っても彼が報告しているように軍隊の長さであった。1万の騎馬隊、10万の歩兵隊であり、各兵士が片手に十字架を、もう片方の手には剣を持っていることであった。このカルトは信教に対して高い影響を与え、またそれなくしてはイスラム教によってキリスト教は飲み込まれるほどであったとある歴史家が兎に角にも言及している位である。欧州人が絶望と降伏から救い、軍隊を再編成出来る時間を与え、結果的には自国に凱旋帰還することになった。

1439年に、リスボンのフリアール・アントニオ(Friar António)が教皇エウゲニウス4世(Eugene IV)に呼ばれ、全キリスト教会会議に参加すべくフローレンスに向った。リスボンへ戻る時に、彼は司祭でもある国王プレスター・ジョンにより統括されていると言われているアビシニアン黒猫司祭の集団に会した。ペロ・ダ・コヴィリャウンがリスボンを離れたその後、国王はローマに駐在の大使から《アビ

## 第9章 調査団長ペロ・ダ・コヴィーリャ

シニアン黒猫司祭の第2集団がそこに修道院を設立した。》という一通の報告書を入手した。彼らがルカス・マルコスという名のキリスト教徒司祭兼国王によってされていたということをポルトガル外交団によって確かめられていた。その王国の国王は、ナイル国王の創始者と現在見られている。バルトロメウ・ディアスが喜望峰を周る歴史的な航海に向けリスボンを旅立つ前に、国王ジョアンがポルトガル宮廷に採用していたコンゴの黒人男女1人ずつを彼に与えた。国王の指図に従って、ディアスは現在のザイルに当たる海岸に彼らを奥地に行かせるために下船させ、川の源流が何処なのかを探す様に指示した。数年後に彼らは海岸に戻ってきて、そこを通り掛ったポルトガルの船に拾われた。彼らは結局、ナイル川を知っている者誰一人会えなかった。

1515年まで、ペロ・ダ・コヴィーリャはプレスター・ジョンを探し回ることから未だに戻れないでいた。今までにポルトガル探検者はアフリカの東海岸を北上しながら旅をしてきていた。彼らはキリスト教王国がだいたいどの辺にあるのか地元人から聞き出して、司祭フランシスコが紅海の南端に当たる港で下船した。彼はアビシニアン国王への国王マヌエル(Manuel)からの親書と貢物を携えていた。その貢物は、十字架、聖書に関わる絵柄の絨毯、鞆ちりばに宝石が鑲められている短刀、可搬式教会用オルガンなどであった。

4ヶ月が経ってフランシスコは山間部を散策した。国王がポルトガルから当地へ派遣した大使は熱病で既に死亡していた。エチオピア人のガイドもまた任期の満了を迎えていた。川床が干されて跋涉できるような道は無かった。地方は猛猛なライオン、豹、狼がうろついていた。彼は行き方を教えることに了解した巡回修道士と遇った。凡そ2週間ほど歩いて漸く彼らは自分達の修道院に辿り着いたが、彼を首都へ連れて行くことを断った。彼らが喋っていた司教を待たねばならなかった。「司教はちよくちよく此処へ来ていたのかい?」「何年も来ていない。」と彼らは答えた。フランシスコ父が一人で、村で使える食糧を買いに出かけた。彼が聞いたら、食事

## 第9章 調査団長ペロ・ダ・コヴィーリヤ

は水を混ぜた大麦粉と雄牛の角に入れた蜂蜜酒を注ぎ入れた、調理をしないものだった。牝牛の糞をスープの味付けとして彼らが使ひ、恰もリンゴを齧るかじように乳牛の乳房をむしゃむしゃ食べているのに彼は驚いた。泥棒が彼のひとつひとつ小荷物を盗んでいた。その中には剣もあった。そして凄ひょうい雹が降ってきた。ある村で彼は石を投げつけられた。

終に彼が首都に着いたとき、国王がテントの中に招き入れて食物を与えられたが国王を謁見することを断られた。2ヶ月後、彼は王立駐留軍に出頭を命じられて一晩寝ずの状態であった。しかし彼が宮廷の正門に到着する前から、皇帝陛下が意向を変えられた旨を伝えようと従者が外に出ていた。フランシスコの我慢さが結局は効を奏した。永い間待たせられた挙句に、ペロ・ダ・コヴィーリヤが直ぐ近くに住んでいることが分かり、彼を訪ねることを許された。

フランシスコは、コヴィーリヤが田舎の大きな邸宅に住み、3千ヘクタールも広がる土地を所有しているのを知った。コヴィーリヤが数え切れないくらいの妻、世話係のアビシニアン騎士とその従者、素晴らしい馬、狩猟犬の群れを所有していた。牧歌的な豊麗の光景の中で、ペロ・ダ・コヴィーリヤは15年間過ごして初めて会ったような気がする、ポルトガル人の司祭を歓迎した。コヴィーリヤは、自分が地元地元の司祭に告解を全てすると、後で隣人に再度話し掛けられるのに気付いたので、今回は罪障消滅で告解の良い機会だと見て取った。ペロがリスボンに戻って正式な妻とそこで再び仲良くなることを打ち明けたにも拘らず、フランシスコは、頑固な偏見を大層持っていたようだ。

ポルトガル人による東アフリカでの探検はこうして終焉を迎えたかのように度々当然のように思われてきているが、これは事実ではない。司祭兼国王の実際に抱いた失望感が、東アフリカでの膨大な金の発見へと繋がらせたのである。ポルトガル人は国王ソロモン金鉱山の発見を他の欧州の国々に対してひた隠して、その間に巨額の利益を上げてきたのである。

## 第10章 ヴァスコ・ダ・ガマと海洋支配

ポルトガルという国を知らない、若しくは、ポルトガルがスペインの一部と信じている人も含めて実に無数の人々が、ヴァスコ・ダ・ガマに関する《カラヴェル船に乗ってリスボンから未知のインドに向って航海した》偉大なる航海者の伝説的功業だけは知っているようである。彼の探検に対して信奉されている見方は、アメリカ合衆国が有人ロケットで宇宙空間に行き、宇宙飛行士が月面に降り立つ自分を見つけることができたと云われるほど真実なものではなさそうであるが。

ヴァスコ・ダ・ガマは航海士でもなく、且つ海事に関しての知識にも乏しかった。我々が今まで見てきたように、インドとその所在はペロ・ダ・コヴィーリヤによって既に発見されていたのである。ヴァスコ・ダ・ガマは、バルトロメウ・ディアスの喜望峰を周る航海を以前に舵取ったペロ・デウ・アレンケール(Pêro de Alenquer)を船長として乗り込ませていた。出鱈目な冒険をするどころか、大分前から綿密に計画を練り上げ、着実に準備を進めてきた数少ない航海の旅であった。カリカットで海洋支配をしていたサモリム王朝(the Samorim)の宮廷へ遣わしたポルトガルで最初の大使として東洋にヴァスコが向った。以前には、欧州人は滅多にアジアへ航海をしておらず、西側と東洋の君主同士の間で結ばれる、初めての条約を交渉しようという者はいつも誰一人居なかった。

ヴァスコ・ダ・ガマは多くの頓挫や誤った冒険を繰り返してきていた。自分は探検家ではなくて外交家であるということを決して忘れることもなかった。彼の本当の達成目標は、決まり文句で、彼に帰せられるよりももっと果敢で、非凡なものであった。英国の歴史家でポルトガル海外問題を専門とするチャールズ・ボクサー(Charles Boxer)教授が“海上運輸帝国”と呼んだように、彼は先ずその基礎を築い



## 第10章 ヴァスコ・ダ・ガマと海洋支配

た。彼が叙事詩的で且つ全くひた向きな使命に従った時代には、百万人以上いや国民の半分以上のポルトガル人が、ブラジルから日本へと続く広い領域を跨ぐ支配的なを感じ取ったことであろう。ポルトガル人はアジアの”*lingua franca*”として、アラビア語を置き換えるようになった。ポルトガルの艦隊はアジアと欧州との間の貿易を実質的に独占したばかりか、インド洋と支那海に大きな商艦と軍艦を断然作り上げたのである。ポルトガル人は支那帝国の顧問となり活動した。ポルトガルは、パーレン、ペルシャ、パキスタンの北西国境地帯、日本、他の東洋の各地に沢山の要塞を築いた。リスボンから送り込まれた修道士や司祭が、その地に、修道院、教会、そして司教の邸宅までも建てた。長期間に亘り、ポルトガル人は中国と日本との間の交易を独占し、関与していた。ポルトガル人は陸上で植民地化を望まず、ポルトガルの町を建設して行った。それは南アメリカのレシフェから東アフリカへの糸と、インドのゴア、マレーシアのマラッカから支那の黄河の河口にあるマカオ、日本の長崎に繋がる糸である。

大英帝国はインドで植民地化を推し進めた。それは国王チャールズ 2 世(Charles II)の時にボンベイをポルトガルから譲り受けたときに始まる。インドが独立した1949年に、インド人歴史家のケー・エム・パニカル(K.M. Pannikar)教授が、『1498年～1945年間のアジアでの欧州人による帝国主義の見事な死亡記事』なる本を出版した。彼はその中で、この四半世紀の期間は、大英帝国の国王の時代ではなくて、ヴァスコ・ダ・ガマの時代であり、大英帝国の存在がしかし挿話的な出来事であったが、太平洋での海軍の覇権に対する太平洋戦争で、日本にアメリカ合衆国が勝利を収めたときに極真に達したのと同様だと書いている。

偉大なる国王ジョアン 2 世は1495年に死んだ。彼の唯一の嫡男王子は乗馬中の不慮の出来事で4年前に死んでいた。相続法により王位は権利を譲渡されていた26歳になっていた従兄弟のマヌエルに引き継がれた。国王としてマヌエルが最初にしたことは、彼の前任者に異議を唱えていたブラガンサ王家と他の貴族を重用す

るのを復活したことであった。議会で多数を占めることになって、《国王陛下はご自身がお持ちの気持で満足すべきだ》と主張して、彼らは国王に海外での冒険を諦めるように攻め立てた。

バルトロメウ・ディアスが帰還した1490年とヴァスコ・ダ・ガマが出発した1497年との間に、ポルトガル人の探検航海が実際にはなかったと度々言われているが、何処にもその証拠になるような公文書は見当たらない。しかしそれとは反対に状況証拠は出てきている。ポルトガル歴史家のアルマンド・コンセイサウン(Armando Cortesão)が、リスボンのレステーロ造船所近くのパン屋で注文書綴りがあったことを明らかにしている。7年間何も造船が行なわれていないふりをしている間に、実は百回以上もの長い航海があったことが、そのパン屋が船内食用ビスケットを納入していた事実でもって判明したのであった。

これらは将来に向けた探検の一部であり、欧州からインドへの航路の輪郭をより良くはつきりさせた。ソファラ（現在のモザンビークにある州名の一つ）の存在を東アフリカ沿岸地域のアラブ人の水先案内人アームド・イブ・マッジド(Ahmed ibn Madjid)の航海誌で<sup>150</sup>仄めかしている限りは、彼らが少なくともソファラの探検をしていたのである。《ソファラで、欧州人の船はモンスーンの嵐の中に誤って入ってしまう。大きな波が鋭い岩にぶつかり彼らの船に投げかかってくる。船員は海の中に飛び込むが、船は沈んでしまう。1495年に、欧州人の船が2年間もの永い航海を終えてここへ来たが、見たところではインド行きであった。》と彼は書いている。彼らはまた以前よりは更に重い荷物を積載し、より高速で航行できるよう、新しい大型船を徹底的に設計して、試験を繰り返してはその経験を積んで来ていた。この造船事業に直接バルトロメウ・ディアスが参画していた。彼が立案指導した技術的な進歩は、喜望峰を周ったときに使用したカラヴェル船を造船したことであり、事実、完璧なものであった。前にもあった《丸形の船》ガレオン船にごく近いものであった。カラヴェル船はそれよりも大型で、排水量が5百～6百トンであった。3

## 第10章 ヴァスコ・ダ・ガマと海洋支配

本マスト、速度を上げるための2枚の丸形帆、操舵性を持たせるための1つの三角形帆でもって構成されていた。船橋は船首の背後に前方に向かって取り付けられていた。船尾の甲板には、ポルトガルで最新式秘密兵器である元込め大砲が搭載されていた。その大砲は水平に近い弾道を描き、着火性の良い追撃ができるものであった。そして驚くほど効果的な抑止力を持つことが証明された。それらが海に響き渡るように一対の正確に狙った一斉射撃があった後は、戦闘でポルトガル海軍を相手にするために船に乗り移って留まるものは誰一人居なくなった。

国王マヌエルは王位を引き継ぐ際に、国王ジョアンの基本計画を成し遂げるべく重大な決定をして引き継いだ。彼はその航海に掛る費用を税金で賄うのではなく、ガーナの金鉱山から直接宮廷の歳入に依存していたので、古参の貴族や議員と対決することができた。

海洋支配という特別な任務は、エステヴァウン・ダ・ガマ(Estêvão da Gama)に対して国王により初めて委託されが、その準備をし終わる前に死んでしまった。国王はエステヴァウンの長兄の息子パウロ・ダ・ガマ(Paulo da Gama)にその業務を引き継がせられないか尋ねた。パウロは自分が病弱であると弁解し、探検航海をしようとするなら、大使業務と海洋支配の特別任務は弟のヴァスコに譲ると申し立てた。またヴァスコは二つの任務を十分にこなせるとパウロは強調した。パウロは航海の終わりに近づいた頃に熱病に罹り、弟ヴァスコが必死に兄パウロを救おうとしたが、亡くなった。

ヴァスコ・ダ・ガマはジョアン2世により創設され、ジョゼ・ヘルマーノ・サライヴァが《少数の官僚貴族》だと呼んでいた階級に属していた。ヴァスコは1468年に、地方の支配者の子として生まれた。彼はアルガルブ地方の役人として果敢さを発揮し、フランスの船員がポルトガルの船を略奪するのを止めさせてフランス政府の失態に対して報復するのに、彼が全てのフランス船をラゴスの船着場に閉じ込めたりした。彼は、地球上において最も力強い欧州人の一人としてインド総督を

務めたが、1524年にゴアにて亡くなった。

リスボンでヴァスコは2隻の丸形の船、彼が航海した”*São Gabriel*”号と、兄が乗った”*São Rafael*”号を与えられた。2隻は共にカラヴェル船であり、斥候<sup>せつこう</sup>と測量の目的で使われ、また他に大きな船には、香辛料や宝石類と交易するのを期待して、布地類、絹製の帽子類、鉄製品類や青銅器類、釘類、珊瑚の数珠球類、小さな鈴類、その他骨董品類などの商品が積み込まれていた。これらの船には非常用食料品や配給用の飲料水を、3年半もの航海でも乗組員が持ちこたえるくらい十分に計算をして積み込み運んでいた。

乗組員の総勢は170人であった。この内の56人だけが生き残って帰還できた。将官や船乗りは勿論のこと、航海中に船の維持や修理をする大工、従軍司祭、音楽家、アラビア語の通訳、仮釈放された多くの囚人が含まれていた。この囚人の中に若い貴族がいて、彼は違法行為の罪で拘禁の判決を受けていた。ポルトガル人による探検で今までに打ち立てて来た慣わしに従い、囚人たちは牢獄から早く解放されることを許されたが、見知らぬ国や土地の何処でも先ず上陸させられる危険を代償として受けていた。探検記録者のアルヴァーロ・ヴェーリョ(Alvaro Velho)もまた洋上にあり、航海日誌を書き残す任務を負っていた。この日誌に彼は、航海時の操舵データと天文学データの全てを将来の航海用として使えるように記録した。我々にとって最も価値のあることは、航海上で何が起き、また上陸して何があったのか真に迫ってくることである。

ヴァスコが乗った船はリスボン西の船渠ベレンから1497年7月8日明け方に出帆した。前日の夕方、船渠の反対側に現在も建っているジェロニモス修道院で、彼は国王マヌエルと一緒に食事を摂った。その修道院には彼の石棺が置かれている。彼はその夜、同行する将官ら彼の仲間と礼拝堂で語り尽くした。アルヴァーロ・ヴェリョの航海日誌の最初の記述から、全くの偶然なる冒険という代物ではないことは明らかで、彼らは既定の航路と行程表に従っていたことが分かる。1週間が経過

## 第10章 ヴァスコ・ダ・ガマと海洋支配

して彼らは予定通りにカナリア諸島に到着した。彼らはランザロッテで南方向へ船を取り、7月27日にはヴェルディ岬に達して新鮮な食料を積み込んだ。シエラ・レオネに当たる緯度の地点で、期待していた通りに、真夏の風を帆にとらえることが出来た。そして船は一つの弧を描くように西方のセント・アウグスティヌス岬、後にブラジルと名付けられた沿岸にその風に乗って進んだ。8月22日には彼らの船は既に南東風に乗り、南アメリカ大陸からの渡り鳥の行き先に従った。同時代のポルトガルの歴史家は、ヴァスコが実に幸運な男であり、且つ水先案内人が実に勘が良かったのではないかと推測している。ポルトガルの船乗りは過去に現在のアルゼンチンに相当する沿岸まで南アメリカへ辿ったように、都合の良い風を上手く取り込み、アフリカの南を周って辿って行ったに違いない。

彼らは1498年3月29日にはモザンビークの島にまで辿り着いた。インド洋の沿岸地域を支配しているアラブ人と商売をし、アラブの文化に接するのは彼らにとっては初めての経験であり、ヴァスコにとっては最初の外交手腕が大きく問われることになった。船着場には4隻の船が停泊していて、船主は《肌色の白いムーア人（トルコ人かペルシャ人）》で、金、銀、釘類、胡椒、生姜、真珠類、サファイヤやルビーなど沢山積まれていたと、アルヴァーロが書いている。

その町の住民たちは、顔が赤茶色をしていて大層立派な体格をしていたと、彼はまた述べている。彼らは木綿製の上着を着て、端が錦模様のターバンを巻いてきちんと衣服を身に付けていた。殆どがイスラム教に改宗していて、アラビア語が広く話され、流暢に会話を交わしていた。2人の仮釈放された囚人が、彼らを襲ってこないだろうか、若しくは追い払われはしないだろうか、この地にキリスト教徒が住んでいないだろうかなどを詮索するために上陸するように送られた。2人は友好的に取り扱われたが、又非常に好奇心も持たれ、キリスト教徒の共同社会が近くにあり、それは東アフリカの沿岸を更に行ったところのモンバサであると話してくれた。

アラブ人の通訳を通して、ヴァスコは要求を出してスルタンに謁見できることに

## 第10章 ヴァスコ・ダ・ガマと海洋支配

なった。スルタンは彼を宮殿に温かく迎え入れた。ヴァスコはスルタンに刺繍をした、帽子の付いたマントを2着、30もの金細工品(miticais)を贈った。そのお返しにスルタンは、モンバサへ道案内できる、経験豊かな2人の水先案内人をヴァスコに与えた。

日曜日に、ポルトガル人は大きな船から小型ボートを降ろして、船着場の近くにある無人島に向った。彼らの従軍司祭は外でミサを執り行った。船に戻る途中で、彼らは武装した数十人の輩に急襲を受けてしまった。船に戻ったモザンビークの水先案内人であるサウン・ガブリエルが、ポルトガル人が彼らに歓迎を受けたと思っていたのは、実は全く勘違いをしているのだと説明をしてあげた。欧州人がモザンビークでは以前には決して見つけられなかった単純な理由のために、ポルトガル人が欧州人であるという事実を、そこでは誰一人頭に浮かぶことはなかった。自分たちの皮膚の色から、彼らは北アジア人に気が合った。キリスト教徒仲間<sup>あ</sup>の在り処<sup>か</sup>は何かの彼らが尋ねたのに、それらがヒンズー教の教えであって、インドの神クリシュナの崇拜者仲間を捜している印象を与える結果になってしまった。スルタンと彼の顧問官が、彼らが十字架を立て、全てのヒンズー儀式とは非常に異なった祭式を催すのを眺めてぞっとした。他の地域から外国人が今にも侵略するぞとの脅しが本当のだと分かった。そこでスルタンは彼らを殺せと部下に命じた。

拷問や海の外へ放り投げるなどの脅しがある中、2人の水先案内人はポルトガルの船をモンバサに着くまで安全を確保しながら操舵した。彼らは日曜日パルムに着き、船着場の外で錨を下ろした。その首長が3頭の羊とオレンジとレモンの贈物を積んだ船を送り込んできた。ポルトガル人は、新鮮な食物にありついて大層喜んだ。船乗りが生存していくために必要であった塩漬けの牛肉や酢漬けの豚肉が、今や新しい大型の船になって不要になった。その理由は、彼らは生きたままの山羊や鶏や他の動物を積み込んで運べるようになっていたからだ。必要に応じて動物を屠殺し、寄航した時に新鮮な水の補給と同時に動物を補給すればよい。新鮮な果物を

得て彼らはががつと食べた。多くの船員が今までに壊血病に罹ってきた。インド洋沿岸に住む国々の人々は既にその治療法《柑橘類の果物の摂取》を見つけていたように思われる。ポルトガル人が数日の内に快復している内に、アルヴァーロは兎に角、周りの空気の質が病気に効くのではないかと寧ろ考えていた。

2人の仮釈放された囚人が、珊瑚の数珠とアラビア語で綴った友好を願うヴァスコ・ダ・ガマからの親書を携えて浜に派遣された。2人は多くの群集に歓迎され、宮殿に案内された。シャイフ（部族の首長）がたつぷりともてなし、案内人を差し出して、彼らをキリスト教徒の商人の館に連れて行った。そこで2人の囚人はクリシュナ像を見せられた。その像はキリスト像でもなく、またマリア像でもないことに気付き、当惑しながら、それが聖霊を表すものであると理解した。

2人はポルトガル艦隊に戻った。船着場の外で音がしたとき丁度、2人のモザンビークの水先案内人が、“サウン・ガブリエル”号と“サウン・ラファエル”号をゆっくりと横でぶつかるように操舵してしまい、混乱に乗じて自分の安全のために海中に飛び込んでしまった。ヴァスコ・ダ・ガマは離陸する時機と判断した。

水先案内人が乗船せずに広い海に出て、ポルトガル人は2隻の手頃なダウ船を見つけ出し、そのダウ船に貨物と船員を乗り移らせて、併走させた。1隻は離れたが、彼らは追い付くことが出来た。彼らは大量の新鮮な食物を持ち、且つ年老いた、貴族らしいアラビア人2人を取り捕まえた。その2人は乗客と14人の船乗りと1人の水先案内人とで船旅をしていたのであった。脅迫おどと煽てを織り交ぜながらポルトガル人はその年老いた貴人から、沿岸を更に上ったところのメリンディの首長は、モンバサのスルタンの最大の敵であることを聞き出した。あなたの、あなたの敵は友である。捕えられた水先案内人は彼らを2日後に到着していたメリンディに案内した。ヴァスコ・ダ・ガマは船を港の外に錨を下ろさせ、その年老いたアラブ貴族を砂丘に下ろした。彼はカヌーで町からきた人によって連れて行かれた。

ヴァスコ・ダ・ガマからの友好と挨拶の親書が伝えられ、ポルトガル人が捕えた

## 第10章 ヴァスコ・ダ・ガマと海洋支配

2人と友好的に話し、首長のために6頭の羊と籠に詰めた果物や香辛料を含む贈物を、彼らに送りに人を遣ったことが、数時間も経たない内に明らかになった。ヴァスコは船に乗せてきた残りの囚人らを解放した。首長が訪問者を楽しませるために楽団を引き連れて浜に下りてきた。常に感情的に動かされないヴァスコが、船に乗り込んできた王の大臣の1人を人質とし、彼を解放する条件としてインドに向う航路を知っている水先案内人1人を遣すように要求を突き付けてきた。

その水先案内人はボンベイからグジャラート (Gujerati ; インド西部の州の一つ) を与えられていた。ポルトガルの船員は彼の自国語'Malemo Kanaka' ('海洋探検者で天文学者' という意味) で彼を呼んだ。彼は荒れ狂うインド洋でポルトガルの船の舵取りをして、彼らは1498年5月20日に無事カリカットに着いた。

ヴァスコは2人の仮釈放した囚人ジョアウン・ヌーネス(João Nunes)とカスペル・コヘイア(Casper Correia)を上陸させた。欧州人とインド人との間での記録に残っている初めての会話が、その2人とジェノバ語を喋れる地元の2人との間で交わされたのである。

「一体全体ここでどうやって暮らしているのかい？」

「我々はキリスト教徒と香辛料を探し求めに来たのだ。」

「あなたはカステイーリャ王から、いやフランス王から、それともヴェニスとジェノバ最高行政官の何れから派遣されてきたのかね？」

「我々はポルトガル王から遣わされてきている。ポルトガル王はこの地に他の国々の王から派遣されているのをお許しはなさらない。」

「ここに来て頂き、神はあなた方を祝福するだろう。」

海洋の支配者サモリムは、この国の宮殿に住んでいた。ヌーネスとコヘイアは、その宮殿に案内された。ポルトガル国王が遣わした大使が到着した旨を公式に話した。彼は信用状を手渡すべきサモリムの従者を捜した。サモリムはカリカットの自分の宮殿に戻りたいという好奇心に駆られた。サモリムは数人の廷臣を遣わし、浜に1



## 第10章 ヴァスコ・ダ・ガマと海洋支配

台の駕籠を送り込んできた。ヴァスコは祝砲の一斉射撃とトランペットのファンファーレでもってそれらを迎え入れた。《ヴァスコはスペインで歓迎された国王の時よりも身に余る光栄で歓迎を受けた。》とアルヴァーロが記述している。それからヴァスコは駕籠に乗り、カリカットの兄弟の首長とヒンズー人音楽家の大きな楽団の先導を受けた。その行列に13人のポルトガル人随行員も続いた。ヴァスコは大きな通りをヒンズー人の群集による歓呼を受けて駕籠で運ばれた。一行は、当初は教会のようだった大きな建物へ先ず行った。それから聳えるヒンズー教の象徴(lingam)、ヒンズーの神像と女神像を眺めた。アルヴァーロが《それには4、5本の腕が付いていた。》と書いている。ただ1人の将官が「魔神でなくて、真の神だ。」と呟いていたけれども、敬意を表すために彼らは膝間<sup>ひざま</sup>付いて祈った。

一行は群集の中を経路に沿って並びながら半日以上掛けて進んだ。地元の人々は自宅に招き入れ、ご馳走でもてなし、拳句の果ては泊るように誘ったりもした。漸く宮殿に辿り付き、大きな扉を潜り抜けて4つも連なる中庭に入った。4番目の中庭の入口に居たサモリムの導師がヴァスコに近づいて来て強く抱きしめた。

海洋の支配者が真珠で出来た天蓋の下に座っていた。彼が身につけていた衣装は白木綿製の腰巻<sup>かぶ</sup>だけで、刺繍をした帽子<sup>ちりぼ</sup>を被っていた。でも腰にはルビーを鑲めたふたつの金製帯<sup>ひび</sup>を巻き、肘から下にかけて両腕に宝石と金で出来た腕輪を着けていた。またエメラルドとダイヤの指輪も嵌め、ルビーと巨大な真珠の耳飾りを着けていた。右手にピンロウジ(東南アジアではピンロウの種子をキンマの葉に包んで噛む。)を入れた金製の鉢を持ち、左手には小さな金製の痰壺<sup>たんつぼ</sup>(ピンロウジを噛んだ後捨てるため?)を握っていた。ヴァスコ・ダ・ガマはヒンズー教流に、両手を挙げて、《キリスト教徒のようにお祈りを》手の平を合わせて、彼に挨拶をしたとアルヴァーロは言っている。海洋の支配者は自分に向かい合った長椅子に座るように勧めた。召使が果物を運んできた。

インド人の壮麗な礼儀作法に従って、ヴァスコ・ダ・ガマは直接統治者に図々し

## 第10章 ヴァスコ・ダ・ガマと海洋支配

く話し掛けようとしたとき、その場に居合わせた国々との商売に関して説明をするように求められた。ヴァスコは厚かましく且つしっかりと、自分は広大な領地や他国の王より多くの富を持つ大君主なるポルトガル国王から遣わされた大使であり、海洋の支配者だけに耳を傾けて欲しい個人的な便りを持って来たと言わなければならないのを断った。

彼はヴァスコを自分の部屋に案内した。ヴァスコはキリスト教徒の仲間を捜しに来たのと、香辛料を購入するために来たのだと彼に話した。首長は王国にとってヴァスコを公式的には歓迎の意を表し、町の北に船を安全に投錨して停泊出来る様に操舵に通じた人間を遣わしてきた。

翌日ヴァスコは沿岸を漕いでいた海洋の支配者への貢物を持っていた。縞模様の木綿生地12巻、茜色の帽子4個、珊瑚の数珠4本、砂糖1箱、オリーブ油と蜂蜜を各2樽だった。カリカットの首長が検査をしに来た。「これらは馬鹿げたものばかりだ。貧乏なアラブ商人でさえこれよりもっと増しな物を持ってくる。この貢物は国王には全くそぐわない。金を持ってこい！」と彼は言い放った。

ヴァスコは即座に取り繕い「これらの貢物はポルトガル国王からのものではなくて、自分個人からの贈り物だ。金は追って持ってくる。」と言った。

首長はヴァスコが船に戻ろうとするのを制止した。ヴァスコは海洋の支配者との謁見を別に設けてくれるよう頼んだ。それは受け入れられたが、通訳がそれを翻訳する断り方が極端だったので、続けて侮辱的な言葉を浴びてしまった。

自分が王族への貢物が不適切なものを持参してしまったことは恥ずべきことであるとヴァスコは悔述していた。彼は、小麦とワイン、鉄と銅を交易するための商品にすべきだったと、有名な“*sang froid*”で答えている。海洋の支配者は幾分怒りが収まってきて、停泊中の船に戻るための1頭の馬を与えようと言い出した。しかしヴァスコはポルトガル国王の大使として威厳が下がるからと断り、駕籠を遣すように要求した。

## 第10章 ヴァスコ・ダ・ガマと海洋支配

カリカットにいるアラブ商人は欧州人の到来で自分達の独占権が止められるのではという脅威の発端を察知していた。ヴァスコらが持参してきた商品あざむらを嘲笑いながらヴァスコの面子が失われたことを、ここに至って最大限に活用した。顧客は殆ど無かったに等しい。がしかし、ヒンズー人はポルトガル人を熱狂的に歓迎し続けた。彼らは子供達を連れて停泊中の船に乗りに来た。ポルトガル人は出来る限りに贅を尽くして彼らを楽しませ、真夜中まで集いを続けていた。

ポルトガル人は持ってきた商品をカリカットに陸揚げした。そこでもまた、アラブ商人は多くの商品が取引されないように監視していた。地元の住民である、ポルトガル人がモンサイドと呼んで知っていたチュニジア人が船に乗ってきて、ヴァスコにこう警告した。ポルトガル人は海賊、盗人であり、カリカットの町中を略奪し、強奪するために停泊していてその機会を狙って待機しているだけだと、海洋の支配者に説得していた。アラブ商人は、海洋の支配者がヴァスコとポルトガル人仲間の活動を止めさせて首を刎ねたら、巨額のお金を出したいと申し出た。既に上陸していたポルトガル人らが自分の船に戻り、その商品を移動することが出来ないようにされた。

ヴァスコはポルトガル船に乗って昼食を摂っていた24人ものインド人の集まりの中で、貴族のような衣装を纏い立ち振る舞っている6人が自分に気付くまで時間を稼いだ。それからヴァスコは6人の囚人を呼び寄せて、ポルトガル人の捕虜を解放するよう海洋の支配者の仲介人でもって彼らと交換した。

自分は盗人とか海賊と呼ばわりを受ける最たる例外者であって、出帆しようと考えていて、戻りはしないという書簡を送った。海洋の支配者はヴァスコの将官の1人を呼び出させて、ポルトガル国王への書簡を彼に託した。その書簡には、《私は閣下の大使を喜んで受け入れ、貴国との交易をたく存じます。閣下が金をお送り頂ければ、私は香辛料と宝石をお渡ししましょう。》と書かれていた。

それから直ぐに彼らは出帆した。与えられた使命が達成されたことになる。でも

## 第10章 ヴァスコ・ダ・ガマと海洋支配

ポルトガルへの帰還航海は悲劇に満ち溢れていた。百人以上、乗組員の3分の2以上が高熱病か壊血病で死んだ。乗組員の希望に従い4隻の船の2隻を海に捨て、海辺に乗り付けて、設計や造船を研究しやすくしているのをアラブ人に盗まれないように軽量なものだけにした。《交易をしたいという申し出の知らせ》を持参して船団がリスボンに辿り着いたとき、国王マヌエルは教会の鐘を国中に響き渡るように命令を出した。そして可能な限り準備が短期間で、カリカットに往復でき、且つ交易を実行できるような別の大型の艦隊を、派遣するように指示した。マヌエルはリスボン大司教に《あらゆる種類の香辛料；シナモン、<sup>ちようじ</sup>丁子、胡椒、生姜、ナツメグ、バルサム、<sup>こはく</sup>琥珀、<sup>じやく</sup>麝香、真珠、ルビー、他の高価な石を持ち帰るよう》に公式文書を送りつけた。ヴァスコの艦隊は小さな船であったけれども、獲得しようと管理してきた貨物は、1航海に要した費用の6倍もの市場価値があったと見積もられている。

ヴァスコ自身は、兄のパウロが熱病に罹ってしまったので数週間リスボンには戻らなかった。ヴァスコはパウロを元気付けようと、新鮮な空気のあるアゾーレス諸島にパウロを連れて行って、快復を期待したが残念なことに元気にならなかった。

数年後にヴァスコは《インドの勝利者》と呼ばれるようになった。彼は生まれ故郷であるシネスの町で年金3万金レイス付きの大邸宅を贈られ、自分と相続人に対して2百クルサードスに相当する1航海当たりの香辛料と、宮廷お抱えの艦隊で旅行が出来、インド海岸に沿って停泊しても料金も取られず、無税である特典を与えられた。彼は伯爵ヴィディグエラ(Vidiguera)という称号を贈られた。姉と弟も貴族に列しられ、邸宅を贈られた。ヴァスコは1524年にインドで亡くなった。

## 第11章 インドとそれを越えて

ヴァスコ・ダ・ガマがリスボンに帰還して半年後、ペドロ・アルヴァレス・カブラルが18ヶ月間もの糧食を積み、1千2百人の乗組員を乗せた13隻の艦隊の指揮をとってリスボンを出帆した。船乗り、兵士、楽団員、仮釈放された囚人らで構成されていた乗組員の他に、薬草薬剤師、理髪師、医師、9人の司祭、1人の天文学専門家も入っていた。インドへ向う途中カブラルはブラジルの海岸に停泊した。これは公式航海録によると船隊は風向きでコースを外し偶然に横切って来たとある。彼はそれに対してポルトガルに苦言を呈していた。喜望峰で大嵐に遭って船は大波に打たれて乗組員<sup>もろとも</sup>諸共、艦隊の半が遭難して失ってしまった。その中には偉大な船長バルトロメウ・ディアスも入っていた。

カブラルは1500年にカリカットに到着し、《海洋の支配者》から歓迎を受けた。貢物として喜ばれそうな、銀製の鉢<sup>つちほこ</sup>、槌矛<sup>きね</sup>、金の象嵌細工<sup>ぞうがんざいく</sup>、絹織絨毯<sup>きぬおりじゅうたん</sup>、精巧な綴れ<sup>つづ</sup>織<sup>おり</sup>を持参した。一方5頭の象を積み込んだ1隻の貨物船がスリランカからカリカットの船着場に着いた。《海洋の支配者》はカブラルにその貨物船<sup>だぼ</sup>を拿捕して自分に寄こすよう頼んだ。

カブラルらはその要望通りにしてあげて交易を始める許可をいち早く得ることが出来た。ポルトガル人はイスラム商人から再び悩まされ妨害された。そこでカブラルはイスラム人の船を拿捕する作戦に出た。上陸していたイスラム人がポルトガルの交易所に攻撃を仕掛けて、50人の乗組員と3人の司祭を殺し、更に数人の囚人をもひとつらえて、ポルトガル人の交易作業を全面的に停止させてしまった。

その報復措置としてカブラルは、停泊中のアラブ船全てを拿捕するように命令を出して先導し、逃げ出すことが出来なかったその乗組員を虐殺してしまった。そし

## 第11章 インドとそれを越えて

て拿捕した船に積み込まれていた貨物を自分達の船に移し変え、ポルトガル人はカリカットの町に大砲で砲撃して多くの建物を破壊してから、コーチンの南に向けて出帆した。彼らはそこでヒンズー教徒の首長から歓迎を受け、カリカットのイスラム人らの交易を転換する好機と捉えて迎え入れられた。

次のインド探検から軍事的な様相を次第に帯びるようになって来た。コーチンでの交易をしに行く途中カリカットでちょっと停泊し、そして町を砲撃し、停泊中の船に火を点けるというのがお決まりのようになってきた。

フランシスコ・デウ・アルマイラ(Francisco de Almeida)が1502年にコーチンに来て、欧州人として初代インド総督の称号を頂くことになった。コーチンの町がカリカットから攻撃を受け、ヒンズーの首長とポルトガルの駐屯部隊が島に避難していることを彼は知った。首長がコーチンを防衛して貰える見返りとしてポルトガル国王の家来になることを受け入れたので、首長に金の王冠を贈った。

しかしコーチンは再び攻撃されてしまった。がこのときは、カリカットから来た軍艦がトルコとエジプトから来た軍艦と合流していた。実はエジプトがヴェネチア人から資金提供を受けていたのである。最も激しい戦闘の一つであり且つ歴史に残る果敢な海戦では、ポルトガルに凱歌が上がり、その後インド洋で同じ規模で接近してきて挑戦することは2度となかった。彼らが東洋で大望を成就しようとするなら、アラブ人とヴェネチア人との香辛料交易を止めることがより安定した基地を必要と認識したのであろう。陸から川で切り離されている大きな島であるゴアが占拠され、アラブの馬売買人に管理されていた。主要を占めるヒンズー教徒の指導者の1人がポルトガル人に近づき彼らを追い出すよう助けを求めてきた。アフォンソ・デウ・アルブケルク(Afonso de Albuquerque)が、それまでインド洋でのポルトガルの司令官であった。ゴアからのヒンズーの密使ティモジャ(Timoja)がアルブケルクに、ゴアの島に攻撃を仕掛けるならヒンズーの人々はアラブ人に対して立ち上がり、彼らを追い出すように手伝をすると約束を交わした。アルブケルクは、ティ

## 第11章 インドとそれを越えて

モジャをポルトガル艦隊の仲間に入れて河口に向け出帆し、4回砲弾を撃ち込んだ。ゴア島の町を防衛していたトルコの傭兵はそれに驚いて馬に飛び乗り、陸地に繋がる通路へ目掛けて逃げ出してしまった。それから間もなくしてイスラム教徒の首長が馬に乗って駆けつけて来た。その数は5万以上にも上ったとポルトガル人は概算した位であった。真夜中に酷く雨が降り続けている間に、彼らはポルトガル人が急拵きゅうこしらえした砦を分捕り、町に戻って行った。

アルブケルクは攻撃することも退陣することも出来なかった。彼の艦隊は3ヶ月間、なりを翬ひそめていた。それから曲折があり、何とリスボンから新しい軍艦が来たのである。その軍艦から砦に向けて砲撃してゴアの町に突進した。アルブケルクが駐屯していない間に、イスラム教徒はゴアでもっと攻撃を掛けるよう乗り出すべきであった。自分の軍艦に戻ってきて彼らが降参するまで、8日間も砲撃を続けた。彼は将官を、彼とポルトガル国王に、その宗教と文化に恭順を示し、ポルトガルとの友好関係を築きたいと表明している周りの地域のヒンズー首長らのところへ遣わした。

ポルトガル人が1961年まで居続けていたゴアで、アルブケルクがアジアで初めて欧州人の都市を創りあげたのである。先ず彼は自分らの砲弾で打ち壊してしまった城を再建し、そこに自分の居を構えた。同時代の記録によれば、ミサを執り行うため夜明け前に毎日城に登り、毎晩少なくとも4百人以上の船長を夕食に招いて楽しませていた。食事の前に24頭の象が前方に連れ出され会釈をさせた。ご馳走を銅製の燭台しょうだいの松明たいまつで照らし出し、トランペットや太鼓による音楽を奏でた。日曜日になるとヒンズーの貴族は彼に挨拶をしに広場に集まって来た。ポルトガルの軍楽隊が演奏してヒンズー教寺院の乙女達が舞踊を披露した。

彼は馬に乗って建設現場を見回ることに多くの時間を費やした。そのときに4人の秘書官を連れ、各人に筆とインク壺を持たせて、指図した内容の記録をとらせた。造幣局を建造させて設備を導入して、地元で調達した金を用いてポルトガル金貨を

## 第11章 インドとそれを越えて

作らせた。造船所は、船材の中で最良のものを見做されていたチーク材を地元で調達し、それを使って9百トンクラスまでの船舶を作れるようにした。ポルトガル依存から抜け出てゴアの自給自足に向けたときに翳<sup>かげ</sup>を落としたのは、インドにとって初めての軍需品工場の建設とその委託であった。

やり方を一新した使節団がポルトガルから着いた。イエズス会共同設立者サウン・フランシスコ・シャヴィエルが率いるメンバーが同乗していた。彼らは下船してインド人の習慣や言葉を研究し、また採り入れ、インド人が着用している衣装を身に纏い、インド料理を食べた。その中の1人フリアル・ジョアウン・デウ・ブリトがヒンズー教の修行を聖都マデウライでして、カトリックの指導者がヒンズー教の僧侶と神霊の問題について対等に議論を交えた。この有名な世界教会主義（キリスト教相互のみならず、より幅広くキリスト教を含む諸宗教間の対話と協力を目指す運動）は、彼を殺した熱狂的原理主義者によって終止符が打たれた。未だに教育界で主勢力を維持しているインド・イエズス会が赤い肩帯を掛け、彼を暗殺した場所がキリスト教徒と同じくヒンズー教徒によって崇められている寺院であることを彼は記憶に留めている。

イエズス会はゴアに中学校を建てて教育を施して大学レベルまでにした。ゴアはアジアで高等教育を国際的で多様な文化を持つものに初めてなった場所でもある。1584年の新学術年として取り決めた宣言書は16ものアジアの言語に翻訳されて出版された。教育に付け加えて、彼らは欧州の恩恵についてその幾つかの研究に取り組んだ。特に彼らは医薬品用の植物園を建設して、自分達に関する厳格で冗長な経験を通してインドで自生する植物が多く病気に治癒力を持つ成分が含まれていることを臨床してその記録を残している。その研究報告書がポルトガル語から他の欧州の国々の言語に翻訳されて、現代の薬理学の基礎となっている。

アルブケルクは、仮釈放した囚人に謝った。彼は囚人を勇気付けて、あらゆる手工業や小企業で職を手につけるように手を差し延べた。その他に、パン屋、靴屋、居酒屋、大工、石工、鍛冶屋などになった。リスボンで売春婦をしていた者が、男



## 第11章 インドとそれを越えて

に扮装して船に乗って密輸され、新しい財産の分け前としてゴアに向った。ヴァスコ・ダ・ガマが、2度目の航海で旗艦の船上には半ダースもの売春婦が同乗し、将官からの広範囲に亘る憤慨と抗議の所為で鞭を打たれていたことを知っていた。ゴアでアルブケルクはポルトガルの乗組員に現地の女性と結婚して、そこに居を構えるよう奨励した。彼らの幾人かは奴隷としてポルトガル人のお抱えとなり、その新しく上がった地位は時として自分達にとって実質的には不都合になった。しかし少なくとも、それはポルトガル人としての市民権や他の諸権利を保障していた。結婚を通じてインドの婦人が受けた野卑な搾取は、決して普遍的な決め事ではなかった。ポルトガル・イエズス会士が説教したキリスト教徒の福音とは、神の前では全ての人々が平等であることと、貧者と浮浪者の正当性をイエス・キリストが擁護していることであった。インドの低い階級に属する人々に対して極めて説得上手なことを驚かれること無く証明していた。ポルトガル人の夫の落ち度と妻への態度が当時どうであれ、ヒンズーの自分の仲間の所為で蒙ってきたものより少なくとも少ない抑圧であったことは確かであろう。インド人の夫人が結婚してキリスト教に改宗したとき、その家族が前に改宗していなくても、ゴアのポルトガル人の男性の殆どがその地方の一夫多妻という慣習に熱中し婦人部屋を持ち、ある者は実際にそうだった。

今日でもポルトガルは、ポルトガルに住まいを持つ権利があり市民としての、そして真新しい才能と技能とエネルギーを持ち込んで、ゴアに住むために来て、ゴア人の仲間になったポルトガル人の移民者の子孫に、感謝の念を持ち続けて来ている。

\*\*\*

香辛料、薬草、宝石類などの供給を調達することは、文字通りの感覚で言えば、ただ、半ば戦闘行為であった。インド洋でアラブの力を打ち毀し、ヴェニスへの交易航路を打ち負かして、挑戦したポルトガル人にとっては、戦闘行為は残り、続いていた。アルブケルクがエジプトからナイル河の流れを逸らせ、メッカにある預言者モハメドのお墓を攻略するという、自分が述べた大願を成就出来なかったとき、

## 第11章 インドとそれを越えて

それらは別の方法で何度か蛮行と言わしめた<sup>どうもう</sup>獐猛さを持ったヒンズーの人々に向って示したように、非常に異なった気持でこの任務を自分達自身に注いだのであった。

初代の総督フランシスコ・デウ・アルマイダはリスボンで22隻もの艦隊を預けられた。2千5百人の乗組員の内、千5百人重装備で機甲部隊の兵士で、残りの多くは装着した大砲の砲尾につく兵士であった。その艦隊はアフリカ東海岸のキルワ港の、アラブ人が交易活動をしている船着場に入港した。彼らは数時間掛けて先ず砲撃した。それから上陸し、狭い路地を通りながら行く先々で戦った。多くの兵士が負傷したが、ポルトガル軍は自陣の兵士に死者を出さずに町を制圧出来た。ポルトガル軍はそこに駐屯して、砲撃で壊した家々や建物の砕け石を集めて砦を作り上げた。兵士の動作の早さには目を見張るものがあった。将官らもその手作業に手を貸して、16日間で砦は完成した。歩兵部隊を出来たての砦に駐屯させ、地元アフリカ人を砦の<sup>かしら</sup>頭として任命した。ポルトガル軍は2隻を船着場の外海を巡回するために出帆させ、近寄ろうとするアラブ人を<sup>ことごと</sup>悉く寄せ付けなかった。

残りの艦隊は、もっと大きな、アラブ人の町モンバサに向け出帆した。モンバサの沿岸で座礁してしまったポルトガルの船を回収しようとしたら大砲によって炎上させられてしまった。そこでポルトガル艦隊は砲弾と火を点けたトーチを射撃して懲らしめる報復を開始して町を破壊してしまった。上陸したらポルトガル軍は何と30人も死者を出す損害を蒙り、その殆どが毒矢によるものだった。ポルトガルの将官の1人の日記には、「毒矢による傷口に効く解毒剤を与えていた地元の1人が居なかったらもっと多くの死者が出ていたに違いない。」と書いている。生き延びたポルトガル部隊は町の廃墟から略奪と盗みを繰り返し、数多くの女性を捕虜として捕らえた。しかしアルマイダは捕虜を船の中に乗せるのを禁じて解放してあげた。ただ唯一の真の信仰を持ち得るにまだ若く、且つ、心からキリスト教徒になり得るであろうと考えられる幾人かの子供は例外であった。彼らの中には十分に歓迎され、教育を受けさせるためにリスボンに戻るために帰えさせられたのもいた。結局はそ

の後幸せな結婚生活をしたようである。

インド大陸の反対側の海洋で《海洋の支配者》がカリカットでポルトガル軍による続けて砲撃していた年の後で、漸く和平に合意した。カリカットに居残っていたイスラム商人はその時には既に撤退し、彼らに他の商人も加えて更に南にあるマラッカで交易所を再興していた。ポルトガル人管轄のアフリカ東沿岸又はインド西沿岸を当時は帆走することが難しかったので、モルディブ環礁で護送しに自分達の船を集結し、その後、途中でポルトガルの軍艦に遭遇しないように祈りながら、紅海に向け北上するのに一緒になって出来る限り早く速度を上げていった。しかしリスボンから大艦隊と共に、ポルトガル人が海峡を指揮できる砦を築いたソコトラ島のある紅海の河口へ、トゥリスタウン・ダ・クニャ(Tristão da Cunha)が遣わされた。

アラブ人の船長はソコトラへ行く代りに、南ペルシャのホルムズの港へ船を操舵した。ホルムズから駱駝の隊商に積んだ香辛料や他の商品を、黒海東沿岸へ送ることが出来るようになっていた。その黒海東沿岸では、トルコ人の船でそれらの商品をイスタンブールに持ち込み、ヴェネチア人の商人に売っていた。がしかし、アルブケルケは1514年の初めの頃に、そのトルコの船をホルムズの方へ追い回し、艦隊は昼飯頃に船着場の外側に着いたが、夕闇になるまで船を動かさなかった。彼の艦隊はトランペットのファンファーレで市民をあっと驚かせた後、夜空に閃光を放つかのように大砲の一斉砲撃の火を噴かせた。アルブケルケは貢物をするから、町全部の統治権をポルトガル人に認めさせよという、突きつけた電報を支配者に送り込んだ。支配者が中々返事をしないしていると、艦隊は停泊中のアラブやペルシャの船に火を点けた。支配者はアルブケルケの旗艦に大量の金を送り込んで来た。数日後にアルブケルケは、船着場の入口に砦を築き始めるように指示を兵士に出した。その時は真夏で、きつい手作業を続けるのに強烈な太陽の熱が邪魔をした。彼は鞭を打ち、急き立てた。しかし2隻の船の乗組員全てが水平線を越え、追跡が不可能なところへ脱走してしまった。アルブケルケは今回の砦の築城を諦めてインドに舞

## 第11章 インドとそれを越えて

い戻った。その航海の途中にアデンを襲撃し、オマーンの海岸地帯の町々を破壊して略奪して行った。彼は後に砦を築く建設作業者を引き連れてホルムズに戻ってきて、イスタンブールへの交易航路を断ち切ることに成功した。

アルブケルケはマラッカの南に上陸しようと航海に出た。マラッカはアジアでアラブ人にとっての最後の要塞であった。ポルトガル艦隊が船着場に着いたが、そこに停泊している多くの商船の乗組員が、彼を恐がって上陸して逃げるほどに知れ渡っていた。マラッカのスルタンが、戦闘をしないで和平交渉をしたい旨、アラビア語で書いてアルブケルケに書簡を送った。町に住む多くの人々はインドと同じくヒンズー人であった。従ってインドから、ポルトガル人が彼らの盟友であり保護者でもあるとの知らせが既に届いていた。町民の1人がアルブケルケの船に乗り込み、スルタンの目論みはポルトガル人との交渉を、台風の襲来まで散開させようとしている密告してくれた。ポルトガル艦隊が暴風雨に悪戦苦闘している最中に、攻撃を仕掛けて撃沈するシナリオであった。そのヒンズー人はアルブケルケに「スルタンは何も考えておらず裏切り者だ」と話してくれた。その晩にアルブケルケは町を一斉砲撃するために軍艦を沿岸に近づかせた。大砲の炎の灯のもとで兵士は小さな船に乗って上陸し、更に船着場の前面に沿って移動して、椰子の葉で覆われた屋根の建物に火を点けて行った。

翌晩に、艦隊は海岸地帯にもっと近づくように移動して多くの砲撃隊を上陸させた。将官の1人が《我々は暗闇の町の彼方此方から、どちらへ逃げればいいのか分からない子供たちを連れた人々の騒乱と泣き声と叫び声が聞こえ、その渦中に投げ込まれたかのようだ。》と日記に書いている。夕暮れ時にポルトガル部隊は町に入場したが、回教寺院の外の広場でマレー人の貴人らの集団によって挑戦を受けるまで、多少の抵抗を受けた。ポルトガル部隊は直ぐに彼らに目掛けて一斉射撃をした。幹線の大通りに入ってきたら、部隊は10人の廷臣と一緒に戦闘用の象に乗ったスルタンとぼったり出くわした。そしてその象が唸りながら部隊を襲ってきた。ただイ

## 第11章 インドとそれを越えて

インドでの経験から象はそれほど恐ろしいものではないことを知っていたので、象の急所である、腹部か耳か目を狙って槍を突けば簡単に撃退できた。こうして傷を負った象は退散して行ったので、大勢のマラッカ人が道で小躍りしていた。ポルトガル部隊はヒンズーの人々によって町の中に道案内されて入場した。部隊はポルトガルの小旗をかなり持っていた。ヒンズーの人々と他のイスラム商人らに、自分の家の前扉にその小旗を取り付けるように与えられた。ポルトガル部隊が翌日の終日、略奪品を運び去るのに熱中したが、その町で略奪するときに、小旗を掲げた現地の人々や家族を免除したのであった。夕方になるとアルブケルケはトランペットを奏でて略奪は終わったと町に人々に知らせた。それからポルトガル艦隊は、連れ去る出来る限りの停泊中の他国船を、それも自分達が所有する船の数以上を、何度も搔っ攫った。道路には麝香や樟脳を詰めた瓶、美しい支那製磁器、彫刻のある白檀の箱などが山積みされていた。それらの価格は、本来は安いものであった。でも量が多かったので、兵士や乗組員1人当たり平均して、5千～6千・金レイス位が懐に入った算段になり、将官クラスになると、3万～4万・金レイス位に相当した。

主戦力がインドに戻る時期になったとき、アルブケルケは、自分用と国王マヌエル2世に贈る豪華な戦利品を積み込んだ、自分の旗艦“海の花”号を持つことになった。等身大の中実の銀2塊、宝石で鏤められた小象の複製品、貴重な香料を詰めたライオン彫像4体、宝石で鏤められたマラッカの玉座を含む物品は、君主に贈られるはずであった。

艦隊はマラッカ海峡を横切って航行していたが、アルブケルケの旗艦は余りにも多くの物品を積み込んでいたので、海上を辛うじて浮いていた。ちょうど半日ほど航海してスマトラの沿岸海域に辿り着いたとき、弱い突風で難破して忽ち沈没してしまった。アルブケルケと同乗の乗組員は救命ボートに乗り、救助されて他の船に乗り移った。サザビーズ(世界最古の国際競売会社でロンドンにある)の美術品競売人が1992年に、当時の価格で、海底に沈んでしまった財宝の価値を判断するよう依頼さ

## 第11章 インドとそれを越えて

れた。財宝は250億ドルと見積もられている。しかしながら非常に驚かされることだが、宇宙衛星での追跡による難破船の位置を確認するのに激しい競争が行なわれたのである。つまりその正当な所有権に関して、ポルトガルは何もない、原則的にはマラッカが地方都市である現マレーシアとスマトラが領土の一部であるインドネシアとの間で、熾烈な国際的論争にまでに発展してしまった。

アルブケルケは、大きく新たに築いた砦、兵士の駐屯部隊、何隻もの軍艦、市民の支配者をマラッカに置き去りにした。都市国家の攻略は、イスラム教徒の別の敗北以上のものにやっばりなってしまった。マラッカは、モルッカ諸島若しくは香料諸島への、中国への、日本への、つまり極東への出入り口であった。ポルトガルは、外交と交易を開始するためにビルマとタイに大使を派遣した。それらの国に歩みを固めたのは、初めての欧州人で、マラッカから来たポルトガル人であると、豪州の歴史家らが信じている。確かに今日でも、ポルトガル人の役人や商人の子孫だと自慢げに言う人々を、スリランカ、フォルモサ(*ilha formosa*)（‘美しい島’；ポルトガル語で台湾を指す）、ベンガルで会うし、マカオ、マラッカのそこでも同様に会おう。

アジアでポルトガル人の威力を増して2つの全く異質な形態が出合い、幸運に結びついたのはマラッカであった。商人から冒険者になったフェルナウン・メンデス・ピント(**Fernão Mendes Pinto**)が、東洋での自分の並外れた探検について著した書物が、17世紀の初めに出版され、また同じ時期にセルヴァンテスのドン・キホーテも出版されていた。この2つの書物はお互いに好評であった。数年も経たない内に、ピントの本、“<sup>しょうよう</sup>遊遙”(“*Wandering*”) はポルトガル語から欧州6カ国語に翻訳され、スペイン語は7版、オランダ語とドイツ語は2版、英語とフランス語は3版と重版された。彼自身の弁明によるとピントは、トルコのガレー船の乗組員によりエジプト海岸で捕虜として<sup>らち</sup>拉致され、ギリシャ人のイスラム教徒に対して奴隷競売に掛けようと南アラビアに最も近い港に連れて行かれ、残酷に取り扱われた挙句に自殺に追い込むように脅された。奴隷の持ち主はユダヤ商人に彼を再び売り飛ばした。ピ

## 第11章 インドとそれを越えて

ントを身受けしたユダヤ商人は、今度は、ホルムズでポルトガル人仲間に戻してあげた。ホルムズでピントは海軍に強制的に入隊させられてしまった。彼はトルコ軍との一連の海戦で奮闘し、マラッカに逃げ出した。そのマラッカで彼はスマトラとマレー半島の王国のポルトガル大使の仕事にありついた。マレーで彼は何人かのポルトガル人と出会った。彼らは一緒になって海賊になることを決めて、トンギン湾に停泊中のイスラム船を襲撃し始めた。

ピントは遠い南支那海、更に韓国まで帆走したが、中国の海岸で難破してしまい、放浪罪で逮捕されて、《万里の長城》の築城などの強制労働を1年間課せられる判決を言い渡されてしまった。その服役を終える前に、タタール<sup>だつたん</sup>（韃靼）の遊牧民が中国を占領して彼も捕まったが、ピントは石造りの《万里の長城》の襲撃方法をタタール人に説明したら感謝されて釈放された。

ピントが自分自身について著している以外で主張している中で、日本に初めて足を踏み入れた欧州人であったことに言及している。このために、そして他の理由から何世紀もの間彼がポルトガルで、愉快な嘘吐き者か、空想する人間か、男爵ムンヒハウゼン(Munchausen)<sup>ほら</sup>（法螺吹き男爵）として見做されるようになっていた。彼の大きな途方もない考えから、イエズス会設立者の1人シャヴィエルの、親しい随行者で且つ顧問であったと彼が言及していると、永く考えられていた。

彼の突飛さが何であれ、日本人は彼の著述の中で、本質的な真実を常に確認してきている。日本では今日、ピントは、彼の著作、上演、叙事詩や映画が作り出してきた1人の民間の主人公と捉えられている。ポルトガルから来たもっと初期の訪問者が上陸した地点でそのテーマ遊園地が彼を取上げ、最近開園した。ピントが《世界の別の末端》から日本に到着して、初めての銃を持ち込んだと信じられている。現代のアメリカ歴史家で、ロサンジェルスのカルフォニア大学のレベッカ・カツ (Rebecca Catz)教授が、ピントの著作を徹底的に再検証した。ピントが詳しく話した、ビルマ軍の国王の指揮者の中で、彼が傭兵の将官になってしまうのを空想的だ

## 第11章 インドとそれを越えて

と永い間放逐されてしまっている出来事の多くが、実際には歴史的事実と一致しているのだと彼女は示唆している。そのうえ、これらの歴史的事実は、彼が死んでその後永い間、欧州では知られていなかった。だからそこに居ないで、それらの歴史的事実をどうやって知りうるのか理解することは困難である。最近東洋でその記録が発見され、彼の著作に書かれている日付が納得できる論拠に符合していたのである。東洋の一種の教皇の宮廷に残されていた彼の書類を、比較的最近、彼の記述が、ラサのダライ・ラマ1世に驚くほど似ていると認識されるまで、彼は嘲笑<sup>あざ</sup>われた。

ピントがマラッカに戻ることに希望を抱きながら、湖南(Guangtang)で中国のジャンク船に乗りながら著作をした。大嵐が襲って来て、南西の日本の方へ海を横切ってジャンク船を駆り立てた。彼は上陸して食材用に野生動物の狩猟に出掛けた。地元民は、ある男が棒に見えた銃を肩に揚げ、その棒の一方の端から大きな響きと閃光があり、暫くして空から死んだような鳥が落下してくるのを見て、腰を抜かしてしまった。地元の支配者は彼を歓迎し、ピントは支配者のその小銃を贈った。その初めての贈物を通して、日本に上陸した最初の欧州人が、日本人に銃というものを紹介したことになる。当時の日本は戦国時代だったので、新しい技術は非常に歓迎されるものであった。

彼自身と日本の記録によると、ピントは2回日本に行っている。2度目の訪問後に旅立つときに、ある若者が老人たちの集まりから追い掛けられて来て、彼の腕の中に飛び込んで来た。ピントは彼を自分の船に押し込んで、彼をマラッカに連れて行ってあげた。若者の名前は安次郎<sup>あんじろう</sup>と言った。その船旅の間に、安次郎が逃走するのを無理強いしたなど自分がやった悪事についてピントに話した。ピントは、カトリックの告解と謝罪消滅の秘蹟について安次郎に話を聞かせてあげた。彼らがマラッカに上陸してから、ピントは安次郎をシャヴィエルのところへ連れて行った。

シャヴィエルはゴアからマラッカに移動して来ていたが、マラッカではポルトガル人がゴアで見てきたような反キリスト教徒の生き方をされていて、役人からの賄賂<sup>わいろ</sup>



## 第11章 インドとそれを越えて

を受け取り、商人によってハーレムを維持させているなどの彼らの<sup>さいごう</sup>罪業を目の当りに見てしまった。シャヴィエルは安次郎が自分の罪業を詳しく話すのを聞いてやり、謝障消滅を与えて、洗礼をした。安次郎はシャヴィエルに日本語の基本語句や良い作法などを教えた。シャヴィエルはリスボンにいる国王に書簡を書き認めた。“陛下がお送り下さった諸規則は、マラッカでは皆が無視をしています。ここで何が行なわれているのかを私は存じ上げております。私はここにて課されているキリスト教徒への抑制には何も希望を持ちえません。私はここで無駄な日々を送り、もうこれ以上の時間の浪費をしたくはありません。私は日本へ行こうとしております。日本で私は異教徒を見つけることになりましょうが、神や慈愛という彼らにとって新しい考えに心を開くことでしょう”。

ピント自身がそうしている間に神秘的な経験をした。それは修道会に平修道士として入会したときにあった。彼は自分が日本人に銃や交易品を売って獲得した資産の殆どをイエズス会に献金していた。ピントの船に2人のイエズス会の神父と安次郎を連れて、シャヴィエルが鹿児島（原著はTagoshimaとあるがKagoshimaの誤植だろう）に向けて航海をしていた。そこに着くと彼らは地元の支配者から大歓迎を受けた。日本人は“地球の反対側の端”から来てくれた神父らの話に豪く魅かれた。支配者の屋敷でシャヴィエルは、仏教の僧侶と神学について公然と討論をした。キリスト教徒の（公的）教理（の教科書）である公教要理（教理問答書）を、彼は、日本人が理解し易く、大いに関心を抱けるように考慮しながら書き表した。

日本に来て2年経った後、シャヴィエルが病気に<sup>かか</sup>罹ってしまい、ピントは彼を自分の船に乗せた。日本（原著はChinaとあるが文節上Japanであろう）を離陸しても彼の容態は悪化するばかりであった。欧州人が上陸するのは不法入国であった。黄河の南8キロ米にある小さな島に、ポルトガル人は、広東人の密輸業者との商売をするために極秘に粗末な交易所を立ち上げていた。シャヴィエルはそこへ案内されたが、もはや歩けないほどに病状は悪化していた。1人のポルトガル人の貿易業者が、彼が

## 第11章 インドとそれを越えて

身を寄せているあばら屋に彼を運び込んだ。それから凡そ3週間が経った1552年12月の始めに、シャヴィエルは命を引取った。享年46歳であった。保存した遺体には神聖なる奇跡を宿ると信じて、欧州人には知られていない支那流のやり方でも防腐処理を施されたい遺体が、その後セント・ポール大聖堂に公に展示するためにゴアにまで運ばれた。御棺の中には彼の肉体は残っていなかった。その後2年経つ前に、信心の1つの行為として、ドナ・イザベル・デウ・カロン(Donna Isabel de Caron)は彼の歯の1つを抜き取らせた。1615年にイエズス会総会長の司祭の要望もあって、肘を下の方にしたシャヴィエルの右腕をローマに運んだ。ガラスケースに納められた遺骨は今もローマのイエズス会・ジェズ(Gesù [dʒeˈzu])教会で見ることができる。1619年に上腕部と肩甲骨が切り離されて、長崎に送られてきた。特別展示開催中の最近の1859年に、他の歯の一部を抜いて、ゴアの支配者が遺族の子孫へ送り届けた。

ピントはポルトガルに戻り、リスボンからテージョ川を横切ったところに住んだ。そこで慈悲会(Misericordia)の会長を務め、その後それは現在のポルトガル慈善協会となっているが、そこで執筆活動をした。

1582年までに日本では欧州人によるイエズス会支部が45も出来、30人の日本人が司祭として任命されていた。日本全体で当時信者の数は15万人に上っていたとローマに報告されている。日本の若い学生が、マカオやゴアにあるイエズス会の大学に留学し、欧州人のバロック音楽に非常に興味を示し、その才能を発揮した。日本の港を公式に訪問して交易を開始した。ポルトガル商人は長崎を寒村から町へと興し、街を建設することによって自分らの交易量を安定させた。彼らが最も大きく貢献したことは、日本へ蚊帳かやを紹介したことである。日本人は蚊帳を利用するのに熱中し、直ぐに素晴らしい効果をもたらした。彼らはまた日本に初めて火器の製造工場を作り、欧州から鋳物製品を、インドから薬を、中国から絹織物を持ち込んだ。更に彼らは日本語に新しい外国語を付け加えた。《ありがとう》の意味であ

## 第11章 インドとそれを越えて

ポルトガル語のオブリガードは *obrigado* から *'arigato'* (原著では *origato* と書かれているが) に転じたものである。日本人は以前知らなかったパン (英語; *Bread*) は、ポルトガル語の *'pão* から *'pan* と転じている。ポルトガル人は魚に衣をつけて油で揚げる調理法を紹介したが、ポルトガル語の *'fritar'* (英語の揚げる; *to fry*) が *'tempura* (天ぷら) に転じたようだ。その天ぷらは現在、日本では人気のあるファストフードとして残っている。彼らは石造りの建築方法を見せた。長崎に1945年原子爆弾が投下されて大きな被害を蒙ったが、ぞっとするほどの損害でなく済んだのは、この石造りの御蔭であったのかも知れない。

日本人は中国で交易するのを禁じられていた。中国製絹織物への需要は非常に旺盛であり、潜在している交易によって巨額の利益が見込めたので、16世紀初めには中国の官僚がポルトガルへの売買を合法化した。黄河の河口にあり中国本土とは盛土道で繋がっているマカオ半島を、ポルトガルに永久的に借地契約することを事実上、承認した。何年も前にマカオの主だった海辺には、ポルトガル人の保養別荘が連なって並んでいた。丘の上には2つの教会とイエズス会の修道院が建っていた。日本との交易は殆どが軍備のある政府系の船であった。利得は個人のものになり、巨額の富を享受し、マカオにいる商人もまたリスボンの議会とは独立した元老院議員の中から選出した自治政府を持っていた。ゴアにおいてと同じく、マカオにおいてもポルトガル人と他の人種との間の国際結婚が標準であった。広東人の小作人の両親によって捨てられた女兒を養女にするのが、マカオの社会で流行った。彼らはポルトガル人として連れられてきて、成人すると殆どが結婚した。彼らは慈悲会によって、時には、政府機関や商館でよい働き口があり付けるような結婚相手を見つける代わりに持参金を与えられた。

広東省は絹の商売で繁栄していた。何人かのアフリカ人奴隷がポルトガル人によって個人の召使として持ち込んでいた。その奴隷は中国に逃げ込み、亡命を与えられていた。結局奴隷は多くなり、田舎の町に自分達の住宅地を持ち、ポルトガル人

## 第11章 インドとそれを越えて

よりも欧州人の商人などの通訳や売買人として良い生活費を稼いでいた。

マカオを通して中国へ、そしてインド、東南アジア、日本へ、ポルトガル人は新しい食べ物を持ち込んだ。種々のパン菓子(filo pastry)の作り方は恐らく北アフリカからイベリアに伝わったであろう。今でも家庭の台所では‘包みもの’(brik)を、パイの皮を包んでこんがりと揚げている。またイスラム支配の時代に紹介された‘サモサ’(samosa)は、コーンウォール(Cornwall)(英国の最南西端の町)でのパイのように、ポルトガルでは‘御つまみ’の定番<sup>ていばん</sup>となっている。それが中国南部やタイの‘肉入り蒸し団子’や‘春巻き’へと進化した。広東地方で繊維質の食物となった‘薩摩芋’や、絞り出すと料理用油にもなる‘落花生’も中国本土へ紹介した。中国の食べ物と調理方法に大きな衝撃を与えた他の新しい食材には、泥鰌<sup>どじょう</sup>インゲン豆(green bean)、豆モヤシ、レタス、クレソンなどがあるが、中国人は未だにこれらを‘西洋野菜’と呼んでいる。勿論‘西洋’とは中国人にとっては‘ポルトガル’を指している。海洋王国時代以外の時期にも、ポルトガル人はパインアップル、グアバ、パパイヤを中国に持ち込んだ。ポルトガル人はトラシ(小海老を発酵させて作るインドネシア発祥の調味料)の調理法を中国に紹介した。トラシは一大産業に発展し、以前は海辺の寒村だった湖南地方を忽ち豊かにしてしまった位で、今でも汁、炒め物、蒸し焼き鍋の薬味として広く使われている。

これらの調理法、食べ物、食材を新しく取り入れた中で最も目覚しいと思えることは、ブラジルからポルトガル人が唐辛子を持ってきたことだろう。唐辛子はアジアの料理で風味を出すために多く使われ、激辛な味付けをしたカシミール地方のカバブ(kebabs)(肉と野菜の串焼き料理)、タイのトムヤムクン(tom yam)とかレッド・カレーとグリーン・カレー、マレーシアのサンバル(sambal)、名高い四川(Sezuan)料理など、群を抜いて気に入られて来たし現在も続いている。これらの料理の中で最もひりひりするの、ゴアから伝わって来たヴィンダルー(vindaloo)(ポルトガル語; vinho d'alhos, Vindalho 又は Vindallo)であろう。この言葉はポルトガル語の‘大蒜入りワ

## 第11章 インドとそれを越えて

イン’の短縮された物であり、調理する前に、(天蘇や)唐辛子を混ぜたワインが入った樽の中に漬けることに由来している。

世界で知れ渡っている唐辛子風味の効いたソースは、《カレー味》であり、インドが発祥地であると一般に考えられている。その《カレー》の単語自身は、ヒンディー語の‘kuri’から由来しており、《ソース》を意味している。

何年にも亘ってインド各地の家庭(*em famille*)料理を食べてくると、多くの料理で一番の味付けに唐辛子がないことが、アジアの他国と対照して当たり前ようになってくるものだ。インド映画スター、BBC テレビ料理番組の料理人、ニューヨークのシェフのマデュール・ジャフレイ(Madhur Jaffrey)が、「チャプスイ(*chop suey*) (アメリカ式中華料理、八宝菜)が中国料理に成り下がったように、世界のカレー料理はインド料理に退化している。」と言っていた。

気候の影響もあって一部のインド料理は、欧州や北アメリカよりもより新鮮な食材を使っており、新鮮できちんとした香辛料を用いて味付けされている。カレー料理は、インドに住む英国の一般市民の召使により、家計にとって経済的なものになるように発明されたものであり、乾燥して粉末状にした唐辛子を振掛けて、実に気の抜けたような香辛料が味付けを安っぽく覆い隠すことができたこと、英国の料理研究家達の意見が一致するようになった。その合成品がインドから英国へ輸出が活況を帯び、19世紀まで英国の食べ物の一部となった。

ダビッド・バートンは自分の著書『ご馳走の支配 (“A Raj At Table”)』に、《カレー料理はポルトガル人を抜きにしては考えられない。》と書いている。ポルトガル人はブリトンらが東インド会社をそこに設立するまで、ベンガル人が多く住むボンベイを英国に割譲した。カレー料理は英国人によって(まったく本物ではない)インド風の味付けに大幅に置き換えられてしまったけれども、それが現在のポルトガルでは主流の料理になっている。スーパーマーケットのジュンボ(Jumbo)では、箱入りカレー粉末が売られている。高級レストランのメニューには、《インド・カレー

## 第11章 インドとそれを越えて

《*Caril a Indiana*》が載っていて、鶏肉か海老入りのものである。同じように、カレーソースを付けた舌平目や伊勢海老料理が、フランス料理屋のメニューに見られる。似た様な料理は本場のインドでは見つからないが、南中国人が恐ろしい位似た鶏肉カレーや海老カレーを食べている。日本の発明として国際特許を1999年にとり、日本企業がカレー味付けを探し求めて来ている。

中国からポルトガル人が《紅茶》を英国に持ち込んだ。ブラガンサ家のカテリーナが英国の国王チャールズ2世に嫁入りする時に英国に持ち込まれたといわれている。イエズス会の修道士がマカオの試験農場にて雄豚の飼育に成功してから、中国の雄豚がポルトガルに送られ、その後ポルトガルで赤身の柔らかい雄豚の養豚業が急成長する結果になった。ポルトガル人は現在《蜜柑(tangerine)》と呼ばれる小さなオレンジを自国に持ち込んだ。その名は、当時植民地であったタンジール(Tangier) (モロッコの都市) の地に苗木を植え付けられたのに由来し、日本の一地方名である薩摩('satsuma')として知られている地にもポルトガル人が蜜柑を持ち込んだ。オレンジは現在アルガルブ地方で栽培されており、南中国地方から移植されたオレンジで、欧州の中でアルガルブ産オレンジが最も美味しいという人がいる。同じ南中国地方からセロリやダイオウ(大黃)もまた欧州へ初めて持ち込まれた。ダイオウは便秘に効用があることに注目されて、欧州が便秘に悩む大陸であると信じて、うわべだけは強欲とも思える位にダイオウへ需要が、南中国地方に高まった。

## 第12章 リスボンの黄金時代、大惨事の広がり

リスボンに行ってお金を出せば何でも買えるようになっていた。ベルギー、英国、フランス、ドイツ、イタリアから、銀行家、商人、小洋装店の経営者、宝石商、裁縫師、仕立屋、帽子屋、靴屋らが続々とポルトガルに渡り、新しく且つ既に根付いている富裕さを探し求めて進出した。

国王マヌエル自身の幸運も手伝ってか、王室の規模も大きくなっていった。新貴族と呼ばれた人々は美しい絹製や亜麻布製の衣装を着飾った。宮廷伝記作家のダミアン・デウ・ゴイス(Damião de Góis)が《島の発見者トリスタウン・ダ・クーニャが亡くなった後の今でも名付けられて、大玉の真珠を鏤めた帽子を被って町を馬で回った。》と記している。国王は毎日新しい衣装を着替えていた。国王は一度袖を通した衣装は、廷臣たちに、年2回分配してあげた。新貴族は飾り立てた馬車に乗って町中を走り回った。国王自身は一頭の犀<sup>サイ</sup>と4頭の象に牽<sup>ひ</sup>かせた行列の中に入って首都リスボンを行幸した。象は膝を曲げてお辞儀をしたり、鞍に取り付けた飼葉桶<sup>かいばおけ</sup>中の水を吸い上げたり、その水を近くの人々に撒<sup>ま</sup>き散らすなどして、群集を楽しませるように訓練がされていた。象の後を、ホルムズのスルタンからの贈物である、獲<sup>ひょう</sup>った豹<sup>ひょう</sup>を運ぶペルシャ馬が追った。王族が乗った馬車は、馬に乗った貴人とトランペットや太鼓を奏でる楽団が先導していた。国王マヌエルは音楽の大ファンであった。国王自身が、昼のシエスタと夜にベッドにつくときに、夜の調べを歌っていた。《インドの館》の執務室で、文書類に目を通すときは、室内オーケストラが演奏した。パンと水だけを摂る断食の金曜日さえ、新たに告訴された被告の抗弁に耳を傾け、判決が出される刑事裁判所で、クラヴィコード(ピアノの前身)とフルートの伴奏があったが、その日の中で一番充実した時間を国王は過ごした。その日の午後

## 第12章 リスボンの黄金時代、大惨事の広がり

には、テージョ川でボート乗りに出掛けていた。宮廷伝記作家ゴイスは《その小さなガレー船は、日よけが付き、内装は絹地の総張りであり、傍には音楽家や事務処理をする全ての分野の役人が乗りこんでいた。》と引き合いに出している。

《自分の室内音楽と、自分の礼拝堂のために、国王は欧州のあらゆる国々から有名な演奏者をかき集めていた。気前良く出演料を支払い、贈り物を与えたので、世界中で一番の演奏者と聖歌隊を抱えることが出来た。》とゴイスは書いている。夕方になると国王はちよくちよく舞踊会を催した。参会者の中には音楽家もおり、更に喜劇役者も居て、貴族や司教らを風刺しても男<sup>おと</sup>咎<sup>が</sup>めが無かった。式典を取り仕切る団長はジル・ヴィセンテ(Gil Vicente) (劇作家・詩人で自作の劇を宮廷などで演じた。当時は劇場がまだなかった。)であり、ポルトガルの劇作家で最も偉大な人物と現在でも思われている。同時代のウィリアム・シェクスピア(William Shakespeare)と彼を比較しようとするのは癩<sup>しかく</sup>に障<sup>さわ</sup>るかも知れないが、彼のスタイルは愛らしかった。彼は大いに楽しみ、表現の自由を十二分に駆使して当時の英国での話題を取上げたことが、恐らくは首を切られる嵌めになったのであろう。彼の初めて記録に残る作品はキリスト降誕劇であり、羊飼いと王様が、特有の、喜劇的な性格を持っていることが明らかに同時代に基づいており、欧州では永い伝統を持つ中で初めての演劇であった。道化師という人材を温存していながら、直ちに実物大の模型の劇にまで発展させた。妻を家庭では実質上四人のように扱<sup>こきつか</sup>いながら、一方自分たちは、全員ではないけれども街に出掛けては私通をし、ありとあらゆることをしていた貴族の姿を生々しく描写した。国王マニエルがお気に入りのヴィセンテの風刺漫画的戯曲は、説教壇で司祭が道徳律を説く内容だったのに、実際は恐喝や強要に近いものだった。

国王マニエルは、巨大で豪華なオペラハウスと新しい宮殿を、リスボン西の海岸通りに直ぐ接しているベレンを見渡せる丘の上に建てた。このプロジェクト企画者は高名な建築家、石工、腕のある職人をカスティージャ、イタリア、フランスから見つけ出して採用した。その中でも最も傑出した人物は、ポルトガル人で、マテウ



## 第12章 リスボンの黄金時代、大惨事の広がり

ス・フェルナンデス(Mateus Fernandes)、ディアーゴ・デウ・アルーダ(Diago de Arruda)、ディアーゴの息子フランシスコ(Francisco de Arruda)の3人であった。がしかし他国から来た人物を含めてその中で、フランスのラグドク (Languedoc [lɑ̃gdok]) から来たディオゴ・デウ・ボイタック(Diogo de Boitac)が多分ダントツであったであろう。彼らは一緒に華麗な後期ルネッサンス建築様式をマヌエル様式と言わしめるまでに昇華させた。新しい建築様式を編み出したものではなく、技法そのものはゴシック建築様式を踏襲している。控え目に言う訳ではないが、古典的な彫塑や装飾が、国王マヌエルが総団長であったキリスト修道会 (後にテンプル騎士団と名称が変わった) の神秘的な象徴によって取って代わられた。これらは、鳥類、野生の動物や植物など自然界を描写した曲線と、聖書に出てくる情景をときには配置して、それらを組み合わせられていた。

マヌエルは、トマルにあるテンプル騎士団の大きなお城の形をした修道院を再建し、セツバルに有名な、3つのネーブを持つ教会の建設し、バターリャの大聖堂に自分の王朝を祭る神殿を建設するよう注文した。宮殿の下方に位置するベレンのテージョ川の真ん中に、ヴァスコ・ダ・ガマの初航海を記念して塔を建立した。その塔の後ろ側に、大庭園を越えた所に聖人ジェロニモの修道院ジェロニモスの建立を注文した。この国立聖堂は南欧州で最も有名な建築物の1つと目されている。ボイタックにより建造が始められ、彼の死後、イタリアで修行をしていたスペインの建築家ディオゴ・デウ・トラルヴァ(Diogo de Torralva)に引き継がれた。建設資金は東洋の香辛料交易に5%もの特別税を課して捻出された。その建造に係わった石工の多くはインドから来ていた。ポルトガル流儀式に使われる生活のなかで、リスボンの大聖堂より中央の位置を占めている礼拝堂の太い柱が、恰も椰子の木の樹幹のように、アーチ形天井が恰も椰子の葉のように、飾り立てられている。2層式の修道院回廊は、現在ヴァスコ・ダ・ガマを記念しているだけでなく、20世紀の詩人フェルナンド・ペッソア(Fernando Pessoa)も含めてポルトガルが輩出した最近

## 第12章 リスボンの黄金時代、大惨事の広がり

の偉人も記念している。香辛料の交易時代には、ジェロニモスの修道士は、色々な活動をする中で、アフリカやアジアから連れてきた子供達のための学校教育活動もしていた。その子供達には、王子、戦争孤児、奴隷などが含まれていた。彼らの出目や、また彼らがそこに来た悲劇的な環境が何であれ、その多くがエリートの一員としてすくすくと育って行った。人種の調和という道徳律は植民地では維持されなかったが、リスボン魂として、なくてはならない部分であった。

まだまだお金がリスボンに流れ込んでいた。《インドの館》の会計院は、今や王宮の1階のフロアーを占めていた。《外国の商人が、金が入った鞆を抱えて、香辛料を購入するために会計院に来て、受付の事務員から「今日受け取った金額では足りないので、明日またもっと持参して出直して欲しい」とだけ言われているのを度々見掛けた。》と宮廷伝記作家が書き残している。メディチ家はポルトガルの独占的な主要銀行であり続けてきた。ローマでは、偉大なロレンツォ(Lorenzo of Magnificent)の子息ジョヴァーニ・デウ・メディチ(Giovanni de Medici)が教皇に選出され、レオ10世の王位に就いた。国王マヌエルの銀行統括者がカトリックの精神的な指導者になったことになる。それは欧州だけに留まらず、ポルトガルのアフリカ、アジア、アメリカにおいてでもあった。ジョヴァーニは37歳であったが、まだ司祭に任命されておらず、数週間経って機会を見計らって許可が下りた。国王マヌエルはトリスタウン・ダ・クーニャを、貢物を持たせて送り込んだ。

トリスタウン・ダ・クーニャ、家族郎党、友人と随行者がフローレンスの近くに上陸した。香辛料交易の新しい主人が、イタリア中を、派手な格好で行列を作って歩いた。贈物を一杯詰めた大きな箱を象に運ばせて先導し、それから音楽隊が続き、その行列をひと目見ようと集まってきた群衆に向って金貨をばら撒きながら貴人が後に続いた。エテルナルの町に近づいたとき、枢機卿が彼らに挨拶をしようと馬に乗って向ってきた。クーニャらの一行はカステル・サント・アンジェロヘエスコートされた。そこで新任の教皇が彼らを待ち受けた。教皇への主たる貢物は、教皇

## 第12章 リスボンの黄金時代、大惨事の広がり

用法衣一式であった。《法衣の全てに金子が織り込まれ、高価な宝石や真珠が鏤められていて、ちょっと見ると金で出来た衣装のように勘違いするほどであったし、宝石と真珠は柘榴の実のような形で結ばれていた。絹地の幾つかの箇所には、我々の救世主、聖人、12使徒の顔を金子でもって刺繍がされていた。法衣は磨かれていないルビーでもって縁取りされていた。原材料は高価なものばかりであったが、出来栄えはもっと素晴らしかった。》と年代記作家が書いている。

国王マニエルはまた1頭の犀を船便で教皇宛に送り込んだ。それがフランス沿岸沖で難破し、犀はそこで溺死したが、マルセイユ西の海辺に打ち上げられた。その亡骸に綿の中に詰めて防腐処理をしたが、あのアルブレヒト・デューラー(Albrecht Dürer)の有名な絵画の題材となったのである。当時のポルトガル貴人の数家族がローマに邸宅を建てた。そこはピアザ・ナヴォナの近くで、今でもポルトガル人街として知られている。ピアザ・デラ・ミネルヴァにあるフォンセカ家の宮殿は、190室もある5つ星高級ホテルに現在なっているほどの規模を誇っている位である。

遡って見て私は若干呆然としたが、この贅沢ともいえる説明によってポルトガル人が知識の進歩に貢献してきたことを概観するのが容易になったであろう。地図や地球儀をポルトガルから外へ伝えたことは、不法なことであり、厳格な刑罰を負った。このことが密輸貿易を盛んにさせ、巨額の移籍金に目が眩んでリスボンの地図製作者が国外に逃亡するのを助長させてしまった。イエズス会修道士や一般のポルトガルの旅人が著した書籍が広く翻訳され、欧州中で愛読され、世界中の知識を初めて知ることになった。ジョアン・デウ・カストロ(João de Castro)によって発展した、城壁などを破れる装薬した大砲や船舶用羅針盤から、石造りの建造物をプレハブ式にするまでと、主だった技術革新があった時代であった。数学の分野では、リスボンのペドロ・ヌネス(Pedro Nunes)が代数学で新しい論文を発表し、欧州の中で一躍名声を博す結果となった。

最大の技術革新は恐らくは薬であったといえるであろう。ポルトガルのイエズス

## 第12章 リスボンの黄金時代、大惨事の広がり

会修道士がアジアと接触した初めの頃から、アジアで発見した薬草について研究を重ね、臨床してきたか、更に日本人が蚊帳をポルトガル人から教わり導入して感謝の念を思い出していることを既に我々は理解してきた。ポルトガル人はマラリア菌の媒介体が蚊であることを突き止めた初めての欧州人であった。古代ギリシャ人で有名な医者ヒポクラテス(Hippocrate)が、高熱病に罹っている人々に囲まれて過ごしていて、彼らがちよくちよく死んでしまったが、その原因を掴めなかった。時代が変わって、アフリカに住む英国人が、隣近所に住むポルトガル人からの、科学的な根拠を持っていなかった《注意》をあまり気に留めていなかった。ポルトガル人は地元のアフリカ人との混血を繰り返した結果、自然と備わった免疫性があるに違いないと彼らは言い触らしていた。英国人は、昆虫から何も防虫対策を取らないで睡眠を取り、淀んだ湿地帯で野生の鴨の狩猟に精を出す生活を続けて、病気で死んで行った。

ゴアに住むポルトガル人の医者ガルシア・デウ・オルタ(Garcia de Orta)は、インド人やペルシャ人の医者らと科学について多く対談をして生涯を送った。しかしながら(患者から)問診をし、全てに仮説を立て、薬を試験的に投与することもしなかった。1563年にゴアで初版が発行された『薬概論(“*Compendium of Drugs*”)』は、科学的な内科医学で画期的な書物であった。その中で彼は、古代ギリシャ原典に則る欧州人医者に見られる職業人に成り切ることを軽蔑している。彼の本が創り出した物凄い動きのために、我々が英国の女王エリザベス1世に見出せるように、彼女も含めて、多くの欧州人の君主が競ってポルトガルの医者を、ある程度は雇ってしまった。

当時のポルトガルの文化的地位がどうかを自分自身で展望してみて、自分たちは人間愛には後ろ向きで、科学技術に向って進んでいると理解していた。学生をローマやフローレンスに留学させたのは勿論のこと、国王マニエルは、ポルトガル人学生が利用出来るような立派な学寮をパリ近くに買い入れた。サラマンカ大学(121

## 第12章 リスボンの黄金時代、大惨事の広がり

8年スペイン最古)、パリ大学(1211年)、アントワープ大学、遠くはオックスフォード大学(1096年)やエジンバラ大学から学者を招聘してコインブラ大学の教授仲間として採用した。宮廷では公用語をポルトガル語からラテン語に置き換えた。《自国語を辛うじて喋っている貴人の子弟が、今やラテン語の読み書きが流暢になっていた。》と同時代の作家が書いている。ジル・ヴィセンテと後継の芸術家の、ポルトガル人による風刺戯曲や喜劇が、古代ギリシャ語の悲劇をラテン語に翻訳して重苦しい上演作品への道を引き渡した。

国王マニエルは1521年のクリスマスを前に、熱病がもとで、52歳で亡くなった。ポルトガルとアルガルブの国王として王位に就いてから、《航海王、エチオピアとアラビアとペルシャとインドの征服王、商業王》の称号を戴いて死んだ。《食料雑貨商の国王》として、他の欧州では知られていた。彼の統治時代には、ポルトガル人はオランダ人、英国人、フランス人、とりわけ、スペイン人によって感心されるようになったばかりでなく、妬み<sup>ねた</sup>を持たれるようになっていた。偉大な君主の死去に伴い、ポルトガルに、更に関連してポルトガル帝国に、どんな破滅が降り掛かっているのかを見ようと、彼らが禿鷲<sup>はげわし</sup>のように様子<sup>うかが</sup>を窺い始めた。

マニエルは2度も鰥夫を経験し、彼が死んだときには、スペイン帝王の妹妃レオノーレ(Leonore)との3度目の結婚を婚約していた。リスボン議会の元老院は、君主の19歳の国王ジョアン3世(João III)が、亡き父君の代りにレオノーレとの婚礼を勧め、せめて彼女が持って来た巨額の持参金をポルトガルは返すべきではないと意見したが、ジョアンはそれを断った。更にレオノーレと持参金をスペインに返したばかりか、彼の妹妃イザベルを国王チャールズと結婚させようと遣わし、スペインの王位に前例のない90万金ドブラスもの持参金を支払った。スペインが獲得する前の香料諸島を発見して交易独占権を持ったことの補償費として、ジョアンは特別処置として35万クルサードスをスペインに償<sup>つぐな</sup>った。

自国で国王ジョアンは、父君の時代の、新たに貴族に列させた人々、固定した報

## 第12章 リスボンの黄金時代、大惨事の広がり

酬と住まいを与えて雇い入れた数百人もの家臣たち、マニエルが地方行幸時に、哀れっぽい身の上話を喋ろうと待ち伏せていた小作人、リスボンへ行けて宮廷の閑職に有り付けさせると約束をしてしまったような人々などで膨れ上がってしまった、実に広大な宮廷を相続した。田舎地方は今もお黒死病で人口が減少して、畑地は休耕地が殆どになった。食糧が大量に輸入されるようになっていた。一方では、東洋との香辛料交易は落ち込んで不景気になった。イスラムからの盗賊や略奪することが不道徳であるどころか神に喜ばれていると、カトリック教徒であるポルトガル人が丁度考えていたときに、新教徒の倫理観が北欧州で芽生えて来て、ポルトガル・カトリック教徒の貨物船に対する略奪行為が、神の力で賛美された1つの冒険とみられた。西フランスの港から来たユグノー（フランス・カルヴィン派の新教徒）の海賊が、大西洋の南北の間の斜めにあるアゾレス諸島を荒らし回した。ジョアンの統治時代に、何と3百隻以上ものポルトガル船舶を拿捕していた。彼らが略奪して手に入れた香辛料や宝石類をポルトガル人と競争して売るときには、ポルトガル人自身にほんの僅かの利益が上がる程度に安値の市場価格に設定していた。

ポルトガル国家が、ますます無駄になった大きな海軍の出費を負担し続けている間に、まだ利益があった殆どがもっぱら個人の懐に入ってしまった。ポルトガルでは私的財産を持つ誰もが、国王マヌエルによって実質的には税金の支払いを免除されていた。その彼らに課税することができないと分かっていた国王ジョアンは、アントワープにある金融市場に国債を売却し始め、さらにまた国債を発行することによって利払いに充て始めた。王立収入役が国王宛に《私の目の前に、実に多くの絶望の根拠が現れてくる》という書状を書いている。ポルトガルの国庫預金の評価額は、アントワープの銀行家が年率25%という貸出金利を要求する位に低いレベルに落込んでしまった。そんな中、1557年に国王ジョアンが亡くなった。ポルトガルの国債は、今日でいう《差押さえ品》として金融市場では知れ亘る結果になり、全てが額面の5%で買手と取引されるという国債に成り下がってしまった。

## 第12章 リスボンの黄金時代、大惨事の広がり

ジョアンとも呼ばれた国王ジョアン3世のごく近い相続人は、ジョアンの死より前に、16歳の若さで、多くの皇族と同じく黒死病で亡くなってしまった。彼は14歳のときに、スペインの皇女と結婚した。ジョアン3世の死後、1ヶ月より少し前に王子セバスティアンが生まれた。

セバスティアンが王位を譲り受けたのは3歳のときで、母君と一緒にスペインに居た。母君は王子を連れてリスボンに急いだ。そのとき彼の祖母が摂政の職務を執るべきと合意がなされ、1562年に祖母は、枢機卿エンリケ(Henrique)でリスボンとエヴォラとブラガの大司教であった、セバスティアンのおおじの後押しで跡を継いだ。リスボンの元老院は、セバスティアン(Sebastião)の、スペイン王家の母方がポルトガルの君主制形成の世話をすべきとの考えに異論を唱えた。《古いポルトガルの慣習に従った国王の至上権、それは、ポルトガル人らしい衣装を纏い、ポルトガル料理を食し、ポルトガル流で騎乗し、ポルトガル語を喋るという、全てに亘ってポルトガル人として行動すること》を、教育するためにイエズス会修道士の1人をセバスティアンの家庭教師として付けて、修道士がそれを教授すべきと、元老院が注文をつけた。

元老院はセバスティアンを宮廷から疎開させようともした。それは、彼が負債を負うこともなく、返済すべき他の贈物を受けることが出来ないように、町の反対側にある御料牧場ごりょうばうに彼を落ち着かせるというものだった。精力的に身体の運動をこなして病気に打克とうという執念を持たせようという決断をした位に、彼は病弱な児童であった。これは軍事教練と戦闘訓練から成り立っていた。彼は自分自身を《イスラム教に対抗するキリスト元帥》と見立てて成長していった。彼は1568年、自分の14歳の誕生日に君主としての権力を手中におさめることになった。数ヶ月も経たない内に、彼は、おおじの枢機卿が選んだ大臣らと喧嘩をして、大臣らを首にしてしまい、自分の年齢に近い他人を任命してしまった。彼はその大臣らを引き連れて、アルコバッサの修道院にあるアヴィス王朝家の大霊廟れいびやうにお参りに行ったと

## 第12章 リスボンの黄金時代、大惨事の広がり

宮廷伝記作家が書いている。セバスティアンはお骨を崇めることが出来るように、先祖のお墓を開けるように命じた。彼はアルコバッサからエヴォラに向い、異端者の嫌疑を掛けられた17人の火炙り公開処刑を目撃するために中央広場に行った。このことが、彼が、異教徒のモロッコをキリストのために征服しに行こうという考えを思い付いたと言われている。その派兵に必要な資金の一部を捻出するために、ユダヤ教徒や他の異教徒に、火炙り刑にされる危機にあるから、それを免除してあげると思い込ませて工面したりした。彼はドイツの銀行家コンラッド・ロース(Conrad Roth)から、略奪からの予想できる利得を担保にして更に借金をした。彼の取り分を不満に感じたロースは、ドイツ兵2千6百名と国王セバスティアンを乗せた船をリスボンに向かって出帆させた。それから英国の探検家トーマス・ストウックリー(Thomas Stukeley)卿が、ローマからアイルランドへ帰る途中リスボンに立ち寄った。彼の率いる艦隊には、歩兵、弓引き兵、大砲を積み込み、英国人新教徒の君主制に対してカトリックのアイルランド人が立ち上がるのを導くよう、教皇から彼に任されていた。リスボンに彼が到着したことは、国王セバスティアンにとっては神からの賜り物のように思えた。

24歳になるまでにセバスティアンは侵攻勢力を増強していた。船団の見送りは祝祭日だった。全部で2万4千もの乗組員が5百もの船舶に乗船してモロッコに向けて出帆した。彼らの国王の明示された命令に対しては、アレンテージョからの4個連隊、ポルトガル人の傭兵2千、アンダルシア人の無給新兵1千が、そして騎馬隊1千5百、神の偉大なる栄光のための戦利品を運ぶ驢馬ろばの荷車と荷車屋1千がその中に含まれていた。侵略隊一団がモロッコの海岸に到着した時でさえ、アルジラでは、その一団を取り巻くその雰囲気はずっと続いた。6千人以上にも上る幕営時の随員を伴って連れてきていた。その随員はあらゆる階層に跨っていて、地主階級の公爵夫人からリスボンの売春婦まで、更に従僕、執事、従者、司祭であった。

アルジラでは、総督が、彼らが更に南下してきたら交戦するから、大きな軍隊が



## 第12章 リスボンの黄金時代、大惨事の広がり

来るのを待っていると彼らは宣戦を受けた。国王セバスティアンに先導されながら彼らは南へ行軍した。それは丁度1578年8月であった。5日後には、彼らは焼けるような真夏の暑さでヘタヘタになり、食糧と水は殆ど底を尽いてしまったが、それとは反対に、元気で、十分に食糧を持ち供給され、戦闘準備が出来ているイスラムの部隊と対峙しているのに気付いた。イスラムの歩兵部隊と国王セバスティアンの歩兵部隊とが2対1、騎馬隊は10対1と多かった。付け加えて言うならば、イスラムの部隊は、7千の弓引き兵士を抱え、大砲の兵卒であった。数時間の戦闘で、セバスティアンの部隊は1万5千の兵士が殺されてしまった。その中には、セバスティアン自身とトーマス・ストウックリーも含まれていた。イスラム兵士は8千人以上捕虜とした。その多くは幕営地の随員であり、その後奴隷として売られてしまった。百人より少ない者がタンジールに脱走を図り、そこからポルトガルに戻るために出帆した。

セバスティアンの大おじ枢機卿エンリケ(Henrique)は、次の王位を得る見込みであり、そう思っていた。彼が相続人を持たなければ、アヴィス家という偉大なポルトガル王朝が最期になってしまうから、自分が余りにも歳を取り過ぎていたにも拘らず、自分の結婚を特免するようにとの請願書をローマ教皇に送った。ところが教皇が熟考する前に、エンリケ枢機卿は死んでしまった。スペインの新王の国王フィリッペ2世(Filipe II)が、公爵アルバ (Alba)の下、僅かな手勢を引き連れてリスボンに急派された。その無防備都市の市民はあっという間に包囲された。ポルトガルはスペインの支配下になってしまったのである。

## 第13章 異端審問所の到来、ユダヤ人の追放

15世紀末以前までは、ポルトガルは欧州の中で、ユダヤ人を国外追放しなかった唯一の国になっていた。13世紀にはユダヤ人は英国から国外追放を受け、14世紀に入るとフランスから、更にドイツ、ポーランド、ロシアから次々と追放されてきた。スイスでは、何百名ものユダヤ人が火刑に処せられた。イタリアの幾つかの都市国家においては、ユダヤ人には生活権が与えられていたが、それでも囲いのある居留地構内又はユダヤ人街にのみ許されただけであった。ユダヤ人は儲かる交易や、(医師等のような) 専門家になることを禁じられ、政治活動や市民権も否定され、もし従わなければ罰を科せられていた。この例外は、《教皇が未だにローマの俗事の支配者であった頃の、統治の権利と抵抗を伴いながらも‘イエスの民’(つまりユダヤ人) を教皇がローマの地に与えた。》ということであり、それは有名である。

ポルトガルでのユダヤ人は、《西部の人》を意味するセファルディーム(スペインを意味するヘブライ語: 世界史リブレット「スペインのユダヤ人」西哲行著、山川出版、10ページより引用) として知られる。ユダヤ人がバビロン捕囚のときに奴隷にさせられた貴族階級の系統を引いていると、ポルトガル人は信じてきていた。第1章で見てきたように、旧約聖書の中にタルシシュに関する幾つかの参考記述があり、それをポルトガル人は信じて来たと、タルシシュの地がイベリア半島大西洋側の南にあったと、今日でも信じる者が多い。紀元後72年、ローマ帝国がエルサレム神殿を破壊しエルサレム崩落した後、イスラエルからの新しい避難民が辿り着くまでは、この地にはユダヤ人が永住していたらしい。ユダヤ人に関して記述がある最古の文献は、紀元後300年の勅令である。その土地を賛美し、またユダヤ人と結婚している司祭の代わりに、ユダヤ教指導者を持つことをキリスト教徒の小作人に禁じたのがこの勅令で

### 第13章 異端審問所の到来、ユダヤ人の追放

ある。そのような禁止令が例え否定的であれ、近隣のユダヤ人のみならず、宗教の平等性についてもまた、キリスト教徒によって広範囲に許容されていた論証を提起する必要性を、司教らは感じ取っていたに違いない。

その後続く数世紀の間にユダヤ人が、キリスト教徒が殆どを占めるポルトガルに印刷技術も含む恩恵を<sup>もたら</sup>齎した。ポルトガルで初めて出版された書物は、ファロに住むサムエル・ガスコン(Samuel Gascon)の印刷によるものであり、それは1487年であった。ユダヤ教指導者エリエゼール(Eliezer)が、リスボンで印刷したのが1489年であった。欧州を越えての探検が達成できなかったのを除けば、医学、数学、天文学などの学識分野において彼らは実に優れた才能を発揮した。13世紀終りから14世紀初めにかけて、国王ディニスの統治時代以降、ユダヤ教大指導者は宮廷で傑出するものが多かった。宮廷内で、ユダヤ教大指導者と、大司教と小修道院長の間に生じた軋轢<sup>あつれき</sup>で有名なものとしては、占星学の実践の有無のみであった。枢機卿の反対を受けて国王ディニスの戴冠式が遅れたのは、彼の時代の、ポルトガルのユダヤ教大指導者が彼に《天体の合体が起きる不吉の占いが出ている》と助言したのが本当の理由であった。ポルトガルの国王は、外国に派遣する大使にユダヤ人を多く登用してきている。彼らが、礼儀作法が良くして語学能力に長けていたからであり、特にイスラム圏の諸外国では、キリスト教徒の大使よりも歓迎され且つより多くの信頼を勝ち得ていた。北欧州やアジアも含んで多くの世界各国では、ポルトガルはユダヤ人の国家ではないかと度々思われていたほどである。

ユダヤ人は、金細工師として働き、宝石業を営むことを単に許されたばかりでなく、寧ろ奨励されていた。これらの工芸・同業者達を統制するギルドは、キリスト教徒とユダヤ教徒の委員が同数の委員会を発足させていた。キリスト教徒による当局は、ユダヤ人がキリスト教徒とは違った、家族の伝統や共同社会規範を持っていることを認め、ユダヤ人自身の持つ律法に従うことを許していた。

ユダヤ人は、ユダヤ教の食物戒律(カシュルット；牛、羊、山羊の肉、鶏と七面鳥は適性で清

### 第13章 異端審問所の到来、ユダヤ人の追放

浄な食物コシエルとされ、鱗と鱈のある魚は摂取できるなど：192ページ前出文献の8、9ページより一部引用)を遵守し、ユダヤ教会(シナゴーク)で礼拝をする一方、礼拝式用言語としてヘブライ語をポルトガル語に取って代えた。ユダヤ人は、キリスト教徒の市民仲間と事実上見分けが付かないように住み、衣装を身に付けて振舞っていた。貴族階級の爵位をユダヤ人に授けるときには、公平で全体のバランスを取っていた。キリスト教徒とユダヤ教の友人同士が相互に休日を利用して、贈り物を持参して訪問し合っていた。その贈り物は、籠に入れた果物、色付けした茹で玉子が多く、ユダヤ教徒がキリスト教徒の家を訪ねるのはクリスマスに、キリスト教徒がユダヤ教徒を訪問するのはハヌカ祭(ハスモン家の人々によるエルサレム神殿の再奉獻を記念する祭：「ユダヤ教」Norman Solomon 著、山我哲雄訳、岩波書店、103ページ)と過越祭(ペサハ祭)(エジプトでの奴隷生活からの脱出を祝う。春の祭りで大麦の収穫祭：前文献の95ページ)が多かった。

このユダヤ人に対する安全保障や彼らの価値を見出す雰囲気、ポルトガルに住むユダヤ人を文化の面でも知的な素養の面でも何処のユダヤ人にも見られない高度なものにし得たのであろう。リスボンにあったユダヤ人アカデミーから、著名な医師、植物学者、地理学者、数学者、法律家、神学者を輩出したばかりか、小説や韻文の世界で新しい書式を作者が開拓して先駆者となり、それらが後に非ユダヤ人の作者に影響を及ぼし、特にオランダやドイツで華を開かせる結果に繋がって行った。

この創造性の高い文明化の雰囲気が壊れて、寛大さと尊敬の念が激しい迫害に置き換わったことは、疑いもなく最悪な結果を齎すことになった。それはポルトガルがスペインからの影響を徐々に受けて苦しみを味わい、それからスペインによる統治期間を経る結果となった。3人のスペイン国王統治下の、ポルトガル自身の《バビロニア捕囚》は60年間も続いた。ユダヤ人はやがては母国に帰ることを受け入れられることになったが、何と1834年の自由革命の後になった。しかしスペイン人の直接の弾圧を受けてスペインから、知識や国際的な連絡網を持って、オランダや、更にオランダから英国へ移動した多くのユダヤ人は、ポルトガルの直接の費

### 第13章 異端審問所の到来、ユダヤ人の追放

用を使って、オランダ帝国や大英帝国を創りあげるのに本質的な、天来の着想を持つようになった。

比較的平和で繁栄していた数世紀後の、カトリック君主のフェルナンドとイザベルの統治下のスペインでのユダヤ人は、王家の信教であるカトリックに改宗するよう強烈な圧力を掛けられるようになった。彼らが特別に宗教的な悪感情をどのみち持ち合わせていなかったのも、寧ろ仕返しに転回した。ユダヤ教の偉大な神学者モーシェ・ベン・マイモーン(Maimonides)の評議会を他のユダヤ人が解任を求めた。イスラム熱狂徒が強制的な改宗を試みていた早い時期では、《特に家族に責任を負う立場にあって自分の心の中に他人を育てている間に、自分の声で信仰を告白して改宗する人生の選択は正しい。》とマイモーンは教えていた。その動機はどうか、そして変化に富んでいたが、ユダヤ人に見られた改宗は、ユダヤ教徒としてあり続けるならば、1478年に最悪な脅迫と向かい合うことになってしまった。その1478年は異端審問所の開設の年であり、キリスト教徒であるとの告白が正直なものかを取り調べる目的で始まったのである。8年後には、7百人もの偽キリスト教徒への改宗者が火刑に処せられた。ユダヤ教徒であり続けた人々は、計り知れない皮肉を込められながらも、拷問室と火刑の死から逃れることが出来た。

1480年には、ユダヤ人はキリスト教徒の社会ではもはや生活できないところまで追い込まれ、隔離したユダヤ人街(ゲットー)に移り住まねばならなくなった。コロンブスの探検の年として良く知れわたっている1492年には、ユダヤ人は改宗するのか、それとも異端審問所<sup>ひん</sup>で危機に瀕して即座に処刑されるのか、若しくは国外追放の運命に遭うことになった。多くのユダヤ人はポルトガルで避難場所を探すのを選んだ。これは名目上改宗したというユダヤ人が多く含まれていた。

国王ジョアン2世のポルトガル王位についてユダヤ人が寛大な歓迎を決してしていないとある歴史家が批判してきている。スペインから逃亡してきた6百世帯のみが、1世帯当たり1万クルサードのお金を1回だけ支払えば、永住権を獲得できた。

### 第13章 異端審問所の到来、ユダヤ人の追放

その他のユダヤ人は、その目的で設立された6箇所ある国境事務所で、1ヶ月当たり1クルサードの手料を支払って8ヶ月間有効な通過査証を発行して貰ったが、その期限までに何処か新しく住む場所を見つけ出さねばならなかった。凡そ6万人ものスペイン系ユダヤ人がポルトガルに入学してきた。セファルディーム（前出192ページ）研究・アメリカ協会会長でユダヤ教指導者ダヴィッド・アルタベ(David Altabé)が、ジョアンとキリスト教徒同志を非難から免れさせたいと考えた。《ポルトガルに住む多くのユダヤ人は、スペインからの国外追放を受け入れることに疑念を抱いていた。スペイン系ユダヤ人がただ一時の滞在を許されるよう国王に推奨したのは、実はユダヤ人であったのだ。》とアルタベが書いている。

リスボンのユダヤ人共同社会の指導者は、スペイン系ユダヤ人の大人数が一気に流入してくるのを最も恐れた。全てのスペイン系ユダヤ人の永住を許したとしたら社会の均衡が崩れ、近所に住む非ユダヤ人との間で衝突する危険性を孕むと心配したに相違ない。

幾人かの難民はリスボンから彼らを連れ出すための船をチャーターした。難民が残った財産を明け渡さないならば、財産を荒涼とした国に捨てていくようにと脅す船長からご慈悲を読み取った。ユダヤ人は金や宝石を飲み込み胃の中に入れて運び出し、胃を切り開いて金などを取り出すのではと幾人かの船員が喋っていた。1493年の冬、ユダヤ教指導者ユダ・チャグヤット(Juddah Chagvat)がチャーターした船に会衆250人も乗せて連れ出した。彼らは4ヶ月間、港から港へ渡り歩いて航海したが、彼らがリスボンの黒死病を持ち込むのではと、至るところで、ただ追い払われる顛末であった。彼らの船は、マラガ（スペイン南のアンダルシア州）へ連れ出して、ユダヤ人が改宗するまでユダヤ人に食べ物か水を与えないという狂信的な司祭に身代金を払って身受けして貰う海賊に拿捕されてしまった。百人は屈服したが、50人は飢え死にを寧ろ選んで死んだ。生き延びた百人はモロッコに逃げ出したが、ベルベル人によって誘拐されてしまい、フェシに住むユダヤ人の奴隷として売られ

### 第13章 異端審問所の到来、ユダヤ人の追放

て、その後解放された。リスボンに居残った大半のスペイン系ユダヤ人の通過査証の期限が切れて、監禁されてしまった。

国王マヌエル1世が王位に就いて初めての公務の1つが、これら監禁されたユダヤ人の解放を命じることであった。しかし、次に取った処置は、フェルナンドとイザベルの娘である王女イザベルを嫁がす相手探しであった。国王マヌエル1世の希望は、それによって自分と相続人がスペインの王位を継承することであり、同様にポルトガルの王位を継承することにあつた。フェルナンドと王女イザベル(Isabel)は特にポルトガルの広さがスペインのやっとなら5分の1であつたけれども、お金持ちの点では無数倍であつたポルトガルのために、この方向に行くようにと考えていた。姻戚による彼の王位継承権は、結婚式を挙げる前には、ユダヤ人なら誰でもポルトガルを免れると力説した。これは、カトリック教徒の君主の子供が外国の王室と婚嫁を挙げる時の、普通の条件であつた。英国の王位継承者・国王ヘンリー8世に嫁入りするもうひとりの王女カタリーナ(Catarina)の必須条件として、父君国王ヘンリー7世から《英国に居るユダヤ人は、殺されるか国外追放になる》という‘引き受けの文面’を得ていた。ユダヤ人が英国に居住することを1世紀半前から禁止されていたので、これはうわべの話に過ぎなかつた。

国王マヌエルが直面していた苦境は本当に実在した。後の件で、国王マヌエルはしようと望んだし、その最も価値を見出せる実に多くの市民の国を取り除くべきであつた。彼が選んだ解決策は幾らか空想的なものであつた。第1に、1497年の復活祭の日曜日までにカトリックに改宗していない全てのユダヤ人は直ちに国外に出なければならないと命じた。第2に、全てのユダヤ人の出国を禁ずる命令を發布した。第3に、復活祭の日曜日の朝に、見つけ出した全てのユダヤ人を検挙してから教会に連行して、聖水を殆ど無秩序に彼らに撒き散らして洗礼式を挙行した。でもある者は抵抗したようだ。同情するキリスト教徒の友人の手助けで、自警団員から身を隠したごく少数のユダヤ人もいた。数人は自殺をしたと云われている。自分

### 第13章 異端審問所の到来、ユダヤ人の追放

の子供が洗礼されるのを護ろうとした親から子供を引取り、国王の出資で運営されている男子修道院や女子修道院へ教育を受けるために送られていった。これらの何人かは、サウン・トメ・アンド・プリンシペ諸島に殖民するために出帆し、そこで砂糖工業を興した。国王マヌエルの布告により、1497年の復活祭の日曜日から、ポルトガルに住む全てのユダヤ人は正式に新キリスト教徒と呼ばれるようになった。こうして国王マヌエルは自分がカトリックの君主であることに満足し、王女を結婚させたのである。

新女王イザベルは、リスボンで生活することになってから義理の親と気が休まることはなかなか無かった。ポルトガルに異端者を取調べ処遇するための異端審問所開設を正式に教皇が許可するよう、彼女から強引とも思える位に懇願されたが、教皇はポルトガルからユダヤ人の代表者派遣を好意的に受け入れて、4年間に亘って同意しなかった。そうこうしている間にドミニコ会修道士が、スペインから来た女王イザベルの保護の下で従うようになり、反ユダヤ人気質の説教をし始めるようになった。ドミニコ会修道士の言掛かりの中には、ユダヤ人が黒死病に免疫性があるのは、黒死病が集団大量虐殺の手段としてキリスト教徒に感染させたものだというものもあった。リスボン大通りで聖体の行列最中に、2人のドミニコ会修道士が、見物人のユダヤ人2人が無礼な仕草をしたとして告訴したことがあった。その聖体の行列が廃止される前まで、スペインのセヴィリア、トレド、バルセロナ、何処でも余りにもありふれて全てがそうになってきていることが、ポルトガルでは前代未聞の行列の日であった。修道士が先導した騒乱で、ユダヤ人が殺戮され、彼らの家は滅茶苦茶めっちゃくちゃに壊され、財産は燃やされたのであった。

治安を再び回復するために国王マニエルは3日間を要した。検挙した彼らの内の60人を処刑した。その中には修道士も入っていた。軽犯罪者は公開の鞭打ち刑に処せられた。彼はリスボンにあったドミニコ修道会と、修道士を支援していた仲間が所属する市庁舎を閉鎖してしまった。国王マニエルが新キリスト教徒に対して配



### 第13章 異端審問所の到来、ユダヤ人の追放

慮する素振りをしながら、真の信仰を問い尋ねる異端審問所の禁止令を20年もの永い期間に亘って認めていたことは非常に重要なことである。この勅許状によって異端審問所はユダヤ人を監督だけでなく、新教徒のルター派信徒やイスラム教徒を根絶する任務を持つことになった。しかし、北欧州に吹き捲<sup>ま</sup>っていた宗教改革が、新教徒が皆無だったリスボンも含めてポルトガルを隈<sup>ま</sup>なく通り過ぎていった。イスラム教徒は少数いたが、北アフリカでのカトリック宣教師への報復を恐れて、異端審問所はイスラム教徒の動向を監視していた。

リスボンに住む、ポルトガル系、スペイン系のユダヤ人は共に、新キリスト教徒の取るべき本務に順応していた。本当にカトリック教徒に成りきる者もいた。内心はユダヤ教徒として断固成り続けるも、うわべだけはキリスト教に最小限服従していた者もいた。大多数の者は並んでお互いにカトリックの礼拝に参加していた。多くの新キリスト教徒家族の中の数人が、司祭として叙品（カトリックでの任命）されるようになったとダヴィッド・アルタベが述べている。教会で彼らはミサを執り行い、自分の親戚や別の新キリスト教徒も参列した。そして、家庭では内密に彼らはユダヤ教式の礼拝をし、結婚式を行なった。教会の聖職者組織の一流の高名な地位にまで、ユダヤ人司祭の幾人かが登りつめた。この時代の、新キリスト教徒の銀細工師が作った司祭用の聖餐杯に、好奇心に駆られる。聖餐杯は傷付きにくくて持ち上げ易いものが望ましいが、分厚い胴体部の内側に隠して、ミニチュアのユダヤの燭台、祈祷式用の肩掛け、(旧約) 聖書の巻物が彫り込まれていることが明らかになった。今日のポルトガルで、このような二元的（ユダヤ教とカトリック）伝統のある生活が更に続いているのを見出すことができる。ポルトガル東北部にあるベルモンテ（カステロ・ブランコ地方）には未だにユダヤ人共同社会が残り続けていることは今日良く知られているが、彼らは、凡そ5百年もの間、ユダヤの信仰を頑<sup>かたく</sup>なに守り続け、秘密裏に儀式の様式を徐々に発展させてきている。リスボンでは、ユダヤ人の家系のカトリック信者の家族が教会通いをしている光景を見かけるし、彼らは公然と自宅でユダヤ

### 第13章 異端審問所の到来、ユダヤ人の追放

教の祝祭を祝っている。

ポルトガルのカトリック貴族の旧家の多くが財政的に困難な状況に陥っていたとき、ユダヤ人が新キリスト教徒となって社会的地位が変化して貴族に与えた恩恵は、国際結婚の宗教的な障害の除去と富の共有化という結果であった。新キリスト教徒の商人や医師などの専門家を、現在のポルトガルでは決して貴人の家系とは思わないし、ユダヤ人の祖先に一部関することを誇らないが、この旧家の多くが自分の娘を彼らと結婚させた。

国王マニエルが1521年に死んだ。新キリスト教徒を異端審問所の監視から護るという彼の保障は、死んでから11年後には期限満了になった。しかしながら、教皇はしっかりと新キリスト教徒側の立場を取りそれを存続した。ポルトガルに住む全てのユダヤ人に刑罰を科さずに、信仰の誤り、ユダヤ教への改宗、他のどんな異教に対して全て許すという内容の大赦状がローマから届いた。それにも拘らず、異端審問所の聖庁が、スペイン系ドミニコ修道会に<sup>そそのか</sup>唆されて1547年に再建された。しかし再び、新キリスト教徒を迫害しようとするその野望が、教皇の大赦で、そして君主と議会がその活動資金の供給を断るといふ、両方から<sup>くじ</sup>挫かれてしまった。それから、1580年にポルトガルがスペインの統治下に転じて、異端審問所は国王フィリッペにより、異教と有罪判決を受けた新キリスト教徒から没収した財産を貯め込み、更に競売にかけて自己資金調達できる機能を与えられた。現在でもリスボンの金融銀行家が高額所得者の上位半分以上を占め、彼らの子孫は新キリスト教徒であった。20世紀で一流の歴史家と称されるアントニオ・ジョゼ・サライヴァ (António José Saraiva)が、《異端審問所とは、お金や他の財産を大勢の兵員に配給するための車両のようなものであり、戦争で行なわれる略奪の姿であり、全てがもっと官僚的な姿である。》と書いている。

1995年に、ある巡回展示会が英国からポルトガルに来たことがある。それは異端審問所聖庁の拷問室に備え付けられていた拷問具を見せるのが目的であった。

### 第13章 異端審問所の到来、ユダヤ人の追放

その展示には、犠牲者が皮紐で結びつけられると想像される大きな鉄スパイクが座席から突き出た椅子、《鉄の処女》(聖母マリアを形とったといわれる女性の形で、中が空洞で釘が打ってある人形)つまり伝えられるところでは容疑者が生きたまま置かれる棺で、自分が言い張れば、釘を打ってある蓋が下がってくる仕掛けがある拷問具が含まれていた。それと同時に、異教徒が火刑に処され、炎に包まれているのを眺めている、国王と貴族、司教と庶民の野次馬の、《異端者の火刑(“*auto-de-fé*”)》という映画の、風変わりな、まとまりのある一連のシーンを上演していた。異端審問所で主に使われた拷問具は、綱と滑車であった。《異端者の火刑》を処されたものは居なかった。

異端審問所を取り扱った本当の怪奇映画は、異端審問所に雇用されていた事務員によって詳細に撮影されていた。それは几帳面な官僚の一団で、他の事実の中にあった。異端審問所の所長は、大勢の所員、貴族、司祭を所管し、審判時に学者を同席させ、また更に検察官、看守、拷問をかける人、執行吏を配下に置き、他人が陳述したことや為したこと全てについて正確に記録する公証人を抱えていた。公証人は、拘置所で審判を待ち受けている収監者の挙動を詳細に記録したものを保管する業務も担っていた。出された食事で豚肉に全く手を付けずにお皿に残していたとか、ユダヤ教徒の断食日に食事を摂らなかったなどで有罪と見做された位であった。

異端審問所で犠牲者になったのは、ユダヤ人が全てではなかった。同性愛主義者は、例え司祭であれ、特に異端審問所の主たる敵対者であるイエズス会に所属していただいても、情け容赦なく追跡して捕えられた。恐らくは異端審問所の拘置所内に監禁されていた間に再犯をした者は、死刑判決となった。全く後悔しない場合は火刑に、まったく撤回しなかった者には、炎に投げ入れる前に絞殺された。異端審問所の命令で処刑された司祭の殆どが、《無抵抗主義》として知られる、非常に異なる範疇の犯罪の廉<sup>かど</sup>で有罪の判決を言い渡されていた。神と民との仲介<sup>たみ</sup>の労をとるために司祭を持つ必要はないと彼らは教えた。《民は神に祈れば学ぶことが出来、神の声を直接聞くことができる。》と。特に1975年(1962年~1965年に開催されて4

### 第13章 異端審問所の到来、ユダヤ人の追放

会期ある。1975年は1965年の誤りか)の第2ヴァチカン公会議で《神の民》としての教会に関する宣言書(The proclamation of Church)(啓示憲章Dei Verbumの中の一つを指す)が出されて以来、これが今日の正統派カトリックの教えである。だからそれは死に値した。

このように検挙された多くは拷問を受け、更に別な方法で、新キリスト教徒であって殆どが女性の審問官によって罰せられた。家庭がユダヤ人にとって宗教を遵守する場所の中心であり、ユダヤ人家族の家長は妻か母親であることを知っていて、そのことを異端審問所へ表明していたからだ。妻や母親は自分が生きている間はユダヤ教を頑なに信仰し続け、少なからず子供に教えていた。タルムード(ミシュナとゲマラを合わせたものを指して用いられ、ユダヤ教の心。聖書に次いで良く研究されている文献：前出「ユダヤ教」56ページ)は、彼らには知られていない。ペンタテューク(Pentateuch)(旧約聖書の初めの5巻)の研究をして、彼らはポルトガル系ユダヤ人の神学を疑いなく発展させた。自分達の人生の目的とは、神によって自分を救済して頂くことであり、それはモーセ五書(Law of Moses)(トーラー；ヘブライ語Torah：創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記)に従うことで達成されることが出来る。これを異端審問所では《ユダヤ教化》と称していた。

《ユダヤ教化》に気を取られている新キリスト教徒を探し出すために、異端審問所は、《ファミリアルス "familiaris"》、素人の‘うろつき人’(探偵、興信所員などのような密告者)を数多く雇い入れた。大都会リスボンの大通りや辻道、田舎の小道で誰か1人を見掛けられない方が難しい位であった。近所の人々から、世話話や噂を聞き出すことが仕事であった。例えば近所の家族と食事を一緒にした時に肉やチーズを口にしなかったとか、ユダヤ教の祝祭日に断食をしていたという嫌疑が出てきたら、《ファミリアル》は聖庁に赴き、告発用の正式な申立書を作成した。この書類に審問官が関心を寄せると逮捕令状が発行された。公証人を連れ立って、執行吏が被疑者の家に出掛け彼女を、偶に彼を検挙した。執行吏が被疑者を異端審問所の拘置所に連

### 第13章 異端審問所の到来、ユダヤ人の追放

れて行く間、公証人はその家に居残って、家族の所有物目録を作成した。その家に大金があれば持ち帰るように異端審問所は望んでいたが、公証人が横領した。審問室の中で、被疑者は自分が何のために告訴されたのか聞かされず、また告発者が誰だったのかも名乗られることも無かった。被疑者は、自分が何ゆえに検挙されたか、罪業の種類を陳述する義務を負わせられた。その答弁が拙いと判断され、また自白を全くしなかった場合には、拷問室に被疑者は連行された。被疑者が縄で吊り下げる拷問で余りにもか弱いとか衰弱が激しいと、異端審問所お抱えの医者が思ったときには、被疑者は拷問台（手足を引き伸ばす方式）の上に置かれた。さもなければ、天井に取り付けてある滑車まで張った縄で、被疑者の両腕を背中に回して手首を縛りあげた。拷問官は被疑者が床を離れる位の力を掛け、縄の別の端を持って急に引いた。それから、その縄は突然弛ませ、そして又拷問官によって締め付けら、被疑者の両足が床に届く寸前に落下を止めた。これで肩の関節窩（肩のソケット）から両腕をぎゅっと振った。ただある若者が6回の引き揚げに耐え、その後壊れそうになったという記録があるけれども、3回以上の引き揚げに耐えられる者は殆どいなかった。兎に角3年間での話であるが、一旦被疑者になると、無実であることが分かって釈放された者はまことに稀であった。この時代には、拷問が繰り返されていたことであろう。被疑者が拷問中、キリストからのお助けを、マリアさまからのお助けをと叫び続けたからという理由で無罪放免される者がいた。他に釈放されているやり方としては、説得力のあるように自分の告発者を、（もし告発者が誰であるかを見分けが出来た場合）逆に告発者自身が《ユダヤ教化》された人物だと弾劾することであった。在監人が拷問を受けているときに、彼らの1人が告発者であるようにひっくり返してくれるだろうという希望を持って、告発者が在監人に対して恨みを抱くに違いないと思う誰でも巻き込むという結果を、この方法は度々もたらした。勿論、この方法が多くなれば、検挙者数増加をひき起こした。

これらの検挙者の殆どが、《異端者の火刑》の前に連行されて来たとき、少なくとも

### 第13章 異端審問所の到来、ユダヤ人の追放

も10年間は、陽の明かりを再び見ることは無かった。《異端者の火刑》はコインブラ、エヴォラ、リスボンで継続されてきた。あまりにも費用が高むので、そんなに長くは続かなかった。大広場には、大きな建造物、華麗な天蓋で覆われた演壇があり、王家の人々と他の高位の人々を伴い、豪華な飲食物が彼らに振舞われた。《‘コインブラ異端者の火刑’で公衆の面前に出させられた被疑者86人の内、重婚者の廉で、不敵なことを言ったとの廉であった。更に、誰でも教会という媒介儀式が無くても神様と直接お話し出来ると教えた司祭も含まれていた。残りの81人は、新キリスト教徒で‘ユダヤ教化’と有罪判決を受けていた。》と、カプチン・フランシスコ修道会(Capchin friar)(Order of Friars Minor Capuchin)が記録を残している。新キリスト教徒の多くが拘置所で他の判決を言い渡されていた。ある者は、アフリカ又は南アメリカへ流刑され、家に戻ることを許された者もいたが、黄色い炎を描いた懺悔の黒衣を着なければならなかった。7人は死刑の判決を言い渡された。その中には既に死んだ者もいたが、彼らは《異端者の火刑》の場所に、炎を描いた棺に入れられて運び込まれた。階段式観覧席が設けられた大広場で、高位の人々の中に外国からの招待客も一緒に参席するなか、その儀式が執り行われた。英国のご婦人方の一団が、明らかにお酒も入って、罪人をあざ笑い、からかっていたと、修道士が記している。その儀式は午前6時に始まり、一日掛けて、罪人の中の懺悔者が自白を暗誦しているのを聞いていた。既にお棺に納められている死者も含め、後悔をしなかった7人が、世俗界の権威者へと手渡された。彼らは処刑執行者により町外れの処刑場に運び出され、真夜中に火刑に処された。最後の瞬間に十字架に接吻して悔恨の念を示そうとした誰もが、自分が窒息死するような気分を初めて経験した。

リスボンの商人とその家族と親交のあった英国国教徒で教戒師の天啓ミハエル・ゲッデス(Michael Geddes)が、リスボンのある‘異端者の火刑’に参加したことがあり、以下のことを書いている。《黒い袖無しの外套に身を包み、裸足で、手に蠟燭の燭台を持ったドミニコ修道士が先頭だった。その後、火刑から辛うじて逃れた

### 第13章 異端審問所の到来、ユダヤ人の追放

懺悔者が続いた。彼らの黒衣は一面に炎が描かれていた。彼らは、自分達が救済される前触れとなるようにと、自分の考えからか、方向を変えて下の方へ向った。それから、自分の悪行との縁を断ち切ってしまった、そして燃え滾る薪の上に置かれてしまう前に叫びたいのを抑えつけられていた異端者が来た。次いで、否認し続け、再び悪行に陥った、後悔しない頑固者が来たが、炎を描いた黒衣を着て上の方へ向って行った。その後、ローマ・カトリック教会に反する教義を信仰する異端者が来た。彼らは、胸の上には彼らの肖像画を、それを囲むように周りには、口を大きく開けた犬、蛇、悪魔の像が、衣服の両側に描いた黒衣を着せられて、炎の傍の上方に向った。》

ゲッデスはその《異端者の火刑》を見ようと集まった群衆・見物人は、1万2千人以上だったと見積もっている。それに更に、国王、貴族、司教、学者が、同性愛者や信条上の悪行をした者たちの告解に耳を傾けながら、階段式観覧席にゆったりと座ってみている。

初日は丸1日、2日目は朝までかかった。この催事に掛った費用を異端審問所の公証人がきちんと記録を残しており、総額1,370,516レイスであった。その主なる費用は人件費と資材費と飲食費である。その世紀の前半で、ポルトガルの異端審問所は108人を処刑した。後の時代になって、その犠牲者はもっと増えて行くことになるが、それは司祭アントニオ・ヴィエイラ(António Vieira)のためではなかった。このイエズス会の司祭は、異端審問所に反対し続けて人生の大半をそれに捧げた。彼の反対運動をするなかのある段階で、コインブラ異端審問所所長が彼を拘束するように命じ、彼を2年間も幽閉した。釈放を保障されてから、新キリスト教徒を迫害から護ることに力を注ぎ続けた。彼は、宮廷教戒師も含めて、数人の有力な司祭に働きかけをした。リスボンでは数で優り、戦略的にも勝っていたと自分では思い込んでいたにも拘らず、ローマに行って教皇に謁見させてもらうように願った。教皇は4年以上も彼と会うことを拒み続けた。教皇が終に彼を受け入れ、

### 第13章 異端審問所の到来、ユダヤ人の追放

保護の勅令を發布するまで、アントニオは気長に自分の立場に固執した。

異端審問所でブラジルへの流刑と有罪判決を受けた幾人かの新キリスト教徒は、処罰としてはそれ程ではないと思っていた。新キリスト教徒が《ユダヤ教化》だと通告されてしまっていた情報を受け入れた後に、ブラジルに逃亡した者もいた。そのうえ更に、思いつくあらゆる移動手段をとる前に、新キリスト教徒自身と家族をポルトガルから南アメリカに密輸したのもいた。

ブラジルでは、彼らはレシフェ（バナンブーコ州の州都、ブラジル北東部港湾都市）に行っていた。町はダイヤモンドのブームの虜とりこになっていた。周りの地方で地面を掘り返せば、若しくは滝の下の泥を篩に掛ければ、簡単にダイヤモンドの石が見つかることが出来た。国外追放され、逃亡してきた新キリスト教徒は、このダイヤモンドを輸出する業務に従事した。彼らはニュー・アムステルダムに売買事務所を開設し、英国人が進出する1世紀以上前に最初のユダヤ人街を建設した。それがニューヨークと名称変更されたのである。

多くのユダヤ人がポルトガルからローマに逃走したが、ローマにユダヤ人の共同社会を作り上げた指導者は、ユダヤ人の流入がローマの町を崩壊に招くと言う教皇に抵抗した。ユダヤ人の指導者は教皇に否定するように勧めた。教皇はポルトガルからの（新キリスト教徒の）避難民を歓迎し、既に住み着いていたユダヤ人をローマの城壁の外側に追い出すことを了解した。暫くの間その場所にキャンプ生活をしたあと、十分なる謝礼をして、彼らは戻ることを許された。

ポルトガルから来たユダヤ人は、トルコでは、他の何処よりもまして歓迎を受けた。スルタンは、ポルトガルからの避難民に危害を加えるものは誰でも処刑すると脅かした。新しい家に定住させるのに必要などんな方法でも避難民は援助を受けることが出来た。それどころかスルタンは彼らを救出する船を送ると申し出た。1通の書簡がコンスタンチノーブルに住むユダヤ教指導者イサク・サルファティ(Isaac Sarfati)からリスボンに秘かに送られてきた。それは《トルコという国は、何も不自



### 第13章 異端審問所の到来、ユダヤ人の追放

由しない処であり、すべてあなた方には満足する処です。キリスト教徒の統治下よりも、イスラム教徒の統治下で生活するほうが良くないかね？この地には、誰もが自分の葡萄の木の下で、自分の無花果の木の下で、平和に暮らせるに違いない。》であった。新しい移住者はタバコをトルコに持ち込んだ。タバコは直ぐにトルコで主要な輸出作物の1つになった。ユダヤ人は、トルコのタバコを海外に売り出し、ナチのユダヤ人強制収容所(Nazi holocaust)の時代まで、続けられた貿易であった。ユダヤ人は、繊維織物や弾薬製造の新技法をトルコに導入した。他の国にもあったように印刷技術も紹介した。ユダヤ人はブライ様式の書体のみを用いていたので、ポルトガル語とトルコ語の作品を、ヘブライ文字に書き直して出版した。

スルタンの時代の人々は、ユダヤ人の庇護と励ましを続けた。アドリア海に接するイタリアの港であるアンコーナのカトリック教市民が、ユダヤ人共同社会を迫害し始めたときに、アンコーナから来た船がトルコにある船渠に入港するのを、またトルコの船がアンコーナに寄航するのを、スルタンはすべて禁じた。トルコの、あるいは東地中海での経済的勢力が、アンコーナに財政的破綻を齎して、2度と復興することは出来なかった。

新キリスト教徒の商人や銀行家の多くがリスボンを離れて、北欧州最大の貿易都市、港湾都市のアントワープに移住していった。ポルトガルがそうだったが、アントワープもスペイン人の統治下に置かれてしまっていた。カトリック教の習俗を強制され、ユダヤ教は禁じられた。ただアントワープをポルトガルと比べてみると、異端審問所そのものがなかった点と、新キリスト教徒が宗教的な取調べを免除されたそこで住むことができることを王室が保障した点とで、本質的に大きな差異があった。ポルトガルでのスペイン人統治者は、リスボンからオランダ人や英国人の商人を既に国外追放をしていた。香辛料や宝石類の、欧州の貿易センターとして、アントワープはポルトガルのリスボンから今や置き換わってしまった。リスボンからアントワープに新たに定住した、新キリスト教徒で金融取引家の中で最も傑出して

### 第13章 異端審問所の到来、ユダヤ人の追放

いたのは、メンデス家であった。彼らはアントワープからアフリカやアジアのポルトガル植民地に直接の取引関係を持つことが出来た。それはある程度彼らとその植民地を通して関係を拡大できたからである。モーゼス・メンデスは台湾(Formosa)(Taiwan:台湾)に住む商人であった。宝石商のアルヴァロ・メンデス(Álvaro Mendes)は、ゴアに住んでいて、宝石の原石を査定する役人であった。グラッサ・メンデス(Graça Mendes)は甥のジョセフ・ナシ(Josef Nasi)と一緒に銀行を経営し、トルコのスルタンの腹心の友になり、ユダヤ人が国からその任に就く事を禁じられていたにも拘らず英国の国王の貸元にもなった。3代の国王が続いた後に、実質的に無一文だった国王ウィリアム4世(William IV)が王位に就くために必要な諸費用を捻出したのは、メンデス家であった。彼の統治時代に初めての国事の1つが、ユダヤ人の迫害を議会が法律で終結したことである。

アントワープに住むメンデス家の本家であるディアゴ・メンデス(Diogo Mendes)は、バルト海域はもとより、ドイツ、東欧州、英国の香料、薬、高価な宝石の貿易権を事実上独占することに成功したと云われていた。彼は、ある時期に豊潤な港であったリスボンとカディスを、単なる僻地の港に戻してしまった。それはヴァスコ・ダ・ガマの時代にヴェニスをポルトガルがしてきたのと丁度同じであった。恐らくその理由からか、1564年に、スペインの統治者である公爵アルバが新キリスト教徒の迫害対象からの免責をご破算にしてしまい、異端審問所が町に戻ってきってしまった。

スペインのカトリック教徒の侵略に対抗した永い戦争後に、オランダ北部のアムステルダムは、今やオランダ人の新教徒の手中にあった。ユダヤ人はアムステルダムからアントワープに移動した。彼らはモロッコ大使の公邸で、ユダヤ教を信奉していた大使と礼拝のときに出会った。礼拝では、ヘブライ語でなくて、ポルトガル語とスペイン語の混ざった方言であるラディノ語(Ladino)が使われていた。彼らの祈りをふと聞いているとスペインのスパイではないかと、近くにいるオランダ人が

### 第13章 異端審問所の到来、ユダヤ人の追放

彼らを疑った。彼らは会衆を検挙する警護員を呼びつけた。ユダヤ教指導者ヨセフ・ティルド(Josef Tirdo)はオランダ語を喋らなかつたが、ラテン語での審判の前に、それらの事件を弁護した。スペインからのスパイどころか、信条的な不寛容による犠牲者の多くがオランダの新教徒であったことを彼は彼らに述べた。会衆がアムステルダムに留まることを許されるならば、彼らは町に大きな幸福を齎すに違いないと彼は約束した。

独立戦争から数年後に新国家は、開拓するような天然資源もなくて不毛の土地になっていた。その土地に平和に定住することを許されたユダヤ人の第1陣が、1620年までに既にアムステルダムが4つのユダヤ人街を持っていたように、より多くのユダヤ人街に合体させられた。トルコに住むポルトガル系ユダヤ人が、新教徒の保護者への贈り物としてチューリップの球根を、自分達のいここに持たせてオランダに送り込んだ。ユダヤ人はダイヤモンド取引をオランダに導入し、更にダイヤモンド原石の研磨とカットの技能を伝授して、現在でもオランダは世界の中でその技術は有名であり、引き継がれてきている。キューバからタバコをオランダに持ち込み、葉巻タバコ工業の基礎を作った。西インドからはチョコレートをおランダに持ち込み、チョコレート工業を立ち上げた。こうしてポルトガル系ユダヤ人が新教徒の国・オランダに豊かさを持ち込んだのであった。

新しく勝ち取った自由の中で、アムステルダムに住み着いた多くのユダヤ人は、祖先から引き継がれた、ユダヤ教義の教えを請け、信仰の慣習を続けていた。でもそれに抗する者もいた。ポルトガルで迫害を受ける中で、彼らに利用出来る、唯一のユダヤ教の聖典であるモーセ五書(Pentateuch) (旧約聖書) (前出202ページ)を研究することで、ユダヤ人はユダヤ教義の概念を形作って行った。ここで今、彼らは初めてタルムード (前出202ページ) というものに遭遇したのである。これらの反体制派は、アブラハムの黙示とモーセの十戒でもってするよりも、中世の不寛容ともったいぶりでもってしなければならないように思えてきたし、彼らは自分たちのユ

### 第13章 異端審問所の到来、ユダヤ人の追放

ダヤ人街を立ち去った。その反体制派の中には、異教のためにユダヤ人街から実際に追放されてしまった偉大な哲学者のスピノザもいた。自分の家族が改宗を強制されたにも拘らず、ポルトガルの教会の協会による迫害でもって、少数だが真のカトリック教徒になる者がいて、オランダではこの信仰の慣習が続いた。その最も有名なのがエラスムス(Erasmus)であった。

すべてこれらが、スペイン人が占領したポルトガルの中から盗み出したものは、罪業ではないという信念を持つことで新教徒同胞を少なくとも結束させていた。その共同で資金を調達した艦隊が、1年間で何と百以上ものポルトガルの貨物船を襲撃して拿捕したのだ。オランダが北欧州の国々で初めて帝国の覇権を持つことになった、リンショーテン(Linshoten)(Jan Huyghen Linschoten)の航海地図という有名なエピソードになって行くのである。

若くて頭脳明晰な学識あるオランダ人のリンショーテンが1576年に、アムステルダムから陸路でリスボンへ旅立った。そのやり方は不明だが、リスボンで彼は、ゴアに本部を置く、アジアと東アフリカを統括する大司教に丁度任命されていたフレイ・デウ・フォンセカ(Frey de Fonseca)と会った。フォンセカはリンショーテンを自分の秘書官に命じ、彼らはインドに向けて一緒に出航した。

リンショーテンが大司教フォンセカの業務のお手伝いを10年以上していた間に、東洋の大帝国ポルトガルに関して知り得たことすべての機密事項の記録をしてきた。ゴアに住む公吏の地図製作者であるフェルナウン・ファシュ・ドウラード(Fernão Faz Dourado)から、リンショーテンは正式な地図の複写品を盗んだ。その地図には、欧州から海洋帝国の交易都市、アフリカ、インド、中国、日本、東インド、西インドの海岸部を含むポルトガル航路が描かれていた。彼はこの航路を航海する船長への詳細な記述、説明書、助言などを付け加えた。年間の気候パターンや干潮・満潮表など非常に貴重な情報も一緒に集めた。大司教と一緒に航海に関する内容も部分的ではあるが情報を収集し、派遣された伝道師を通じてポルトガル帝国の各交易都

### 第13章 異端審問所の到来、ユダヤ人の追放

市の詳細な報告書も集めて自分に呉れるように依頼した。その報告書は、地元民の評価、彼らの習慣、気象条件や健康状態、取引されている商品や製造物品、それも数量、品質、価格までに亘っていた。

彼の編集物は、正確さがあり、仔細な記述があるのが骨頂であろう。彼が大司教の影響範囲から自分をどう引き離し、オランダにどう還元させようとしたかはあまり知られていない。彼がアムステルダムを出発して20年経った1596年にアムステルダムで自分の記録類を出版した。それから殆ど直ぐにコルネリウス・フーフマン(Cornelius Hoofmann)を船長とした艦隊がオランダ人を乗せてジャワに向けて出帆した。フーフマンはそのジャワにオランダにとって初めてのアジアへの足がかりを築いた。その後5年経って、香辛料を満載した船40隻をアムステルダムに帰還させた。1602年にはオランダ東インド会社が設立され、直ぐに巨額の利益をあげるまでになった。

ポルトガルでアヴィス王朝統治時代の退廃期が続く中、そしてまたスペインによる統治下で、ポルトガルの商業艦隊は競争の強みをより失う結果になってしまった。ポルトガルの造船所で建造されてきている船は余りにも大型であり、嵩張り過ぎ、不安定なものだった。それは、恰も操舵が狂気の沙汰で管理される代物であった。アジアの為に縛られた艦隊の幾つかの中に、艦隊の半分以上の船が目的地に着くことが出来る前に転覆していた。船員は航海中には、奴隷に、栄養失調、病気、無気力と、自分が逃走出来そうな港が何処か見つける心配などが入り乱れることが度々であった。ポルトガルの海軍は、リスボンから出帆したスペイン無敵艦隊の分隊のフランシス・デウレイク卿によって英国の西海岸で事実上壊滅状態になっていた。

オランダ人は、大型で、軽量で、高速能を持ち、より安定性のある船を設計し建造した。1619年までにオランダ人はジャワに要塞と港を建設し、ゴアとマカオと長崎との間の交易航路を航行するポルトガル船をジャワの要塞から襲撃した。オランダ人はポルトガル人をセイロン、台湾、香料諸島、マラッカ、マラバール海岸

### 第13章 異端審問所の到来、ユダヤ人の追放

から軍力でもって追い出してしまった。リンショーテンの詳細で正確な情報と結びつき、オランダ人の持つ気迫と効率性が相俟った結果であり、オランダ人が非常に上手くいったことはそう驚くことではなく、寧ろアジアでのポルトガル人の存在が全くなくなったことが驚くべきことである。

オランダ人が日本に遂に到着したとき、ポルトガルとスペインのイエズス会の伝道師に地元の人々が頑なに身を守るような態度をとったのに対して、そのようなことにはならなかった。オランダ人が布教に成功を収めることが出来たのは、その多くが貴族階級であったし、仏教寺院の僧正を自然と心を不安にしたのかも知れない。神父フォーレス・エス・ジェイ(Forez SJ)が、《私が、生まれの高貴な人物を対象に改宗を勧めているし、心の救済を口実にして日本を侵略するための単なるからくりであると信じながら、その嫌疑から目覚めるのに全力を尽くしてきていたのを日本人は見抜いていた。》と書いている。

1585年の大勅書で教皇は、“*padroados*”（ヴァチカンとポルトガル王国とスペイン王国との間の条約）の下で、日本はポルトガル・イエズス会の独占にあると表明した。スペインのフランシスコ修道会は、あまり魅力のないフィリピンの独占権を与えられた。フランシスコ修道会は、日本のイエズス会の縄張りに侵入しようとする運動を開始した。フランシスコ修道会が日本に到着したのは、伝道師ではなくて大使であった。彼らは改宗の行為はしないと約束するとの条件で、首都の京都に行くことを許可された。京都御所が持った疑いの目はもっと刺激的であった。1596年にスペインのガレー船1隻が日本沿岸で座礁してしまった。その貨物船には60万枚もの銀貨が積み込まれていた。その船長はどうかこうして脱出して逃走できたが、船員は捕まってしまった。彼自身から注意を逸らせるように祈りながら、彼はポルトガルとスペイン帝国の地図を作りあげた。彼は如何に多くの国々が服従させられて来たかを説明した。「彼らは、その国々の人々が我々の宗教を信奉するように勧誘してその気にさせる先ずは伝道師を送り始めるのです。これが上手く進むと、彼らは偶然

### 第13章 異端審問所の到来、ユダヤ人の追放

に出くわしたような格好で改宗を勧める部隊に送り込むのです。そうすると後は簡単に改宗させることが出来るのです。」

その直後に、スペインのフランシスコ会修道士が、日本イエズス会修道士3人とキリスト教徒の日本人7人と一緒に十字架の磔で殉教した。全ての外国人伝道師が国外追放された。47人が長崎のポルトガル出島に身を隠したが、何れ多くが国外追放を受けて帰国した。日本の統治者は当初彼らの反抗態度に対して寛容な態度を取ったか、若しくは少なくとも日本の統一への戦争によって注意が向けられていなかった。自分の信仰を捨てるような全てのキリスト教徒は、名誉を取り戻され、恩給を認められた。申し出るものは殆ど無く、欧州での異端審問所のそれに少なくとも同じような恐怖への犠牲者が彼らの中に居たことが分かっている。20万人もの改宗者が、少なめの処分で止めるような処罰を受けたとイエズス会は推定している。でも千4百人以上が処刑された。教会から迫害されていたにも拘らず自分の信仰を極秘に信奉し続けていたポルトガルに住んでいたユダヤ人と、ポルトガルのイエズス会が日本に設立した教会が2世紀もの間地下に潜っていたのに1867年の信仰の自由を謳って再び表に出たことを想像すると、著しく類似していることに気付く。ポルトガルのユダヤ人のように、日本人は聖典を持たなかったが、洗礼式の、礼拝の、聖体拝領の記憶を辿り刷新して自分の所見を持ち続けていた。

再びポルトガルに戻るが、ポルトガルの東部に位置するトマールの市長と市議会議員がスペインの国王フィリッペ2世がトマールに御越しになると書いてある1通の書簡を受け取った。彼らはポルトガルの国王として歓迎し、御もてなしをした。トマールに住む市民のユダヤ人のみが沢山のお金を所有していて、異端審問所のお蔭でユダヤ人の財産は差し止められてしまい、宮廷を歓迎するための資金すら持ち合わせていないと窮状を訴えた。トマールのユダヤ人街は倉庫になっていた。倉庫は1990年代まで4百年以上も存続した。現在それは親愛を込めて復興されユダヤ人に戻されている。1994年に時は過ぎて、国外追放されたポルトガル系ユダ

### 第13章 異端審問所の到来、ユダヤ人の追放

ヤ人が建設した、ロンドンの最も古参なユダヤ人街・ベヴィス・マルクスのメンバーがトマールを訪れ、地元のユダヤ人と会い、その倉庫を宗教的な施設に復活した。



## 第14章 自由の再獲得

1588年のプリマス沖でのスペイン無敵艦隊の敗退は、フランシス・ドレイク卿によって、英国で一番知られた出来事として記憶に残されてきている。女王エリザベス1世の統治時代の最も大きな軍事行動のその続編は、稀に語られている。

1589年4月18日に、150隻もの英国艦隊が1万8千5百人の兵士を乗せて、プリマス港から南へ出航した。女王エリザベス1世の見方では、彼らの任務はスペイン北部大西洋側の港に停泊中のスペイン無敵艦隊の残兵を追跡し打ちのめすことであった。がしかし王室の財政は破綻していた。スペイン軍と海上で、陸上で、オランダで戦うのに必要な戦費25万ポンドを議会から承認されていたが、既に超過していた。議会は女王が提出した更に戦費を注ぎ込む議案を断った。女王管轄の広大な領土への非常に大きな軍事的冒険の目的で航行している戦艦の内、王室海軍の戦艦はたったの8艘だけであり、残りは個人的な資金援助を受けたものであった。

この軍事行動はドレイク卿とジョン・ノリス(John "Blackjack" Norris) 卿(John Norrey's のこと;1547?-1597)の大将の指揮の下行われた。ノリスはその冒険に2万ポンド私財を投じ、一女王エリザベスの1万7千ポンドに対して一、更に友人が軍隊に何倍もの資金を投じてくれた。フランシス・ドレイクは2千ポンドの私財を積み増し、自分の海軍仲間からの6千ポンドを、ロンドン市長からの1万5千ポンドを加えた。市の共同組合や国中の資産家からの資金提供が続いた。遠征の目的に対する彼らの見方は、女王の見方とは大きく異なり、優勢なのは彼らの方であった。

フランシス卿と旗艦に同乗したのは、ポルトガル国王ジョアン3世の弟の非嫡出子であるクラテウ修道院次長ドン・アントニオ(D. António)であった。ドレイクとノリスの企たくらみは、ポルトガルからスペインを追い出し、ドン・アントニオを王位に就

## 第14章 自由の再獲得

け、財産を作り、ポルトガル帝国とポルトガルの交易を英国が引き継ぐというものであった。君主であるべきカトリックを英国国教徒が支持することが、適切なのかどうかについて幾らかの<sup>とが</sup>咎めがあったが、しかしドレイクが助言を求めた清教徒の神秘主義者が、どんな方法であれスペインのカトリック国王に降り掛かるすべての被害が神に喜ばれるということを受得したのである。

女王エリザベスの仕草のように、ノリスとドレイクの艦隊は、先ずスペインの港ラ・コルナに入港した。港で1隻の灯を点けたガレー船を見つけた。上陸してみると無防備な町が下に広がっていたので、兵士や船員が略奪し始めた。そこで大量のワインを見つけて、酩酊するほどまで飲んでしまった。こんな状況のなか、とある館に入ると貴人家族と思われる多くの派手で使い古しの衣装があるのを知り、それらを身につけたら、何と高熱を出す<sup>のみ</sup>蚤に刺されてしまった。二日酔いになり、また病気に罹った彼らは、結局は船に戻って、南方へ出帆して行った。

艦隊はリスボン北にある漁師の町ペニシェに5月16日の午後着いた。伯爵エセックスが海の中に飛び込み、海水が彼の肩まで来たのを確認した後、第一陣として2千人の兵士が上陸した。《白兵戦でスペイン人を殺したが、抵抗する者はいなかった》と、彼は後日書き残している。地元守備隊のスペイン人司令官の伯爵フエンテスが5千もの兵士を引き連れて英国艦隊が最初に見える処へ退却した。そして城のポルトガル人司令官が英国側に城の鍵を呉れてあげた。唯一の死傷者は、大波で岩礁とぶつかって粉々になった船に乗っていて溺れ死んだ者だけだった。夕方になる前に、ノリスは主力部隊を上陸させて町を制圧した。

2日後に英国部隊は92キロ米離れたリスボンに向けて行軍し始めた。ドレイクは山腹に立って、彼らに‘さよなら’と手を振った。それからドレイクは自分の船に乗り、艦隊はロカ岬を廻りカスカイシュとテージョ川の河口に向かった。

ペニシェからロンドンの枢密院に、自分の報告書を海軍記録類協会が保存している旨書簡を送った。自分の軍隊の兵員数は、主に脱走や難破によって8,526人まで

## 第14章 自由の再獲得

に減少していた。その内ラ・コルナでの古着からの<sup>のみ</sup>の蚤の被害などの病人が2,791人も未だいた。リスボンに向けた行軍に参加できなかった兵士を連れ帰ってきた。エセックスは、英国から船で持ち込んだ自家用四輪馬車を利用した。騾馬<sup>らば</sup>の群れの背中に結びつける者もいた。シートで出来た担架の上に乗れ、雇った地元の農夫によって運ばれるものもいた。このような汚い衣服を纏った軍隊が隊列を前に進めていたとき、フエンテスが自軍と敵軍との間隔が1日の行軍相当になるように退却した。英国軍が1日当たり10キロ米以上辛うじて進んでいる間は、何も大きな戦闘は起こらなかった。

英国軍が終にリスボンの北部郊外にまで来たとき、その地域が、すべてが廃村のようになっているのに気付いたが、ただ、年老いた、衰弱した、独りぼっちの乞食が、棕櫚<sup>しゅろ</sup>の葉を広げて彼らに大声で叫んでいた。「国王アントニオ様、お長生きを！」逃げ出した市民が穀物倉に火を放ち、残っていた食べ物や食糧を持ち出していたことが分かった。不思議なことに、彼らは、家の裏に大量の宝石や高価な物を残して行ったのである。英国軍の兵士はその日の午後はそこでじっとして過ごし、略奪をしなかった。翌朝、教会がリスボン市の城壁に向っているという戦略的には何の価値も無い、リスボンの守護神を奉納しているサント・アントニオ教会を襲撃した。その城壁は英国軍の予想を遙かに超えて高かったし、彼らは城壁下に地下道を掘り、城壁をよじ登るような、兵器や装備を持ってきていなかった。彼らは聖具保管室を通過して教会に侵入し、いとも簡単にネーブを駆け下りて、リスボンへ行く側の正面扉の外に出た。しかし彼らは、準備が出来て待ち構えていた生意気で意志の強そうなスペイン兵士に出遭ってしまった。英国軍が撤退し暫くして疲れが出たので昼食をとり、シエスタの為に腰を落ち着けてしまった。昼寝をしている間にスペイン軍は《<sup>あられ</sup>霰のように早い小銃弾》の一斉射撃でもって彼らを急襲し、ノリスとエセックスが援兵を連れ、市の城門を通過してスペイン軍の後退を追い掛ける前に、3人の将軍と46人の兵士が即死してしまったのである。

## 第14章 自由の再獲得

明日には、スペイン軍は少なくとも3千のポルトガル王立軍を合流してくるだろうと、アントニオはノリスに断言した。さくらんぼや西洋桃を詰めた籠を国王になりそうな人に贈った唯物論者の人々は、裸足の修道士6人と貴族のご婦人1人のみであった。彼らは、スペイン人によって首を刎ねられてしまうアントニオのために自分自身を意思表示する者は殆ど居ないという言葉を彼らに持って来た。ノリスは損をする前に‘損する取引’を中止することにし、カスカイシュはペニシエに撤退する距離の5分の1であることも考慮して、兵士をカスカイシュに移動することを決心した。

ドレイクは、既に自分の部隊と重装備をカスカイシュに落ち着かせていた。道中、彼はハンブルクから60隻の船からなる艦隊に目星を付け、それを攻撃して食物やマスト、ケーブル、船の交換部品などの貨物を略奪した。カスカイシュの人々は、英国軍を、パン、果物、湧き水、ワインの贈物を持ってきて、温かく歓迎した。ドレイクはロンドンに戻ってから“カスカイシュは最も気持ちの良い町であり、清潔な町である”と、報告している。彼の部隊が1週間カスカイシュに滞在したら、それが‘最も、いやでたまらない場所’の評価にひっくり返ってしまったと記録されている。

カスカイシュに着いて、ノリスはアントニオをお城に腰を落ち着かせた。しかし戦争に疲れ、戦う兵卒をひどく使い尽くしたポルトガル軍が丁重だったにも拘らず、2百人は下らない位の兵士が英国軍に加わろうとして志願をしてしまった。

ドレイクの艦隊は、戦うのにはあまりにもまだ元気の無い兵隊の3分の1を英国に残して出帆し、残りの3分の2の兵士を連れてテージョ川の河口の北河岸にある、スペイン軍の最前線セント・ジュリアンの要塞に向った。一方スペイン軍の増援隊がリスボンから要塞を守るのを助けるために既に到着していた。スペイン将軍の誰もが翌日の正午に決闘するという挑戦を受けた伯爵エセックス(Essex)は、1人の使者を要塞に送り込んだ。使者の左腕にネッカチーフを巻き付け、特殊な羽根を付け

た帽子を被って見分けが付くようにしたと言っていた。正午になってスペイン軍が大規模な攻撃を仕掛けて来て、英国軍は退却した。ノリスとドレイクが戦闘を全面的に止めると決断したことで、英国軍兵士はもうひどく士気を挫かれてしまった。

《もしも神様が天国から幾らかの戦利品を我が兵士と海員にお恵み下さるなら、全ての戦力が再び蘇<sup>よみがえ</sup>るのだが》と、ドレイクは書いている。そして、スペインのガレー船をアゾレス諸島で見つけて、南アメリカから銀を積んだ貨物船を略奪できると思ひながらそちらに向って出発した。

ノリスは直行に近い格好で英国に向った。途中南西フランスのバイヨンヌに立ち寄り、アントニオを亡命させ世に知られぬよう下船しただけであった。ドレイクが手ぶらで既にそこに到着していたかどうかを見つけるためにプリマスに着いた。

7年経って、エセックス卿は、ドレイク卿とワルテル・ラレイグ(Walter Raleigh)卿らを連れ立って、アルガルブ南沿岸に沿って航行していた。彼らはカディスの町をほんのいま略奪したばかりで、彼らの艦隊は、英国の兵士や水夫を久しく踏み倒してきた沢山の略奪品を今は満載していた。兵士や水夫が英国に戻ってもその略奪品を換金出来るのか心配したのに、ファロに寄航して、そこにもっと高価な略奪品がもう無いかどうか見ようというエセックス卿の言い分に譲歩してしまい、兵士は下船させられた。港で鮪<sup>まぐろ</sup>釣漁船が難破した後だったので、エセックスが兵士を町に連れて行った。ファロの人々は町を見捨てて居なかった。新築で美しい建物が司教の宮殿であった。エセックスはその宮殿に移動し、その間、兵士が周りの地方や村落を焼き払いながらうろつき廻ったが、何頭かの牛や豚がいる位で、金目の物は何も見つけることが出来なかった。アルガルブの司教ドン・ジェロニモ・オソリオ(D. Jerónimo Osório)は内陸の町シルヴェスから海岸の町アルガルブへ移り住んだばかりであった。彼の学識は人文学、神学、ラテンの歴史と文学にまで及び、カトリックの欧州の隅々まで知れ渡っていた。何処の私的な所有物の中で司教の蔵書が最も価値があった。もっと他に略奪するのがないので、エセックスは司教の書籍を乗船

する時に積み込み、英国へ持って行った。英国で、彼はその略奪した書籍を、オックスフォード大学のボドゥレイ図書館の創設者トーマス・ボドゥレイ(Thomas Bodley)卿に譲った。こうしてこれが西欧の主要大学図書館の中で、唯一の、盗品書籍の蔵書の、中核と恐らくなつたに違いない。

ポルトガル人は60年以上もの間、スペインからの独立を奪還出来なかつた。スペイン国王フィリップ2世が、ポルトガル国王フィリップ1世として同時になることを大きな問題として捉えていたポルトガル人は、フィリップのとり振舞い<sup>やかま</sup>には喧しかつた。フィリップは多少なりとも議会の役割を是認していたが、リスボンの議会には滅多に出掛けなかつた。世界で指折りの名画として未だに評価されている絵画の中のヒエロニムス・ボッシュ(Hieronymus Bosch)(オランダの画家。フィリップ王が愛好)の三連祭壇画『聖アントニウスの誘惑』を、国王フィリップはポルトガルの首都リスボンに贈つた。彼の孫に当たるポルトガル国王フィリップ3世(King of Portugal Filipe III)つまりスペイン国王フィリップ4世は全く正反対のような態度をとつた。彼は決してポルトガルには足を踏み入れず、スペインの栄冠の下で来ていた他国を拒む特権を与えられるべきだという、ポルトガルは常軌を外していると見ていた。例えばアンダルシアとカタロニアは、独裁主義的な流儀の首相オリバーレス公によってカステイリョから統治されていた。

君主制というやり方はイベリアの至るところで広範囲な圧政に帰結したのである。カタロニア人はスペインの栄冠に対して、フランスの枢機卿リシュリー(Richelieu)から与えられた軍隊と共に立ち上がり、初めて反乱を起こした。反乱を鎮圧するのを援軍しにポルトガルからカタロニアに千人の軍隊を出すようフィリップが命じた。殆ど直ぐに、枢機卿リシュリーはリスボンに内密の使者を送り込み、スペインに対しポルトガル人が反乱をするよう軍を提供した。貴人らが公爵ブラガンサの館を訪ねた。アヴィス王朝の嫡出でない分家の出のブラガンサは、新しく独立した時の王位を狙う者になつたが、生まれは最もまことしとやかなものだった。彼はアレンテ

## 第14章 自由の再獲得

ージョの中でのヴィラ・ヴィソーサにある田園の宮殿で快適に過ごしていた。野生の猪を狩猟に凝り、宮殿の裏には囲った大きな狩猟場を所有していた。また頭が切れたし、聖歌のアマチュア作曲家としての才能を発揮していた。英国の作曲家(John Francis Wade 1711-1786)の盗作であったと思われるけれども、『アデステ・フィデルリス(*Adeste Fidelis*)』は、彼の作だと云われている。

スペインは予備部隊が特に無かったので、スペインに対して立ち上がるのは今の時機だと貴人らが申し出たとき、ブラガンサはそのようなことは何もしないと断った。それは余りにも危険極まりないものだった。アンダルシアの貴族出の妻ルイーザがその話を聞いて「私は公爵夫人でずっといるよりも、1日でもいいから女王になりたいわ」と、彼にきっぱりと言った。

1640年12月1日朝の9時に、武装した貴人らが、同じく武装させた召使を引き連れてテレイロ広場に集まったあと、ブラガンサ宮殿の階段を一緒になって駆け上がった。ポルトガル最上級官吏で、且つ売国奴を先導する国民であり攻撃されるべきと見做されたミゲル・デウ・ヴァスコセロス(Miguel de Vansconcelos)は、即死に近い状態で殺され、窓の外に遺体が投げ出されてしまった。執務していたスペイン人のポルトガル統治者マントゥア(Mântua)伯爵夫人が、助けを呼んだが誰一人来なかった。彼女は拘束されて、田舎の修道院に連れて行かれて、そこで勤王家のポルトガル修道女によって監禁されて過ごした。指導的立場にあるスペイン系高爵位専門家数人もまた拘束され、貴族4人が首を刎ねられ、平民6人が絞首刑になった。スペイン人との利敵協力者として烙印を押されていたブラガ大司教が監獄で死んでしまった。異端審問所の所長が同様の問責で牢獄に入れられたが、ローマからの圧力が掛って結局は解放された。彼が事実何の野望も抱いていないと思わせるために、このすべての出来事がブラガンサ公爵によって秘密にされてしまった。クーデターが成功したのだ。2週間後にはテレイロ広場に設けられた野外の演壇上で、国王ジョアン4世(João IV)として歓呼で迎えられたのである。

新国王に贈られた貢物の中に、兄ベルナルド・デウ・ブリト(Bernardo de Brito)からの1冊の本があった。それは《ポルトガル君主国(“*Monarquia Lusitana*”)》であった。縛りつけた見解の恩恵で、少なくとも、その媚<sup>ひ</sup>び<sup>へ</sup>諂<sup>へ</sup>いが神聖<sup>ほうとく</sup>冒<sup>ぼう</sup>瀆<sup>とく</sup>に迷い込んで行くように思える。その時代の状況の中で、これはそれ程はっきりしたものではなかった。神が地球を創造するというお考えを持つ前に、神はポルトガルをデザインしていて、ポルトガルの宿命は、地球上に存在する新しい神の王国全体を統治する帝国の中の帝国に、すべからなくなったのだとベルナードが述べている。

それはジョアンの統治というよりは寧ろジョアンの皇后、現女王ルイーザ(Luísa)の統治であった。王位の傍で15年後に権力を握った力強い女王は、1556年夫君が亡くなったときに摂政となった。ルイーザは、名ばかりの王であった自分たちの王子アフォンソの後を摂政として本当に留まった。アフォンソ6世(Afonso VI)は精神的な欠落<sup>かんしやく</sup>があって、寝そべって食事をとるわ、癩<sup>か</sup>癩<sup>ん</sup>を起こすわ、リスボンの居酒屋に出掛けて、飲んだくれ、言い合いをし、世評によれば、折にふれては喧嘩して人を殺したりしたがお咎めがなかったなどを仕出かしていたのである。彼は王位の譲位をするように誘導されて、先ずシントラで幽閉され、それからアゾーレス諸島に島流しになってしまった。

女王ルイーザが直面している問題は風変わりなものだった。ポルトガルは事実上軍隊を持っていないに近かった。海軍が軍隊の全てであり、その海軍がスペイン無敵艦隊の部分の如くに壊滅していた。そして国庫は殆ど無いに等しかった。結局、フランスは次の例外を除けば何も援助を差し延べなかった。その援助とは、フランスの年少の王女であり、彼女(マリ・イザベル)は最初アフォンソ6世に嫁ぎ、その後彼の弟で王位相続者の国王ペドロ2世(Pedro II)と結婚したことである。援助の要請を受けていたオランダは、逆にポルトガル商船を攻撃し始めて、マラッカを占拠してしまった。

スペインによって抑圧されているポルトガルが、スペインの一地方でなくてポル



トガル領であることを、公認せよとの申し出を、教皇ウルバヌス7世(Urban VII)は撥ね付けた。ローマに派遣されるポルトガル大使たちが、先ず船でリスボンからポルドーに行き、それから、スペインを通り過ぎない回り道をする陸上での旅をする羽目になった。ラメゴの司教がローマに入ったとき、教皇は彼を歓迎しなかった。枢機卿で構成されたある委員会が、大使は法律上存在していない国家を代表していないから、ポルトガル大使の信任状は無効であると言明した。彼は路上でスペインのスパイに襲撃を受けて、召使2人が殺されてしまった。リスボンはそこで大手の修道院次長をローマで起きたポルトガル事件を抗弁しに遣わした。前任者が死ぬまで新任者をローマが任命しなかったので、このときまで、司教管区18の内、17の司教が空位になっていた。修道院次長は謁見を拒んだ。彼もまたスペインのスパイに襲撃されて、1人の召使を失ってしまった。

教皇は女王ルイーザに逆らっていたにも拘らず、彼女は別の司祭を側近にした。彼の名は神父ダニエル・オー・ダリー(Daniel O'Daly)といい、低い爵位だったが並外れた能力の持ち主であった。アイルランドのケリー生まれでドミニコ修道会士の彼は、英国やアイルランドの若者が司祭職になるための勉強が出来、且つ新教徒の迫害を受けない内に司祭に叙品されるような神学校を探しにリスボンに来ていた。神父オー・ダリーと女王は、彼の英語カレッジをポルトガルに開校出来る許認可を女王に請願する際に初めて出合った。2人がお互いに会った瞬間に意気投合したようで、女王が神父に自分の告解を聞く司祭になるよう頼むのもそれ程時間は掛らなかった。その後まもなくして、女王は彼に外務大臣の顧問に任命し、更に国際報道長官になった。

彼は、ポルトガルにとっての緊急で最優先すべきことは、力強い軍事同盟を作ることだと見た。これを達成する鍵は、女王ルイーザの娘カタリーナ・オブ・ブラガナサの結婚時に、ポルトガルの植民地から成る彼女の持参金を提示することだった。そこで彼は、その提案をする相手である国王ルイ14世(Louis XIV)の宮廷に出向い

## 第14章 自由の再獲得

た。でも太陽王はそれを容認しなかった。ローマが公認しないポルトガルの新米の不安定な王朝との婚礼によって、自分自身の王位の価値を下げようとはしなかった。そしてスペインに対してポルトガルのための援軍を出すことを、近時のピレネー条約を承認することで禁じてしまった。しかしながら国王はダリーが申し立てた事由に理解を示して、実効的なことも提案をした。カタリーナと結婚した英国の国王チャールズ2世が、英国の王位に晴れて就いた場合には、フランスは英国から海峡の港ダンケルク(Dunkirk)を37万ポンドで買い取り、その代金をポルトガル防衛のための英国艦隊派遣費用に充たうというものであった。

ダリーはロンドンからリスボンに神父バルロウ(Barlow)を遣わした。彼の業績の中に、時報を繰り返す時計を発明したことが含まれている。2つの押しボタンを次々と押すと、暗闇の中でも今が何時何分であるか時報を聞けることができる代物である。この時計が今でも尚珍奇なものとして製造されており、27,500ドルで売られていて、“Le Portuguisier”として知られている。彼はその時計を国王チャールズに贈った。国王は豪く気に入られ、ポルトガルから赴任してきた大使の住居を宮廷のサマーセット・ハウスに移動するよう要請した程である。何か企みがあると嗅ぎ付けたスペイン大使が、もしもチャールズがブラガンサのカタリーナ以外の王女を結婚するなら、ポルトガルが提供した持参金の何と倍ものそれを差し出すと申し出たのである。スペインのハプスブルク君主制は戦争を通じて事実上破産状態に追い込まれていると知れ渡っていたので、この申し出は宮廷では冷ややかに扱われた。ブラガンサのカタリーナと結婚すれば、国王チャールズがポルトガルの植民地タンジェとボンベイと35万ポンドもの現金を受け取るという密約は、神父バルロウによって編み出されたものである。彼には、必要ならマデイラ島をおまけで添えることも含めて取引を纏める権限をリスボンから付与されていた。結果的にはマデイラ譲与をしなくて済んだ。おまけに同僚のドミニコ修道会が英国のセルティック地域で傭兵を集める許可も与えられて、彼らがポルトガルに派兵され、スペインからの攻

撃を防備することに繋がることになった。

最初の頃はボンベイにそれほど関心を示さないでいた。英国人がボンベイに正式に派遣し、兵士を派兵するのに3年間を要した。ロンドンに住む影響力を与える人々がタンジェを英国領にすると地中海沿岸住民を商業的にも軍事的にも支配し易くなると信じ込んでいた。伯爵サンドウィッチ(Sandwich)がタンジェ委員会の議長となり、サミュエル・ペピス(Samuel Pepys)が海軍省書記官兼収入役になった。

1662年の初め頃に、サンドウィッチ伯爵はタンジェに向け出帆し、ポルトガル人の統治者から英国の統治へと引き継いだ。彼は王女カタリーナを引取るためにリスボンに向った。王女のブラガンサ家は持参金の合意額の半分より僅か上回る程度しか用意できなかったが、英国も一か八か<sup>いち ぼち</sup>で差し出すことが出来るほどの財政的な立場になかった。サンドウィッチ伯爵が未払いの全額を補うために約束手形(IOU:I owe you)(promissory note)で手を打った。ロンドンにあるポルトガル大使公邸内に現在も懸けられて大きな壁掛けは、王女カタリーナを連れながらリスボンから出帆した英国艦隊が描かれているものである。ポーツマスに彼女が到着したとき、大群衆が押し掛けて熱狂的に歓迎したことを、“彼女は背が低く、下顎が僅かながら突き出ていたが、他の点では結構可愛らしい容貌であった”と、ジョン・エヴェリンが日記に書き残しているが、しかし国王は初対面での印象を「不細工だ！」と漏らしたと報告されている。

2人は慌しくポーツマスの大聖堂にて挙式をあげてその後、寝室に入った。今や英国女王になったカタリーナが、英国式婚礼も済ませたので当たり前前の床入りをすることを何と拒んでしまったのだ。そこでカトリック司祭が寝室に呼び出されてしまうことになる。その寝室で、ポルトガル人の高い階級の男性4人とポルトガル人の侍女3人立会いのもと、英国人が誰一人居ない状態で結婚のミサを司祭が執り行った。その後漸くカタリーナは国王と一緒にベッドに入ることに合意したのである。

お互いの言語(英語とポルトガル語)を一言も喋らずにスペイン語で会話した王室のカ

## 第14章 自由の再獲得

ツプルは南海岸に沿って帆走してテムズ川を遡上してロンドンに向ったら、多くの群集に熱狂的な歓迎を受けた。しかし新女王の人望は、少なくとも宮廷の中では、それほどではなかったようだ。そしてポルトガル人の侍女が初めて会う人の誰にでも頬に接吻をするのを廷臣が呆気にとられていたと、サムエル・ペピスが日記に書き残している。女王掛り付けの医者であるメンデスが、この水が飲める代物ではないと扱下ろし、タンブリッジ・ウェル（英国西ケントの町、東エセックス、スパのある町）の水が良いので消費するよう推奨する小冊子を出している。新女王はポルトガルの調理人を連れてきてはポルトガル料理のみ口にしたようである。英国風の衣服は身に着けず、もっぱら古風に見えるポルトガル宮廷服を気に入って着ていた。

国王チャールズは女侯爵キャッスルメイ<sup>おんな</sup>ン(Castlemayne)(Barbara Villiers ; 旧姓, 1<sup>st</sup> Earl of Castlemayne 初代キャッスルメイ<sup>おんな</sup>ン伯爵夫人であるがチャールズの寵姫サミュエル・ペピスの日記に多く取上げている。)をおおつぱらに囲い続けていた。王家の寵姫の称号は国王によって一切用意され、寵愛する見返りに平民に卿爵位をあげていた。この見え透いた口実の下、新公爵になったキャッスルメイ<sup>おんな</sup>ンはキャッスルメイ<sup>おんな</sup>ンが産んで数年間に亘る皇帝陛下6人の父親として、彼らの教父である国王としての代役を務めることになったのである。チャールズは、皇后カタリーナが寢室の女王にキャッスルメイ<sup>おんな</sup>ンを指名し、カタリーナは断固として譲らなかつたと主張したそう。チャールズはカタリーナが譲歩しないならポルトガル人侍女全員を送り返すぞと脅したら、何と彼女は送り返してしまった。ペピスが宮廷での逸話でこう記録を残している。《女侯爵キャッスルメイ<sup>おんな</sup>ンが女王の衣装室に入ってきた。女王陛下の髪はポルトガル流に編まれていた。キャッスルメイ<sup>おんな</sup>ンは自分がそのような髪を結わねばならないならばどれほど辛抱強いかについて意見を述べた。女王はこう答えられている。「このようなことは、我慢する中では一番少ないうちのよ。」》直ぐにその後、ペピスの1665年6月10日付けの日記の書き出しには、《応接間にいた侍女の面前で普通に話していた女王が、女侯爵キャッスルメイ<sup>おんな</sup>んに、「国王が貴女の館に夜遅くまで泊って

## 第14章 自由の再獲得

お風邪を召さなければいいのに」と、話した。するとキャッスルメインは皆の前で「いや国王はそんなに遅くまで泊っていませんよ、遅くならない内にそこから（朝の1時か2時か3時には）どこか他の場所にお泊りでしたよ。」と書かれている。

《それから国王は部屋に戻られてこのことをふと耳にしたので、キャッスルメインの耳にこう囁いた。「お前は図太くて出しゃばり者だ！ 宮廷から出て行け！ 自分が呼び戻すまで2度と来るな！・・・」と、話した。彼女はペル・メルにある下宿に行き2、3日泊った。》3日後に彼女は国王に自分の持ち物を引っ越しするのに宮廷に一度戻らせて貰えないかどうかの書簡を送った。それなら宮廷に来て確認しなさいと国王は返答したので、彼女は宮廷にやって来ることになった。国王は彼女の為に待ち続けていた。そうしたら何と彼女は国王に自分は貴方の私への恋文をばらしますよと、脅迫する作戦に出たのである。国王はそれを不憫に思い、「友人として再び付き合おう。」と述べたようだと、ペピスの日記に書かれている。

ペピスによれば、このことは王室財政にとっては喜ばしくない知らせであった。国王の不義を利用して英国宮廷でのポルトガル人（カタリーナ女王を指す）の軽視が、今やポルトガル人にとっては、支払義務がある持参金の支払を更に遅らせる理由となり得た。《ロンドンのシティー（1マイル平方の旧市内は英国の金融・商業の区域）は鏹一文も貸すとは思わない。》とペピスが述べている。事態を悪化させるのに、ペピスらが期待したような財政積み立て掛金を備えるどころか、ポルトガルから英国へのタンジェの贈物が、逆に、商業的な見返りが実質無くて派遣守備隊を維持するのに、年間55千ポンドも英国は負担を強いられてしまった。

結局、国王は女侯爵キャッスルメインとの関係は破局になってしまい、その後ポーツマス公爵夫人に叙せられたルイーゼ・ケルアイユ(Louise Keroualle)を寵愛するようになった。そしてサマーセット・ハウスにポルトガル風の居室を造り、女王は別居し続けた。ある晩、晩餐を終えて、ペピスは女王の寝室を拝見しに友人に連れられて行った。《寝室には寝台以外に殆ど何もなく、見事な宗教画と祈祷本があった

位であった。女王が就寝するときの頭上の方に聖水が置かれていた。》彼女はミサに参列し、祈祷し、告解し、長い訓戒を読んだりして毎日多くの時間を費やして過ごし、その他はトランプに興じていた。

チャールズ2世の伝記作家ジョン・ミラー(John Miller)教授は、《その結婚は、まさに個人のそして政策上の戦略であった。》と書き認めていた。国王が女王の寝室に偶たまにしか行かなかった。女王が4度も懐妊したが毎回流産した。4度目に懐妊したときに、そもそも懐妊しているのではなく、不妊症であると国王は決め付けてしまったのである。国王がカタリーナと離婚するという動きが宮廷内と議会内で囁かれ始めた。持参金を受け取れるものに返還するものが幾らか含んでいたために離婚しない結果に終わった。清教徒の政治家は、女王の王位に対する《カトリック教徒の陰謀》に彼女を巻き込めようとした。国王は、十分にご立派と思える位に、明らかに馬鹿げたことだとその言掛かりを弾劾した。国王が亡くなった後、女王に対する悪意に満ちた噂の捏造が増えて来たので、女王はリスボンに帰ってしまった。カタリーナが英国で暮らして継続的に貢献したこととして上げるならば、ケーキ付きの紅茶という‘午後の紅茶’の習慣をポルトガルから英国に持ち込んだことだけだったということか。

ポルトガルにとっての幸運は、彼女が英国にいた間に様相が一変したことである。彼女の弟で間抜けな国王ジョアン6世がアゾーレス諸島に島流しされていた。王位に就くことになっていた下の弟の国王ペドロ2世が、兄ジョアン6世の妻と結婚した。一方この3人の母君である女王ルイザは君主として君臨していた。

女王ルイザの宮廷付き司祭であり国務大臣でもあった神父オー・ダリーは、2歩兵連隊と2騎馬隊と10隻の軍艦を引き連れて英国から帰還した。スペイン軍が1665年にポルトガルを侵略し、ブラガンサ王朝の宮殿があるヴィラ・ヴィソーサに向けて軍勢を進めたとき、シヨムベルグが指揮する英国軍とドイツ軍から援軍を受けていたポルトガル軍と対峙した。何と初日の6月17日に、4千もの兵士が

戦死し、6千も捕虜されてしまったのである。更にスペイン軍の馬3千5百頭も分捕られてしまった。この戦いがモンテス・クラロスの戦闘として良く知られているものである。

それからそれ程経たない内に、リスボンに住む人々が皆驚いたことだが、ブラジルのポルトガル人移住者が、オランダ人の植民地支配者の自由を奪い取ったことに抗して自由を獲得せがむがために立ち上がり、自分らの権力を握ることが出来た。彼らは直ぐにタバコを1年間で28回もの貨物船でリスボンに輸送する程までの量に伸ばした。1680年代までタバコの輸入や再輸出業務は国の専有事項となり、税率を20%もの課したタバコ税は、ブラガンサ王朝(Braganças)の最大の歳入源となって行ったのである。そしてタバコの流行は欧州全体を駆け巡った。ヴァージニアのイギリス人・タバコ大農園主によって栽培されたタバコをロンドン商人が北欧州に供給しているときに、リスボン商人は東ブラジルで育てたタバコを輸入してスペイン、イタリア、フランスに売り捌さばいていた。喫煙は楽しい社会的習慣となり、また人の脳を素早く陽気にする覚醒を齎す快樂だけでなく、常用癖が付く麻薬として市場に出回った。葉巻タバコよりも、刻みタバコの格好で吸うのがより好まれた。タバコを親指と人指し指の間に挟み、鼻の穴から煙を出すと、鼻孔の粘膜からニコチンを血液の流れの中に入れ込むのだ。そうすると7秒から9秒後には脳にニコチンが運ばれるというのである。ポルトガルでは、タバコが興奮剤として広く欲しがられてしまい、エヴォラではタバコに起因する犯罪が次々と起きたので規制できるようにリスボンに告訴する裁判を起こされたほどであった。喫煙する習慣を支えてお金を獲得するためには、数多くの喫煙常習者の奪い合いとなってしまった。タバコ大流行から裕福になる者の中で君主制そのものが傑出していたので、その裁判の申立に対してリスボンでは耳も貸すはずもなかった。国が独占しているタバコ貿易に対してではなくて、民間がタバコ貿易をした場合には罰則規制を反対に設けた。ポルトガル国内でタバコを栽培することは違法と見做された。大掛かりな闇市場を

#### 第14章 自由の再獲得

取り締まる警察官が採用され、彼らは違法なタバコを捜し出すのに国内中の建物の手入れをした。自分の野菜農園でタバコを栽培していた多くの貴い身分の家族の一員が逮捕されて、罰金を科せられ、時には収監された。1676年には、警察はリスボンにある聖ベネディクト修道院を家宅捜査した。警察は修道士からタバコ葉破砕機と篩と刻みタバコ入りの大袋4袋を押収した。修道士は起訴を免れたものの、大修道院長は国外追放されてしまった。1700年には、ヴィアナ・ド・カステロにあるサンタ・アナ女子修道院を家宅捜査して、修道女が修道院の農場でタバコを栽培し、そのタバコを1日当たり120キログラム売っていたという記録を押収した。

ゴアのポルトガル人とインド人が喫煙を楽しむ続けるために、タバコ購入代金としてダイヤモンドを詰めた麻袋を年間10袋もリスボンに支払うほどにタバコがゴアでは大流行した。品質が低等級のタバコ葉はサトウキビの糖液に漬けられて西アフリカに出荷されて奴隷と物々交換して、噛みタバコとして喜ばれた。その奴隷はタバコ農場を新しく開墾し、より大きな農場にするための労働力としてブラジルへ運ばれた。

タバコはブラジルがブラガンサ王朝の宮廷やリスボン商人に引き渡すことになっている富の前奏曲に過ぎなかった。砂糖、獣皮、薬草、ダイヤモンド、そしてブラジル人が後に名付けたもので‘鬱蒼と茂った赤い檜木’を南アメリカの大西洋沿岸の港からポルトガルへの一つの流れがあった。スペイン領土の南アメリカから略奪した銀の交易がブラジルとリスボン経由でロンドンへのひとつの流れもまたあった。銀は英国で膨大な需要があり、アジアで最も需要があったのは硬貨であったので、アジアでの商業分野で大英帝国として発展させるのに、銀貨は必須の通貨であった。

そして1694年、バルトロメウ・ブエノ・デウ・シケイラ(Bartolomeu Bueno de Siqueira)が、サン・パウロの内陸部にあるイタヴェラヴァの丘陵地帯に金が埋蔵されているのを発見したのである。財産を相続したシケイラが、賭博で金を摩ってし



まっていた。彼は失った遺産の穴埋めに一大決心した。彼の言葉を借りれば、「私は賭博で取り戻すよりも働くのだ。」砂金を鍋で選り分けるような小川の流りに連れて作業をする原住民の一味に雇われて、大いに働き、そして意気揚々として町に戻った。サルヴァドール・フルタード・デウ・メンドンサ(Salvador Furtador de Mondonça)大佐がシケイラの後を気付かれないようについて行き、部下に砂金を選鉱させたなら半オンスもの砂金を直ぐに持って来た。町に戻る途中でマヌエル・ガルシア・ヴェーリョ(Manuel Garcia Velho)隊長と会ってしまった。隊長は大佐がその金を自分の精選物、奴隷の随員2人の中で飛び切り美人だった土地の女性と交換するよう説きつけてきた。大佐は24歳の女性とその11歳と12歳の娘を選んだ。大佐はその娘2人に洗礼を受けさせ、更にパタングイに彼らの住まいを与えた。その後、彼らは一緒に40年も生活したそうな。話し変わって、大佐はブラジルの奥地から金を商業規模の抽出に成功した人物として歴史上に残った。

それからアメリカでかつて無かった初めてのゴールドラッシュに沸き立った。アメリカ合衆国でのそのような出来事が起きる前の1世紀半、欧州人が奥地を骨の折れる旅をしていたのである。リスボンからの船が続々着いて、ポルトガル系ブラジル人が3千人以上にも膨れ上がった。現在ミナス・ジェライス州として知られている地域が共通した行き先であった。森の藪が踏み潰された。逃げ出さなかった原住民は奴隷として捕えられ、ありとあらゆる川や小川で砂金を選り分ける労働に扱われた。土手伝いににょきにょきと吹き出た天幕群が、三つもの堅牢な町へと何時の間にかに大きくなって行った。この貪欲劇を描写した叙事詩があるという記録が皆無に等しいのは、これに関与した多くが特に読み書きの出来ない人々だったからであろう。がしかし記録が残っていないくても、多くの、いや多分最も多くの、探鉱者が金を探し求めて来ていたことだけははっきりしている。

牛肉を食するよう畜牛を駆り立て、また他の食物を荷車で他の地域へ運んでは、至る所で仕入れ値の10倍も50倍も値段を吊り上げて売り、財を築く欧州人も出

#### 第14章 自由の再獲得

て来た。犯罪は確かに増えた。探鉱者が探し出した金の在り処や自分の生活基盤の全てを、純度検査所で分析結果を得る前に失うのは日常茶飯事になった。ブラジル生まれのポルトガル人とリスボンから新しく移民してくる人々との間のいがみ合いが激しくなっていた。双方共に金のためにお互いに殺しあうのが犯罪とは、決して思わなくなってしまった位である。サン・パウロから出掛けて来た彼らは、道中で、偏狭な田舎育ちで強制されて小作人になった者や無報酬の労働者を寄せ集めた。これは明らかに違法であった。最初に支配者に抵抗し、今度はポルトガル国王に抵抗した《原住民》を、政府の役人が保護することに乗り出した。返答がなくて、また法律を適用しようと軍隊に要請するも、拒否された彼は辞任してしまった。後継者もまた直ぐに役立てないことに抵抗した。ポルトガルの国王が結局は原住民の抗弁の調停に乗り出したとき、双方の役人がブラジルの国内問題に干渉しようと努力している国王を非難した。それではとても遅すぎた。この田舎くさい陶芸家の原住民は、熱帯雨林のなかで金を採取するような劣悪な作業環境の下で生き延びる体格を持ち合わせていなかったし、実に多くの仲間が死んでいった。彼らはギアナやアフリカの何処からか船で連れて来られた奴隷に置き換えられた。産出された大量の金は、ポルトガル君主国により課された20%もの売上税を支払わないで済むように国外へ密輸されていた。

こんな状況にも拘らずブラガンサ王朝は苦情を言わなかった理由がある。1699年までに18千オンスの金が正式ルートでポルトガルに輸入されていた。1720年になるとこれが900千オンスへと増えた。国王ジョアン5世の取り分は英国の国王の全歳入金額の何と30倍以上という年間歳入に及んでいたのである。

国王ジョアン5世にはもうひとつ大きな収入源があった。アジアや南アフリカから欧州へダイヤモンドを大量に送り出して供給過剰になった結果、その価格の暴落を惹き起こし、タバコの値段が暴騰し続けてしまった。ブラガンサ王朝はもはや王家同士の外交的結婚ゲームに鼻であしらわれないであるべきであった。つまりオー

ストーリーの王女マリア・アナ(Maria Anna)がジョアン5世と手を切った。

国王ジョアン5世はリスボンの宮廷で贅沢三昧に過ごしたが、それを他の欧州の君主下品な見栄と妬み、嘲笑いはするものの、見習おうとはしなかった。外国の大使の歓迎式、ブラガンサのいとこの海外赴任の見送り式、復活祭、ブラガンサ家の御子の洗礼式・・・など全てが終りなきパーティーの理由の連続であった。この時に、展示館、劇場、凱旋門、仮設の架橋、ライトショーの建造物が必要とされた。

ブラガンサ王朝の多分のご祝儀はヴァチカンにまで広がっていた。リスボン大司教の名は教皇によって授けられ、今現在も続いており、世界中でたった3つのカトリック司教名の1つであるパトリアルフ(Patriarch)という称号である。国王ジョアン5世は愛人の中の1人であるアベス・オブ・オディヴェラス修道院のパウラ・ダ・シルヴァ(Paula da Silva)を恋仲になり、彼女が1人の子を産んで国王と王家から感謝された。御子の誕生を祝ってブラガンサ家の領地であったアレンテージョにあるその修道院は、《天使の羽根》、《天国のベーコン》、《修道女の乳房》などの子供用のデザートを作って振舞われたという。

ローマにあるセント・ポールの音楽指揮者ドメニコ・スカルラッチ(Domenico Searlatti)が宮廷礼拝堂を引き継ぐために、素晴らしい独唱家と少年聖歌隊員を連れてリスボンの王家に採用された。大きくて新しいグランドオペラハウスが、次にアルカンタラに壮大な水道橋が建設された。現サン・ロケ教会であるサン・ジョアン・バプティスタの礼拝堂は、イタリアで瑠璃(*lapis-lazuli*)を材料にして建造したものをローマ教皇が祝福した後に解体して、リスボンに移送して再度組み立てられたものである。

1717年にブラガンサ王位継承者の誕生に感謝してジョアン5世(João V)は、マドリードから北方に位置するエスコリルの宮殿はもっと大きかったがそれを参考にしてリスボン北方の離れたマフラに宮殿を設計し建造するように命令を下した。その計画は1733年に大幅に拡張された。その結果、ヴェルサイユ宮殿を含めて

## 第14章 自由の再獲得

欧州のどの宮殿の中の廊下は最長のものになった。同時代のポルトガルの小説で最も知られた、そして英訳もされたジョゼ・サラマーゴ著の『修道院の覚え書き (“*Memorial do Convento*”)』には、ピラミッドの建造で従事したエジプト人の奴隷の数に匹敵する位の強制労働を強いられて苦しみ、死んで行ったことが述べられている。その宮殿が竣工した後は、大部分は修道院として利用された。修道士は古典の写本を蒐集して実に優れた蔵書を持つ図書館にし、礼拝堂には6つのオルガンが備えられて典礼音楽の中心として有名である。1910年の共和国の宣言を受けて、ブラガンサ王家一族が英国のミデゥルセックスのトウィケンハムに国外追放をされる直前に、ポルトガルの地の、このマフラの修道院で最後の夜を過ごした。

今や伝説的にもなっているブラガンサ王朝の富裕さが、ポルトガルの政治に基本的な面で変化を齎した別の結果として、まさに王朝の廃止にあったという者がいる。欧州の他国と同じく、ポルトガルの国王が税率を引き上げる必要があると国会を召集して来ていた。伝統と慣習によって、国会議員が貴族、聖職者、平民、地方自治体、貿易業同業組合で構成する議員グループに新しい権利と特権を国王は認めた。彼らがどうお金を使うかを知っている以上のお金を消費して、ブラガンサ王朝は、その後の120年、別の意味での議会を召集することはしなかった。

## 第15章 ポンバルと国王、誇大妄想の二重奏

1755年11月1日、万聖節の祝日の夕方に、カリブ諸島に大波が押し寄せた。同日午後一番に英国の海岸の周りに大波が襲い掛かってきていた。60歳になるドイツ人のゲーテ(Goethe)がドイツで地震を感じ取り、余生で思い出に残るショックを受けたと書き残している。フランスの作家で哲学者であるヴォルテール(Voltaire)が亡命先のスイスにいたが、自分のいる地面が揺れた。未だに最も人気がある彼の作品である風刺小説『うまれたままの』(*Candide* ; ナイフの伝説)を書こうとそこで彼は思いついた。

リスボン大地震は欧州各地で記録が残されている最大の激震であったし、その最悪規模の記録は破られていない。震源地はセント・ヴィセント岬の南西沖であった。激震はアルガルブ地方とアレンテージョ地方一帯を通り抜けて朝の9時半に首都リスボンに達した。56もの各教会では、丁度そのときミサが執り行われていた途中だった。教会は滅多にないほど参列者で溢れていた。11月1日の万聖節のミサ参列はカトリック教徒のポルトガル人にとっては必須のものである。聖餐台の傍や脇の礼拝室に点火していた燭台が、祝祭日だったこともあって特別に多く飾られていた。地面の激しい揺れが2分ほど続いた。最初の地震で市内の5つの教会が全壊した。余震が続き、巨大な粉塵の雲が市内を覆い尽くし、建物の崩壊による生き埋めから辛うじて生き延びた人々が多くの死体に挟まれて窒息する位であった。その後、大きな津波がテージョ川の河口に駆け上ってきて、市内の低地地帯は洪水と化し、生き埋めから脱出した人々を溺死させてしまった。リスボンの住宅地がある7つの丘陵地帯には無数の燭台があり、地震があったとき消したのもあるが点いたままのもあって数え切れないほど大きな火災が発生し、6日間も延焼したのもあった。崩

## 第15章 ポンバルと国王、誇大妄想の二重奏

落した石材の下に挟まれた生存者がそのまま焼死し、死体が火葬されてしまった。

長い間、激しい揺れのある余震が続いた。漸く洪水だった水も引き、消火されたが、リスボン市内にある20万の建造物の内の1万7千が倒壊してしまった。その中には7つの内の6つの王家の宮殿、枢機卿の宮殿、異端審問所の聖庁、インド館、ポルトガル帝国の本部も含まれている。スカルラッチ（前出233ページ）が国王音楽隊の団長を務め素晴らしい作品を作曲した王立礼拝堂、柿落とし後ほんの数ヶ月しか経たない大歌劇場、素晴らしい美術品を備えた王家や貴族の宮殿、図書館など、後世の人々には大きな損失であった。町にある刑務所は倒壊しなかったが、激しい揺れで監禁者と脱走者を閉じ込めた。囚人がどっと脱走して、兵器と弾薬が保管されていた崩れかけた倉庫の中に身を潜めた。また廢墟に化した大通りを通り抜けながら略奪して暴れまわる者が拡がって行った。

24万人の人口の中から、恐らく10分の1以上の犠牲者が出たと思われる。その3分の2は地震による即死ではなくて、石材の崩壊、洪水、火災、又は殺人、伝染病から震災後に死んだものと推定されている。被災者に関する多くの記録類は、諸外国の多数の特派員らによって書かれている。英国人だけで36人、その他にフランス人、ドイツ人、イタリア人、スペイン人である。

間に合わせの野外説教壇から、「地震や洪水や大火は、悪事を後悔しない我々に対する神の激怒の小さな前触れであるのだ」と、司祭が説き伏せていた。するとある信者が「神はなぜ刑務所や売春婦の住む地区に危害を与えないで、信仰が詰まっている全ての教会を倒壊させてしまったのか」と、問うた。国で一番身分が高く、姦通や仰山の饗宴を繰り広げていた罪人である国王ジョゼ1世自らが危害を与えてしまっていたのだ。当日の朝、国王は宮廷での公務をしないで、退屈しのぎに側近を連れてリスボンの町外れのベレンにいて結果的には難を免れた。国王ジョゼ1世はポンバル侯爵と後になる最年少の大臣に、国王は今何をすべきかを尋ねた。そこでポンバルは「遺体を埋葬し、住まいを与え、リスボンを復興すること」と、答えた

## 第15章 ポンバルと国王、誇大妄想の二重奏

という。宮廷に戻るのを止めて、国王はポンバルに宮廷をベレンに移すように命じた。自分と家族と宮廷をベレンに落ち着かせて、ポンバルをリスボンに遣わした。

ポンバル(Pombal)侯爵となるセバ스티アン・ジョゼ・デウ・カルヴァーリョ・イ・メロ(Sebastião José de Carvalho e Melo)は、こうしてポルトガルの全時代を通じて最も有名になった首相となり、当時の欧州で一流の政治家となる経歴を歩み始めた。彼は歴史家の中で現在でも未だに論争の中心にいる。1世紀に亘って彼が弾圧したイエズス修道会が、誹謗によって歴史的復讐の追及を許しがたいように時々思われていた。ポンバルの弁解者は、彼の残忍性が彼の生きた時代では特異なものではなく、寧ろ啓蒙運動の先駆者と見ている。彼が君主政治を実質的に国王から奪ったことを否定し、内気でありながら決断力のある国王に忠実な僕しもべであると主張している。ポンバルは度々“啓発した独裁者”と呼ばれて来ている。それは恰もそのような人物であるべきであったし、《謎々》でもポンバルについて多く語られている。これについては現代のポルトガル人学者の間では一致していない。

神の天罰による天災として大惨事を見るどころか、ポンバルはそれが政治的に大きな好機と見做していた。彼は『ポルトガル国王が1755年の大地震から手にする諸利点』という題名の政権公約を発表した。その中でこう述べている。《テージョ川は洪水の御蔭で、本来の自然な流れへと最適にすることが出来る契機である。同じように、理想的な国家を造りあげるには、国家は部分的に壊さなければならぬときもある。この事象の後には、新しい明晰が現れてくるものだ。》

城壁の外側にあった彼の邸宅は被害を受けていなかった。大惨事後、彼はそこに8日間戻らなかった。市内を動き廻って査定をし、国王証印を押した命令書を発行しながら、四輪馬車の中で過ごした。220人以上が生存していたのである。家族と一緒に未だ避難していない強壮な人たちがリスボン市内を離れるのを禁じて、救助活動や消火作業に従事するように命じた。黒死病が大流行する危険性を大いに孕んでいることに気づいた。ポンバルは死者の個々の葬式なしで済ますよう枢機卿

## 第15章 ポンバルと国王、誇大妄想の二重奏

の同意を取り付けた。兵士は瓦礫の中から遺体を掘り出すのに分遣され、その遺体を川に投棄した。港に停泊中の食物を積んだ全ての商船が徴用された。商店主は食物の値上げをしないように指示され、守らなければ重罰に処された。リスボン市内の8つの地区の夫々に、公設の絞首刑台を建てさせた。ポンバルは裁判官に略奪者、不当利得者、他の犯罪者を死刑に宣告でき、直接、即座に執行出来る権限を与えた。

見せ掛けの体制が取り戻される時代まで、ポンバルは国王ジョゼの黙認のもと、ポルトガルの指導者と成っていた。その後22年間も続いた。他に2人の国務大臣がいたが、1人は死に、もう1人はポンバルによってエステウレマデウーラ海岸沖の島へ流刑され、彼もそこで死んだ。ポンバルの称賛は述べられていないが、彼がどうやってそのような大きな権限を掌握したかについてそれがそれ以来、憶測の域にとどまった。政治的宣伝というものを早熟とっていい位に理解を示して自分の政治的道具として用いた。彼は他人の名前を借用して自分の政治を鼓吹し、自分や国王の敵に対しては凄惨な攻撃をしたばかりか、鮮やかな自叙伝を書いて発表した。こうして伝説は最近まで脈々と生き続け、在ロンドン・ポルトガル大使だった彼が同時代の英国の哲学や重商主義や帝国の貿易に関する主要な蔵書の作品を蒐集し、熱心に研究した。事実、ロンドンで6年住んだ後でも、自分自身のようなポルトガル人にとって理解の及ばない所が英語の言い回しにはあると彼は未だ不平を零<sup>こぼ</sup>していた。英国のある新聞が彼についての記事を載せたとき、アングロ系ポルトガル人の知識人に自分用にそれを翻訳してくれるように頼まねばならなかった位であった。同様にリスボンの復興計画立案者に彼は信用されていたが、それは公表してよいとの許可が下りたその計画を報告したのは、実は自分だったからであった。

彼が初めて権力を握った段階とは、彼が公文書所の保管人となったときだとの噂がその時代のポルトガル貴族の中で広まり、王家や貴族を守ってきた家系という機密データを、爵位を上げるかどうかを強<sup>ゆ</sup>請<sup>す</sup>りという彼のやり方で、後で利用していたと申し立てられた。彼の2人の連れ合いが自分の職業の立場から抜け目なく選ば



## 第15章 ポンバルと国王、誇大妄想の二重奏

れたことに少し疑問が残る。騎士の従者の息子であった彼は高名な貴族家の令嬢と駆け落ちして、結婚して爵位を手に入れることに成功した。彼女の死後、オーストリーの伯爵夫人と再婚した。ポルトガル皇太后であるマリアナ・フォン・ハップスブルグ(Mariana Ana)はウイーンで育てられ、人里離れたところに住んでいてホームシックに掛っていた。彼女は後のポンバル侯爵を直ぐに相手役とし、彼女の友人の夫が出世して金持ちになる手助けするのに大いに興味を示した。

彼が多く成功したのは、冷酷さを持ちながら自分の到達目標に邁進していたと考えることが出来る。それでも、国王ジョゼがそれを望めば、国王のためにそれを掌握するのにまた無心で忠勤な彼でもあった。これはタヴォラ(Távora)事件においてその痕跡がある。国王ジョゼが4輪馬車に愛人の若きタヴォラ侯爵夫人を乗せて、一晩を過ごした。この情事が結婚している上流階級である彼女のタヴォラ家を激怒させてしまった。馬車がタヴォラ家の屋敷への第1門を通り過ぎたときに、国王は撃たれて右腕を負傷してしまった。馬車は即座に引き返した。第2門には既に公爵アヴェイロ(Duke of Aveiro)が率いる武装集団が待ち構えていたので、引き返したのは実に幸運であった。公爵アヴェイロは国王ジョゼの後継者と目<sup>もく</sup>されていて、彼の息の根を止めようと待っていたのである。

ポンバルは自分と国王ジョゼの個人的な敵に対する国王の布告を巧みに利用しながら、異端審問所を教会からそれまでに接收していた。彼はタヴォラ家の家人を異端審問所による逮捕を命じ、拷問を掛けて訴追した。しかし一審判決は却下した。“それは周知の事実だ”と法廷で言って、国王と一緒にいた愛人の伯爵夫人の暗殺を企てているのをタヴォラ家の家人がそのときは知らなかったとの訴追請求をポンバルは信じないと言った。

ポンバルから脅かされて、控訴審では判事が自分の意思を曲げて有罪と判決を下した。彼らの幾人かは翌日に処刑されてしまった。他は20年間の地下の独房にて過ごす羽目になった。愛人である伯爵夫人は、伯爵と2人の子息が立ち会う中で自

## 第15章 ポンバルと国王、誇大妄想の二重奏

ら命を落とす前に、ポンバルによって処刑された。彼女の子女である国王の前愛人はずっと修道院にて幽閉された。

ポンバルの命令で、タヴォラ家の宮殿は取り壊され、その華麗な庭園には塩がばら撒かれて植物は全て枯れてしまった。国中にあったタヴォラ家の紋章は取り外されて、壁に埋め込まれた紋章は粉々にされた。

ポンバルは、自分が国王の忠義な大臣であり、彼自身や彼の仕事や若しくは彼の制令に対して、全て不従順になり又は批判することは即ち国王に対して攻撃していることであり、君主・国家への反逆だと、この時までには自分の考えを確信してきていた。ポンバルが出す全ての政令に実際に国王証印を押していたので、国王自かがこの考えを支持していたことになる。ルイ14世が『国家は朕なり』と言ったように、ポンバルは『君主は朕なり』と考えていた。彼はこの考えを今や平民を卑屈の中に押し込めるのに利用して、1年経つと直ぐに権力を握ることになった。

1756年に、ポンバルは国王のために商人の企業連合にポルトガル第2の都市ポルトにワインを販売する王家が所有する独占権を売り渡した。数多くの居酒屋経営者や小売商人は商売が出来なくなってしまった。それに反対する者が街頭に出たデモをしたが、478人も検挙された。判事はこの裁判で理解を示して彼らに無罪放免の判決を言い渡した。国王はその判事を首にし、ポンバルは彼の財産を没収した。検挙された者は再び裁判に持ち込まれた。478人の内、13人の男性と5人の女性が絞首刑に処せられた。残りは鞭打ち刑や収監され、若しくは中央アフリカに追放されて、財産を没収されたが、その没収品は恐らくポンバルのものになったであろう。彼はポルト占拠するために5つの歩兵連隊を派兵した。ポルトの市民は自分たちの家に兵士を泊めさせ且つ食事を出してあげねばならず、しかも自分達がその費用を負担したばかりか、国王のためと称して兵士に報酬まで支払わされた。

リスボンの復興にポンバルが考えているほど誰もがポンバル以上には気力を持っていなかった。国営企業若しくは独占会社を作ったのは確かにポンバルであった。

## 第15章 ポンバルと国王、誇大妄想の二重奏

しかし欧州の中では新しい全体設計をして、都市計画書を率先したのはマヌエル・ダ・マイア (Manuel da Maia)であった。彼が南アメリカで見てきた現代的な都市で触発された彼の設計思想は、海岸通りに大きな広場があり、新王宮が背後にあり、川に面しているというものだった。欧州の何処から来た訪問者に深く印象に残るようなその他の形としては、その当時は幅広の大通りであった。殆ど驚くほどといってもいい位に、大通りは直線で格子状になっていた。ポンバル風と知られる建築様式は、実際には偉大な建築家エウジェニオ・ドス・サントス (Eugénio dos Santos)の様式である。ポンバルが建築に及ぼした貢献とすれば、きちんとした統一性を求めた点であろう。でも彼が敷いた規制は窓敷居に花瓶を置くこと、玄関扉に紋章を表示することを禁じた程度であった。

リスボンに住むドイツ人の商人組合の指導者アルテンブルグ (Altenburg)が都市計画を研究した後、国王ジョゼに謁見し、国際基金連盟を組織化して復興事業の財政支援をしたいと申し出た。国王は彼がポンバルに相談するように暗に勧めた。アルテンブルグはポンバルが気乗りしていなく、誠意がないようだと言った。国王がポンバルに意見を伝えると言ったようである。ポンバルは彼を逮捕させて、アンゴラへ行く船に強制的に乗せてしまった。彼はその地で病死した。

ブラジル人が金<sup>きん</sup>ブームに沸いていた全盛時代はもう終わっていた。最も産出の多い鉱脈を開拓するためには、金鉱山で働く労働者の<sup>ことごと</sup>悉くに課せられていた法外な人頭税が唯一有益なものであったが、大部分が産出しなものと想定して値踏みしていた。ブラジルはそれでも未だポルトガルに大量の砂糖とタバコを出荷していたが、カリブ海諸島のオランダ、英国、フランス植民地からこれらの商品が供給されて、今や熾烈な競争の中に立たされ価格の下落を余儀なくされていた。この物品税収入減少が国庫への流れに枯渇を齎してしまった。そこでリスボンの再興に必要な資金確保のために、ポンバルはリスボン市内での小売全てに4%の消費税を課することを処置した。これで商業活動が抑えられ、建設の進みも遅くなってしまい、リ

## 第15章 ポンバルと国王、誇大妄想の二重奏

スポンの復興は独裁者の死後の時代まで完成しなくなってしまった。

新しい商店を開店でき、出来立ての住宅に居住できるように建物は出来上がったのに、入居する者が出てこなかった。人々はリスボン以外の地域の廃墟から飛び出て、掘っ立て小屋だらけの町に住むことを選んだ。彼らは賃借料の踏み倒しをし、共同社会という意識を持って比較的自由的な規制のない生活が自分達には寧ろぴったりだと思っていた。彼らは王政の同意なくどんどん拡大して行くその小屋での生活が違法なものだとされ、ポンバルは小屋を壊すために兵士を派遣してその居住者は新築の家に追い出している。

元は宮殿広場(Terreiro do Paço)として知られる大きな広場を、ポンバルが商業広場(最近見事に復興して来ている)と名前を付け替えた。ポンバルはその広場の真ん中に国王ジョゼの大きな騎乗像を建立した。彼はその像に個人的ではあったにせよ3日間も敬意を表して祝福をしたが、一緒出来なかった名士の1人とは、実は国王本人であった。そのとき国王ジョゼは重病を患っており、その広場側の、窓際の病室のベッドに寝ていたのに、兵隊とか貴族や役人や町の人々が広場を訪れてその騎乗像に向って敬重にお辞儀しているのを眺めることすら出来なかった位であった。除幕式が行なわれたあとに、ポンバルは国王の統治の徳行と偉業を称えた、実はポンバル自身への感謝の気持ちに満ち溢れたものと明確に読み取れるものだが、国王へのくどくどした手紙を書いた。

ポンバル自身ロンドンで6年間も住んで心から英国人が嫌いになっていたのに、ポルトガルを一流の国際的商業活動の中心地に再び発展させるには、彼は英国人が鍵を握っているとの確信を持つようになった。それはビジネスの分野で寄与している中産階級の英国人を指していた。リスボンでの中産階級は英国人やオランダ人とドイツ人の商人であり、彼らが牛耳っていた。ポルトガル人の商人は、新キリスト教徒と言われているユダヤ人からの不利な条件に甘んじながら生活していた。ポンバルはポルトガル人が商業分野で外国人の商人より優位に立てるような方法がある

## 第15章 ポンバルと国王、誇大妄想の二重奏

と見立てた。ポルトガル人が受けてきていた公な差別待遇全てを廃止した。異端審問所の聖庁を引き継ぐときに、国王の名の下でポンバルはユダヤ人に対する迫害に関する全ての綴じ込み帳を焚書するように命じた。彼は欧州の至る所に国外追放されたポルトガル系ユダヤ人共同社会に密偵を遣わし、ポルトガルに戻るように誘った。ポンバルによって多分奨励された有名な逸話がある。ユダヤ人に向け未だに流行っていることを述べようとポルトガル全土の子供達に語り掛けているものである。

ユダヤ人かどうかを見分けるのに白い小さな帽子を被っているか否かで全て確認できると総大司教の枢機卿に<sup>そそのか</sup>唆されて制令を布告したと、ある日、国王ジョゼがポンバルに話した。ポンバルがそれから国王を訪ねた折に、3つの帽子を持って行って、「1つは陛下に、もう1つは枢機卿に、残りの1つは自分用」と説明を加えた。

ポルトガル商業の復活についてポンバルが考えた別の計画とは、英国の東インド会社に概ね良く似た貿易の企業連合を立ち上げることであった。その中で最も永く続いたのはドウロ川上流域ワイン醸造会社である。ポートワインの特に英国への輸出は何倍にも膨れ上がり、ポルトガルでは主要な経済活動の1つとなった。ここにはフランスワインに課された関税税率の3分の1以下という特惠関税を英国によって保護された背景がある。ワインの自然発酵終了前にブランデーを加えることでポートワインが製造されるようになった。1730年代に、ジェレシュ・デウ・ラ・フロンタイラから来たドミニコ会の修道士がその製造法を持ち込んだようである。それで甘味が増した、アルコール度の高いポートワインとして英国に伝わり且つ英国人に気に入られた。それでも品質の劣るものが出回って酷い供給過剰に陥ってしまい、価格が下落した。18世紀の中ほどまでに価格は9回も下がった。

ポルトの英国商人が葡萄の購入先を傘下に置いていなかったため、ワイン貿易の仲介を独占していたポンバルの新会社が、ドウロ川流域での葡萄栽培者に対して買値を吊り上げることが出来た。同時にドウロ川流域がワイン拡張領域と世界中で初めて区分されることになり、ポートワイン用の葡萄はドウロ地域で栽培されるべき

## 第15章 ポンバルと国王、誇大妄想の二重奏

という新しい必要条件に課税免除も付いた。ワインの色合いを濃くし、風味をつけるのに不法に古木の液果を用いられてきていたが、その古木は根こそぎ抜かれて燃やされてしまった。化成肥料を使用することが禁止になり、病虫害にあった葡萄の木は新しい苗木に植え替えられた。品質をより向上させるために、植栽者は白ワインか赤ワインのどちらかを植えつけるよう求められ、両方の植え付けは禁じられた。

作りたてのワインは聖餐式には向かないとイエズス会は言明した。イエズス修道会はポンバルの独裁制に対して、ポンバルが権力を持ち始めた初期の頃から異を唱え、あらゆる面で強烈に敵対してきていた。イエズス会修道士は世代を超えて王位への証聖者であったので、自分たちが国事に大きな影響を及ぼすと信じてきていた。ポルトガルにおいて最も人気のある聖職者をイエズス会は抱えていた。彼らは国内や海外領土での中等教育を支配していた。

ポルトガル帝国時代に、イエズス会はサン・フランシスコ・シャヴィエルによる孤独な先駆的冒険的事業をして以来、その長い道のりを歩んできている。ブラジルでは、6百人ものイエズス会修道士がサトウキビの大農園を所有して栽培に携わっていた。リオデジャネイロにあった大農園は、4万ヘクタールの広さであり、年季契約の奉公人千人を働かせていた。彼らは17もの砂糖精製工場を持っていた。この例は、ロバート・ボルト脚本の古典的映画『ミッション』で描かれた、奥地でのサトウキビ栽培と比べると小規模なものであった。ポルトガル領ブラジルとスペイン領パラグアイの国境地帯に修道士は実質的に独立国家を持った。そこでは原住民の南アメリカ人が、略奪し回る征服者や欧州人の盗賊に対して改宗し、庇護した見返りに所有権を与えられた。修道士は要塞化した村落に原住民を収容し、耕作するように組織化した。

貴金属や宝石の密輸を終わらせるために関税を無効にするようポルトガル領とスペイン領の南アメリカの国境線変更をポンバルが再交渉し始めたときに、イエズス会とポンバルとの間に対立が生じた。ポンバルはイエズス会と改宗者がその地域か

## 第15章 ポンバルと国王、誇大妄想の二重奏

ら引き揚げるように命じた。彼らを強制的に排除しようと遣わされたポルトガルとスペインの部隊が、原住民の南アメリカ人の果敢な、粘っこい抵抗を長期間受けて再三再四後退せざるを得なかった。

ポンバルがイエズス会に対して最初にとった動きが、彼の性格からして文章に書かれており、『イエズス会の非難』という別の題名で出版されている。その小冊子には、イエズス会が来る前のポルトガルは、宗教心のある、経済的に豊かな、活力に満ちた国であったと書かれている。彼らが破壊したが故に、ポルトガルは背徳行為に走り、軍事力の、新地発見の、そして商業という全ての分野で衰退してきたと。

そこでポンバルは行動に出た。国王ジョゼに対するイエズス会の陰謀を告訴し、修道会の全ての建物を部隊で囲み、叛逆罪の廉で家宅搜索するように命じた。しかし何もその証拠物は見つからなかったにも拘らず、高名な修道士10人を検挙し、そして拷問に掛けた。

彼らが、『異端者の火刑』を甘んじて受けたポルトガルで最後に人々となった。修道会に所属する修道士とカトリック教徒が接触することを禁ずる旨の一通の教書を枢機卿の総大司教が公布した。それでポルトガルや植民地に居残っていたイエズス会修道士全員が国外追放を受け、彼らの財産は全て没収された。ポンバルはその没収品の殆どを自分用に供してしまった。外国人の修道士は出身国に帰させられた。そしてポルトガル人であった修道士はローマに向った。

それだけではポンバルは満足せず、イエズス会に対する大掛かりな国際的宣伝と外交的運動をリスボン発で立ち上げた。彼はイエズス会の非難文を作成し、それをフランス語、ドイツ語、スペイン語に翻訳した。啓蒙と進歩、科学と技術、理性と客観性を促進しようとするとき、イエズス会の社会は大きな障害物になるというのが彼の厳しい批判点であった。これはデカルト(Descartes)、パスカル(Pascal)、ヴォルテールの新哲学に魅了されていた欧州の琴線に触れるだろうとの計算があった。

ポンバルが感づいていたように、イエズス会が、政治的、経済的にあまりにも権

## 第15章 ポンバルと国王、誇大妄想の二重奏

力を握り、更に教育分野や学問領域でもまた影響力を及ぼすようになってきて、それが国外に広まる気配があった。イエズス修道会はフランスから1764年に追放され、その5年後にはポルトガルから追放された。1767年には、スペインとスペイン帝国からも追い出された。ポンバルはこの時点で、教皇クレメント13世(Clement XIII)に、イエズス会を《消滅する》よう要求する書簡を送った。さもなければ、ポルトガル、スペイン、フランス部隊を結集してローマに軍事侵略するであろうと書いた。それはセント・ポールの教皇の座からクレメント13世を引き下ろして、ポンバルが自由自在に操れる新しい教皇にすぐ替えるのが本当の目的であった。

教皇クレメント13世は退位した。ポンバルはリスボンから遣わしたヴァチカン大使を免職し、英国教会の方針に沿った独立した国教会を設立する準備をしていると内外に公表した。クレメント13世は1772年に亡くなった。1年以内に後継者のクレメント14世(Clement XIV)が、イエズス会を廃止する教皇大勅書を布告したが、19世紀の初めまで失効しなかった。ローマとの外交関係を回復するために、ポンバルは新教皇の使節がリスボンに来るのを歓迎する旨伝えた。使節が来たとき、ポンバルの弟パウロ(Paulo de Garvalho)が枢機卿になったというニュースを持参し、更に2人の聖人の全身の遺骨を納棺したガラス製のパネルで覆った御棺を贈物として運んできた。

イエズス会は、一流の高等教育機関であるコインブラ大学などポルトガルの教育界を支配して来ていた。イエズス会は中等教育の学校網を唯一持っていて、ポルトガル国内ではその数が24にのぼり、マデIRA諸島や海外の植民地には60も抱えていた。2万人以上の生徒がポルトガル国内で何時でも教育を受け、更に引き続いてイエズス会直系の教育施設に学んだ学生が、ポルトガル社会の中核となる教育を受けて育って行った。

ポンバルはポルトガル社会の底辺にも<sup>はびこ</sup>蔓延るイエズス会の影響を根絶することに



## 第15章 ポンバルと国王、誇大妄想の二重奏

没頭した。彼はイエズス会の教育がポルトガルを欧州の野蛮な国の中の方へ戻らせてしまい、精神的にも、道徳的にも、知性の面でも同様に、品性を落としてしまったと、攻撃的に批判したものを敢えて匿名で投稿している。国王はポンバルをコインブラ大学の構造改革をする監査人として指名した。

学問を発展させたと今日評されているイエズス会が、人間の知識は既に完璧なもので、疑問を呈して議論をすると寧ろ混乱や誤解を惹き起こすからそのようなことは止め、研究そのものの価値を否定した、ポルトガルで反動主義者であることに疑問を挟む積りはない。唯一正しい哲学規範はアリストテレスの作品に見出されるし、トマス・アキナス(Thomas Aquinas)によってそれが更に発展した。科学的な理解をするただ1つの鍵は、アキナスの著述に見出される。哲学や科学やその他の分野で本を発行することや、欧州の至る所で新しい思考法を書いてある書物を輸入すること自体をイエズス会の命令でもって禁止されていた。ドミニコ修道会士や他のもっと教養のある自由な修道会士からコインブラ大学に入学しようとした学生は、面接試験で学籍を得るためには、イエズス会の定義した正統派信仰学説から逸脱しているのを隠蔽せざるを得なかった。

コインブラ大学でポンバルが目指した到達目標は、オックスフォードやケンブリッジ大学よりももっと進んだ大学に改造することであったが、端的にいえば、幾つかの点でその英国の大学に倣った。彼はコインブラ大学に出版部を創設して、今まで出版を禁じられていた重要な学術論文を直ぐに出版できるようにした。

彼は13人の教授を抱えていた医学部を解体して教授を辞めさせて、ポローニアやパドヴァ大学から医学者や外科医を教授として任用した。死体を解剖する解剖学は違法であったが、ポンバルはその法律を改定して変更し、ロンドンから手術室を持ち込み、解剖学指導者を招き、更に病院棟、実験室棟、研究用植物園を増設した。

他の学部にも所属していたイエズス会系教授全員を解雇して、ポンバルは海外から教授を招聘した。英国から建築と工学の教授、アイルランドからはギリシャ研究者、

## 第15章 ポンバルと国王、誇大妄想の二重奏

イタリアから解剖学、物理学、化学と数学専攻の教授らであった。

それから彼は初等教育と中等教育に自分の関心を向けた。欧州の他国から注意や警告を喚起されていた、庶民教育の授業要領にそしてその方向性に潜む国家の掛り合いを改革するのが彼の計画であった。ポルトガルの素朴さをからかっていたヴォルテールがこう問い掛けている。「誰が田畑を耕し、誰がひとでなしを大事に使い、誰が常道を良い状態にするのかね」と。

ポンバルは教育税を創設し、ワインとブランデーに売上税を賦課した。彼が統治している間に、この税収入を440の小学校と358の中学校の新設費用に充てた。イエズス会がやってきたのと同じ格好で彼は新たに教育覇権を確立し、特に宗教的規範を押し付ける私立学校の設立を促進したと非難を受けた。同時に教師の適格性を判断するための試験委員を用意した。その規準は厳密なものだったために公立学校の教員資格所有者の不足を惹き起こした。その事実をひた隠しても資格のある‘監督下にある教師’に頼らざるを得なかった。教会が経営する学校の教師で試験委員の試験に落ちた司祭や修道士は、単に学校から締め出されたばかりでなく、植民地で奴隷の如くに働くために国外追放された。

同時に、長老教会管轄下の教区教会司祭が、農夫や手仕事従事者の子弟に対して国王への忠誠と従順に重きを置きながらキリスト教教義の初歩を教えるようにポンバルは要請した。

将官とか外交官の育成用として、定員百人で貴族階級の若き子弟のためにリスボンにポンバルにより設立された貴族用の学校が、たった24人の生徒を入校させて開校したものの、生徒数は減少してしまった。大学では、ポンバルの講義概要に基づいた科目を教授できる能力を持ったポルトガル人教授の講義があまりにも少ないという問題点があった。そこでポンバルは海外から教授を招聘し、その多くが再びイタリアからであったが、彼らの殆どがポンバルの不愉快極まりない革命の使者に過ぎないとの社会的批判を浴びて帰国してしまった。

## 第15章 ポンバルと国王、誇大妄想の二重奏

ポンバルより14歳年下の国王ジョゼ1世(José I)が1777年に亡くなった。ジョゼ1世の王女マリア・フランシスカ(Maria Francisca)が精神的に不安定であり、王女の仲間が気ままな宮廷をそのままにしていたので、ポンバルは王女を国王の後継者とならないように企てた。ポンバルは王女についてこう書いている。《私を置き換えるような十分な知識とか将来図を持ち合わせているような人物は誰1人いない。》

ポルトガルを統治する初めての女王になったマリアはポンバルを、後に彼自身が爵位を選んだ村名である、それまで一度も訪れていなかった彼の諸領地に追放した。新女王の寛大さが広範囲に亘った抵抗を迎えてしまった。ポンバルに対しての数多くの非難が宮廷に寄せられ、その多くは国民に対する暴力行為についてであり、強奪行為のうちに度々怒りを招いた。ポンバルが巨額の富を積み上げてきた1つが、貴い身分の人々に自分の所領地を10倍も値段を吊り上げて売り捌き、また更に10倍にして転売を強要するという遣り口であった。そのような取引を巧くするためには脅迫をし、場合によっては拷問し、監獄に打ち込み、流刑に処した。取引の駆け引きに抵抗したりでもしたら、彼らの子弟は遠くの修道院に収容されてしまった。

ポンバル時代は、欧州では概して道路や運河の建設が精力的に行なわれたほうである。進展と幅広い繁栄に向けた方法で、ロンドン、ベルリン、パリ、マドリッドにおいて国際貿易面での興隆が見られた。ポンバルは道路建設をせず、1つだけ運河を作った。この運河はテージョ川の航行水路を通じてリスボン郊外の彼の宮殿に繋がっていた。彼の個人資産は西側世界の政治家の誰よりも信じ難いほどになって、ポンバルは必要とする軍事資金を得ていた。彼が背を向けてしまった陸軍と海軍の忌々しくも使い尽くした状態がポルトガルに対して悲惨な結果を齎すことになる。

女王はポンバルに意見を聞くために2人の判事を遣わした。判事は宮廷に戻ってポンバルが告訴されていた事実上全てのことに対する近時の女王が許可をしている公文書を彼が所持していると秘かに女王に報告した。おおっぴらにそれには、本当

## 第15章 ポンバルと国王、誇大妄想の二重奏

に、ポンバルが可能性のある判決で死刑に近いことは余りにもはっきりしていて、どんな罰が与えられようとたださせるのみであると書かれていた。ポンバルの残虐行為を扱う司法委員会が設けられた。政治犯から釈放された囚人の中にフランスの人文主義哲学者の研究に対して唱導したことで10年間監禁されていたコインブラ司教が含まれていた。他の犠牲者もまた釈放され、財産と地位が元に戻った。

ポンバルに対し、彼が安寧に死するのを許されるのには十分とは言えない。ポンバルに対する問責の全てにくどくどと論駁していたと記録が残っている。ポンバルは女王マリアの父君ジョゼへの彼の忠順が彼に過ちをしてしまったときを除き、自分が本当に無実であると主張していた。

## 第16章 大きな権力の運動場

御者が自分の馬にキャンター（短縮駆足）をさせようと鞭を入れた。女王マリア・デウ・ブラガンサ(Maria de Bragança)の侍女が、馬車の仕切り客室から身を乗り出して御者に「そんなに速く走らないで！我々の馬車が走り抜けてしまうと臣民が思うわよ！」と、叫んだ。

侍女の傍に座っていた女王は、何度もはね跳んで吐きそうになっていた。父君がポンバルと共謀して教会勢力に挑戦してきたので、父が地獄で火炙りされている幻影に女王は国を統治し始めてからずうっと悩まされてきていた。ポンバルが任用した外国からの学者、技術者、その他の専門家を女王は母国に帰国させた。教員資格があつて素人の教師を退職させ、ごく僅かに、学識ある修道士を教師に置き換えたことがときたまあつた。

ポンバル時代にリスボンに招聘され、女王マリアを精神鑑定して処置のしようがないと診断し、また英国国王ジョージ3世(George III)は‘気違いだ’と公言して高名なロンドンの医者ウィリス(Willis)それ自身が精神病に罹っていると、57歳になった女王が公表した。女王が立場上摂政の形を取らざるを得なかった子息である王子ジョアン(João)は、自分がブラジルに逃避した際に女王を利用していた。ブラガンサ王朝の役人、廷臣、千人を超える他の人々が、リオ・デ・ジャネイロ行きに乗ろうと船着場に駆けつけていた。英国王立海軍から護衛艦が派遣されてきていた。ジョアンは、ブラジルの欧州との特惠関税貿易権を英国がポルトガルから引き受けることをその返礼として承認した。

女王はフランスからの脅威に憂鬱になっていた。欧州の他の王家に劣らず、ブラガンサ王家はフランス革命に慄き自国にも革命が流れこんでくるのではと恐れてい

## 第16章 大きな権力の運動場

た。女王マリアは厳格な検閲を課し、フランスに関するあらゆる記事を掲載したポルトガル新聞の発行を禁じ、且つ外国で発行された新聞の輸入禁止処置をとった。外国からポルトガルに来る人々は入国前に地元の居住者による保証が必要となった。旅行者がリスボンのカフェでパリでの出来事を口に出しようなら、間髪入れず検挙され又国外追放された。

その後ナポレオン(Napoleon)が権力を奪い、1807年までに彼の軍隊は実質的に南欧州を、ポルトガルを除いて占領していた。ポルトガルは大陸への通路をナポレオンにとっての大敵である英国に与えている唯一の国であった。ナポレオンはジャン・アンドシュ・ジュノー大将とする軍隊をリスボンに派兵し、英国船出入りの港全てを封鎖し、ポルトガルにある英国人の財産を全て没収し、ポルトガルに住む英国人全員を収監するか国外追放する命令を王子ジョアンが出すように要求した。ジョアンがこの要求を承諾すれば、ポルトガルが経済的な廃墟に化すことを意味している。都市や田舎両方にあつた繁栄は、英国市場に出入り出来る特典に大きく依存していた。リスボンやポルトで活躍する多くの英国商人で構成された共同社会は、ポルトガルの輸出品にとっては必須のものであつた。王子ジョアンのブラジル逃避を知って、ナポレオンはポルトガルを撲滅してフランス国家にしてしまうという策略を編み出した。北部地方はフランスにして、南部地方はスペインに吸収されるべきと考えた。ナポレオンはジュノー(Junot)大将を今度は3万の兵を持つ軍隊を引率する司令官としてリスボンに戻した。フランス外務大臣のタレーラン(Talleyrand)がパリに赴任しているポルトガル大使に王子ジョアンの先の要求を承諾するよう進言した。ブラガンサ王朝は欧州では未来がなく、ブラジルという新世界に幸運を任せなさいという代物であつた。ブラジルで、「そこにブラガンサ家は旧世界のような革命も存在しない、新しい帝国を国王の命で創れるのだ」と、タレーランは申し述べた。

王子ジョアンがブラジルへ逃避して臣民を捨てる前に、自分にとって最後の勅令

## 第16章 大きな権力の運動場

を臣民に向けて発布した。フランス部隊は何の抵抗も受けずに占拠した。ポルトガル軍の兵士は自分達の駐屯地を離れず、規律正しく平和を維持し、逆らうこともなかった。ジュノー大将と部下の兵士は、《フランス軍は我々ポルトガル人を他の欧州に統一してくれるだろう》として、市民から受け入れられた。

リスボンの主要な市民の多くが、ブラガンサ王朝と横暴な統治姿勢の、事の真相を見て喜んだのは事実である。武装しての抵抗は無駄に終わったばかりか、軍資金は底をつき、兵士は実質訓練を受けていなかった状態であった。少なくともポルトガルの知識階級の人々は、ジュノーを占領者としてではなく自由解放者で、フランス啓蒙運動の新しい時代のこの欧州先端に位置するポルトガルへの使者と見た。彼らの主要な集会がブラガンサ王朝に先陣を切って反対するメイソン・グループや、はなはだ力強い資金力のある聖職者たちの再興結秘密結社支部で行なわれた。ジュノーがリスボンの支部の玄関に近づいたとき、再興秘密結社支部の会員が歓迎するために馬を馳せて自分らの迎賓館まで彼を護衛した。

先ずジュノーは期待にこたえた。リスボンに到着するやいなや、ポルトガルにとって新しい時代の夜明けが来たことを宣言した。更に彼は自由に満ち溢れた再興計画を発表した。それは、効率的な政府機関の創設、公民生活に対して礼節ある財政の導入、市民の諸権利を侵害してきていた貴族階級の追放であった。更に普通自由選挙とか、ブラガンサ王朝が約束していなかった国を経済的に発展するのに必要な道路や湾岸設備を建設するための巨額な公共工事計画なども含まれていた。

蜜月時代が始まるのが早いか、びっくりするような無神経な行為でジュノーはそれを台なしにしてしまった。彼は自分の部隊の凱旋パレードを首都リスボンのど真ん中で挙行了。サン・ジョルジュ城の塔の上に上からフランスの旗、そしてポルトガルの旗を掲揚した。彼は城壁の上に立ち、ナポレオン万歳を3回歓呼したが、群集は黙って眺めていた。

その夕方、ジュノーはサン・ジョルジュ城で勝利の祝賀会を設けた。大勢の市民

## 第16章 大きな権力の運動場

が城の周りに集まり、「ポルトガルは永遠に、フランスには死を」と、繰り返し言った。彼は警察に群集を城内に入れ、発砲して撃ち殺すよう命令した。警察は拒んだ。ジュノーはそこでナポレオンから自分は《唯一のポルトガル統治者》に任命されているという勅令を見せ付けた。ジュノーが寄せ集めて来たポルトガル軍隊の残り凡そ9千人が、スペインとフランスを越えて強硬な行軍をした。《ポルトガル軍団》として、そこから彼らはナポレオンのロシア征服への悲惨な企てに参軍するために派兵された。貴い身分の人々や司教で構成された派遣代表団がバイヨンヌに居るナポレオンのもとに抗議をするために行った。自ら皇帝と宣言したナポレオンは彼らを歓迎した。ナポレオンは、何故ポルトガル人としていたいのか、何時になったらフランス人かスペイン人になるのか、自分は悩んでいるのだと打ち明けた。代表団は正式にポルトガルが降伏するようというナポレオンの要求に署名するのを断ったので、彼らは検挙されて監獄にぶち込まれてしまった。3年経って、彼らは《和平交渉》を提出して署名し、釈放された。

リスボンに戻ると、ジュノーは自分自身でアブランテス公爵を名乗っており、自分が直ぐにでも国王になれると思いついて知っていた。ジュノーは陸軍元帥のニコラ・ジャン・スルト(General Soul)とアンドレ・マッセナ(Massena)の2人に並び称され、ポルトガルを超えたフランスの勝利が今や完成されたかに見えた。フランス部隊は国を越えて拡がり、強要、略奪、蛮行を計略的に繰り返し広げていた。ナイフで脅かされて金貨や宝石類を巻き上げられた財宝を、自由意志で渡しましたという陳述書に署名をせざるを得なかった。フランス部隊は教会のドアを叩き壊して中に入り、ロマネスク様式の、地中海様式の、ゴシック様式の、ルネッサンス様式やバロック様式の彫像や装飾品を荒らし回った。彼らは金銀製の聖餐式杯を拾い集め、偉大なイタリア人芸術家による傑作なども含まれていたが、それらを溶かして固め直した。またお墓を打ち壊して埋葬してある遺体に付いている指輪類や宝石類を盗み取った。更に彼らは田舎にある大邸宅から大画家の絵画とか壁掛けや精巧



## 第16章 大きな権力の運動場

な家具類を奪い取った。芸術品に対する彼らの故意の破壊行為の最も皮肉な事例の中に、アルコバッサ大修道院のそれがある。それはフランスのシトー会修道士によってポルトガル国が創られた直後に建造されたもので、純粋で優雅なフランス建築様式で現存する最も美しい修道院と言われている。そのアルコバッサの修道院で、フランス部隊は非常に貴重な蔵書を略奪し、無秩序に乱雑に掴み、ページを破って弾薬筒を作るのに用いた。修道院の厨房は国内で最も美しいものとして評判が高かった。1人の若き将官がある本の1ページを拾い上げたが、そのページは修道士の料理本から引き千切ったもので、雉の骨を取ってその中にフォアグラを詰めてポートワインに漬けたトリュフとで調理する雉料理であった。彼はそれを女伯爵の母親に送りつけたが、更に彼女は偉大な料理人オーギュスト・エスコフィエ(Escoffier)へそれを渡した。エスコフィエ自身が著した古典的な料理本に《フランス人が悲惨な戦役をして、それが獲得した唯一の良いことに違いない。》と書いている。

フランス軍の兵士がこうしてポルトガルの文化遺産を奪い取っている間に、ジュノーはポルト市民の治安維持のためにスペイン人兵士を徴用していたが、無報酬でやらせていたようである。そのスペイン兵士らは、一斉に市街に出て歩きながら、遺産を所有する市民に遺産を捨てるよう暴動を仕掛けた。彼らがリスボンに辿り着いたとき、それらを自国に持って行く船をブラサ・ド・コメルシオ（商業広場）の波止場付近で待たせてあったが、彼らはフランス軍に襲撃されてしまった。その2つの占領軍の間で激戦が繰り広げられた。両軍で多数の死傷者が出たという結果は、リスボンでは軍の統制が崩壊していたことを意味していた。

ポルトガルに潜入していた英国のスパイから、このニュースがロンドンに直ぐに届けられた。英国首相の公爵ポータランド(Portland)は、ナポレオンの5年間に亘る英国諸島封鎖を終焉させる絶好の機会と読み取った。フランスの欧州支配の終焉とナポレオン体制の崩壊の始まりを証明していた動きに、ポータランドはポルトにはやふね早船を繰り出して、ポルト市長とポルト市民を激励する手紙と、軍隊や軍装備を購

## 第16章 大きな権力の運動場

入できる位の高額資金を持たせた。その後直ぐに、若き英国軍司令官アーサー・ウェルズリー(Arther Wellesley) (後の初代ウェリントン公爵) が8千の兵士を引き連れてモンディーゴ川の河口に上陸した。時は1808年の8月であった。ある部分では彼らの攻撃に驚きを通して、またある部分は策士としてウェリントンの早熟な手腕を通じて、彼と彼の率いるアイルランド部隊が短期間の戦闘と重大な決戦でフランス軍を負かしたが、後者の決戦では後に休戦を申し出た。

ウェリントンが署名したフランス軍の降伏条件はフランス軍が全軍と全ての装備を撤退するのを認めただけではなかった。フランス軍の略奪品を撤退時に自国に持ち帰ることも許した。更に英国軍は、フランス軍から分捕った軍艦も戻し、自分らの盗品もフランスに返却した。ウェリントン自身は英国に向けて出航した。彼はポルトガルに駐在する英国ジャーナリストの拝謁を当てにしていなかったように思われる。彼の船は新聞を購入しようとポーツマス港に着いた。そこには彼の妙な太っ腹について長ったらしい記事や憤慨した社説を掲載した新聞が既に持ち込まれていた。“我が国の名誉の瓦解でもって、すべての英国人の胸が悪くなるに違いない”と、書かれていた。彼はロンドンに行ってみると、アイルランドにある自分の家族の所有地に自分が逃げ込んだことに対する世論の風当たりの強さを感じ取った。新聞はまだ一連の報道を止めようとはしなかった。結局政府がその報道をやっつけ、ウェリントンと彼の仲間の将官をチェルシー兵舎で軍事裁判が行なわれる前に審問した。自分は休戦協定の内容に何ら責任がなく、それが何を意味しているのかただ漠然とした印象を持っていたとウェリントンは弁論した。上官がそうしろと命令したから単に署名をしたのだとも言いつけた。被疑者全員が無罪になった。ポルトガルの重要美術品の喪失は元には戻るものではなく、フランスや英国によって償える代物では決してなかった。当然のことだが、それは未だにポルトガルに苦しみを齎している。英国の支配層にはそれは恰も、ポルトガルの芸術遺産の喪失は実質的に的外れの側面をもった問題のように捉えられていたようである。「我々はよく知られてい

## 第16章 大きな権力の運動場

リスボンの高台に英国の台木を植え付けに行く。台木を植え付けたところには、外国からの支配者は来ない。」とキャニング卿が言っている。

ウェリントンは1809年にポルトガルに戻るよう指示されたので、若くてタフな清教徒の将軍ウィリアム・カール（後のベレスフォード(Beresford)卿）が、手に入れたリオデジャネイロにいる国王ジョアン(João)からの手紙を携え、不安があったにも拘らずポルトガル軍の司令官としてベレスフォードを任命して、自分の率いる軍に加えた。フランス軍の将軍ジャン・デュ・スールトが国王として君臨する新君主制をはっきりと宣言してポルトを攻撃して再び奪還した。そこでウェリントンはスールトの部隊を攻撃したら、彼らはスペインとの国境線を越えるまで退却したが、ウェリントンの部隊は、彼らの軍がフランスまで引くまで追い掛けた。

それからウェリントンとベレスフォードは、双方が納得をしてから、以前よりも増して大規模な攻撃をフランス軍に仕掛ける準備を始めた。ベレスフォードはポルトガル軍兵士を徴用し訓練するのを着手した。ベレスフォードと同僚の英国人将官にとっては、その時から民俗の役割という観点で、全てのポルトガル人が同じく見えてきて、ポルトガル人は自分たちの世界で自分達を必要とするのだと彼らは唱えた。給料日には、報酬としてポルトガル徴用兵に何度か支払ったが、これが《英国人に対する値打ち》として知られるようになった。

ウェリントンはリスボンの要塞化に着手した。これは大事業であったが効率よく警備体制を敷いて成し遂げた。彼の事業計画は、首都リスボンの北東に位置する地方都市トレス・ヴェデウラス（通称日本の発音ではトレス・ベドラス）の防衛線(Linhas de Torres Vedras)として知られ、フランスへと続く不可避の道筋であった。ウェリントンはその地域を測量するために2週間掛けて馬に乗り走り回り、21地点の計画で工事監督を命じ、必要な時は強制してでも準備作業を手伝させようと近隣地の小作人を任用した。

川が曲がりくねっていて通り抜けられない位の沼地を形成していたので、壕を深

## 第16章 大きな権力の運動場

く幅広く掘って茨<sup>いばら</sup>をそこに詰めた。急勾配の斜面が計り知れない深さの崖に向かって垂直に切り立っていた。人捕り罫<sup>わな</sup>や防衛のため打ち込んだ矢<sup>やらい</sup>来があった。厚さが5m、高さが13mにもなる石壁を築き、600丁の銃を据え付け、152の石製の堡塁を設置した。防衛線の幅は80km程度である。そこにある各駐屯地は、当時では考えられない速さの7分程度で手旗信号による指令やメッセージを次々と遣り取り出来るシステムでお互いに繋がった。3万ものポルトガル民兵と国防市民兵が配置された防衛線の背後は、新鮮な水、家畜用の牧草地、果樹園、野菜畑、小麦やトウモロコシの穀物倉が豊富にあり、海岸に行けば魚が獲れる、700km<sup>2</sup>の広さに及ぶ巨大な砦であった。

その防衛線の遠隔地の方は、荒野の中に向かって出来る精一杯向きを変えさせていた。砦の敷地内荒野に持っていけなかった育った食糧全ては焼却処分にするか駆除した。フランス軍がそこに到達したとき、フランス軍に避難所を与えることが事実上全て出来たが、住民に引越しをさせ、木々の伐採をさせ、小作人は自分たちの納屋や住まいを壊すのもさせられた。ウェリントンは指令本部を砦の南部地方にある300mの高さがある丘陵の頂きに置き、フランス軍を待ち受けた。

夏が過ぎ10月に入ってから、6万5千のフランス軍と1万のスペイン軍の合同部隊の長であるマセナ元帥が到着した。マセナ元帥ただひとりで防衛線の方へ向い馬に乗り、英国軍のカノン銃砲撃隊の中に入って行った。彼は後に“自分は驚愕<sup>のち</sup>に圧倒されてしまい、最前線はカノン銃と英国軍とポルトガル軍で一杯だった”と述べている。駐屯地の監視所から一発の警告砲を彼に目掛けて撃ってきた。マセナは帽子を上に掲げて、馬は疾駆して行った。それから3日経って、ウェリントンは、ソブラルの要塞近くにマセナの部隊が集結し始めていると読み取り、彼らに攻撃を加えた。英国軍は150人も兵士を失いながらも彼らと戦い抜いた。翌日マセナ部隊が120ものカノン銃砲撃隊に向かって馬に乗りながら再度攻撃を仕掛けてきたが、再び警告砲撃が加えられて撃退させた。ウェリントンは配下の将官から全面的

な攻撃を仕掛けるようにという声の高まりを感じ取った。そこでウェリントンは「私はいつ何時でも彼らを誑かすことは出来るが、1万人の兵士を犠牲にしてしまうかも知れない。我が部隊は英国が与えてくれた最後の軍隊なるが故に、大事に対応しなければならないのだ」と、こう答えた。

一風変わった類の包圍攻撃が展開された。食事やワインがたっぷりあり、娯楽付きという楽しめる包圍であった。それは全く祝宴が開かれているような雰囲気は漂っていたと述べる者さえ居た位であった。一方、包圍したその外側では餓える者が増え、飲料水は汚染し、冬の到来が迫ってきていた。栄養失調で死ぬ者、病気に罹って死ぬ者が急増し始めた。マセナは、自分の部隊が3万から4万5千人位に兵員がこうして減ってしまったと見て、闇に乗じて退却した。ウェリントンの率いる部隊は、フランス部隊を、ポルトガルを跨いで追撃し、スペインを通り抜けて、フランス領地にまで入り込み、ツールーズまで追い出した。難攻不敵だったナポレオン軍は挫けてしまい、これは明らかにワーテルローの戦いへの舞台が整えられた。

ポルトガル軍自身は、ポルトガルがフランス軍の占領下にあったことより今は自国が自分自身ではないのだということを見出すための勝利であったと目を覚ました。ウェリントンが死んだのに伴いベレスフォード卿が摂政評議会の議長であると公布されていた。ポルトガルは今や英国軍の軍政の統治下に置かれていた。彼は実に横柄で残忍な性格の持ち主であった。国事の運営管理に亘り彼と対立したポルトガル人は、収監されるか処刑された。彼が特定した標的はリスボンの再興秘密結社である、自由と進歩を決心したインテリの自由主義者のメイソンズ・グループになった。ベレスフォードに対抗する革命がポルトで勃発したのは、1820年8月であった。ベレスフォードは国王に相談するためにリオデジャネイロ行きの船を仕立てた。大西洋を航海してリスボンに入港し、彼が下船しようとしたら阻止されてしまった。そこで彼の船は援軍を求める値打ちがないと感じていた英国に実は向っていた。その後1月に選挙があってリスボンで議会が召集されて統治評議会委員を任命した。

## 第16章 大きな権力の運動場

その後ブラジルでクーデターが起きて、国王ジョアンは、ポルトガルに欧州人の王位を取り戻すために帰国を、気が進まなかったが余儀なくされた。自由の原則に忠誠を国王が誓いを立てることは価値のあることだった。これらを謳いあげた憲法が1822年の発布されたのである。

その5年後に国王ジョアンが亡くなったとき、一番若い王子ペドロが王位を継いだ。ペドロは既にブラジルの帝王として宣言していて、リスボンに移り住みたいとは思わなかった。彼は7歳になる王女のマリア・ダ・グローリア(Maria da Glória)をポルトガル女王と任じ、その摂政として24歳になる彼女の弟ミゲル(Miguel)を任命した。

ミゲルはウイーンの皇帝の宮廷で過ごしていた。ウイーンはオーストリー、プロシア、ロシア3国からなる神聖同盟国の中心であった。その意図は自由主義を踏み倒し、絶対的専制君主制には神聖なる権力が備わっていると主張することだった。ミゲルが未だウイーンに留まっていたとき、彼のもとにポルトガルから憲法条文の写しが送られてきた。これをメッテルニヒに見せたところ、彼はそれを無視するよう助言した。リスボンの大聖堂でミゲルは憲法をあざけ嘲りながら話した。彼は憲法の法典を聖書の上でなくて、『*”Us Burros”(The donkeys; 馬鹿者)*』という題名の大衆小説の上ののせて、光栄を与える宣誓をしたという記録が残っている。ミゲルをスペインから連れ立ってポルトガルに来た、スペイン人の母君カルロッタ・ジョアキーナ(Carlota Joaquina)は、彼より輪を掛けて激しい反民主主義者であった。彼女は最も反動的な顧問陣を探し当ててきてミゲルの傍らに置き、実際の、また想定した敵の相手を描き出した名簿を持っていた。逮捕されたのは数千人にのぼり、150人が処刑され、残りは収監されるか処罰を受けた。

自由主義者のグループの中には数人の優れた将軍クラスも含まれていたが、彼らはガリシア(現フランス)に逃亡し、またガリシアを經由して英国にまで逃げ込んだものもいた。彼らは英国へ行っても特段歓迎されず、ポーツマスにある廃墟になった

## 第16章 大きな権力の運動場

倉庫に住み着いた。がしかし、ロンドンでのスペイン系ユダヤ人の避難民からの支援もあってか、14%という高い利息を高利貸に支払ってでも、ロンドン市内で2百万ポンドを借金する手立てをした。

1832年になって、ブラジルの帝王ペドロ1世(Pedro I)は自分が退位させられ国外に追放させようとする実の不愉快な動きがあるのを知った。ポルトガル帝国の中で、ペドロを君主として未だに忠誠を誓っている諸国はアゾレス諸島のテルセイラ島のみになっていた。ペドロは英国を出帆してからテルセイラ島の反体制派自由主義者によって出迎えられた。このありそうにない提携が彼のポルトへ向けた旅立ちとなった。ミゲルが乗船した艦隊はポルトで全く驚きの目で見られて、市民は逃げ出した。ペドロと自由主義者による長期間に亘るポルト市の包囲攻撃が始まった。町の治安状況は悪化の一途を辿ったが、市民は自由と民主政治を支持しようという伝統を持ち続けていた。包囲軍の状況は悪くなる一方で、幕営地ではコレラの伝染病が流行り拡がりを見せていた。生き延びた兵士は一緒に脱走し、最終的には南下してコインブラの町を略奪しようと計画しながら、ドウロ川の流域を遡上して略奪と蛮行を重ねて歩き回った。

自由主義者であった公爵テルセイラ(Tereceira)は、英国人の軍艦艦長チャールス・ナピエール(Charles Napier)を始め、2千5百の義勇兵を連れ立って出帆し、アルガルブに上陸させた。そこから彼らはリスボンに向けて行軍を開始した。セント・ヴィセンテ岬を周ったとき、ナピエールはミゲルの軍艦と遭遇して5隻の船を拿捕し、絶対主義者の士気に対して大きい打撃を与えた。テルセイラ公爵らの艦隊が、リスボンが鼻の先のテージョ川の南岸に着いたとき、ナピエールは艦船を河口の方に移動させてその後リスボンを砲撃した。ミゲルはそのとき、ポルトを再度占拠しようと北の方に居た。リスボンに居たミゲルの支持者はテージョ川を上ってサンタレムに向けて逃亡した。戦闘がそこで激しく開始され、多くの市民に犠牲者が出て、町並みや周りの農園に損害を加えてしまった。結局は自由主義者らによって

負かせられたミゲルは南方に戻り、自分の最後の、希望の持てない場所となったエヴォラまで退却せざるを得なかった。

エヴォラ・モンテという村において、ミゲルは降伏と退位することに署名をした。彼はその後ジェノバに向う船に乗った。ジェノバに着くと、彼は強迫されながら署名したのであって合意文書は無効なもので、自分は未だにポルトガルの国王であると宣言した。ミゲルはそれからウイーンに戻ったが、彼の名を再び聞いた者は殆どいなかった。

ペドロが自分の娘の摂政としてリスボンに戻った。彼が死んだ後、娘のマリア・グローリアが女王となった。まだ15歳である。初めての議会選挙が行われ、新しい自由主義の政治の枠組みが出来た。ポルトガル人がその自由に対して支払ってきたその代償は、しかし、国の多くを荒廃させ、家族を離散させる内戦後の苦しみを産み、財宝を空っぽにし、外国からの借金を負うなど大きな重荷と化していた。これらを清算しようと、ペドロは全ての宗教的束縛とか、男女の修道院の建造物とその所有地や他の資産の没収と売却できる制度を廃止して整備をした。資産の本当の数量を競売に出して、価格の下落を抑えて、寧ろ価格を吊り上げさせた。そこで買手は幾つかのシトー派修道会の代表的な建物を含めて、美しい修道院を探し出すことが出来なくなり、それらは修復困難になって廃墟になるものもあった。安値で取引された農地の多くは修道士の農業技術に欠けていたものが多くて、生産性が落ちていった。

アルコバッサの修道士が管理していた所では、小作人はまともな生活をして、僅かな土地の賃借料を支払っていた。修道士は小作農に対して専門的技術知識を授け、旱魃の年には小作人に資金を貸し付けていた。宗教的束縛を排除することにより、地主が不在の時期には、小作農は年季奉公か、臨時仕事か、はした金で働くなどをしてきた。新しい地主階級がその時代に生まれ、彼らは修道士や修道女から置き換わり、結局は社会に対して彼らよりももっと強欲に、害を齎しているのだと、偉大



## 第16章 大きな権力の運動場

な自由主義者で反聖職者のアルマイダ・ギャレット(Almeida Garrett)が言っている。

## 第17章 ブラガンサ家の没落

《スペインからポルトガルに来てみると何と変化があることか。<sup>あたか</sup> 恰も中世の時代から一足飛びに現代に飛び込んだみたいだ。》とハンス・クリスティアン・アンデルセンが、1865年にポルトガルを長旅した<sup>のち</sup>後に書いている。

アンデルセンが童話作家として有名になる前は、当時彼は旅行作家として知られ、且つ国際的な賞賛を浴びていた。彼の著作は主だった欧州の言語に翻訳されていたし、彼が英国を訪問したときには、チャールズ・ディッケンス(Charles Dickens)夫妻が賓客として宿泊を提供され、ヴィクトリア(Victoria)女王、アルバート(Albert)皇太子がワイト島のオズボーンで自分たちと一緒に逗留するよう勧められた位に名声があった。ポルトガルでは、1853年に女王マリア・ダ・グローリアが10人目の子供を出産したときに、命を落としてしまった。アンデルセンはリスボンにあるネセシダーデス宮殿で、<sup>やもめ</sup>鰥夫となった皇太子アルバートのいとこフェルディナンド(Fernando II)、公爵サックス・コブルグ、公爵ゴースから歓待された。フェルナンドと現在呼ばれている国王が摂政の立場でポルトガルを統治していたが、その頃に自分の息子ルイスに君主を譲っていた。彼から王位を相続したルイス(Luís)は新しい王権様式をとり、民主的な憲法と選挙で選ばれた政府を統治するというものだった。フェルナンドはこの新統治様式に成功を収め好評を博した結果か、ポルトガル自身に警戒感を持たせる位に、スペインやギリシャ政府から自国の君主になるよう乞われる始末であった。

ルイスが国王になった時代には、長期間の内戦で打撃を受けるような酷い損害の痕跡は殆どなくなっていた。秩序のない、退歩している感じのスペインから国境を越えてポルトガルに来たアンデルセンは、鉄道が近代的であり、列車ダイヤの時

間厳守していること、客車の居住性の良くてまた食事の内容の良いこと、通り過ぎて車窓に広がる町や村々の家がペンキを塗り替えて小奇麗なこと、とりわけ、乗客や列車の乗務員が礼儀正しいことなどに目を見張った。

リスボンに着くと、市内には路面車の車道があり、夜間にはガス灯の燈る広い並木樹路が伸び、遊歩する身なりの良い市民が住んでいるのを自分の目で確かめた。リスボン市内を散策した後、コインブラ、シントラ、セツェバルを旅行し、ポルトガルが農業から芸術に至るまで全ての分野で実際に活力に満ちていると感じ取った。

ポルトガルは南欧州では最も発展している国になっていた。国王フェルナンドの親友アレクサンダー・ヘルキュラーノ(Alexandre Herculano)が著した、際立って革新的な歴史書が今日でも未だに評価が高い。国家に検閲制度がなくなった状態になって以来初めて、ヘルキュラーノは証拠と客観性を付加した伝説に置き換えることで原著を神話化した。

彼の友人で同僚のジョアン・アホイオ(João Arroio)は、この時代で度々見過ごされたけれども偉大な教育改革者であった。大臣だった彼はジョアン・デウ・デウス(João de Deus)が考案した小説方式《文法的に難解な言語の読み書きを子供たちに教える方法》を導入した。アンデルセンがポルトガルを旅行する前の10年間で少年向けの学校数は略倍ほぼに増えて2千に達していた。主要な地方都市は全て公会堂を所有し大学予備校になっていた。女子教育は未だ遅れていたにも拘らず、少女向けの学校数は6倍に膨れ上がり350になっていた。リスボンとポルトに工科大学が設立され、建築学、医学、工学、薬理学や自然科学を新世代に教育をするようになった。

内戦時代にはどちらかというと自由主義側に付き自由を取り戻すのだと演説して旧体制の下で入獄させられた、ヘルキュラーノの僚友であるアルマイダ・ギャレットは、消滅した異端審問所聖庁を国立劇場と演劇学校に改造する事業を監督した。ポルトガルにはジル・ヴィセンテという著名な脚本家が1人いた。その時代に、ギ

## 第17章 ブラガンサ家の没落

ギャレットは国立劇場での上演演目を自ら残り全てを書いた。ギャレットと仲間の作家は、韻文や散文に、新しく、新鮮な、直接言語体を切り開いていた。彼らは著述業組合を立上げて、教会内や政界でも同様に自由主義を謳って促進しながら、写真術から農学に跨る領域での討論と改革を後援しながら、著作権の領域を遙かに越えた主要な知的な影響力を持ち始めていた。

工業が急速に発達し、機械の利用率が6倍に膨れ上がり、工場で利用する原動機は9倍にも増えた。ポルトガルはコルク生産量では世界一となり、現在もそうである。織物や磁器やガラス製品もまた大量に輸出され、これらの商品はポルトガルの蒸気船で運ばれていた。リスボンの商人は、英国人やブラジル人と海底ケーブル線を使った電報で遣り取りをしていた。その1つはリスボン西郊外からコーンウォール（英国西南部）のケーブル線だが現在も使われている。国内道路網の建設工事も含めて大きな公共事業には、海外の専門家、フランスの偉大な技術者エッフェル(Eiffel)を招いて鉄橋やリスボンにあるエレベーター（現在も国の陸標に成っている）の建設もある。そのような公共事業の財源は租税の税率引き上げと徴収を効率良くするシステムを確立して確保した。この歳入は赤字財政の穴埋めにも使われ、ポルトガル国債をロンドンやパリの証券取引所に上場して2倍の値に跳ね上がった。

その時代の元気に満ちた気分が建築様式にも現れてきた。それはリスボンにあるロッシオ駅やカンポ・ペキーノにある闘牛場で、燃えるような偽アラビア模様を現在でも見ることが出来る。国王フェルナンドは息子の為にブサコに広大な狩猟用の山小屋をマヌエル建築様式で復活させたが、その建物は現在豪華なホテルとして使われている。フェルナンドが建築を命じたペナ宮殿はゴシック様式であり、シントラに聳えている山の頂に今もなお塔が建っている。そのペナ宮殿はウォルト・ディズニーの映画撮影用セットに好まれて来ている。その時代のシントラには、浪漫主義の魂が脈々とつながり、シントラに惹き付けられて芸術家、著述家、作曲家などが欧州各地から集まり、ポルトガルの偉大な作家であるエサ・デウ・ケイロシュ(Eça de

Queirós)もその1人である。

公立の公園作りも盛んになり、斬新な、自然を活かした彫刻家育成の学校も造られて公園に彫刻が建てられた。画家も育て彼らの作品が金持ちだけに独占されない形で普及した。印刷の再生産も現代的な手法により手頃な値段で印刷が可能になって、多くの家の壁紙に利用されるようになった。

人権に関していえば、とりわけポルトガルは世界各国の模範となっていた。カトリック教徒でない人が結婚し、子供の出生登録をすることにまだ厄介な場合にはそれが可能になった。女性は自分の資産を所有する権利があった。奴隷はポルトガル帝国の時代には不法なことだった。死刑や強制労働、長期間の独房での禁固も不法であった。牢獄の処罰をする場所という考え方は、改心をするためであり、また更生をすることと見做していた。特に収監者は、出所した後ではきちんとした生活をするために生活資金を得られるような技量を教えられた。女性収監者はアハイオロス(Arraiolos)(エヴォアラ県、人口3千人)の絨毯の織り方を教えられ技量を高めた。その伝統的な絨毯は現在1平方メートル当たり150ドルの値で売れる代物である。男性収監者は色んな工芸技術を教え込まれた。コインブラにある刑務所は、豪華な装丁本の綴じ込み作業で国内の中心にもなった位である。

工場経営者と従業員との間で激しい労働争議が他国で頻発しているのを知った途端、その嵐が海外からポルトガルにも吹いて来て、今までの平和的な雰囲気や啓蒙運動と文化の発展が突然に壊されてしまった。英国の北部に位置するランカシャーで労働争議が始まり、織機工場の労働者が夜間学校で成人教育を受け、新社会主義者が書いた小冊子を読み多くの知識を吸収して、西側世界で初めて彼らが労働組合を結成した。この労働組合は、適切な賃金支払や週6日間の就労や、ちょっとした病欠でもって解雇させないなど最小限の権利を要求する運動の先頭に立った。織機工場の経営者は、ポルトガル北部に新たに織機工場建設の投資をして製造の一部を移転すると伝えた。ポルトガル人の労働者は、英国人の労働者が組合を結成してや

## 第17章 ブラガンサ家の没落

った同じやり方で過酷な労働条件に対抗するために英国に遣って来た。彼らはストライキに打って出た。この時代には織機は新規技術を導入して高性能になり、作業そのものは単純で子供でも操作出来るようになっていた。実際にそのことが現実なものになった。経営者は熟練労働者を首切りして、年少の労働者を雇い入れたのである。国営タバコ専売公社やアレンテージョ地方にあるコルク加工工場の英国人経営者はそれを真似した。

大西洋を渡って、ニューイングランドの織機工場にもまたストライキの波が押し寄せた。その経営者はアメリカ人労働者を解雇する一方、幹旋人を雇いポルトガルに派遣し、ポルトガル人を雇用して船に乗せて連れてきた。ポルトガル人の織機工場労働者が共同社会を作って住み続けたニューイングランドの土地の1つがケンブリッジやマサチューセッツに近いフォール・リバーである。1980年代に2年間ほど彼らの中に入って過ごした経験のあるペドロ・ダ・クーニャ教授が、悲惨に向う道として教育の恐ろしさを未だに信じ続けているのを見て取った。

19世紀後半には、世界各地の産業革命が、新しい苦難と同じ位の恩恵をポルトガルに齎していた。ブラジル海軍で反乱が起きるという次の嵐が来た。ポルトガルの軍艦がリオデジャネイロの港に、偶然にもそのときに停泊していた。将校と船員は暴徒に同調して600人以上を軍艦に乗船するのを許可して、ブエノスアイレスへ無事に運んであげた。ブラジル政府は憤慨してポルトガルとの経済関係が悪化してしまった。このことはリスボンやポルトの商人の繁栄に水を差したばかりではなかった。多くの貧しい家庭はブラジルに自分の息子を移民させ働いて稼いだお金の送金によって生計を立てていたのも、この蓄えが今や閉ざされた羽目になった。経済ドミノの駒による荒廃しきったゲームで、銀行システムが順番に弱体化し、政府の税収入が急激に落ち込んだ。これらの要因の中には、市場で取引が続くようにと低賃金労働者が作った安い製品が逆に供給過剰を引き起こして、製品を買う余裕がなくなるという、結果的に産業界が不況に陥るといふ現象が混ざり合っている。

## 第17章 ブラガンサ家の没落

国王カルロス1世(Carlos I)が1889年に父ルイスから王位を引き継いだ。彼は多作の水彩画家（彼が画いた風景画は未だにロンドンの競売に掛けられ続けている）であった。彼は海をこよなく愛し、ときの政府が気の進まない状態で差し出した高価なヨットに<sup>こだわ</sup>拘る優柔不断さがあった。ブラガンサ王朝が突然の、非業の終止符を打つようになった重大局面を予感させるものを、<sup>かんしゃく</sup>癩癩を起こす無能さも含めて彼の短所の中には何も見出だせない。

カルロスの王位継承のとき、ポルトガル国家への期待は滅多にないほど再び輝いていたようだった。欧州の中で各国がお互いに国力を競う代わりに、大陸の主要国は、奴隷貿易が不法なものとなって以来、見向きしなくなったアフリカ大陸の領土分捕り合戦に忙しく立ち回っていた。アフリカには銅や金、ダイヤモンドの豊富な埋蔵物が、それも露天掘りが可能であり、象牙を無限に自国に供給できる位の象の群れなど莫大な富があるという物語を、派遣団や探検家は持ち帰ってきていた。

この信じ難い新しいゲームにポルトガル人は独自性のある十分な部隊を配置した。彼らは一旦アフリカに派遣したら2度と母国には戻らない方策をとった。この永住駐屯政策は、ポルトガル領ギニアの例外はあるが、西アフリカを探検するのに最後に離国するという協定でフランス軍によって4百年後に見破られた。南西アフリカ所有の権利を主張していたドイツ軍は、北部に近接するアンゴラの領主であるポルトガルに感謝した。英国もまた、中央アフリカで欧州人の覇権をポルトガルが担っていると初めて主張した。最も古い同盟国があったとしても、アフリカ大陸は余りにも大き過ぎて分配できない位であった。

19世紀も幕を閉じようとした頃、アフリカ内で意味を持っていた植民地主義が、意味を持たなくなっていた。中央アフリカの西海岸と東海岸で夫々、その国と交渉したときのように、ポルトガル人はアンゴラやモザンビークをそれほどに統治をしていなかった。ポルトガル人は港を作り、海岸地帯に欧州人の居留地を建設し、統治者を置き、小規模の駐屯部隊を配置した。その海岸地帯の背後の土地の幾つかを

## 第17章 ブラガンサ家の没落

ポルトガル人の家族や植民地会社が開墾して農園を作りコーヒーやタバコを栽培した。その他の点で中央アフリカの奥地のようなアフリカ諸国は大きく荒らされずに済んでいた。アンゴラとモザンビークの間に、<sup>おとな</sup>大人しいマショナス族(Mashonas)が住んでいて、直ぐ南方にはマタベレス王国(Matabeles)があった。これらの土着民は東アフリカを通してインドや中国と盛んに交易をしていた。彼らの要塞化した首都ジンバブエは現在中央アフリカと呼ばれているが、建築学や工学で著名な業績を残しているのは、最も偉大ではあり、世界で殆ど知られていない驚異の1つである。ポルトガル人は外交関係を樹立し貿易協定を結んだ。1880年代には、マタベレス王国との協定の合意に伴い、中央アフリカを横断してポルトガルの一連の駐屯地を設立し、両国の貿易と中央アフリカの発展を刺激するという1つの計画が姿を現した。東部地域では、ポルトガル人が銅や金の採掘が始まった。

リスボンに立ち戻ってみると、植民地担当大臣エンリケ・バロス・ゴメス(Henrique Barros Gomes)が議会の前に立って1枚の地図を広げていた。その地図には中央アフリカが描かれ、それは現在のザンビア、ジンバブエ、マラウイ、アンゴラ、モザンビークがピンク色で染められていた。彼はこれがポルトガルの領土を意味するのだと力説し、ビスマルクが主宰した重要な会議で幾つかの欧州諸国との協定で合意に達していると付け加えた。それを賞賛している真最中に、部隊が権利を保護するために派兵され、領土を拡大し、探検をするための公的な寄付金を通して資本金を募るために地理学協会が設立された。

政府による激励ではなくて、英国人の教区牧師セシル・ローデス(Cecil Rhodes)の海賊を職としている息子によってその挑戦をするよう鼓舞された。彼はグラマースクールを17歳で卒業し、クリスマスに小規模の綿花農場に長兄と一緒に採用された。セシルは引き継いだ3つのダイヤモンド採掘権を所有していた。20歳になった時には既に彼は大金持ちになっていた。1873年にオリエル・カレッジの学部生として入学したオクスフォード大学を8年間通学した。彼はアフリカの富に催



眠を掛けられ続けていたが、自分が実行するしかないと決心した。セシルは媒介物として英国南アフリカ会社を作り、ポルトガル人が地図にピンク色を塗ってポルトガル領土だと主張していたザンベゼ(Zambese)南部の領土は、自分の会社に権利があると要求した。彼は南モザンビークの部族民を武装させ且つ訓練をしてからポルトガル軍との戦闘に向わせた。この戦いは何も独立戦争ではなくて英国南アフリカ会社のための単なる占領だとは勿論一言も言わなかった。数で優り、時には奇襲攻撃を仕掛けて果敢に戦った結果、ポルトガル軍を打ち破ってしまった。

ローデスは英国に戻って、ポルトガルとポルトガル人に向けた大掛かりな宣伝キャンペーンの論陣を張り、新教徒の伝道会に対しては特に熱心に支持を求めた。ポルトガル人が初め中央アフリカを探検していたのに代り、修道会に所属する探検家の1人デーヴィット・リヴィングストーン(David Livingstone)が探検してきていたことにセシルは称賛を送った。ポルトガル人はカトリック教徒が殆どであったが、抑圧の世紀を経た後に、カトリック教は英国では最近になって再び完全に合法化されるようになっていた。カトリック教はそれでも未だ疑いの目で見られ、本質的に英国風ではないものであり、イタリア人の尻に敷かれている不吉な迷信だと広く思われていた。中央アフリカで高貴な生まれの未開人の靈魂は、マキアヴェリ主義者の南部欧州人司祭から庇護を受けられるべきであった。更に言えばポルトガル人はその地域に法律を制定し、注文を付けることもせず、英国の企業家や伝道師に対して危険になるようなことはしなかった。《不精で、役立たずの、欧州人とインド人のあいの子の嫌な野郎》とセシルに呼ばわりされ、新教徒の福音伝道者の安全を将校が保障した英国南アフリカ会社により領土を引き渡されていた、ポルトガル人をそこから追い出すことが最善の解決策であった。国の利権若しくは納税者に恩恵を齎すという期待は持たずに、英国政府は屈服しようと大いに熱心であった。

1890年6月1日、リスボン駐在英國大使がポルトガル外務省に最後通牒を突き付けた。ポルトガルは中央アフリカから即時に軍隊を引き揚げる予定であった。

## 第17章 ブラガンサ家の没落

ポルトガルが拒絶しようものなら、英国大使はロンドンに呼び戻されて、両国は戦争を開始する状況になったに違いない。国王カルロスが王位に就いて1年にも満たない頃、閣僚が国王の下へメッセージを持参してきて緊急会議が行なわれた。国際的調停に掛けるべき問題であると英国にその会議で得られた結論を伝えた。ポルトガル軍が中央アフリカの奥地から撤退する旨の屈辱的な合意書に、ロンドン駐在ポルトガル大使が署名した。反英を叫ぶ暴徒が町中に溢れた。

各紙の論評は英国人に対してかつて無いほどに痛烈になり、英国人に公然と敵意を抱く激しさが増して行った。伝統校コインブラ大学の文学部教授テオフィーロ・ブラガ(Teófilo Braga)は後にポルトガル共和国大統領になった人物であるが、『ポルトガルの問題点は、‘ブラガンサと英国同盟’が根源である。』という表題を付けた有名な小冊子を即座に書き著した。英国人がポルトガル人に対して謝罪しなければならない位に不当な仕打ちであると感じているのを越えてでも、ポルトガルには英国に敵意と不満の感覚が今日でさえ、生き続けているのが分かる。

国王カルロスは議会に参席して議会の解散を宣告し、新しい時代の到来を表明する演説をした。国王は全面的に信頼を置いていた政治顧問のジョアン・フランコ(Franco João)を首相と《再興と自由のための運動団代表者》に布告する形で任命した。国王の指示は、今や国中を虜にしている反君主制主義を抱く者を撲滅することであった。それに反対する新聞社は閉鎖された。デモ隊は暴徒鎮圧用の警官隊によって粗暴に撃退された。国王とその家族は、テージョ川の南に位置するアレンテージョ地方のヴィラ・ヴィソーサにある比較的質素な宮殿に避難した。

1908年1月31日に、フランコが体制で敵と見做した誰でも、裁判に掛けずに国外追放できる独裁者権限を自分に与えるという、彼が強要する勅令に国王は署名した。その後直ぐに、2人の共和主義者ジョアン・シャガス(João Chagas)とアントニオ・デウ・アルマイダ(António de Almeida)が、リスボンの船着場に連行され、外国行きに乗船させられた。フランコは国王にもう身の安全は確保されたので、家

## 第17章 ブラガンサ家の没落

族全員がリスボンに戻るようにと話した。翌日の2月1日に、カルロス、皇后アメリア(Amelia)、皇太子ルイス・フィリップ(Luís Filipe)は、御用列車に乗車してテージョ川の南河岸沿いに旅をした。そこから川下りしてプラサ・ド・コメルシオに上陸した。彼らはフランコと第二王子のマヌエル(Manuel II)に迎えられた。彼らは2台の天蓋の無い四輪馬車に搭乗して、敵が潜む群衆の通りに向け出発した。1人の若者が走っている国王と皇后が乗車していた1台目の馬車に飛び乗り、ピストルを抜いて国王を撃ち殺した。もう1人の男はカービン銃を撃ち皇太子を撃ち殺した。が、彼の銃弾は弟のマヌエルの腕をかすめただけに留まった。

暗殺者は仲間の銃で即座に殺された。皇宮警備隊の隊長フランシスコ・フィゲイラ(Francisco Figueira)はその仲間の1人であり、その後国外に逃走して、何と40年以上経ってから短期間の内密な旅で戻った。

フランコもまた、殺人を執行した夕方に首相を辞任してポルトガルを立ち去り、彼の消息をその後聞くことは出来なかった。マヌエルが国王になった。当時18歳であった。同時代の歴史家によれば、マヌエルは《相続人というよりは寧ろ孤児であった。》と評している。若かった頃のマヌエルは君主制の中で振舞うような訓練を殆ど受けていなかった。彼は政府閣僚を任命や解任をしながら引き継いだ。ポルトガルは漂流し始めて行った。欧州を回って、更に大西洋を横切って、海外の、新聞社からや新聞通信社からの特派員が、誰もが革命が実際に避けられない状況にあると疑い且つその場所になるだろうというリスボンに集まってきた。

1910年10月に、ポルトガルで君主制が倒された一連の出来事は、1917年10月に起きたセント・ペテルスブルクでロマノフ王朝(the Romanov)の転覆への奇妙な前触れであった。10月4日の夕方、リスボンの宮殿内で国王マヌエルは新共和国ブラジルの大統領と食事を共にし、皇太后と2人の廷臣はトランプでブリッジに興じていた。そのとき突然に大砲が宮殿に打ち込まれているのに気づいた。宮殿はテージョ川に停泊していたポルトガル艦隊の革命将校と乗組員から砲撃され

## 第17章 ブラガンサ家の没落

ていた。彼らは1人のお抱え運転手を呼び出した。運転手は、リスボンの北西にある丘に建つマフラ宮殿に国王らを乗せて走った。翌朝、彼らはエリセイラという漁港の近くに乘せられていた。そして王室のヨットに乗ったが、船長はジブラルタルに連れて行った。そこから英国王室のヨット、ヴィクトリア・アンド・アルバート号に乗り換えて英国に向った。マヌエルは余生をロンドン郊外のツヴィッケンハムの邸宅で過ごし、古物収集家のポルトガル書物の蒐集や几帳面なカタログ作りに専念した。

リスボンに話を戻すと、翌朝、共和主義者の集団が行進をし、王宮と軍と警察の本部を管轄下にした。解散する為に兵士を指揮してきた幾つかの分隊の司令をする将校は地下に潜った。市民は街頭を埋め尽くした。市民は軍から逃げ出してきた大勢の兵士や海員に合流されてしまった。1つの軍兵舎は君主制主義者に抑えられていた。手製爆弾が壁を乗り越え兵舎に投げ込まれ、多数の死傷者が出た。他にも君主制主義者の一味が抵抗をし続け、多くの抵抗者らと一緒に交戦していた。

この時、ドイツ人のビジネスマンの一団が出張で列車に乗ってロッシオ駅に丁度着いた。駅前の広場の外側には君主制主義者の分隊で埋まり、一方隣接しているレスタウラドーレスには共和主義者の革命軍が占拠していた。ドイツ人のビジネス代表派遣のリーダーが、自分の傘に白いハンカチを巻き付けて、通り抜けようと仲間を引率した。共和主義者は彼が役人で、旧体制の降伏を宣言しているものと捉えてしまった。革命軍は市庁舎に向かって走り、ベランダを飛び越えて、共和主義者の旗を掲げた。誰一人国王側の、強力で十分に訓練された警護隊や、兵舎に残っていた殆どの部隊とは戦いを交えなかった。こうして君主制は崩壊し、2度と復活することは無かった。

## 第18章 独裁制への滑走

君主制廃止後15年の間に、何とポルトガルは7回総選挙を行い、8人の大統領を産み出し、45回も内閣が交代した。内閣は1日で交代したのもある。大統領の誰一人、任期4年を全うすることができなかった。

1920年代の半ばまで、ポルトガルが民主政治自体の利己心から漂流して何とかして止めようしてきたのを、民主政治とはうまく行かないものだ国民の多くの記憶に疑念を留めて来たように思える。共和主義者の改革の幾つかが明らかにされた。教育の急進的な改善にリスボン新大学やポルト大学の創設も含まれる。そこではその時代に取り掛かっていた研究コースと教育コースを設け、政教分離に取り組み、非カトリック教に対して礼拝の自由を齎したばかりか、表現の自由を齎し、宗教的基盤の上に立った差別を、雇用の差別も含めて少なくするなどが取り組まれた。

それでも未だ女性には選挙権が無く、また自分自身の財産を管理する権利も無く、父親か夫からの許可がない限り国を離れることすら出来なかった。外国人と結婚しているポルトガル人女性は、自動的に市民権を喪失し、持っても相続権は無かった。

共和主義者の感情を外に出してしまった失敗は、恐らくは、経済発展と社会発展に資金を融通するために、一般には遺産相続税を課さないということだったであろう。ポルトガルにとって初めての後援者であった聖人ヤコブが救済を大いに必要としたことを言い換えて、支配階級のために、まだまだ貧乏国に住む大金持ちの家族から巻き上げていた。

労働者の団結権、経営者との集団交渉権、そしてストライキ権などの労働権は、1822年以来、1世紀以上掛って認められるようになったが、でも先進国の中では結構進んでいた方であった。主要都市の住民の大多数からの永い間閉じ込められ

た不平や要求が、今や、重要な産業分野にいつまでも損害を与えるような広範囲に亘る、激しいストライキを惹き起こした。無政府状態が工場から街頭まで広がっていった。更に暴動が街頭から議会へと伝播し、議会では代議士同士が殴り合いを始めたので審議するのを諦めた位であった。

ただ単純とも思える大衆迎合的な不満を越える混乱が裏に潜んでいた。君主制時代に忠実に生きてきた人々が、より給料の多い仕事に有り付こうと田舎から都会に出て来ていたのである。貴族階級の中には、国外追放を受けた国王を帰国させようと企てる一味がいた。共和主義者もまた反聖職権主義の急進的なポルトガルの伝統から脱した主要都市を作ろうという意見を認めて企てようとした。ポルトガル人は未だにそうしているが、教会の権威へ盲目的におべっかを垂れるという大きな欠点があった。国王や国政者はこの数世紀の間、教皇の勅令がポルトガルの利害と矛盾していると判断したら、それに屈服するのを断ってきた。気取った、そしてもったいぶった聖職者は、国王ジョアン2世の統治時代に後戻りするまで、もの笑いの種となった。修道士や修道女は不法だと共和主義者が主張するも、イエズス会修道士をポルトガルから排除する3度目の先例を作らないできていた。ただこのときの違いは、目標を明らかにしていた点である。前もって仄めかされていたとき、それでもなお自分自身をカトリック教徒と見做していた統治者による過度に政治力、社会的権力、経済力を持つ立場にあった。共和主義者の指導者アフォンソ・コスタ(Afonso Costa)が、《2世代の内に、宗教を全て根絶する》という目標を宣言した。教会のミサに参列することでさえ、今では時には勇気のいる行為になっていた。聖職者の排除とは、兎にも角にもミサが殆どなくなったことを意味している。アイルランド人のドミニコ修道会士が居残ることを許された。ドミニコ修道会系学校が児童に学校教育を初めて施してきたし、英語の喋れる外国人カトリック教徒の牧師であったからであった。そこで礼拝しようとするポルトガル人が、リスボンのコルポ・サント教会に押し寄せるような結果になった。

共和主義者は、自分たちが少し痛手を受けるに違いない聖職階級制度への猛攻撃を制限していた。共和主義者の言葉を借りれば‘迷信’、信仰を狙っているときに、彼らは、信仰に厚い態度に対して根本的な誤解をしていたのを露呈した。それは、進むべき道から離れていると感じ取っている司教や他の人々を、非難する権利が与えられていると自分自身で思い込んでいた、カトリック教への絶対的な忠誠と帰依の姿勢から起因している。教会そのものがその生き方の重荷となると彼らが理解した考えは、実は事実とは正反対のものであった。全ての中等教育や多くの病院の運営、そして殆どの社会福祉や貧困者の保護活動を実際にしていたのは教会であった。教会は見世物や祝賀会とか催事にもまた多くに関与するし、村落が共同社会の形態をとるようにも力を発揮して、共和主義者への反対者が結集してくる拠点となった。

ファティマの近くの丘陵地の牧場で羊を見張っていた牧童3人が、聖母マリアが自分達の前に姿を現したという告白に、総大司教と教会聖職団が初めて嫌疑を掛けてきた。ファティマには力強い霊的な雰囲気を感じている多くの人々を知っているにも拘らず、この人気ある寺院を前もって懐疑的な態度に逆行していると否定することは難しいように思える。このように多くの群集を惹き付けるようなところは、ポルトガルでファティマ以外の何処にも見当たらないし、司教がファティマの政治的便宜性に気づいた。ファティマにはカトリック教に未だに大規模な大衆参拝者がいるという証拠があると司祭が掴んで、共和主義者の体制に含蓄させた。

リスボンの政府に襲った次の一撃は、アフリカ植民地からであった。1923年大量の偽札が国中に溢れているという記事を、リスボンで発行された新聞が報じた。その出どころは直ぐに判明し、アンゴラ・オブ・メトロポリス銀行（欧州人の植民地に対して留保した国の地域に与えた後の名前）の最近作ったリスボン支店であった。その銀行の唯一出資者で詐欺師はその後アフリカを去って、パリで豪華な生活をしたと云われていて、彼の名はアルヴェス・ドス・レイス(Alves dos Reis)という。

当時の低い身分階級であるもののレイスを含む知識人の多くは、出世しようにも

未だに頑固な社会障壁に突き当たって自分の経歴に挫折感を起こしていた。レイスは認められたいということ、財産を築こうとアンゴラに行ったのである。鉄道会社で一旦働いて退職し、その後幾つかの投機的事業に手を出したが失敗に終わった。危険負担資本のひとつ勝負を別に掛けようと英国に向け出帆した。彼は英国で有名な造幣印刷会社ウォーターローズの本社に出向き、自分がポルトガル銀行の代表者であるという紹介状を持参して渡した。商売は粉炭であった。その営業マネージャーは上司のチェックもなくして信任状を受け取った。レイスの発注金額は5百エスクードのお札でもって、2百万ポンド相当であった。このお札が印刷され、束ねられ、梱包されて、ロンドン滞在中のレイスへ届けられた。彼はそれを持ってリスボンに行き、そのお札を前もって口座を開設していた銀行を通じて市場に流通させた。ウォーターローズは、ポルトガル銀行総裁に送った照会状がレイスの共犯者によって傍受されると返還の要求をして防御した。それにも拘らず国際司法裁判所は、ウォーターローズに落ち度があると判断して賠償金の支払を命じた。その後、ポルトガル紙幣はフランスで印刷されることになった。

お札が偽造されていたよりも最悪なことだとポルトガル人が気づいたのは、その詐欺事件が発覚してからそれ程時間が経たない内であった。レイスのお札は本物の銀行券である。彼はポルトガル銀行自身が発行し、既に流通していた銀行券の製造番号を用いていて、ポルトガル銀行発行のお札と、レイスの偽造銀行券とを区別することが困難であった。ポルトガル銀行は両方を回収し、本物のお札に沿って詐欺にあったお札の為に、良札に交換して終止符を打った。

その損害を受けた総額はそれ程多額ではない。ポルトガル銀行は恐らく百万ポンドよりは多くない損失を蒙った。この出来事で、国家の金融管理がどうやってそのような信用詐欺による混沌状況に対応すべきか？という疑問が持ち上がる。その5年後に、通貨エスクードの貨幣価値がポンドに比して7.50から127.40と崩壊したのも、同様の混沌が起きてしまった。



こうして国家の財政負債は4億エスクードから80億エスクードと唾然とするように増加した。未払い勘定の中に、英国政府に外貨で支払うべき額が8億ポンドのものがあつた。これは第一次世界大戦時にフランスに出征したポルトガル軍への軍需品費用と軍事費である。ポルトガルは《最古の同盟国》としての英国の強要で戦争に突入した。参戦は悲惨であつた。多くのポルトガル軍兵士が、塹壕で赤痢や他の病気に倒れ、その殆どが死んだ。ドイツ軍が残つた兵士を見つけ出すのにそれほど困難ではなかつた。ポルトガル人は、英国人によって甘言で釣られてこの大惨事を受けた代償を、上述の理由からして、寧ろ英国が支払うよう望むようになった。

激しい憤りに対して、その結果ポルトガル軍将官は、報酬支払いが酷く遅れていた国家公務員のなかでも断トツのランクに位置付けられた。カトリック教徒として、例え彼ら自身の性質としても、彼らは無神論者の体制には決して忠実ではないと既に感じていた。将校が軍隊の食堂で食事を共にする会食者の会話は欧州で生じた新修道会に関してであつた。ファシストがもしイタリアを統制し且つ選り分け、ナチがドイツでもっと活動を展開するなら、何故ポルトガルではそうでないのか？

1926年5月28日に、大将マヌエル・ゴメス・ダ・コスタ(Gomes da Costa)が国家宣言を發布した。彼は既に退役していて、ブラガ北方の近くの大聖堂のある町で暮らしていた。彼は自惚れうぬぼの大きい男として有名だったが、それに匹敵する位に風変わりな男として名が知られていた。彼は、小規模で秘密主義の極左派の、政党集会に最近参加したにも拘らず、自分に政治的指導権があることを主張するために、ブラガにある兵舎へ右派の将官に連れて行かれた。自分の放送番組で、「我が国の情勢は、誇り高き者にとっては我慢できない……ポルトガルを救う為には私の下に集まろう、勝利か滅亡か。ポルトガル国民よ、武器を持て！」と、吹聴した。

4年前にローマ市内でムッソリーニ(Mussolini)率いる軍隊が行進したやり方で、ゴメス・ダ・コスタ率いる軍隊の行進がリスボン市内で举行された。この行進は、軍事的権威を獲得する目的で、2年間で4回行なわれた。今回の行進でもって何の

抵抗も無くて共和主義政府が崩壊し、大統領と大臣数人が国外追放を受けた。ゴメスは議会制度を廃止し、国を運営するのに同僚の将軍と海軍司令官を任命したと公表した。軍事政権に他の将校を取り込むのに8週間近く要してしまい、ゴメスがあまりにも間拔けで、非常に無能であることを曝け出したことになる。軍事政権は彼を元帥に奉り上げて、アゾレス諸島へ追放した。

大将アントニオ・カルモナ(António Carmona)が新大統領に任命された。彼は生え抜きの騎馬隊将校としてながく勤め上げた後、以前に軍事クーデターを企てた将校の一味を有罪との判決を決するのを拒否していた皇宮軍隊の一員として従軍していた。ムッソリーニの称賛者であるカルモナは、若人が黒色の制服を着て街路を軍事行進するのを主催し、《偉大なポルトガル》の《神聖なる使節団》と叫んでいる新修道会の祈祷党と熱狂的に連帯した。彼は1951年に死ぬまでの25年間、自ら《独裁者不在の独裁制》と奇妙な言い回しで表現した政治体制の中で、ポルトガル大統領として居座り続けた。

彼が大統領に就任して間も無く、ポルトガルの財政状況が自分たちの予想していた以上に悪化していることをカルモナは見て取り、前政権の予算で示されていた財政赤字額が実際の50分の1であることが分かった。英国政府のために、ウインストン・チャーチル(Winston Churchill)が戦争資金の未払い負債の凡そ4分の3をご破算にした。カルモナと仲間は更に国際連盟に支援を申し入れた。ポルトガルから手始めに要求したのは、主要な港を近代化するため、議論の的になる事業費よりは少なく融資するよう、千2百万ポンドという著しく控え目な借款額であった。ポルトガルが提示した担保は、国家が独占権を持つタバコ産業への課税金で、疑いないものに見えた。

国際連盟は貸付金を提示したが、タバコを輸入する時の関税賦課金を、ポルトガル政府ではなくて、徴収するためにスイスから派遣された国際連盟の官吏が即対応するという、実に珍しい、信じられないような条件を付加するという無礼なものであ

った。そのような条項を国際連盟によって課せられた他の国々は、第一次世界大戦の敗戦国であったのだが。ポルトガルはその屈辱的な取り決めに従う同盟の一員に成り下がり、国の尊厳を傷付けるものだと、カルモナがそれを排除しようとした。そこでリスボン市街では大掛かりな国家的凱旋式が催され、動員を掛けられた群集が喝采して迎えたが、その請求金額をどうやって支払おうとしたのだろうか？

カルモナは、自分と同僚が思いつく唯一の拠り所である、コインブラ大学・経済学権威のサラザール教授に助けを求めた。

サラザールはそのとき37歳であり、聖職者マヌエル・ゴンザレス・セレジエイラ(Manuel Gonçalves Cerejeira)と部屋を分けて大学に近い質素な下宿で独身生活を送っていた。マヌエルは、サラザールが首相になった頃同時にリスボン総大司教枢機卿になった人物である。枢機卿マヌエルのサラザールへの終生に亘る忠誠は、交際をするなかで教会聖職階級制度を論争の中に齎した。例えば、政治体制に対抗して、都会の貧しさの原因は役人が擁護していたから、ポルトの司教がローマに公式な訪問をした後に、ポルトガルへの再入国を拒否することにマヌエルは同意した。

サラザール自身、聖職の研究を8年間もして、ダウン盆地の生まれ故郷の村を訪ねると《父》と、よく呼ばれていた。たいして目立たない誓願をした後は、ひたすら聖職受任式に向って歩む代わりに、彼は予定を1年ほど先に進める軌道修正をして、法律の研究へと進路を切り替えた。

コインブラ大学の学長が、新しく且つ<sup>はや</sup>流行りの準科学である経済学の履修科目を設け始める時機到来と判断した。その時点ではポルトガルにその科目を教授する資格を有するものがおらず、大学側が教授任用のための論文の公募をした。その結果サラザールが入選してポルトガルで初めての経済学教授に任命された。

彼の生涯は、一匹狼的なところがあった。彼は破壊的な専制君主主義者<sup>ひいき</sup>最眞の政治に従事したために、大学から辞任させられたが、1年後には復職した。それから、彼はカトリック中央党から議会選挙に立候補し、議員となった。電車に乗ってリス

ボンに向かい議会で1日間だけ登院し、直ぐにコインブラに戻ってしまい、以降民主政治の方に関わろうとはしなかった。

サラザールは国家財政に関する連載物を書き、その中で均衡予算と金本位制への復帰が必要と説いた。小麦粉を過剰な程に輸入に依存していることが、国家の経済的破綻の大きな原因であると指摘した。

カルモナがサラザールに財務大臣就任を要請し、2度目の誘いで彼は承諾した。実は最初の就任要請交渉は2年前にあったが失敗に終わった。それは軍事政権が、全省の支出を財務省の下で統制されるべきという彼の基本的な要求を断ったからであった。政府の財政は国家の経済状況に絡んで悪化し続けた。ここで軍事政権の大將カルモナは彼に譲歩したので、漸くサラザールは首都リスボンに移った。

サラザールは税率を上げ政府の支出を大幅に削減し、初年度から均衡予算を作り上げた。彼の提出した予算で執行した結果は直ぐに黒字に転じ、それで海外でのポルトガルの負債を返済するまでになった。これが国の信用貸付格付けを高めることになり、ポルトガルが未払いの負債を殆ど半分にまで支払えるような金利に引き下げる効果を齎した。サラザールは年金基金による多額の貯金額の存在、それも国有銀行カイシャ・ジェラル・デウ・デポジトスに実際、無為になっている個人の貯蓄家などに注目を傾けた。その貯金を借りて、大型の灌漑事業や輸送の近代化のための設備投資に充てた。お米の生産性を向上させ、欧州人の国で唯一お米の自給を達成して、輸入していた小麦の代替にした。乾燥した果物を包装し、鯛を缶詰にするなど近代化を推し進めて、小麦粉を手に入れるために海外と貿易し始めた。

彼の統治下で失業率は劇的に下がり始め、それに相応して税収入が増加した。ポルトガルは、最近の20年の大恐慌や最初の30年を生き延びてこなかったけれども、殆どの西欧州の国々よりも反対に最も少ない影響を受けたに過ぎない。ポルトガルには金融や社会の安定があるという新しい評判を勝ち得てきた。これが世界各地でのトラブルから静かに避難し、安全を探している、富裕な外国人と一緒に付い

て来る多額の外貨を引き付けた。今では豪華なリゾートマンションが立ち並ぶリスボン西のエストリルは、多くの英国人や大金持ちのスペイン人家族の税逃れの住処になりつつあり、更に共和主義者の脅しで逃げ出した者が住んでいた。彼らは国外追放を受けた皇族・・・スペインの王位を狙う王子フアン(Juan)、ルーマニアの国王カロル(Carol)、イタリアの国王ウンベルト(Umberto)、ハンガリーの摂政ホルティ・ミクローシュ(Horthy)、そしてフランスの王位を狙う伯爵アンリ(Henri)・・・と流れを打つかのように続いた。

軍事政権の大臣が、実権を持たせてくれないという欲求不満が溜まって、相次いで辞任し、何人かの大臣が閣外に去ると、サラザールはその大臣職を引き継いだ。彼は、財務大臣はもとより、外務大臣、陸海軍大臣、植民地大臣、内務大臣を兼務した。彼の置き換わった大臣職の殆どが軍の将校であり、結果的にはサラザールが兼務したことで、軍事政権から文民政府への回帰を意味することになった。

結局、大将カルモナはサラザール首相を大統領に任命するという筋の通った段階を踏みながら、また新文民憲法の草案作りを監督するようにサラザールに委任した。サラザール自身その後《自分が創り出した‘新国家’とは、反共産主義体制、反民主主義体制、反自由主義体制、反権威主義体制・・・、理性と知性のある独裁主義体制だ。》と書いている。

1930年～1933年にコインブラ大学からの教授陣で作りに出した憲法草案は、イタリアのファシスト憲法やスペインのフランコ総統主義憲法のように、噂によると、教皇レオ13世(Leo III) (教皇回勅ラテン語 *Rerum Novarum*; 英語 Of New Things) やピウス11世(Pius XI)の社会学説《反現代主義者》に基づいていた。政党間に横たわる政治的闘争は《本質的に邪悪なもの》と決め付け、《徳》の前方にある進路は、愛国主義とカトリック教と緊縮財政とが均質に混じりあって成り立って然るべきものとした。偽プラトン哲学的な物の見方によると、人間社会は、社会に属している個々人からは別個であって、より大事なものであると云っている。その基本的単位

は家族であり、各家族は家長、つまり夫であり父を持っている。その家長が国政選挙権を持っていて、ポルトガル人の国家という家族の家長を選挙で選ぶのである。下院議会は一種の家族会議に相当するものであり、家族の構成員である議員は助言や嘆願や評言が出来るが、国家の家長が割り当てた国家予算には口を挟むことが出来ないのは当然である。これが各家族の家計つまり国家財政を合法的な原則として忠実に写し出した。女性か未成年者は財産を所有出来るという原則であったが、それを管理できるのは家父長である男性にのみ特権が与えられたのである。

1つの家族としてのポルトガル国家は、階級闘争若しくは他の色んな形態での国内紛争に対しては寛容ではなかった。労働組合も政党も解散させられ、ストライキは禁止された。実業家は準中世をモデルにしたギルドつまり同業組合に組織化され、専門職が構成員となった。手工業の職人は企業連合の中に囲い込まれた。これら3つの夫々から選ばれた代表者が上院を構成した。そうして彼らは自分達の中で色々と生じた問題を平和的に、ごく普通の関心を持って解決していった。教会は国家の母親のように、つまり、ポルトガルの各家庭で、母親が家族を実際には取り仕切っているように、その伝統的な役割を取り戻した。後日サラザールはこう宣言した。《神の国から来ていない他人によって課される権威は存在しない。神が人間に権威を植え付けるのであり、権威を課した人間に授けるのだ。》

諸政党を再編成して、サラザールは《独裁制確立とその目標設定とその綱領を支援するために》国民連合党を立ち上げた。全国の社会人は、毎年、共産主義に反対する誓約書に署名し、彼が非合法としたフリーメーソンズには属していないと誓うように義務付けさせた。新国家市民が担うべき義務は、《理想とする社会の1つの単位として家族を敬い、新しい社会秩序の権威と独裁制を重んじ、教会の精神的な価値と聖職階級制度を尊ぶ。》ことと示されていた。それらが堅実に働くことと、徳と信心の必要性を市民に知らしめた。

女性は家庭を想い、お店や教会にきちんと通うこと、そして男性は働きに出るこ

とを要求された。《工場や事務所や専門職の職場で、男女が一緒に働いたりすれば、家庭は崩壊してしまう。家庭とは、良く組織化された社会の基礎となる礎だと定義できる。》と、サラザールは説明を加えた。

未亡人になったある母親が、世帯主になったので選挙権があると裁判所に申し立てたことがあった。申立人の主張に合う判決が出されたのに、サラザールは女性の選挙権を否定するように、選挙法を書き直した。

未亡人の敗北とサラザールの勝利は、象徴的なものになった。大統領か下院議員のどちらかを再選する投票をしようとする有権者には、候補者選択の余地はなかった。従って両方を投票しなかった有権者は、現状を肯定した投票と数えられてしまう棄権をしたと見做された。

独裁政治に反対するデモ行進が、リスボンとポルトで1927年に行われた。続いて小規模の反対運動が1929年に起き、警察がその組織のリーダーを検挙して、離島アゾレス諸島に追放した。1934年にはサラザール個人に向けた最初の大規模のデモ行進が、ガラス製品製造工業の中心地マリーニャ・グランデの町で行なわれたが、3千人以上が逮捕され、デモの首謀者150人がまたアゾレス諸島に流刑された。

サラザールは国家防衛国際警察という新しい部隊を創設した。彼は国家検閲制度を導入し、新聞はもとより、書籍から幼児の誕生日パーティーの招待状に至る全ての発行物を検閲し始めた。新聞や雑誌の編集者は、検閲者に与えられた権限が取材記事や論評や解説の削除だけに限っていないのを知った。こうして空白になったスペースは、サラザールのチームが書いた政治的宣伝の記事が、新聞スペースを埋め尽くした。少なくなった政治犯罪を裁判するために、控訴制のない文民裁判所が設立された。新しく設置された軍事裁判所は、文民の起訴に関する審理も含めて、重大な《国家の安全保障に対抗するような犯罪》が告訴された物件について審理した。

反政府運動が次々と続き、1935年には、サラザールが創ったファシスト的な

様式である、国家が統制した労働者産業別組合に対抗して、禁じられていた労働組合がストライキを敢行した。サラザールはアフリカ西海岸の沖にあるカーボ・ヴェルデ諸島のタハファル(Tarrafal)に強制収容所を建設するように命じた。

最初の追放者が、1936年10月にその強制収容所に送り込まれた。彼らは20歳から30歳の年齢構成であった。ポルトガルは、前世紀の中頃に、西側諸国の中で最初に死刑制度を廃止した国であった。サラザールはそれを表向きには強化しようとはしなかった。タハファルはナチの強制収容所のようなものではなく、ガス室もなく、また大量殺戮するような系統だった設備は備わっていなかった。死刑はポルトガルの植民地では国内と同様に禁じられていた。しかし、収容所の環境は著しく劣悪で、収容所の管理者は第1陣の収容者に「タハファルに連行されてきた奴は、死ぬために来たようなものだ」と、洩らしたようだ。

数人の若者は数年以内に死んでしまった。

そうしている間に、ポルトガルでは、反サラザール派の軍将校2人がサラザールを襲撃しようとした。サラザールが18世紀の先輩ポンバルの巨大な像の除幕式を行い、新しい秘密警察を再編成した。彼の要望で、ムッソリーニがイタリア人で新しい技術が生かされた拷問方法を指導する教官を派遣してきた。それは身体には目に見えるような傷跡が残らないという代物であった。反政府者を大掛かりに検挙して、強制収容所に送り込み、尋問し、監禁した。

リスボンを訪問したムッソリーニもまた、彼自身の子供を先頭にした若者黒シャツ隊を送り込んだ。サラザールはポルトガル若者運動(PYM)を興した。そのPYMの会員は、金持ちや権力者の子弟であろうが、事実上強制的に加入することが義務付けられていた。制服には、バックルには頭文字のS(エス)を描いたベルトを身に付けていた。国民連合が52歳になったサラザールを祝うためにリスボンでデモ行進を行なった。彼の友人の枢機卿セレジレイラがコインブラで“新国家におけるキリスト教徒の基準”と称した聖職者会議を主催した。



## 第18章 独裁制への滑走

第二次世界大戦が欧州の他国でうっすらと現れてきたときは、サラザールは不名誉なことだったけれども、ポルトガル自国内では、まだ幅広く目を見張るような大衆支援体制を作り上げているところであった。彼は、ナチズムからばかりか、他の南欧のファシズムとは別個な、‘新国家’という国内の政治的宣伝のなかに、引き離すのに痛みを持ってきていた。現在の傍観者が細かな点でその差異が大きく見えたならば、彼は伝統的なポルトガルの価値に回帰しようとするサラザール主義を、公平に首尾よく差し出すことができていたことになる。

反対派の主たるものは、比較的小規模な製造業の労働組合であった。サラザールが秘密警察を創設したことでさえ、残りの25年間《法律と命令》に彼が約束した兆候として感謝して見られていた。第一共和制の、軍事独裁制が上手くいった無政府状態の記憶が未だに鮮やかであった。他の軍事クーデターが信じがたいもののように見させるために軍事教練が軍隊に再び導入された。

多くの者が失業して銀行預金も無くなるような経済的混乱が、中産階級に、少なくとも新資産家において起きた。公僕や国家公務員はそれでも規則正しく報酬を十分に受け取っていた。農場経営者は、生産物のため存続できる市場を持っていた。公共事業、つまり新しい道路、病院、刑務所、学校、スポーツスタジアムの建設が新しい雇用を生み出し、国家の自尊心を植え付けることになった。

これらの事業の中で最大のものは、国内の鉱物資源で、銅、金、錫、そして全ての鉱物の中で最も利益が上がると保証されたタングステンを探し出す電力を発電するための水力発電所の建設であった。

## 第19章 第二次世界大戦、自由への裏切りと戦い

1943年2月、ロンドンで戦時内閣の緊急会議が開かれウィンストン・チャーチルが、RAF 偵察飛行機が前の日に撮影した航空写真を閣僚に見せた。それはカレー(Calais フランス北部ドーバー海峡を結ぶ港町)の周りに建造中の不思議な格好のコンクリート建造物で、スキージャンプ台を逆にした形に似ていて、その先端の向きがロンドンに向いていた。ポーランドの反ナチ・スパイグループが数ヶ月前に流し始めた諜報筋の噂を劇的に確認できたもので、彼らが最も恐れていた内容であった。

ドイツ軍がロケットプロペラ爆弾を開発してきて、ヒトラー(Adolf Hitler)が英国帝国の首都を破壊して降伏するまで使おうと秘策を練っていた。ロケットはドゥラッケンブルク山脈の地下深くにある、攻撃を受けても難攻不落の洞窟に立ち上げた工場で大量生産されていた。経済厚生省のアナリストが、このプロジェクトの成功を握る鍵は、ロケットで大量に消費するタングステンを、如何にドイツ軍が入手できるかどうかだと助言し、ロケットのジェットのノズルが他の低融点の金属材料で作ったら、地上を離れる前に既に分解してしまうだろうと付け加えた。

ドイツ軍は占領したチェコスロバキアと中立の立場をとるスペインから小銃弾、銃、装甲鋼板やタンク車を製造するのに使う、この稀金属を買い上げていた。その結果、第二次世界大戦が勃発した翌月にはその価格は40倍まで高騰してしまった。今や、この稀少価値のある商品を作り出す豊富な資源を持ち、ドイツ軍にとって有用なのは、ポルトガルの中央山脈の鉱山で、その殆どが地質学上の地勢ではタングステンが未だに埋蔵されていることが判明している。その最大の埋蔵量がある地域パナスケイラは英国人に所有権があったが、直ぐに英国政府によって国営化された。また英国はアメリカ合衆国からタングステンを豊富に供給されるようになった。

## 第19章 第二次世界大戦、自由への裏切りと戦い

ロンドンを徹底して破壊するために、更にタングステンを手しよう、ヒトラー内閣の軍務大臣アルベルト・スpeer(Albert Speer)がベルリンを発って、ナチ占領地のフランス、ファシスト国のスペインを車で飛ばして横断しリスボンに着き、サラザールと会った。ポルトガルは第二次世界大戦では中立の立場をとっているといわれていた。1940年代の初め頃から、在ポルトガル英国大使がドイツ軍へのタングステンを売ることが止められないかサラザールに問い掛けていた。英国とポルトガルの両国は《旧同盟国》であり、ポルトガルは遵守すべき協定によって縛られているという主張に基づいた要求であった。

サラザールはその英国の要求を断った。ポルトガルが大戦に参戦するように、そして英国軍の艦隊がアフリカのポルトガル領土を横切ることが最低限できるように、更にドイツ市民がポルトガルに入国できないように、またドイツの軍艦や船員が大西洋の真真中で聞けるようなアゾーレス諸島から発信する天気予報の放送を止めて欲しいという、チャーチルの要求に、サラザールは以前に全て断っていた。英国人に対する憤り、《旧同盟国》の悲哀から来る得<sup>とく</sup>は無いかを探し出して来る歴史的な偏好からして、これらは予測された動きであった。

ポルトガルでドイツ軍への物資供給に英国人ビジネスマンが関与しているという申し立てを英国諜報員が調査報告して、チャーチルに失望感を与えてしまった。

英国政府は、自分達が必要を感じていないドイツ軍の求める供給品の値を高くするように試みた。タングステンの価格は再び高騰したが、ドイツへ運ぶ船は増え続けた。ナチスはオランダ、ノルウェー、ベルギー、フランスそしてイタリアの中央銀行から没収してきて保管していた中から金購入の支払に充てて金を買占めた。

チャーチル内閣は、英国のポルトガル管区にタングステンをドイツに供給するのを断つよう MI6 (Military Intelligence section 6; 軍情報部第6局=Secret Intelligence Service 英国秘密諜報部の下部組織) に対して伝統的な方法でよう命令した。キム・フィルビー(Kim Philby)が率いる英国秘密諜報部のイベリア局はポルトガル部を持っていなかった。

## 第19章 第二次世界大戦、自由への裏切りと戦い

その姉妹組織の特別作戦本部行政官がシェル石油の管轄下でポルトガルを取り仕切っていた。その諜報部員がサラザール秘密警察によって摘発され、追放されてしまった。キム・フィルビーは、愛想をつかさされて西アフリカ経由でロンドンに帰国していた友人グレーム・グリーンを助けるために帰国した。彼は、自分の上司が心臓麻痺になるのではないかとロンドン本部が気遣っているようだとっては、在ラゴス英国諜報部の部長をいじめていた。彼が最後に申し出たのは、ラゴスの海岸を去るとき、潜水艦(U-boat)(Unterseeboot ドイツ語を英語風にしたもの; 英語 Undersea boat 又は Submarines)の乗組員を騙して諜報報告を受けるために、アフリカ西海岸地帯を浮上と潜水して移動できるよう、ポルトガル売春宿巡りを設定して欲しいということだった。グリーンは在ポルトガル英国秘密諜報部全局の部長に約束をさせられ、見せ掛けで入国して来た将官の一団や男女を雇い入れた。

非合法の、地下に潜った共産党のアルヴァロ・クニャール(Álvaro Cunhal)を含む指導者は、“*safe house*” (秘密諜報部や秘密警察の専門用語で ‘secure location 安全な場所’ の意) <sup>まかな</sup>を賄われていた。共産主義者は、“我々は団結した反サラザール戦線に喜んで行動を共にする”と宣言した政権公約を、英国から密輸入した印刷機で印刷して、そこから発信していた。ずーっと以前に、彼らは社会主義者や自由主義カトリック党と他の民主主義者と連携をしていた。その連合の議長に大将ノルトン・デウ・マトス(Norton de Matos)を選んだ。独裁者サラザールがアフリカ労働者の権利を守る法律の廃止し、マトスが提案した経済発展計画を取り消したことに反対の意思を表明して、マトスはサラザール統治時代初期にアンゴラ軍事臨時政府の閣僚を辞任してしまっていた。アンゴラ人の小作農が、地元住民が消費する食物を栽培する代わりに、ポルトガル輸出用に綿花を栽培しようという命令に、サラザールはこれを置き換えた。マトスが辞任した後、ハンガーストライキが行なわれたが、残忍な形で鎮圧されてしまう。綿花は外貨を使ってアメリカ合衆国南部から購入すべきではないとサラザールは望んだ。ポルトガル北部の織機工場経営者は、アンゴラからの綿

## 第19章 第二次世界大戦、自由への裏切りと戦い

花は毛足があまりにも短いタイプで利用できない代物だと言って反対した。それで中央アフリカでの飢餓の蔓延と、ポルトガルの織物工業製品が高品質だという名声が穢されてしまう結果を招いた。

マトスは、サラザールが活動を禁止していたポルトガル・フリーメーソンズ・グループの指導者であった。フリーメーソンズも秘密組織の他のグループもどちらも地下組織の共産主義者に匹敵はしていなかった。1996年に発表したエッセイでアルノ・バハダス(Arno Barradas)が、地下活動新聞を複写して、逃走し、又は、刑務所や強制収容所から脱走して、秘密警察の常時観察の目が光っている中を生きている僚友を保護しながら、秘密の共産主義者センターを運営している、律儀さと勇気を両方兼ね備えた女性達を描き出している。彼女らは、それが好きだから、自分たちに結婚とか母性を否定するしかなかった。その数人は母性本能に屈し、その後逮捕されてしまい、秘密警察の独房に幼児と一緒に連れ去られる者もいた。

それは反ファシスト全ての共通的な印象であるとバハダス博士は述べているし、英国秘密諜報員だったディー・エル・ラビー(D.L. Raby)教授も同様に著書“ポルトガルのファシズムと抵抗”で、ポルトガル人に財政的な援助や他の実利的な支援を与えると、やましい点のない約束をしていたと付け加えて書いている。同盟国ポルトガルが第二次世界大戦の勝利に加担した見返りとして、英国人は戦後のポルトガルに自由と民主主義選挙を植え付けることを保障することだろうと。

リスボン港に停泊中の一隻のドイツの船が、タングステンの代りに砂を詰めた箱を幾つも積み込んでいた。その後直ぐに出航したが、そのトリックが見つかる前に船は爆破された。セツール港で、鯛の缶詰用の缶に砂を一杯詰めたものが船に積み込まれた。デモ行進と暴動が港場で起きた。ドイツ向けのタングステン積み込んだ鉄道貨車には、ポルトガルからドイツへの贈物として、“過剰な食物”が入っていると注意書きを内密に刷り込んだ型板が取り付けられていた。食料の配給で怒り心頭していた主婦達は、その物品が動けないようにトラックの前に陣取り立ち並ん

## 第19章 第二次世界大戦、自由への裏切りと戦い

だ。国立警備隊は排除するように命令を受けた。すると今度は地面に座り込んだ。警備隊は力づくでも彼女らを動かせという命令に従わなかった。警備隊員は若者が殆どであって、彼女らは自分たちの母親のような存在であったので—実際に一部はそうであったが—手出しが出来なかった。

タングステンのドイツへの出荷を止めること拒否したサラザールは、アゾーレス諸島に軍事基地を建設をという枢軸国の要求の返事を引き延ばしていた。これらポルトガル領土の諸島は、食料や新鮮な物資を英国へ運ぶポルトガル商船隊が襲撃されないようにドイツ製潜水艦Uボートで護衛して、避難所として使われてきていた。Uボートというポルトガルとドイツの関係を使って、ヒトラーは英国を負かして降伏させようという夢を実現するために接近してきた。サラザールは未だに考えを変えようとはしなかった。アゾーレスの人々は、ポルトガル本土よりもアメリカ合衆国に住む人々と個人的なお付き合いが永い間続いてきていた。人々の同情が集まったことは疑いの余地がない。ポルトガルからの独立を要求するデモ行進の波が押し寄せた。1943年の夏に、もっともらしく出し抜けに、サラザールは枢軸国の2つの要求をしつしつ容認した。タングステンの輸出を全て禁止した。アゾーレス諸島の軍事基地建設の準備の技術的な詳細を詰めるために、軍事技官のチームがロンドンからリスボンに来ることが許可された。と同時にサラザールの秘密警察が、地下に潜っている反サラザール指導者のリストを作って検挙することに手をつけて、身元と所在に関しては、正確で、最新の情報から作業が明らかに進められていた。

そこで在ポルトガル英国代理店は、それ以来どんな取引若しくはより有利なものを得るために何かを差し出す交換を控えた。しかしグリーンはその後直ぐにMI6のポルトガル部長を辞めたのが、実はその事例であった。後で彼がそうしたことを書残した最初のことは、秘密諜報部の無能力と背信という皮肉な物語であった。その物語の中で自分自身を比較的安全な過ごし易いロンドンのアルバニー（ピカデリーにある複合アパートメント）に住む主任として描き、《自分の情婦や彼女の旦那がアパート

## 第19章 第二次世界大戦、自由への裏切りと戦い

の廊下を降りてきて、豪華な食事をし、翌朝には恰も彼の二日酔いの空想の作り物のような現場で、気難しく自分が諜報部員を上手く操っていた。」とその物語に書いている。彼の司令を成し遂げて壮絶な死に遭遇したときのみ、彼らが現実の人間であったと初めて気づいたことだった。彼はその物語を映画用として初め書いた。でも英国政府の映画検閲者によって直ちに禁止され、そして結局は数年後に映画化され、再び本として書かれた。その名は『ハバナの男』である。

第二次世界大戦でほぼ中立の立場で貫き通したポルトガルは、欧州大陸の大西洋側諸国の中で唯一ナチに占領されなかった国であった。リスボンは英国人やその同盟国に門戸を開放し続けてきている。ポルトガル経由で、国際赤十字が各地の拘留所からの郵便をその家族先へ転送していた。英国宛と英国からの郵便は KLM の飛行機で運ばれていた。英国からポルトガルの首都に到着した旅行者もまた KLM の飛行機を利用した。食料と石油を配給され、焚き火をして暖をとって家や職場で過ごし、灯火管制が敷かれ爆弾で破壊されたロンドンから新たに到着した英国人を迎えているリスボンは、平穏で明るい都市であった。グリーンンの秘密諜報部将官の1人マルコルム・ムゲリッジ(Malcolm Muggeridge)が、罷免されて数年後にリスボンに出掛けて、レストランの外側にあったメニューを見ただけで目が回ってしまい、チーズ・サンドイッチをカフェで注文して終わった。リスボンが曲名になり、ロンドンの西端で数年間流行ったテーマソング『漁師ペドロ』を今思い出す。イアン・フレミングはポルトガルを訪れた別の英国諜報部員で、彼が最初に書いたジェームス・ボンドの小説『カジノ・ロワイヤル』は、エストリルで構想した。

フレミングが考えたジェームスボンドのモデルは、エストリルに住んでいたユーゴスラビア人デウスコ・ポポフ(Dusko Popov)(Duško Popov;Serbian Cyrillic: Душан Попов)であったと後に云われている。冷静に、貴族的な雰囲気、カジノの内外で大博打を打っていたポポフは、実は、英国にとって最重要人物の二重(逆)スパイであった。自分がドイツ軍のスパイのようなふりをしながら、ドイツ軍には逆情報入手の熟練

## 第19章 第二次世界大戦、自由への裏切りと戦い

者によって集めた偽情報を流していた。フランス北部カレーの周囲の海岸から、枢軸国が占領された欧州を奪回しようとしていると信じ込ませて、ドイツ軍を惑わすことが目的であった。この欺きは首尾よく成功して、枢軸国がノルマンディーの南方に、ドイツ軍から大した抵抗も受けずに且つ犠牲者も少なく上陸出来た。ポポフはこっそりとロンドンに亡命し、後に宮殿での秘密式典で高い勲章を授与された。

リスボンでもまた、反ヒトラーのドイツ人、とりわけ法律家オット・ジョン(Otto John)とドイツ諜報部(Alwehr)の上席部員数人が、非ナチ・ドイツ政府を通じて先導者(Führer)ヒトラーを打倒し、平和交渉を支援しようとしていた。英国秘密諜報部のイベリア局の局長フィルビーは、その陰謀はドイツがロシアに襲い掛かるのを強めることになるとごく自然な考え方をしたのに、それがソヴィエトの親派だと思われ、解雇されてしまった。英国は全面的な無条件降伏に他ならないと、彼は元氣良い返事した。在リスボン・ドイツ人の地位の高いグループは、しかしながら、非常に有益な情報を持った英国の秘密諜報部員を補充し、少なくともその内の1人には終身の報酬を支払った。

戦時中でポルトガルの偉大な勇士と云えば、アリスティデス・デウ・ソウザ・メンデス(Aristides de Sousa Mendes)を挙げられる。フランスがナチに1940年に陥落したとき、メンデスは在ボルドー・ポルトガル領事だった。彼は、酷い迫害を受けて死にそうになって逃げ出してきた大勢のユダヤ人から話を持ち掛けられて、即座にポルトガルのビザを無料で発給してあげた。リスボンにいる彼の上司が、彼のしたことに気づいて発給を止めるように命じた。メンデスは、ボルドーと一緒に住んでいた家族を領事館に呼び寄せた。その中に最近結婚したばかりの婿もいた。メンデスは自分の窮地を彼らに託した。カトリック教徒紳士の1人として《自分はビザを処理せねばならなかった。》と、自分の善悪の観念を彼に話した。《しかしこれは、サラザール政治体制の手で、恐らく結果的には恥辱の処置されることだろうし、自分の家族や自分自身の財産破滅に陥るであろう。》妻、娘、婿はビザ発給に関



## 第19章 第二次世界大戦、自由への裏切りと戦い

して何も言及しなかった。彼らは彼の事務員として手助けして、ビザを更に発給する仕事を続けた。その噂が広まり、ユダヤ人の群集が領事館の外に毎日のように押し寄せてきた。メンデスの家族は総出で日夜を問わずに作業をした。在バイヨンスのポルトガル領事が、自分の領事館の外側の通りには、避難民のユダヤ人が溢れかえっていて何をすればいいの？と電話してきた。メンデスはこう答えた。「彼らにビザを発給してあげなさい。勿論。」

3万人にも上るユダヤ人がナチから救われたのだ。数は少ないが今でもカルダス・ライニャという静かな温泉保養所(spa)で暮らしているのが分かる。その多くが北アメリカや南アメリカに行った。メンデスは停職処分を受け、リスボンに召喚された。逃げていた1人の亡命者のために、国際法で著名な教授である彼の告発人たちを当惑させ、命令に背いてビザを発給した廉で、懲罰裁判に極秘に掛けられた。メンデスは職を解かれ、最低限の期間拘禁された。余生を無名の田園地帯で送った。1967年に、イスラエル政府が彼を《道義心の英雄、有徳の異邦人》と言明した。ポルトガル政府も自ら1980年に、死後の彼の名誉を取り戻し英雄と称え、それ以来続けている。

もしも前に少しの疑念があったとしたら、ポルトガルの思いやりがあったところで戦争は終結しただろう。リスボンや他の都市の大通りは、枢軸国の勝利を喝采し、反サラザールのスローガンを掲げて叫びながら、ユニオン・ジャックや星条旗を人々が振り翳<sup>かざ</sup>して溢れ返った。数日後に、サラザールは幾らか怖<sup>おじけ</sup>気ながら自分が主催したデモに参加して、《枢軸国勝利への貢献だ！》と、拍手喝采している自分自身を信じ難かった。彼は《自由選挙がある英国と同じ自由選挙》を約束することで、独裁制に対する印象の強さをまた認めたりもしていた。

しかしながら直ぐに彼はこう言った。「私は、英国人と、彼らの生き方、そして自分達の制度や慣習を尊重し、更に自由を大事にしている点に感服している。これらの原則をポルトガルに当て嵌められなかったポルトガル人も十分に知っている。」

## 第19章 第二次世界大戦、自由への裏切りと戦い

反ファシスト連合が民主制団結運動を推し進めていたとき、サラザールは毎週、治安会議を主宰するなど、秘密警察の近代化と強化を推進した。この秘密警察の柱石は、自分の政治体制の打倒をただ単に目指して活動していると云われている人々のみでなく、将来そのような運動に入るに違いないと考えられる人々の一勢検挙にあった。妨害や検閲、嫌がらせ、ますます多くの検挙に対して立ち向かってくる彼らの運動に、秘密警察が対抗した。リスボンで大規模なデモ行進が行なわれ、普通自由選挙を約束した独裁者にそれを実施するよう訴えた。民主化移行の請願は30万人の署名を集めるに至った。ポルトでは、明らかに10万人を越えたであろう署名者の身元を主催者は頑かたくなに秘密とした。提出された署名がリスボンに集まると、国家公務員で署名をした全員を解雇するよう厳命を受けた秘密警察に、間髪入れずにその署名簿を引き渡した。同様に、ポルトガルで最も尊敬されている大学教授の何人かは、教授の地位を追われた。民間企業に働く従業員もまた、署名をした者は解雇されるという圧力を掛けられた。反対する党が出馬しない選挙が行われた。

民主化運動を進めるメンバーの幾人かが、連帯運動を助けた報いとして、ポルトガルで世界大戦後に自由選挙が行われるとの約束がなされると信じてきていたのを思い出した。敗戦国のドイツ人らは、民主化には厳しい批判をしていた。共産主義者がポルトガルを乗っ取れば、全ての政治的自由を与えてしまう結果になると、サラザールが英国政府やアメリカ合衆国政府を説得して合意させた。ポルトガルの共産党は実際に7千人以上の活動家を抱えていた。共産党は永い間、他の反対政党のどれよりも断トツの組織化を誇っていて、反サラザールのストライキを打つなど有効的な手を打っていた。しかしポルトガル国の権力を握っているのはカトリック教だというのが、全ての考えにあった。

しかしながら、それから冷戦が始まり、ポルトガルでファシズムに唯一代わるものとしての《共産主義者の脅し》が、ヘンリー・キッシンジャー(Henry Kissinger)とロバート・ケネディー(Robert Kennedy)のように全く異なる見方をする政治家を結

## 第19章 第二次世界大戦、自由への裏切りと戦い

びつけて、ワシントンで信条に関する記事が連載された。ポルトガルでは、サラザールの行き過ぎた行為に批判的な *Time* 雑誌を7年間発禁にしたが、アメリカ合衆国当局はそれをしなかった。

サラザールは1952年に新たに総選挙実施を指示した。勿論、対立候補者を擁立させなかった。総選挙で選ばれた、独裁者の子分エンリケ・ガルバウン(Henrique Galvão)は、彼の選挙区では少なくとも、選挙管理委員は当選者を公表する前に、投票数集計に手間暇を掛ける必要はなかったと、懐述している。この若き将官ガルバウンは、大尉までのぼり詰めた後、植民地軍務に配転された。ポルトガル帝国の偉業をもっぱら褒め称えて、馬鹿受けしたリスボン博覧会を彼は組織運営した。それからサラザールは、彼をポルトガルのアフリカ植民地の検閲庁長官として任命した。

アンゴラとモザンビークを視察したガルバウンは、自分自身が悪事の首謀者を務めてきたことと、政府の組織的宣伝に矛盾があることに気付いてぞっとした。彼が見た現地人の墮落ぶりと役人の皮肉癖について書き綴った報告書を、国会議員に送りつけた。秘密警察は搜索して、複写物全てを押収した。

強壯で、国から脱出できるような、ほとんど全ての人々が、アンゴラとモザンビークから南アフリカに逃亡していると、ガルバウンは報告書に書いている。南アフリカの方が、より多い給料を貰いより良い生活が出来たばかりか、黒人隔離政策という抑圧があつたにも拘わらず、あるべき人権を享受できた。国内に留まった14歳から70歳までの男たちの殆どが、ポルトガル政府の公吏によって検挙されて強制労働に適すと判断されて、彼らは檻の中に打ち込まれ、鉱山や大規模農園や私企業の持ち主に彼らが貸し出された。強制労働というこの制度は、奴隷制度以上に悪いものだ<sup>と</sup>ガルバウンが言及した。奴隷の持ち主は奴隷に元手をかけていたので、奴隷を死なせずに都合をつけては維持しようという私利私欲が働いた。政府から貸し出されて、病気に罹り、また死んでしまったアンゴラ人やモザンビーク人は、無料で、若しくは特別料金でもって、簡単に雇い主から他と入れ替えさせられた。

## 第19章 第二次世界大戦、自由への裏切りと戦い

村で自分が所有する土地を耕して自由らしく暮らしているアンゴラやモザンビークの男達の方が、その暮らし向きが辛うじて良かった。この小作人が、コーヒー、綿花、お米、お茶と、儲けの多い収穫物を生産するためには、ポルトガル人専門家による農業技術支援を植民地にすべきだという議論が、リスボン博覧会であった。実際には、小作人はそのようなノウハウ導入を拒んだ。すると植民地統括の役人や会社の代表者が現地を訪れ、ごく僅かな価格にするために何を生産調整すべきかを小作人に生産物種類と量の注文を出し、莫大な利益が上がるように再販を強要した。その結果、収入が減って小作人は自分の家族を養えなくなってしまった。医療サービスは無いに等しかった。乳幼児死亡率が60%になっているとガルバウンは推定した。ある地域では、出産時に母親が何と40%も死んでいる事実が分かった。例え無事に死なずに済んだ母親や乳幼児には、風土病の蝸牛熱(hilharzia)(=schistosomiasis snail fever とも言われる)の受難が待ち受けていた。病気に罹った母親や孤児が到る所で見られたという。

この医療に関する数値はかなり誇張されたものであり、ガルバウンの報告書の残りは修整のモデルになったと、サラザール政権下の、ポルトガルのアフリカ植民地問題を専門とする歴史家がずっとそれとなく言ってきている。サラザールは、名目上は別として実質的に、彼の前任者が約1世紀前に違法と禁じた奴隷制度を復活した。《黒人とは強制して働かさない限り、働かないものである。》という表現が独裁者の哲学である。

ガルバウンの報告書は、反駁は言うまでもなく、却下されるうる以前に揉み消された。ガルバウンはアフリカ植民地検閲庁長官辞任した。ポルトガルのアフリカ植民地の事態は、伝統的ポルトガル人が持つ<sup>ヒューマニズム</sup>人本主義の価値観や正義を全面的に裏切っているものだと、ガルバウンは言い切った。その落ち度はポルトガルの人々だけでなく、《警察の非道な行為によってそうするように強いられたことから、ただ国家が耐え忍び続けるという違法な政府》にあった。

## 第19章 第二次世界大戦、自由への裏切りと戦い

何らかの落ち度の中には、サラザール政権に気楽に財政援助をし、海外に外交支援するなどまた英国やアメリカ合衆国にもある。“独裁制を支援することで、両国は、自国の民主制という理想を単に裏切っていたのではない。両国はポルトガルの行く末に障害物を置いて、自由化を達成させようと試みていたのである”。

《銀行襲撃の暴力団のような動きをしている秘密警察からの数人が》尾行してガルバウンを逮捕し、彼を独房室に監禁して、拷問し、反逆罪の有罪判決を下して、強制収容所に送った。7年間幽閉された後に、ガルバウンは重病に罹ってしまうが、秘密警察によって砒素系の毒を盛られてしまった結果かとは彼は思い込んだ。

彼はリスボンにあるサンタ・マリア病院に移送された。警備員が2交替制で張り付けられ<sup>しろくじちゅう</sup>四六時中監視されていた。彼の病室には<sup>かんぬき</sup>門が掛けられていた。彼は7階にあった浴室の窓を潜り抜けて逃げ出した。彼は窓から突き出た小さな棚から棚へと伝い歩きして、廊下に繋がる開いた窓に辿り着いた。自分を医者に変装出来る衣服が備わっている従業員更衣室を見つけた。そしてロビーを出て街に脱け出して、政治亡命を求めてアルゼンチン大使館に歩いて行った。大使は身の安全を確保して空港へ案内してくれて、ガルバウンはブエノスアイレス行きの飛行機に搭乗出来た。

それから2年も経たない1961年1月に、豪華な周遊定期船で、ポルトガルの商船の誉れ高いサンタ・マリア号が拿捕されたという、驚くべきニュースが世界を駆け巡った。カリブ海周遊中で起き、乗客の殆どがアメリカ人であった。船から沿岸のラジオ局経由での報告によれば、海賊が3等室の乗客を、空き室だった1等室の続きの間に引っ越し、彼らはシャンパンとダンスパーティーを準備していた。

ガルバウンと23人もの国外追放されていたポルトガル民主主義者が、乗客や専門家に変装して、前日の夕方からサンタ・マリア号に乗船していた。彼らは乗船券代を支払うお金を十分に持ち合わせていなかったのも、その他の仲間は見学者とか身を隠して乗り込み、ヴェネズエラの闇市場で買い求めて持ってきた少量の詰め合わせ兵器を携えていた。真夜中になったとき、彼らは船橋を強襲した。軍務の将官

## 第19章 第二次世界大戦、自由への裏切りと戦い

が降服することを拒んだ。彼は撃たれて死んだ。彼だけが、抵抗を示した唯一の将官であり、乗組員であった。船長は船長室でその騒ぎで目覚めて即座に降服した。ガルバウンは後でこう述べている。この男は、その瞬間は権威を鼻に掛けていたが、直ぐに啜り泣き、竦み始めた。臆病者で、道徳の墮落した者として擬人化し、サラザールが国全体を困った状態に陥れていたことで、船長配下の将官の幾人かは直ぐに従う立場を変えて、海賊側についた。

北大西洋条約機構(NATO)を結ぶことを切願していたサラザールは、ポルトガル海軍の搜索とサンタ・マリア号の奪還を同盟国全てに頼んだ。ガルバウンが共産主義者として知られ、海賊行為に対する処罰が、船の主マストからの絞首刑を国際的に受け入れられるべきだと主張した。

大多数のNATO加盟国が彼の懇願を無視した。フランスは公然と否認した。英国は2隻の王立海軍護衛艦を出し、アメリカ合衆国は、軍艦1隻と偵察機を送った。ガルバウンはイデオロギー信奉者ではなくて、理想主義者であり、熱心なカトリック教徒であった。彼は船を自由の聖マリア号と名づけ直し、自分らは、海賊行為を何もしていないという声明をラジオ放送で流した。船に乗る前に国際海事法の権威者ヘイワード(Hayward)とハップワース(Hapworth)が書いた本の複写を持ち込み、それを引証しながら、著者に感謝した。船は、旗が舞い上がっている国の領海の中にあつた。自由の聖マリア号は一部ポルトガル領土であり、彼ら同僚は不法の独裁制から自由な状態であり、合法的な規則を取り戻していたのである。

アメリカ合衆国の新大統領ジョン・ケネディー(John Kennedy)が、ガルバウンの起こした海事事件は確実な根拠のあるものだと、法律専門家としての自ら助言をした。英国は直ぐに追跡から軍艦を引き揚げたアメリカ合衆国と歩調を合わせた。

ガルバウンの当初抱いていた意向は、‘自由の聖マリア号’をアンゴラに向かって航海をして、アンゴラで反ファシスト反乱のきっかけを作ることだった。燃料不足とアメリカ合衆国政府の圧力で、ブラジルに航行するような代用案で説得された。

## 第19章 第二次世界大戦、自由への裏切りと戦い

アメリカ人の乗客は、実際には乗客の殆どであったが、彼らは自由なポルトガルを宣伝する報道陣を待つよう言われて、ブラジルのレシフェで船を降りたが、ガルバウンはブラジル国民議会の儀礼兵に護衛され、立ち見の歓呼でもって歓迎された。

サラザールは独裁者として居坐ったが、国内での支持は弱まった。民主制に戻り、思想や価値観や熱望という言葉の自由のある、殆ど生活レベルが向上した標準的な欧州他国は、厳格に見て田舎者であるポルトガルがその<sup>ウルトラナショナリズム</sup>超民族主義を捨てながら今までより熱中して哀願していると見た。サラザールは、秘密警察の権力を増し、採用を増やし、厳格な検閲制度を更に課し、潜んでいる敵である教育レベル、特に大学の教育水準を下げて、その不安と苛立ちに応じた。数千人の大学生が学位過程を終了させられ、植民地での反乱の鎮圧に学徒徴兵されてアフリカに送り込まれた。

サラザールの物の見方が根本的に変化したと広まった。ソ連のポルトガル乗っ取りに対して独りで抵抗し、文明に信念が固い人が、今や孤立し、自尊心を傷付ける暴君の姿が僅かに窺える人になった。同じ年に、インド軍がゴアとポルトガルの他の植民飛び領土に侵略し、占拠した。英国とアメリカ合衆国の両国が申し訳程度の外交的な抵抗と同程度の調停交渉を断った。アムネスティー・インターナショナルがロンドンに設立され、リスボンの秘密警察の拘置所に拘束されている前民主的大学の学生の解放を取り付けることが最初の目標であった。ポルトガル共産主義者の伝説的な指導者アルヴァロ・クニャールが厳重に警備されていた監獄から脱獄し、モスクワに意気揚々と再び現れた。1958年の大統領選挙に反ファシストとして立候補した大将フンベルト・デルガード(Humberto Delgado)が、選挙で過半数を制したと信じられていたのに、直ぐにその後秘密警察から逃亡せねばならなくなり国外に出た。ブラジルで、彼は海外でサラザールに反対勢増長で焦点を浴びるようになった。ゴアでの避けられない降服へのサラザールの返答とは、多数の民間人の虐殺と検挙、軍法会議で恥をかかせ、厳しく罰するなど簡単に来た、効率よく回避して行動する司令官と上級将官を持つことであった。彼の秘密警察は、スペインに

## 第19章 第二次世界大戦、自由への裏切りと戦い

いるデルガードを殺す任務を負っていた。ベンフィカにある、抵抗と共和国の博物館の中で、この殺人者の名前を今日、見ることができる。アンゴラでは、国家から処せられた残虐行為に対抗して大きな暴動が起きた。その暴動は残忍に鎮圧されて、多くの犠牲者が出た。しかし、徴集兵の青年将校のような新しい世代が、その鎮圧に部分的に手を貸している間に、そのような長期間の圧制が、果たしてポルトガル国内も海外の領土でどう生き延びることが出来、いやそれが許されるべきなのかを彼ら自身の中で議論し始めた。



## 第20章 自由の夜明け

ポルトガル・ラジオ・クラブのスタジオに居て、トークショウのホスト役でディスクジョッキーのジョゼ・ヴァスコンセロス(José Vasconcelos)が、1974年4月24日、水曜日の未明、零時24分に、今まで決してかけたことのないシングル盤『修道士の理想郷』の上にレコード・プレイヤーの針を下ろした。その流行歌はサラザールの検閲制度でラジオに流すことを禁じられていたものである。夕刊に掲載された番組批評を見て、そのヴァスコンセロスのトークショーを初めて聞こうとラジオのチャンネルを選局した人々は、番組も結構上手く改善されたものだな、そしてまた《とがめだてを受けて聞くこと》になったなど言い合っていた。

これらの聴衆者とは青年将校である。その新聞の批評と、放送を禁止されたレコードを掛けることの双方が、実は暗号化した合図であった。青年将校が、アレンテージョの田舎で週末にその数人が、数ヶ月間工夫しながら極秘の会合を重ねてきて作りあげた案を、その瞬間に実行したのだ。夜明けに、早起きしたリスボン市民が、要所な政府関係や軍関係の建物、主要な警察署、空港、国営放送局、その他要所な軍事施設の正面に、銃を構えて乗っている戦車や車両が向いているのを見付けた。

サラザールは1970年に死んでいた。エストリルにある休暇用邸宅のベランダで、彼が足治療用として愛用していた、後ろに倒していたデッキチェアが壊れてしまい、彼は床に転げ落ちて頭を強打したが、外面上の打撲傷以外には大した怪我ではないと思っていた。2週間後に、彼は「酷く老いたように感じる」と零し始めた。病院に連れて行って検査を受けたら、脳に血のかたまりがあるのが分かり、外科手術を受けたが、助からなかった。

35年経って私が彼の生誕地ダウン盆地を訪ねてみて、彼にとっての小さな町に

ある記念碑 —彼の生涯を叙述した絵タイルを貼った壁画— が、撤去されていないし、かといって維持管理もされていないのを知った。ポルトガルのあらゆる部分でサラザールに対して、長引いた感情の交錯を表していた。独裁者の政策は、彼が引き継いだときの、ポルトガルの貧乏な状態を救ったが、と同時に、彼がムッソリーニやフランコ(Franco)に余りにも影響を受けてきたために、それは国際的に見ればポルトガルはファシストの国と烙印を押すようなものであった。でもまだ自分に自制心を課して、その規模に近づこうとどんなことでも粗暴に訴えようとはしなかった。政治的に反対する者のかなりを、彼が操る秘密警察の手で拷問し、死に追いやったことだろう。でも彼がカトリック教徒のふりをしていてその教えを誓って、どれだけ多くの人々が拷問で死んでいったかを公表していないことで明らかである。そこですべての誓いがなされたかどうかの問題である。サラザール独裁の後期のポルトガルでは、政治犯収監者待遇に対する外国の反感が増して、直接に反応してアムネスティー・インターナショナルが創設された。

もしサラザールが今日生きていたとして、人間愛に対抗して犯罪行為を漲らせることができたのであろうか？サラザール経済再建案の強力な唱道者である教授フェルナンド・デウ・オーレイが、ロンドンでチリのピノチェト大将が逮捕された後の談話で、ポルトガルの独裁者は、チリでのそれよりももっと近い国で起きた犯罪に対して、スペインからの逃亡罪人引渡の要求にもまた直面していたに違いないと述べている。彼はポルトガルにいる亡命者を捜索させ、スペイン共和主義避難者をバダホシュにある円形闘牛場に追い入れて銃殺していた、フランコ総統の官憲に強制送還した。彼のアフリカでの人権否定は、ポルトガルの名声に恐ろしい汚点を残している。

彼はボンバルにならってファシストだったのか、それとも独裁者の愛国主義者だったのか？コロンビア百科事典によれば、《国家や国を称賛し、国の生涯のすべての面を国家管理しようとする統治哲学を持つ全体主義者》とファシストが定義され

ている。それは本質的にあいまいで情緒的な特質であり、自分が全ての面でファシストであるというのを憤然と度々否定する指導者が、比類なき国の多様性ある発展を助長していたのだ。

サラザールは首相をマルセーロ・カエターノ(Marcelo Caetano)に引き継いだ。彼はサラザールお気に入りの子分であり、イタリア流ファシズムに影響を与えてきた弁護士でもあり、《新国家》憲法の草案作りにサラザールを手伝ってきた。幾つかの大臣を歴任し、アフリカで植民地に抑圧体制を組織化した後、リスボン大学の学長に任命された。彼は、学生の抗議デモを解散させようと制服を着た警察官がキャンパスに踏み込んだ後、抗議の意味でもって学長を辞任した。彼の抗議は、警察の残忍性に対してではなく、大学の敷地内に捜査令状の提示もなく、且つ自分の許可も受けずに警官が踏み入れた厚かましさに対してであった。彼は、自宅で夜中2時に防衛大臣から、首都で反乱軍の動乱が起きたので自分に警告をしたいという連絡があり、起こされた。彼はカルモ兵舎にある国立共和国護衛隊の本部に避難した。

朝遅くになると、その兵舎は騎馬隊によって包囲された。国立護衛隊は一時的に発砲したが、カエターノは青年将校らの代表派遣を迎え入れることに合意した。彼らは夜中の間に、ポルトガルがファシズムから解放され、カエターノを逮捕すると告げた。彼らは彼に即座に辞任するように要求した。

カエターノは、大将スピノラ(Spínola)にだけ電話をして自分は首相を辞任すると言明した。スピノラは自分がクーデターを起こしたのではなく、反乱軍将校らを連れだって、彼と協議をしに兵舎に来たと弁解した。それから、スピノラはカエターノと喋るために兵舎の中に入り、自分たちのために彼の辞任を認めた。

夕方に、将校らはスピノラを8名からなる国家回復のための評議会の議長に指名した。最近までファシスト最員の、一第二次世界大戦中は、おおっぴらにナチ最員で—そして最近民主主義者に転向したスピノラは、クーデターがそんなに簡単に成功するとは最初信じられない仲間の中にいた。しかし、この2日間で、カエター

ノ首相と上級大臣の3人と元帥で共和国大統領のアメリコ・トマスが、拘禁の下であっても、ブラジルへの亡命で逃亡してしまった。半世紀に亘って続いたポルトガルのファシズムがここで本当に終焉した。

駆けつけてきた秘密警察の一団が、その軍事クーデターに唯一抵抗して本部に居座った。兵士らが本部の建物に近づこうとしたら、秘密警察は兵士に向かって発砲した。死傷者は僅か2人の死者と13人の負傷者で済み、直ぐにクーデターが終結した。その後パレードした際に兵士らが銃口の中にカーネーションを差し込んだので、《カーネーション革命》と云われるようになった。ファシズムが崩壊してしまったのだと認識していたその時点で、彼らが何処に居て、何をしようとしていたのかを、20年も経つとポルトガルには即座に鮮やかに思い出す人が殆どいない。アヴェニーダ・パレス・ホテルの屋上にいたジャーナリストたちが、街頭に群衆が溢れ返って、兵士らを拍手喝采し抱き合っているのを見ていたことを思い出している。あの恐ろしい植民地戦争の戦闘にアフリカへ送り出され、恐怖に<sup>おの</sup>慄きながら待っていた経験のある若い徴集兵らが、自分たちの兵舎の出入門が開けっ放しになり、兵士らが自由に除隊できると喋っていて、軍服を脱ぎ普通の服に着替えたことを思い起こしている。

ある裕福な家庭のお嬢さんが、《制服姿の女中達の前庭に出て、兵士が歓呼してパレードをしているのを見ていると母親から家の中に戻るように言われ、兵士たちは大衆労働者階級の友達ではないとそれとなく言っているのかなと、多くの家事の召使を心配していた。》のを思い出している。サラザールの際立った支持者であった大金持ち家族の幾つかは、現金や貴重品を出来得る限り持参して海外に逃避し、パリやロンドンにあるリッツ・ホテルのスイートルームや、リオデジャネイロにある豪華な館に持ち込んだ。裕福な彼らや、邪魔もされずに逃避が許され、快適に生き残った秘密警察官らは別にして、再形成した社会、《新国家》でのサラザールの陰気な実験への支持がどのようにして昇華していったのだろうか？

サラザール自ら指揮をしたという証拠からして見て、例えサラザール本人がポルトガルの大多数の支持を、永い間受けてきていたと信じてきているようには思えないとしても、彼のとった政治体制そのものは明らかに同調者を抱え込んでいた。国家管理的経済の時代に商売が非常に繁盛して財を成した少数の家族が彼を支持したのではなく、もっと幅広くあった。ただ彼の偽ファシスト思想に魅せられる人々は殆どいなかった。平和の有難さと見せ掛けの安定そのものがサラザール時代を特徴づけているとして見ていた中産階級がいた。秘密警察の活動からかけ離れた《秩序》というオーラが漂っていた。ムッソリーニ風に定刻に列車が発射してから、それは、能率的な郵便業務とか街路の清掃業務、犯罪発生率低下の特命事項や、駅舎の塗装作業や近くの花壇の手入れなどであった。独裁者サラザールは、個人の生活は質素で、金銭的には正真正銘の清廉で、ポルトガル人を家族の一員として愛するポーズをとることで、また尊敬を勝ち得てきていた。

政治体制の支持が宿命的に崩壊した源は、何もポルトガルの中にあっただけではなく、アフリカのポルトガル植民地の中にあっただけでもなく、アンゴラとモザンビークで独立戦争が、夏の火事のようにあっという間に広がったときに、サラザールが普及させようとかかなり永い間努力してきていた政治体制の、恵み深い、寛いだ家庭的なイメージを捨てた。アンゴラとモザンビークで従軍した徴収兵の戦死ニュースを添えた電報が徴収兵の留守家族宛てに届き始めた。独りでは政治信条に関心を持ちそうにないがために、殺されてしまった若い兵士の写真が、村の教会の壁に、悲嘆に暮れた両親の手で張り出された。国中の礼拝堂と聖所と聖堂には、殺された故人に祈りを捧げに来た人や、故人によって命を助けて貰ったに違いない仲間が、持ってきた献花や献蠟燭で埋められていた。家族の助けと勇気づけでもって、徴兵される年齢に差し掛かっていた若者たちが、逃亡させまいと厳戒態勢を敷いて国境線、港、空港でチェックがあったにも拘わらず逃走した。サラザール崇拜者組織の中心人物であった職業人が、突然にもその政治体制に一筋の新しい光が差し込むのを見た。自分

たちの息子がアフリカでの戦争で馬草を与えているように見えてきたと気づいたのである。徴兵逃れをした若いポルトガル人たちが作った堅固な共同社会が、アムステルダム、ジュネーブ、パリ、南アメリカで発展を遂げた。

アフリカに住むポルトガル人にとって、必然の運命に武装して抵抗するリスボン警察は未だにもっと狂気に見えた。大勢の文民が南アフリカに南下して移動した。ヨハネスブルクだけで、ポルトガル人の人口は40万人に達していた。上級将校らは、自分は反ファシストであり、反戦者であると、おおっぴらに宣伝して自分の職業に賭けた。これのためか、武装部隊の将校の殆どがまたそれに同調した。

大将アントニオ・デウ・スピノラは、西アフリカのギニアで軍隊の解放戦線に抗して戦ったポルトガル部隊の司令官であった。地方当局は、彼が国の文民統治者を任命することで、リスボンによって質や能力などを更に高められていた。1973年、スピノラはリスボン政府に《ポルトガル人はどんな勝利をも期待を持っていない。》と話した。たった1つの現実的な選択肢は、ポルトガル兵士が撤退させることが出来る間停戦するよう、自由解放戦線側と交渉することであった。さもなければ、多くの、いや恐らく最多数の兵士が無意味に殺されるであろう。カエターノは彼を叱りつけた。スピノラはリスボンに舞い戻り、首相を激しく論争して、辞任した。

反ファシストの軍将校の、英雄であり且つ指導者としての地位は、その後に本を著したことで更に強固なものになった。ポルトガルの植民地アフリカでは発禁になったにも拘わらず、スピノラは印刷し、ポルトガル国内で1974年2月に発行に漕ぎつけた。この本は、その時代に発行された書物の中では現在でもなおベストセラーである。『ポルトガルと将来(“Portugal and Future”)』のタイトルであり、その命題は《経済と社会を国家管理するような国システムは機能しない》である。アフリカで、ポルトガルは国民投票をすべきである。アンゴラやモザンビークの国民は、2つの選択肢が与えられるべきである。1つ目は、独立して、ポルトガルと緊密に連携する道、2つ目は、独立して、ポルトガル語を話す連合国に入る道であり、大

まかに云えば、英国連邦に基づいている。ポルトガル自身、選挙があつたばかりか、西側欧州の他国で享受している数多くの基本的自由があつた。前首相カエターノのちに、《その本を読んだ瞬間、その政治体制は終わらされていたと知った。》と述べている。

それは、その後2か月より少し経つ前だった。しかしこれは多くの幻滅があつて、民主制に直ぐに移行することを意味しなかつた。スピノラは、国外追放を受けていて戻つた社会主義者の指導者マリオ・ソアレスと、アルヴァロ・クニャールと、共産主義者らを取り込んだ政府を発足させた。しかしながら街で聞かれる実際の権力者は、オテロ・サライヴァ・デウ・カルヴァーリョ(Otelo Saraiva de Carvalho)率いる極左の軍将校らの一味の手中にあるように思えた。彼らは道路にブロックを積み、彼らが《階級の敵》と疑つていた人々に嫌がらせをした。また金銭や時計や車も盗み、家々に隠遁した。侯爵パルメーラ(Palmela)や他の貴族の人々も不法に捕まえた。更にエスピリット・サント銀行の頭取の家族の数人を襲つた。他のメンバーは海外に逃亡した。

革命主義者らは、全ての銀行や主要な産業を、賠償金を支払わずに国有化した。そのうえ、彼らは小作人や労働者の名義にして手に入れて、大きな農場やコルク樅が植わっている土地を差し押さえた。

スピノラは辞任して、今や実質的には管理政府である共産主義者同盟を倒閣するために右翼の将校らを結集しようとしていた。だがこれは失敗に終わった。スピノラは、マルクス・レーニン主義共産党によって捕まえられるところを辛うじて逃れた。彼は軍のヘリコプターを寄こさせて、スペインに避難すべく脱出した。サラザール時代になされた自由選挙開始という約束は、非現実的なものに思えてきていた。ワシントンで、アメリカ合衆国の国務長官であるヘンリー・キッシンジャー博士が、「ポルトガルは回復の見込みのない患者だ！」と言つたことがある。ポルトガルが避け難い将来は、西欧州のキューバになってしまうということだ。在ポルトガルの

アメリカ合衆国大使館は、外交団よりも要塞化した飛び領土の方で留まって見栄を張っていた。

出版物の検閲はファシズムと一緒に廃止されてきていた。現在世界的に市長カルヴァーリョとして知られるオテロは、『ギルダー』新聞の編集局を、編集者は右手で書き、発行用記事を編集者向けに選択し、他の記事は削除するというようにと、事実上の原稿受取人に置き換えて、追いやってしまった。殆ど全ての出版物は今までに国有化してきていて、たったの1紙に残ったフブプリカ(*Republica*)の編集長ラウル・レゴが最後まで持ち堪えてきていた。彼は編集の自由を主張したためにサラザール政治体制下での拷問独房や強制収容所で長期間過ごしてきたが、左翼の独裁制になった今漸く譲歩されるに至った。ジャーナリストや出版の自由に関心する支援者は、大統領府の外側で、出版の自由を守るデモ行進を組織化した。オテロは装甲車と部隊の出動を命じて、そのデモ隊を追い散らした。

テレビ放送は、軍隊がテレビ局を占拠した4月の革命の時点で既に国有化された。マルクス・レーニン主義者は、自分ら左派がこの真相を徹底的究明のため自分たちが喋ったことをそのまま放送するよう、そして十分な放送時間を充てるように要求したが、軍部が認めていないと非難していた。自由主義派の番組製作者やジャーナリストは解雇された。その左派の後継者が4時間実況の政治ショーを組んだが、それはアルヴァロ・クニャールが出演して、共産党のポルトガル将来計画を広めるためであった。しかし彼らは、社会主義者マリオ・ソアレスもまた番組に出演させた。マリオはスタジオでクニャールをさんざんにやっつけようと秘かに思っていた。これは、彼らにとってひどい誤算であった。

その夕方のテレビ番組を見なかったポルトガル人は殆どいなかった。その多くが自宅のテレビでチャンネルを選んでいなかったとしても、カフェやバーや街角の小さな商店にあるテレビの前で釘つけにされていた。2人の政治家は旧知の仲であった。ソアレスは校長の息子であり、父親が勤務する学校の生徒だったときに、地理



学担当のクニャール先生に学んだ。

2人とも、秘密警察での独房、強制収容所での孤独な幽閉、国外追放を経験した同士であった。クニャールは大人になってから殆ど地下活動をして過ごし、共産党の秘密連絡網作りに精を出した。ソアレスは公然とファシズムに異を唱えていた。彼は弁護士の資格を取った後、法律事務所員になり、国家に叛いた犯罪で告発された被告の裁判で弁護をする仕事を担当していた。国家の権威を傷つけたとして彼は検挙され、拷問を受けた後、サラザールによって西アフリカ海岸沖の熱帯の島サウン・トメに流された。そこでは、予期されていたように怠惰になるどころか、自分が今まで関与してきた法律業務を再開した。例えば重要でない役人の労働組合に組合員を加入させた時に不正な問責を受けたことに関して起訴をして弁護した。ソアレスが弁護人として出廷した植民地裁判所の判事が、全ての他の弁護士とかどんな弁護士で申し立てられた事件で出された判決よりも弁護依頼人にとっては酷く無情な判決を言い渡した。最悪でもそうであるべきだった、週の報酬を半分にするという罰金を科せられた税関官吏が、何と10年間の禁固刑を言い渡された後に、ソアレスはポルトガルに帰国することを許された。戻ったポルトガルでは秘密警察によって常時悩まされた。数か月後にパリに逃走して、ポルトガル社会党を結成した。

革命後、スピノラはソアレスを外務大臣に任命した。彼は欧州各地を駆け巡ってポルトガルを自由にするための支援をして欲しいと大いに宣伝した。外務省はこのために支払うような基金を持っていなかったが、英国労働党と同等の他国の社会党が援助のために集まってきた。彼は、欧州人の政治舞台面に斬新で印象に残るような人影として、素早く自分自身を作り上げた。自由主義者のロシア政治家ケレンスキーが民主政治の道を開くために、ロシアのツァー体制(the Czars)の没落後を統治したが、無比のボルシェビキ(Bolsheviks) によって倒されたケレンスキーに言及して、キッシンジャー博士は、「ソアレスはポルトガルのケレンスキーだ！」と、彼あざけを嘲りながら放逐した。ポルトガルの共産主義者は、既にソアレスに《共和国の敵

の第一人者であり、反ファシスト事件の謀反人》という称号を贈っていた。

1975年11月にクニャールとソアレスを映し出したテレビ番組は、政治的衝突や、また2人の指導者と彼らのイデオロギーの間での討論でさえ、描写されることは出来なかった。ソアレスは、彼流に油断なく、熱心に、生き生きと自分の意見を述べた。彼は平等に視聴者へ話しかけた。自信に満ちながらも傲慢にもならないやり方で、親切に、何も隠さずに話していたのが、すっかり寛かされたようだ。クニャールは、権威主義者に有り勝ちな性格を呼び出してしまった。彼は、ごちなく、姿勢よく、微笑まず、うわべだけの冷静さをもって座っていた。準備していたポルトガル共産党の政権公約を読み上げた。それは、スターリン主義者のイデオロジスト以外の者が他に使わないような堅苦しく官僚的な言葉で書かれていた、かなりの長文であった。ソアレスがたとえ質問したとしても、クニャールはその質問を止めて、答えなかったであろう。ろくすっぽ挨拶もせず、自分のパンフレットをのりくらしと読み続けたに違いない。

さて4時間の番組も終わりになる前に、クニャールは他の新しさを装っただけのサラザールの子供じみたものだという意見で殆どのポルトガル人は一致していた。共産党側は今回の公開討論で完全な敗北を喫したことが、直接、オテロや極左翼軍将校の彼の仲間には損害を与えてはいなかった。彼らは落下傘部隊がリスボン周辺の軍事基地にある、武装した自由主義者らが掌握していた歩兵・工兵・警官隊の小隊を奪取するように指令を出した。11月の第4週までは、キッシンジャーよりもっと多くの人々にとって、ポルトガルの自由主義運動が絶滅したのも同然のように思えた。

そこでポルトガルの歴史上で最も有名な逆転が起きた。アフリカの内戦での自由主義者で退役軍人である大将ラマリーヨ・エアネス(Ramalho Eanes)と同僚の将校の一団が、逮捕され、処刑される恐怖を自分たちの信念で振り切っていた。ソアレスは、彼らは最たる文民であると同様に、勇気を持って、ポルトガルに民主主義を

取り戻すためには全ての危険を顧みず解決したとの印象を述べている。11月24日の夕方に、エアネスの司令の下、彼らは共産主義者の軍事陣地に照明弾の一斉砲撃を行い、接收した。クニャールは、軍事陣地にいる共産主義者に恐ろしい流血惨事を懸念して手を引くように呼びかける声明を自分の名で出した。オテロと彼の仲間は逮捕されて、後に人権侵害の廉で裁判に掛けられた。

続いて1976年4月、まさしく革命から2年後にマリオ・ソアレスが首相に選ばれた。選挙ができるという感謝の気持ちでいた普通選挙民が61%の得票でラリーヨ・エアネスを共和国大統領に選出した。

ポルトガル人の境遇は色んな面でもの寂しさを漂わせていた。過去の残骸が全部あったばかりか、退歩が半世紀に亘るサラザールによって齎されていた。サラザール時代にポルトガルは西欧州の世界で最も<sup>あとずさ</sup>後退りしてしまった。それは高い文盲率と結核の高い罹病率であった。サラザールはそれらを知らずに、小作人は幸福であると思い込んでいた。彼の有名な、そして恐らく最も皮肉な金言である、『ファドとファティマとフットボール』が、小作人と労働者を養ってきたのである。結核患者やその家族に治療薬の料金を請求せずに、治療薬を支給することは、ポルトガル人の道義的な気骨を損ねてしまうと彼は思っていた節がある。そしてポルトガルは再び外国からの莫大な借款を抱えることになってしまい、ロンドンの経済学者が、それを許されるレベルに引き下げるには2世代に亘った国家的な犠牲を払う必要があると述べていた。そこで、ポルトガル統治と同じ象徴であるアフリカ植民地からの撤退で、40万人もの避難民という満潮時の大波がポルトガルに押し寄せた。生涯の仕事の進展が、低い排他的階級によって妨げられないような環境を探すために、アフリカ植民地に渡った、中産階級とか労働者階級のポルトガル人の子孫が殆どであった。現実には、放置され空き室になった、旅行客やビジネスマンが利用したホテルの一室に家族が住み、僅かな替衣をもった、無一文になったのが殆どであった。

ガソリンや、銀行には現金さえもが不足を来していた。社会民主党の設立者フラ

ンシスコ・サ・カルネイロ(Francisco Sá Carneiro)と、皆から非常に慕われていた中道政党的の代弁者が搭乗していた小型飛行機が墜落して、2人とも死んだ。その事故は、右翼か左翼の何れかの反民主的な連中の仕業による悲劇ではないかと多くが見ていた。ソアレスは一部のポルトガル人が受け取った感情に対して、《現代の民主制と経済からしてそれ自身を指揮することには、本質的に国は無力なものである。》との声明を出した。

国の魂に関する彼の声明から、ポルトガルに民主主義の回復の兆しを読み取れる。革命後の危機の一部は、工業や商業の機能をポルトガルに依存するようにした1万人以上もの管理職、技術者などの海外流出に原因していた。彼らが帰国してきて、工場を引き取り、建設事業を再び進めようとした。国外追放を受けていた間、多くの若い徴兵逃れをした者は怠けていたのではなかった。彼らもまた、医学、工学、建築学、大学教師になるため学問を習得して帰国して来た。皮相で悲惨な避難民の中には、医者、建築家、技術者、研究者ばかりか、新しい産業を創設してまた他の会社にもビジネスのノウハウを適用するような精力的な企業家らがいた。ポルトガルの経済成長率は鰻登りになり、欧州の他国の成長率を凌ぐほどになった。ポルトガルは欧州の《経済の暴れ者》として知られるようになった。国の財政赤字を慎重に且つ極めて高度な管理をすることで、15年の間に西欧州の国々の中で一番低くすることが出来た。

新しい議院法がポルトガルに出来、最も社会的に啓発をしたものの一つとして少なくともそのゴールには達した。その法律は、英国の議院法よりもより以上に婦人や子供の諸権利を護ったものである。国家による健康サービス、公衆衛生、学校教育の面で大きな改善点が見られた。内閣は何度も平和的に交代した。ファシスト党—最も右寄りの大衆党(PP ; Partido Popular)のイデオロギーは欧州の国々の何処の《大衆》党よりも右寄りではなかった—は、もはやなくなった。その大衆党の得票率は10%と同程度で、人々を惹き付けられないでいるように思われる。共産主

義者は、地方政府で効率性や清廉さや啓発運動を重視して熱心に評判を博してきている。(共産党が選挙で過半数を越えている) エヴォラ市の行政は卓越した典型として広く維持されている。しかし彼らは国政レベルでは、右派より多数を占めるような足掛かりを決して掴んで来てはいないでいる。

それら続いてきている課題と挑戦の全てに対して、その初めの解放の15年間でポルトガルが達成したことで、2世代の圧制から自分たちで自分自身を解放出来るのだということを東欧州各国に不意に見せつけたポルトガルが、希望という<sup>かがりび</sup>篝火になった。ポルトガルもまた、この世紀の間、連続した軍事独裁制とファシズムと共産主義の経験をしてきたことを東欧州の国々の彼らは知っている。そのような解放運動に伴ってくる暗い影の感覚を通じてであった。それらのケースは希望のないものであり、最低限でも2世代の間は経済的に回復するのが不可能だとも彼らは話した。更に、自分たちは生活必需品の欠乏状態の生活と自己否定の生活をし続けるしかなかったとも話していた。

ブラハからハヴェル(Havel)が、当時のポルトガル共和国大統領マリオ・ソアレスと協議をするために、初めてリスボンにやって来た。その訪問団の中の専門家の1人にチェコの裁判官がいて、彼は民主的なポルトガル憲法がどう機能を發揮しているかを視察しに来ていた。ポルトガルの製造に携わる技術者が、工場の近代化について助言するためにハンガリーに行った。ポーランドからはレフ・ワレサ(Lech Walensa)が来て、自分がポーランドを解放できたことへの感謝を、ファティマに訪問して表明した。

今日、ポルトガルが世界に向けて発信した重要なことは、20世紀に傷を負った諸外国が希望を持って生きて行けるように齎してきたことを証明していることである。

## 第20章 自由の夜明け

## 出典註記

私はジャーナリストであって学者ではないので、『初のグローバル村・ポルトガルは世界を変えた』は学術論文ではなく、現在のポルトガルがどうやって今に辿りついてきたのかを書いた物語である。

自分がポルトガル人の中に溶け込んで、とりわけ8年間も住み、働き、旅をし、更に北アフリカ、アンダルシア、グルゴーニュを旅してポルトガルの歴史を散歩して集大成したものである。

20世紀末に向って民主主義に舞い戻り、著しい国の復興をとげ欧州連合に加盟出来、さらに通貨統合に参加できるまでに牽引役を担ってきた我々の多くの友人が自分たちの経験を拝聴させて頂いたことは非常に嬉しく思う。

更に申し上げるならば、私はポルトガル語、英語、フランス語を原語で、アラビア語、ドイツ語、ラテン語を翻訳したもので数百もの文献を調べてきた。その多くはこの本に述べてきたし、他は下記の《更に読んで欲しいもの一覧》にある。これらは単に書物だけに限らず、ポルトガル語のものは日刊新聞から読み物、雑誌に至る印刷物が殆どである。1970年代の検閲制度が廃止されて以来、数千にものぼる秘密公文書が公開されてきた。極右、極左のどちらの思想の強制から解放された新しい世代の考古学者、歴史家は過去を新しい見方で再検証している。

*O Público* や *Diario de Noticias* のような日刊新聞、*Expresso* のような週間新聞、リスボンにある英国歴史協会が発行している *História* や小冊子のような雑誌、*Brotéria* に見られるような研究論文、イエズス会のポルトガル支部の研究雑誌、ニューヨークのコロンビア大学・カモエンス研究所の研究会報などが続きこれらは発展している。

リヴィイ(Livy)、プリニイ一兄、プルターチの作品は、前ローマ時代並びにローマ

時代について直接に魅惑的な情報を提供している。これは考古学的研究によりローマ人による並外れた技能、つまり立杭を深く作っての鉱業技術やダム建設など、から西欧州にキリスト教を布教する範囲にまで詳細な検証に拡大してきて、最近は民間伝承を反駁するような証拠を明らかにしてきている。

イスラム化時代に立ち入った研究の開拓者は、レイデン大学のラインハルト・ドズィー(Reinhart Dozy)であった。それは1850年代であった。彼の“*L'Histoire des Mussulemans d'Espagne et de Portugal*”は、ムーア人がモロッコに敗走したときにムーア人が持って行った、その時代の記録類を研究したものである。つい最近、1975年にニューヨーク大学で開催されたシンポジウムではベイレイ・ウインダー(Bayley Winder)教授が主宰し、西側とアラブ側の研究者が一緒になって欧州人の文明化の発達はイスラム文化の寄与が、特にイベリアにて始まったとの発表があった。それらの論文は、後にマサセッツ工科大学の出版部から“*The Genius of Arab Civilization*”のタイトルで発行された。

私は既に《著者の紹介》にて述べたが、ポルトガルの歴史の中で最も論議された時代は、恐らく《レコンキスタ》、つまりイスラム教徒の強制的な追放、そしてキリスト教国に国が編入したことであろう。型に嵌ったようなポルトガル人評価は、非ポルトガル人の原典、特にトロワの公会議での議事録やテンプル騎士団創設時の記録、ブルゴーニュのクレルヴォー大修道院長の聖ベルナルの書簡を、厳しい挑戦を受けている。私はイレネ・ヴァレリー・ラドット兄、聖ベルナルのシトー修道会の伝記作家には、特に恩義を感じている。

ポルトガルでのユダヤ教徒に関しての、つまり異端審問所とユダヤ人の追放の評価は、セファルディ(スペイン・ポルトガル系のユダヤ人)・ユダヤ人の原典に基づいていて、詳細すぎる位の記録に関する現代の研究は、異端審問所それ自身で維持してきた。ポンバル時代は歴史的な地雷敷設面を取り残していて、ユダヤ教徒によって少なからぬ論争があり、そのとき近代化の反対者として彼らを見ている。出来事に関して



私の解釈には両面に依存しているので、それは多分共に満足しないであろう。私の思いは丁度両方であった。

検閲制度が無かった19世紀半ばの啓蒙政府の時代に、アレクサンダー・ヘルクラーノによって書かれた『ポルトガルの歴史』は、総意に基づいての最初の大掛かりな作品であった。その後、ポルトガルとフランスで書くことが可能で、主だった歴史家権威らの中にリベラ・マルチンスが含まれている。現代では、オリベラ・マルケス(Oliveira Martins)に従っている2巻の歴史書が一現在英語版に翻訳され出版されている一、学術的に見ても実に優れた作品である。ポルトガルの現代歴史家で最も人気のある断トツなのは、ジョゼ・ヘルマーノ・サライヴァである。彼は超国粹主義者の伝説、特にサラザールの独裁制を取り壊し、彼の仲間のポルトガル人が自尊心を持つようもっと納得のいく原因でもって、それらを置き換えるのを大いに喜んでいる。

外国語—そして特に英語—でポルトガルの歴史の評価を著述する場合、繰り返すが、注意が必要であると私は気づいた。英国人はポルトガルにおいて既得権を認めてきていた。それは度々ポルトガル人自身にとって幸福な状態と戦っていた中世時代に礎としてそれ以来であった。欧州を越えた世界をポルトガル人のエンリケ航海王子が発見した役割を酷く大袈裟に言っていることから、この先入観は比較的明らかな方法でもって繰り返している。なぜなら彼は半分英国人であり、巨大な富を獲得するためにセシル・ローズ（アフリカのナポレオンと言われた英国の政治家）の為よりも寧ろその住民の利益の為に、ポルトガル人から南アフリカを英国が要求したことを暗示しているようなものだ。ポルトガルはスペインと天然の国境線は持っていないし—国境線に沿って旅をした人の誰にとって明らかに馬鹿らしい—、ポルトガルの自立権利に対して盲目的に疑う見方を表しているとリヴァモレスのように別の主張をしている。

ポルトガルの歴史を研究している英国人歴史家の中で、貴重な例外がチャールズ・ボクサーである。皮肉にも彼はサラザール独裁制が続いた永い期間、ポルトガルに入国するのを禁じられていたが、後になり彼はポルトガルで大いに名誉を取り戻した。彼がポルトガルを《海洋帝国》と評価したことは、後の頁で挙げる《更に読んで欲しいもの一覧》に現れる著者の中で名人に相応しいと私は考える。

## 更に読んで欲しいもの

以下の一覧は、2000年までに英国で発売されたものを含んでいる。原典もあり、他のものは約3000年遡ったものか、18世紀、19世紀に再印刷された写本の翻訳または翻案もある。この一覧は包括的なものではないが、英国図書館でのカタログにおいてポルトガルの歴史だけに限っても5万項目にもものぼる。私が選出す際に大学での教科書は除外した。それは学究的に相応しい作業を避けるために敢えて求めなかった。私が取り上げたテーマについてもっと詳しく調べ始めたいと望んでいる読者を案内する意図がある。それは、専門家の領域に入るものと、私自身が持ち合わせていないものを代表する多面的な観点に入るものとの両方の折衷案である。発行年の分かっているものは、可能な限り最新のもので且つ利用可能な版を括弧内に示している。ポルトガルの名前は図書館や書店のカタログで容易に検索可能なように英語様式に従った。

Alden, Dauril  
*Royal Government in Brazil* (1968)

Andersen, Hans Christian  
*A Visit to Portugal*, 1866 (1972)

Anderson, James M.  
*Portugal, 1001 Sights*, an archeological and historical guide by the University of Exeter (1994)

Baretti, Giuseppe  
*A Journey from London to Genoa through England, Portugal and Spain* (1970)

Beamish, Huldine  
*Cavaliers of Portugal* (1968)

Bernard of Clairvaux, Saint

*Letters* (1953)

Berneo, Nancy

*The Revolution within the Revolution: Workers' Control in Rural Portugal* (1986)

Bloom, Murray Teigh

*The Man Who Stole Portugal* (1966)

Bodian, Mirian

*Hebrews of the Portuguese Nation* (1997)

Boxer, Charles R.

*From Lisbon to Goa, 1500-1750* (1991)

Boxer, Charles R.

*Salvador de Sá and the Struggle from Brazil and Angola, 1602-1686* (1952)

Boxer, Charles R.

*South China in the 16<sup>th</sup> Century: Being the Narratives of Galeote Pereira, Father Gaspar da Cruz O.P., etc.* (1953)

Boxer, Charles R.

*Portuguese Society in the Tropics* (1965)

Boxer, Charles R.

*The Tragic History of the Sea 1589-1622*, 2 vols. (1959, 1968)

Boxer, Charles R.

*The Portuguese Seaborne Empire 1415-1825*

Bradford, Sarah

*The Englishman's Wine: The Story of Port*

Bragança Cunha, Vicente de

*Eight centuries of Portuguese Monarchy* (1911)

Brearley, Mary

*Hugo Gurgeny: Prisoner of the Lisbon Inquisition* (1948)

Brett, Caroline B.

*Men Who Migrate, Women Who Wait* (1986)

Bruce, Neil

*Portugal, The Last Empire* (1975)

Camões, Luís de  
*The Lusíads* (translated by William Arkinson) (1952)

Charles, Sir Oman  
*A History of the Peninsular War* (1999)

Cheke, Marcus  
*Dictator of Portugal: A Life of the Marques of Pombal* (1938)

Coates, Austin  
*City of Broken Promises: A Story of Macau*

Collins, Roger  
*The Arab Conquest of Spain* (1995)

Corkill, David  
*The Portuguese Since 1974*

Custódio, José  
*National Palace, Sintra*

Duffy, James  
*Portuguese Africa* (1968)

Evance, Gillian R.  
*Bernard of Clairvaux* (2000)

Featherstone, Donald  
*Campaigning with the Duke of Wellington: Guide to the Battles of Spain and Portugal* (1993)

Fielding, Henry  
*Journal of a Voyage to Lisbon* (1855)

Gallagher, Tom  
*Portugal: A 20<sup>th</sup> Century Interpretation* (1983)

Gervers, Michael  
*The second Crusade and the Cistercians* (1992)  
Góis, Damião de

*Lisbon on the Renaissance* (1999)

Graham, Lawrence S.  
*In Search of Modern Portugal, The Revolution and Its Consequences*

Gunn, Geoffrey C.  
*Encountering Macao, A Portuguese City State* (1996)

Hamilton, Russell G.  
*Voice from Empire: A History of Afro-Portuguese Literature*

Hufgard, M. Kilian  
*St Bernard of Clairvaux: A Theory of Art* (2000)

Isherwood, Christopher  
*Christopher and His Kind* (1988)

Janitschek, hans  
*Mario Soares: Portrait of a Hero* (1979)

Levenson, Jay A. (editor)  
*The Age of the Baroque in Portugal* (1993)

Lowe, K.J.P.  
*Cultural Links between Portugal and Italy in the Renaissance* (2000)

Marques, A.H. de Oliveira  
*History of Portugal; Vol. I: From Lusitania to Empire; Vol. II: From Empire to Corporate State* (1971, 1972)

Marques, Susan Lowndes  
*A Traveller's Guide to Portugal* (1954)

Maxwell, Kenneth  
*The making of Portugal Democracy*

Maxwell, Kenneth  
*Pombal: Paradox of the Enlightenment* (1995)

McGuire, Brian P.

*The Difficult Saint: Bernard of Clairvaux* (1991)

Melville, C.P. (Editor)

*Christians and Moors in Spain: Arabic Sources 711-1501* (1992)

Mendes Pinto, Fernão

*The Travels of Mendes Pinto* (edited by Rebecca D. Catz) (1990)

Mira, Mannuel S.

*Forgotten Portuguese: The Melungeons and the Portuguese making of America* (1998)

Molinos, Arturo

*The Archeology of the Iberians* (1999)

Myatt, Frederick

*British Sieges of the Peninsular War* (1996)

Nowell, Charles E.

*A history of Portugal* (1952)

Opello, W.

*Portugal from Monarchy to Pluralist Democracy*

Paris, Erna

*The End of Days: A Story of Tolerance, Tyranny, and Expulsion of the Jews* (1995)

Passos, John dos

*The Portuguese in India (New Cambridge History of India, Vol. I)* (1994)

Pessoa, Fernando

*The Book of Disquietude* (translated by Richard Zenith) (1997)

Phillipps, Jonathan

*The Conquest of Lisbon* (2000)

Pierson, Peter

*Commander of the Armada* (1989)

Pinto, António Costa

*Salazar's Dictatorship and European Fascism: Problems of Interpretation* (1996)

Read, Jan

*The Moors in Spain and Portugal*

Queirós, Eça de

*The Illustrious House of Ramirez* (1994)

Robinson, R.

*Contemporary Portugal* (1979)

Saramago, José

*The History of the Siege of Lisbon* (1997)

Shirodkar, P.P.

*Researches in Indo-Portuguese History* (2 vols.) (1998)

Singerman, Robert

*Spanish and Portuguese Jewry* (1993)

Sitwell, Sir Sacheverell

*Portugal and Madeira* (1954)

Smith, Colin (Editor)

*Christian and Moors* (1990)

Soares, Mário

*Portugal's Struggle for Liberty* (1975)

Stanislawski, Dan

*The Individuality of Portugal* (1959)

Strandes, Justus

*The Portuguese Period in East Africa* (1961)

Strangford, Lord

*Poems From the Portuguese of Luis de Camões* (1824)

Subrahmanyam, Sanjay

*The Career and Legend of Vasco da Gama* (1997)



Tamen, Miguel

*A Revisionary History of Portuguese Literature* (1999)

Vernon, Paul

*A history of the Portuguese Fado* (1999)

Wheeler, Douglas L.

*Republican Portugal: A Political History, 1910-1936*

Wills, John E.

*Embassies and Illusions: Dutch and Portuguese Envoys to K'Ang-His, 1666-1687*  
(1984)

Winius, George

*The Fatal History of Portuguese Ceylon* (1971)

Wise, Audrey

*Eyewitness in Revolutionary Portugal* (1975)

Wordsworth, William

*The Convention of Sintra* (1983)

Zilmer, Richard

*The Last Kabbalist of Sintra* (1997)

更に読んで欲しいもの

## ウ ェ ブ サ イ ト

<http://www.portugal.com>

ポルトガルに関する一般事項、ビジネス、旅行、メディア、その他に繋がる専門家向けの検索サイト。(英語版)

<http://well.com/user/ideamen/portugal.html>

CIA からミーニョ大学までポルトガルの情報プロバイダーのホームページに繋がり、広範囲に亘る一覧。  
(2008年現在アクセスできない状況)

<http://www.the-news.net>

英語によるポルトガルに関するニュース。一週間単位の更新。  
(詳細記事を読む場合にはログインが必要)

<http://www.algarveresident.com>

アルガルブ地方のニュース。一週間単位の更新。  
(英語版)

<http://www.alemnet.org/aol/elo>

アレンテージョ地方のオンライン・ニュースと情報  
(2008年現在アクセスできない状態)

## 訳者あとがき

本書は2002年に初版が出され、訳者は2004年にポルトガルのリスボンの書店でタイトルに惹かれて手に取り購入してきた1冊であり、第6刷のものである。

ポルトガルは、日本人にとっては馴染みの少ないものだが、小学生でもキリスト教伝来とザビエル（シャビエルが正しい発音）、鉄砲の伝来と織田信長、インド洋新航海路の発見とバスコ・ダ・ガマなどの、ポルトガルに関連した史実と人名を知っていて、むしろ他の外国との関係以上に僅かでも、断片的なことを直ぐに思い出せる日本と関係ある国である。

ポルトガルの面積は、北海道と青森県の合計、即ち日本国土の約四分の一程度で小さい日本よりもっと小さな国であり、人口も1千万人程度の小国である。オリーブやワインから連想して農業国なのか、海に半分囲まれ航海にも長けているから漁業国なのか、いや外国車でポルトガル車を見たことがないから工業は発達していないのかな、などと勝手に想像しているのが殆どであろう。つまり現在のポルトガルでさえ、どんな国なのか日本には殆ど伝わってこない。

訳者は、1999年から社用で妻と一緒にポルトガルに2004年まで約6年間住みついて、映像や書物などからでなくて、自分達の眼でポルトガルを知ってきた。実際に南北が約270km、東西が約150kmという狭い国のためかその間にほぼ全国を訪れて、大都市の、町の、村の多くの人々に接してきた。

そんな中、本屋で”The First Global Village, How Portugal Changed the World”『初のグローバル村・ポルトガルが世界を変えた』のタイトルの本を手にとった時、著者が我々と同様にポルトガルからみて外国人であり、且つ著者は家族と一緒に8年間もポルトガルに住み着いて、我々と同じく各地を旅行したことを知った。著者紹介が本書の概要を説明する形で展開して、何故にこんな衝撃的な、且つ英国人特

有の皮肉とも受け取れるタイトルにしたのが多少分かり、即、購入した。

著者は網膜剥離症を患っていて既に失明状態のなか、奥様のキャサリンの絶大な手助けのもとで、本書を4年間掛けて著したと読む内に理解した。訳者は2004年11月にインフルエンザ・ウイルスが脳に侵入して、急性散在性脳脊髄炎に罹ってしまい、双下肢麻痺と排尿障害になり、1ヶ月間ポルトガルでの入院を余儀なくされた。その後日本に帰国して更に3ヶ月間入院して、奇跡的に歩行ができるようになった。永い期間目が見えないのと、滞在の最後で歩けなくなったとは全く違うが、片や8年間、片や6年間家族と一緒に異国ポルトガルに住み、多くのポルトガル人と接触してきた共通点に、多少の因縁を感じるといっても過言ではない。

著者は英国人のジャーナリストであって、自分は学者、研究者ではないと謙遜しながら出典註記で述べている。訳者は技術者として民間企業に奉職したあと、『対訳ポルトガル憲法』を訳して文科系に方向転換したもので、ともに歴史家ではない。

読者は、著者紹介、第1章～第20章の本文、出典註記、更に読んで欲しいものから、何故にこのタイトルが付けられ、他のポルトガルの歴史書とは違うものに気付かれたことだと思う。訳者は敢えて『ポルトガルの歴史物語』と付け加えた。

第1章は旧約聖書からの引用で始まり、南欧世界に位置して海に国の半分が囲まれ、アフリカに程近く、イスラム教世界と対峙してキリスト教国の前線で立ち向かい、海を越えてアジアや南アメリカにまで触手を伸ばし、更にアフリカにも進出して、地中海のグローバル社会から抜け出して、地球規模のグローバル社会に航海を、先陣を切ってきたのが本文で理解できるであろう。ただ海外領土の広さから見ると、偶然の掘り出し物であるブラジルとアフリカを除くアジアは、実に小さな規模であり、常に村という有限世界に留まっていたのが結果であろう。これが何から起因しているのかは分からないが、スペインや英国との差異は見えるように思う。

人間の物質的な欲求を満足させる衣食住に焦点を当てれば、当然のことながら食の優先度が高く、ゲルマン民族大移動やゴート族の西進も、ポルトガルのアフリ

カやブラジルの植民地化も、元はといえば食に基づいた欲望いや必要性を具現化した結果であろう。北洋に船を出して鱈などの漁業を昔からしており蛋白質源の確保に努め、香辛料を求めてアジアにまで足を延ばしたポルトガルは、やはりグローバル化の先駆者であった。住に関しては狭い国土でありながら、アジアでは多くが居留地という小さな領土で終わっていた事実から容易に大きな願望はなかったように思われる。

ただ人間は衣食住が満足できればそれで済むものでなく、精神的な満足を追い求めるのが人間故なのであろう。衣食住が足りなくて為政者が逃げ道として宗教を癒しの道具いや言い訳に使うのも多々見られるが、イスラム教社会とキリスト教社会の接点がポルトガルの地勢で偶然にも設定されていて、陰に陽に、プラスの面とマイナスの面の影響を作り出し、影響を受けてきた。現在のEUの創設に繋がるベルナードに関する第5章、更に第20章での、東欧州国などに希望を与える足跡をポルトガルが置き土産で世界史の中に残してきたことも、何かタイトルに関連しているのかも知れない。読者はどう感じたのでしょうか。

読者はお気づきかと思うが、敢えて訳者がタイトルに『ポルトガルの歴史物語』と日本向けに付け加えたのかである。著者が出典註記の冒頭で個人的な物語であって、学術的な報告書ではないと断っているのに関連する。通常歴史ものは、通史のスタイルをとるか、誰か個人に若しくは時代にスポットを当てて著述されている。公文書を中心とした資料からだけでなく、庶民が目にする新聞や雑誌や学术论文などを調査研究して、特に年代記作家や伝記作家の著作物を解析して歴史物語に構築しているのが理解できる。何千年も前の現場にあたかも生きていて、事件や歴史的事実や物事を観察して、起きているドラマを、演技者を、そのときのムードを取材している独特なスタイルである。やはり世界を駆け巡ってきた海外特派員のなせる技であろう。テーマもポルトガルがどこで、何を先駆者として切り拓き、後世、いや現在につながりがあるのかを紐解いてくれている。

結果的には年代記的に、主要な統治者の姿を常に前面に打ち出してはいるが、その中の弱い面や隠したい内容を鋭く抉り出して、何故に表舞台から立ち去ったのか、何を後世に残し、何の役割をしたのかに言及しているのが特徴であろう。特に独裁者サラザールに関する記述は随所に見られて、表裏を炙り出している。

この訳出に当たり、以下の点で意を用いた。先ず地名や人名などの固有名詞はカタカナ表示に極力したが、日本語表記が一般にないものは原語を括弧内に併記した。また訳者註記は通常は後でまとめるのが多いが、全てその箇所に字体を小さくして表記し、著者の註は同じ字体にしてある。索引は原著が人名だけなので敢えてカタカナ表示にせずそのままにし、原著のページとのずれを調整して初出のページのみ付記してある。本文のスペルと索引のスペルとが違っていたので、前者に統一した。また人名索引に載せた本文の人名は下線を施して容易に索引できるようにした。

訳者の著作『対訳ポルトガル憲法』2008年4月丸善プラネット発行、丸善発売は、2009年5月現在37の公立図書館、37の大学図書館の蔵書になっていて読者も容易に閲覧できる。この憲法は、本書が辿ってきた『ポルトガルの歴史物語』の、ポルトガルという先駆者の精神的な面での集大成であると私は考えている。

この訳本を何とか企画出版にと4社あたりりましたが成立せず、このように自分のホームページにひっそりと公開しました。『増補版 ポルトガル史』彩流社発行を書かれた金七紀男・元東京外国語大学教授には、ご相談させて頂き、多くの助言を頂いたことにお礼を申し上げます。出張期間も含めて8年間、ポルトガルにてお世話になった方々にも厚くお礼を申し上げます。その滞在時、並びに入院したときなど終始面倒を見てくれた妻の美基子には感謝の気持ちで一杯です。

2009年7月 訳者 鈴木弥栄男

## 人 名 索 引

**A**

- Abd-al-Rahman dynasty, 66  
 Abis, 37  
 Abraham, Rabbi, 145  
 Abu-Thabet-Mohamet, 141  
 Adahu, 120  
 Afonso IV, King of Portugal, 102  
 Afonso V, King of Portugal, 129  
 Afonso VI, King of Portugal, 222  
 Afonso Henriques, first King  
     of Portugal, 84  
 Agila, Visigoth Prince, 63  
 Alarcão, Jorge, 56  
 Albert, Prince, 263  
 Albuquerque, Afonso de, 164  
 Alenquer, Captain Pêro de, 150  
 Alexander VI, Pope, 134  
 Alexander the Great, 42  
 Alfonso, Duke of Medina Sidonia, 140  
 Alfonso, King of Leon e Castile, 84  
 Al-Idrisi, Arab geographer, 75  
 Almeida, António, republican leader,  
     272  
 Almeida, Francisco de, 164  
 Al-Mu'tamid,] Prince of] Seville, 79  
 Altabé, David, Rabbi, 196  
 Altenburg, 241  
 Amadeus, Count of Savoy, 84  
 Amélia, Queen of Portugal, 272  
 Andeiro, João Fernandes, Count, 103  
 Andersen, Hnas Christian, 27  
 Aquinas, Thomas, 247  
 Arib bin Said, 77  
 Aristotle, 78  
 Arroio, João, 264  
 Arruda, Diogo, 183  
 Arruda, Francisco, 183  
 Auden, W. H., 23  
 Augustus, Emperor, 47  
 Azambuja, Diogo de, 135  
 Azurara, Gomes Eanes de, 113

**B**

- Badomel, King of Senegal, 124  
 Baldaia, Captain Afonso Gonçalves,  
     119  
 Barlow, Father, 224

- Barradas, Arno, 291
- Beresford, Lord (William Carr), 259
- Bodley, Sir Thomas, 220
- Boitac, Diogo de, 183
- Boxer, Charles, 150
- Braga, Teófilo, first republican  
President of Portugal, 272
- Bragança, Duke of, 130
- Bragança, Duke of,  
参照 King João IV
- Bragança, Princess Catarina of, 27
- Braganças, 229
- Brito, Brother Bernardo de, 222
- Brito, Gabriel Mesquita de, 9
- Byron, Lord, 22
- C**
- Cabral, Pedro Álvares, 134
- Cadaval, Marquesa de, 22
- Caetano, Marcelo, becomes Prime  
Minister, 305
- Caracala, Emperor, 53
- Carlos I, king, 268
- Carlota Joaquina, Queen of  
Portugal, 260
- Carmona, General António Óscar, 280
- Carneiro, Francisco Sá, 313
- Carneiro, Roberto, 30
- Carol, King of Romania, 283
- Caron, Isabel de, 176
- Calvalho, Major(now Lieutenant-  
Colonel) Otelo Saraiva de, later  
known as Otelo, 309
- Castlemayne, Lady, 226
- Castro, Américo, 66
- Castro, João de, 185
- Catarina, Princess, daughter of  
Fernando and Isabel of Spain, 197
- Catz, Rebecca, 173
- Cerejeira, Manuel, G., Cardinal  
Patriarch of Lisbon, 281
- Chagas, João, republican leader, 272
- Chagyat, Luddah, Rabbi, 196
- Charles II, King of England, 151
- Churchill, Winston, 280
- Clement V, Pope, 100
- Clement XIII, Pope, 246
- Clement XIV, Pope, 246
- Coates, Austin, 9
- Coleridge, 22



- Colombo, Bartolomeu, 132  
 Colombo, Cristóvão, 112  
 Constantine, 54  
 Correia, Gaspar, 158  
 Cortesão, Armando, 152  
 Costa, Afonso, republican leader, 276  
 Covilhã, Pêro da, 133  
 Cunha, Pedro da, 9  
 Cunha, Susan, 28  
 Cunha, Tristão da, 169  
 Cunhal, Álvaro, communist leader,  
     290
- D**
- Dalrympe, Major, 97  
 Daniel, Thomas, 105  
 D. António, Prior do Crato, 214  
 Delgado, General Humberto, 301  
 Descartes, 245  
 Deus, João de, 264  
 Dias, Bartolomeu, 122  
 Dickens, Charles, 263  
 Dinis, King of Portugal, 99  
 Domitiano, Emperor, 53  
 Dourado, Fernão Faz, government  
     cartographer, 210  
 Dozy, Reinhart, 317  
 Drake, Sir Francis, 111  
 Duarte, King of Portugal, 108  
 Duke of Alba, 191  
 Duke of Aveiro, 239  
 Duke of Beja, 141  
 Duke of Palmela, 309  
 Duke of Portland, 255  
 Duke of Terceira, 261  
 Duke of Viseu, 130  
 Dürer, Albrecht, 185  
 Duzy, Reinhardt, 67
- E**
- Eanes, Gil, 119  
 Eanes, Major (new General),  
     Ramalho, 313  
 Earl of Arundel, 114  
 Earl of Essex, 218  
 Earl of Sandwich, 225  
 Eberhardt, 124  
 Edward II, King of England, 99  
 Eiffel, engineer, 266  
 Eliezer, Rabbi, 193

- Eramus, 210
- Escoffier, 255
- Eugene IV, Pope, 147
- Eulogius, 68
- F**
- Father Forez, 212
- Father Francisco, royal chaplain, 140
- Fearless Geraldo, legendary Knight,  
86
- Fernando I, King of Portugal, 102
- Fernando II, King of Portugal  
(Duke of Saxe-Coburg and Gotha),  
263
- Fernando, Prince, son of the King  
João I of Portugal, 111
- Fernando, King of Castille, 134
- Fernandes, Carlos, 9
- Fernandes, Mateus, 182
- Ficalho, Count of, 128
- Fielding, Henry, 22
- Figueira, Captain Francisco, 273
- Filipe I, King of Portugal (II of Spain)  
191
- Filipe III, King of Portugal (IV of  
Spain), 220
- Fleming, Ian, 22
- Fonseca, José Maria da, 53
- Franco, Francisco, Spain's dictator,  
304
- Franco, João, president of Movement  
of Renewal and Liberty, 272
- Frey de Fonseca, Archbishop, 210
- Friar António of Lisbon, 147
- G**
- Galvão, Henrique, 297
- Gama, Estêvão da, 153
- Gama, Paulo da, 153
- Gama, Vasco da, Count of  
Vidigueira, 129
- Gargaris, god-king, inventor of  
cultivation, 37
- Garrett, Almeida, 262
- Gascon, Samuel, 193
- Geddes, Michael, 204
- George III, King of England, 251
- Gilbert of Hastings, 95
- Glanvill, Herbay, 90
- Glória, Maria da, Queen of Portugal,

260

Godofrede of St. Aumer, 82  
 Goethe, 235  
 Góis, Damião de, 181  
 Gomes da Costa, General Manuel, 279  
 Gomes, Fernão, 127  
 Gomes, Henrique Barros, Minister  
   of the Colonies, 270  
 Gonçalves, Antão, 120  
 Graham, Billy, 29  
 Greene, Graham, 22  
 Guterres, António, 130

**H**

Hadrian, Governor of England, 44  
 Hamilcar, military Commander in  
   Chief of Carthage, 36  
 Hannibal, son of Hamilcar, 37  
 Hasdrubal, 39  
 Havel, Vaclav, 315  
 Henrique, Cardinal Archbishop of  
   Lisbon, 189  
   becomes King, 191  
 Henrique, the Navigator, Prince, 109  
 Henri, Count, pretender to the throne

of France, 283

Henry, Count of Burgundy, 84  
 Henry IV, King of England, 112  
 Herculano, Alexandre, historical  
   writer, 264  
 Hercules, 36  
   pillars of, 36  
 Herode Agripp II, 60  
 Hitler, Adolf, 288  
 Hoofmann, Cornelius, 211  
 Horthy, Regent of Hungary, 283  
 Hypocrate, 186

**I**

Ibn al-Labban, poet, 81  
 Ibn A'mmar, poet, 78  
 Imulce, daughter of the load of the  
   Silver Mountains, 39  
 Issac, Brother, 67  
 Isabel, daughter of Fernand and  
   Isabel, 197  
 Isabel, Queen of Portugal, 99  
 Isabel, Queen of Castile, 134  
 Iserwood, Christopher, 23

**J**

- Jaffrey, Medhur, 179
- João II, King of Portugal, 128
- João III, King of Portugal, 187
- João IV, King of Portugal, 221
- João V, King of Portugal, 233
- João of Avis (King João I of Portugal),  
103
- João, Prince Regent of Portugal, 251  
King, 257
- John of Gaunt, Duke of Lancaster,  
103
- Jonah, 35
- José I, King of Portugal, 248
- Juan I, King of Castile, 103
- Juan, Prince, pretender to the throne  
of Spain, 284
- Jurian, Pope, 142
- Jurius Caesar, wins governorship of  
Hispania Ulterior, 35(章名に), 41
- Junot, General, Duke of Abrantes,  
252

**K**

- Kennedy, John, 300

- Kennedy, Robert, 296
- Keroualle, Louise de, Duchess of  
Portsmouth, 227
- Kissinger, Henry, 296
- Konetske, Richard, 66

**L**

- Lancaster, Terence, 18
- Lane, Salles, 24
- Leão XIII, Pope, 281
- Leonore, Princess, 187
- Linshotten, 210
- Livingstone, David, 271
- Livy, 316
- Lopes, Fernão, chronicler, 104
- Louis XI, King of France, 129
- Louis XIV, King of France, 223
- Luís, King of Portugal, 263
- Luís Filipe, Crown Prince, 273
- Luísa, Queen of Portugal, 222

**M**

- Madjid, ibn Ahmed, 152
- Mafalda, Queen of Portugal, 84
- Maia, Manuel da, 241

- Major, Richard, 110
- Mântua, Duchess of, 221
- Manuel I, King of Portugal, 148
- Manuel II, last King of Portugal, 275
- Maria Anna, Princess of Austria, 232
- Maria de Bragança, Queen of  
Portugal, 251
- Maria Francisca, Princess, Queen, 248
- Mariana Ana von Hapsburg, Queen  
Mother of Portugal, 239
- Martins, Lourenço, 105
- Martins, Oliveira, 318
- Massena, General, 254
- Master Rodrigo, 138
- Matos, General Norton de, 290
- Maximus, Emperor, 58
- Medicis, the, 128  
Giovanni, 152  
Lourenço(Lorenzo), 152
- Melo, Paulo de Garvalho e, brother of  
the Marquês de Pombal, 246
- Mendes, Aristides de Sousa, 294
- Mendes, Álvaro, 208
- Mendes, Diago, 208
- Mendes, Graça, 208
- Mondonça, Colonel Salvadol de, 231
- Miguel, Prince Regent, 260
- Miller, John, 228
- Molay, Jacques de, 100
- Moore, Susan, 9
- Mohammed, profet, 67
- Muggeridge, Malcolm, 293
- Mulachik, King of Fez, 141
- Musâ ibn Nasser, Khalif, 65
- Mussolini, Benito, 279
- N**
- Nacalao, Father, 81
- Napiez, Captain Charles, 261
- Napoleon Bonaparte, 252
- Nasi, Josef, 170
- Noah, 35
- Norris, Sir John “Blackjack”, 215
- Nun’Alvares, Portuguese  
Commander in Chief, 106
- Nunes, Pedro, 185
- O**
- O’Connor, John, 9
- O’Daly, Father Daniel, 223

Oliveira, Father Fernando, 125  
 Oliveira Marques, historical writer,  
     128  
 Orey, Fernando d', 9  
 Orta, Garcia de, 186  
 Osório, Jerónimo, Bishop of Argarve  
     219  
 Otto, John, 294

**P**

Pannickkar, K. M., 126  
 Pascal, 245  
 Paynes, Hugues, 82  
 Pedro Hispano, Portugal only Pope  
     (João XXI), 77  
 Pedro I (IV of Portugal), Emperor  
     Of Brazil, 261  
 Pedro I, King of Portugal, 98  
 Pedro II, King of Portugal, 222  
 Pedro, Prince Regent, 108  
 Pessanha, Admiral, 99  
 Pessoa, Fernando, 183  
 Pepys, Samuel, 225  
 Phiby, Kim, 289  
 Philip IV, King of France, 100

Philippa, daughter of] John of Gaunt  
     (Queen) Filipa of Portugal), 107  
 Pinto, Fernão Mendes, 172  
 Pius XI, Pope, 283  
 Pliny, the Elder, 50  
 Plutarch, roman biographer, 42  
 Pombal, Sebastião José de Garvalho  
     e Melo, Marquês de, 237  
 Popov, Dusco, 293  
 Prester John, 146  
 Priscilian, Bishp of Ávila, 60

**Q**

Queirós, Eça de, novelist, 267  
 Quintilian, Iberian historian, 57

**R**

Raby, D. L., 291  
 Raggessvinth, Visigoth King, 62  
 Baleigh, Sir Walter, 219  
 Reis, Alves dos, 277  
 Reis, Jaime, 9  
 Rex Argentonius, the Silver King, 35  
 Rhodes, Cecil, 270  
 Richard II, King of England, 105

Richard Lionhearted, 81  
 Richelieu, Cardinal of France, 220  
 Roderico, Visigoth King, 63  
 Roth, Corrad, German banker, 190  
 Romanov dynasty, 273

## S

Salazar, António de Oliveira, 9  
 Saldano, António, 9  
 Samorim, the Lord of Oceans, 150  
 Santos, Eugénio dos, architect, 241  
 Saraiva, António José, 200  
 Saraiva, José Hermano, 88  
 Sarfati, Issac, Rabbi, 206  
 Searlatti, Domenico, 238  
 Scipio, Gaius Cornelius, Roman  
     General, 40  
 Sebastião, King of Portugal, 189  
 Seneca, 49  
 Shakespeare, William, 182  
 Silva, Aníbal Cavaco, 30  
 Silva, Paula da, 233  
 Siqueira, Bartolomeu, 231  
 Sisenand, 68

Soares, Mário, socialist leader, 21  
 Soult, General, 254  
 Southey, Robert, 22  
 Speer, Albert, 289  
 Spender, Stephen, 23  
 Spínola, General António de, 305  
 St. Bernard, Abbot of Clairvaux, 82  
 Stephens, William, 97  
 St. James, 58  
 St. John the Baptist, 85  
 St. Martinho, Bishop of Braga, 62  
 St. Paul, Deacon, 68  
 St. Peter, 85  
 Stukeley, Sir Thomas, 190

## T

Talleyrand, 252  
 Tariq, Arab General, 63  
 Távora, Marquise de, 239  
 Teles, Leonor, Queen of Portugal,  
     daughter, 103  
 Tennyson, Alfred, 22  
 Teresa, Princess, Alfonso's second  
     daughter, 84  
 Tiberius, Emperor, 45

Timoja, Hindu emissary from Goa,  
164

Tirido, Josef, Rabbi, 209

Tomlin, Geraldine, 9

Torralva, Diogo de, 183

Toscanelli, Paolo, 188

Tristão, Nuno, 120

## U

Urban VII, Pope, 223

Umberto, King of Italy, 283

## V

Vallery-Radot, Brother Irineé, 83

Vasconcelos, José, 303

Vansconcelos, Miguel de, 221

Vasques, Fernão, 103

Velho, Alvaro, 154

Velho, Captain Manuel Garcia, 231

Vicente, Gil, 182

Victoria, Queen of England, 264

Veira, Father António, 205

Viriatus, Lusitanian leader, 41

Visinio, José, 138

Voltaire, 235

## W

Walesa, Lech, 315

Wellesley, Sir Arther, Duke of  
Wellington, 263

William IV, King of England, 208

Willis, Doctor, 251

Winder, Bayley, 317

Witiza, Visigoth King, 63

Woodsworth, Dorothy, 22

Woodsworth, William, 22

## X

Xavier, São Francisco, 19



## 著者略歴 マーチン・ページ (Martin Page)

- ・ 1938年にロンドンに生まれる
- ・ ケンブリッジ大学から Master of Arts 修得
- ・ マンチェスターのガーディアンに入社
- ・ 24歳のとき視力が弱まったが、若い海外特派員に
- ・ アルジェリアからベトナム戦争など7つの戦争を取材
- ・ パリ、ローマ・モスクワに駐在し、「失脚人物」を初出版
- ・ ロンドンで、サンデー・タイムスに連載
- ・ 彼の著作は14ヶ国語に翻訳される
- ・ 「会社の不法作者」はドイツと日本でベストセラーに
- ・ 小説「ピラトの陰謀」と「モナリザを盗んだ男」は英国文学賞を受賞
- ・ 1988年アメリカで映画の脚本製作中に視力を失う（法的解釈上は失明）
- ・ BBCのTV執行役員の妻キャサリンと二人の息子と共にポルトガルに移住
- ・ ポルトガル国内、北アフリカ、アンダルシア、ガルシア、ブルゴーニュを旅行
- ・ 4年間掛けて「初のグローバル村」をリスボン近くのアゾイアにて執筆
- ・ 現在、国際カトリック評論“タブレット”の主筆である



## 訳者略歴 鈴木弥栄男 (すずき やえお)

- ・ 1945年7月 疎開地の岩手県遠野に生まれる
- ・ 1971年3月 横浜国立大学大学院工学研究科修士課程 金属工学専攻修了
- ・ 1971年4月～2006年11月 昭和電工株式会社に35年有余勤務  
その間1999年5月～2004年12月 ポルトガルのヴェンダス・ノヴァス  
に自動車エアコン用アルミ鍛造品製造会社を設立、運営、セツールに妻と在住
- ・ 2008年4月 「対訳ポルトガル憲法」鈴木弥栄男、大迫丈志共訳、

丸善プラネット発行、丸善発売